大田十二社遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集

1981

津山市教育委員会

大田十二社遺跡（おおだじゅうにしゃいせき）

中学校建設用地造成にかかる弥生
時代後期集落址発掘調査報告書

昭和56年

津山市教育委員会

序

北陵中学校の建設に伴い、昭和49年度に大田十二社遺跡を発掘調査してからはや七年の歳月が流れた。各方面から報告書刊行への強い要望を受けつつも、それ以降の開発事業多発に伴う発掘につぐ発掘におわれ、刊行が今日に至ったことをまずもってお詫びしたい。

思えば、大田十二社遺跡の発掘調査は、津山市教育委員会が実施した本格的かつ大規模な調査の最初のものといえる。報告書の内容には、当時の困難な状況を反映し種々の不備のあることを虞れる。

学校建設のためとはいえ、貴重な遺跡を破壊せざる得なかったということはまことに遺憾なことであった。しかし反面、調査中遺跡の見学に訪れたものの数は千名をはるかに越え、この調査を契機に市民の埋蔵文化財に対する関心が急激に高まったことは事実で、遺跡の破壊にはとうてい替えがたいこととはいえ、一つの成果であったと思う。

とはいえ、市民の文化財意識の高揚とはうらはらに、現在も当市における文化財保護をめぐる環境には実に厳しいものがある。特に、地下に埋もれた埋蔵文化財が、その矢面に立たされているといっても過言ではない。

本委員会としても、当時から積み重ねられてきた貴重な経験をもとに、さらに一層保護活動に重点を置きたいので、今後とも各位の御援助、御理解をお願い申し上げたい。

末筆ながら、発掘調査及び報告書の作成にあたり、実に多くの方々の有形無形の御指導、御援助をいただいた。ここに、深く感謝の意を表するとともに、本報告書が弥生時代の歴史の解明にいささかなりとも貢献することのあることを願ってやまない。

昭和56年９月

津山市教育委員会

教育長　福　島　祐　一

例　　言

1. 本書は、昭和49年５月～昭和50年３月にかけて津山市教育委員会が実施した総合中学校（仮称二中、現北陵中学校）建設に先だつ弥生時代後期集落遺跡の事前発掘調査報告書である。発掘対象地の地番は、岡山県津山市大田十二社160番地他37筆である。
2. 発掘調査ならびに報告書作成に要した諸経費は、すべて津山市の負担にかかるものである。
3. 発掘調査の実施にあたっては、別記５名の調査委員を委嘱し随時調査委員会を開き調査指導を受けた。
4. 本書の編集は中山俊紀が担当し、執筆は河本清・中山・安川豊史・行田裕美があたった。執筆分担は、第１章、第２章、第３章及び第４章１～４、英文抄録を中山、第４章５を安川、第４章６を行田、第５章河本、中山である。執筆にあたっては、随時上記四者で討議を重ねたが意見の分かれる部分については各執筆者の見解を極力尊重した。
5. 遺構の実測は、河本、中山、国貞圭也が実施し、岡田博，安川、島崎東、皆木美智子の援助を受けた。遺構図版は、国貞圭也、奥和之、森潤、近藤正友、光延稲造の協力を得中山が作成した。
6. 遺物の実測製図は、土器を中山、石器を行田裕美、鉄器及び石棒を安川が実施作成した。
7. 本書に使用した小時期区分（１～５期）は、第４章１で設定した土器の５型式区分に基づくもので、概ね、１期は弥生時代後期初頭、５期は弥生時代後期終末に相当する。
8. 谷部トレンチにおける植物種子分折を岡山大学笠原安夫に、また土器の鉱物分折を京都大学清水芳裕に依頼し、報告をいいだいた。それぞれ第３章４の②、第４章１の③である。
9. 航空写真の撮影にあたっては、陸上自衛隊第13師団長緒方二郎、中国電気津山電力所岡田文治の協力を得た。
10. 本書では、原則としてすべての敬称を省略した。御寛怒願いたい。
11. 出土遺物、図面は、津山市二宮の埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに　　頁

１．発掘調査にいたるまで …… 1

２．発掘調査の組織と構成 …… 2

３．遺跡の立地と環境 …… 3

第２章　発掘調査の概要

１．発掘調査の経過 …… 9

２．遺構の概要 …… 12

第３章　出土遺構及び出土土器

１．住　居　址 …… 15

２．袋状貯蔵穴 …… 54

３．配 石 遺 構 …… 91

４．水田部のトレンチ調査

①　トレンチ調査概況 …… 100

②　津山市大田十二社遺跡からの発掘植物種子の種類同定 …… 102

５．古 墳 石 室 …… 107

第４章　遺構、遺物について

１．土器編年について …… 108

①　各型式土器の特徴 …… 114

②　山陽地方と山陰地方との相対的平行関係について …… 118

③　土器の胎土分析について …… 122

２．住居群構成の分析 …… 126

３．貯　蔵　穴 …… 128

４．配石遺構をめぐる若干の問題 …… 133

５．鉄　　器 …… 135

６．石　　器 …… 137

第５章　宮川流域における弥生社会の展開と大田十二社遺跡 …… 143

付　　録　　英文抄録 …… 151

挿　図　目　次

Fig. 1　大田十二社遺跡位置図 …… 1
Fig. 2　津山市内主要弥生遺跡分布図（1/60000） …… 4
Fig. 3　大田十二社遺跡周辺の地形 国土地理院昭和28年発行1/25000地形図津山東部及び檜 6
Fig. 4　グリッド及びトレンチ配置図（1/1600） …… 10
Fig. 5　遺構全体図（1/1000） …… 13
Fig. 6　1号住居址平面図、断面図（1/80） …… 15
Fig. 7　1号住居址出土の土器（1/4） …… 17
Fig. 8　2号住居址平面図、断面図（1/80） …… 19
Fig. 9　2号住居址出土の土器（1/4） …… 20
Fig.10　3号住居址平面図、断面図（1/80） …… 22
Fig.11　3号住居址出土の土器（1/4） …… 22
Fig.12　4号住居址平面図、断面図（1/80） …… 24
Fig.13　4号住居址出土の土器（1/4） …… 25
Fig.14　5号住居址平面図、断面図（1/80） …… 26
Fig.15　5号住居址出土の土器（1/4） …… 27
Fig.16　6号住居址平面図、断面図（1/80） …… 28
Fig.17　6号住居址出土の土器（1/4） …… 29
Fig.18　7号段状遺構平面図、断面図（1/80） …… 31
Fig.19　8号住居址平面図、断面図（1/80） …… 32
Fig.20　8号住居址出土の土器（1/4） …… 33
Fig.21　9号住居址平面図、断面図（1/80） …… 34
Fig.22　9号住居址1号竪穴（1/40） …… 35
Fig.23　9号住居址出土の土器（1/4） …… 36
Fig.24　10号住居址平面図、断面図（1/80） …… 37
Fig.25　10号住居址出土の土器（1/4） …… 38
Fig.26　12号住居址平面図、断面図（1/80） …… 39
Fig.27　12号住居址出土の土器（1/4） …… 40
Fig.28　13号住居址平面図、断面図（1/80） …… 41
Fig.29　13号住居址出土の土器（1/4） …… 42
Fig.30　14号住居址平面図、断面図（1/80） …… 45

Fig.31　14号住居址出土の土器（1/4）…… 46
Fig.32　15号、19号住居址平面図、断面図（1/80）…… 47
Fig.33　15号住居址出土の土器（1/4）…… 48
Fig.34　16号住居址平面図、断面図（1/80）…… 49
Fig.35　16号住居址出土の土器（1/4）…… 49
Fig.36　18号住居址平面図、断面図（1/80）…… 50
Fig.37　18号住居址出土の土器（1/4）…… 51
Fig.38　20号住居址平面図、断面図（1/80）…… 51
Fig.39　20号住居址出土の土器（1/3）…… 52
Fig.40　21号住居址平面図、断面図（1/80）…… 53
Fig.41　23号段状遺構平面図、断面図（1/80）…… 53
Fig.42　袋状貯蔵穴２、３、４号実測図（1/40）…… 57
Fig.43　袋状貯蔵穴５、７、18号実測図（1/40）…… 58
Fig.44　袋状貯蔵穴13、24号実測図（1/40）…… 59
Fig.45　袋状貯蔵穴14、42、44号実測図（1/40）…… 60
Fig.46　袋状貯蔵穴43、45、46号実測図（1/40）…… 61
Fig.47　５号住居址袋状貯蔵穴１、２号実測図（1/40）…… 62
Fig.48　５号住居址袋状貯蔵穴３、５号及び袋状貯蔵穴E34号実測図（1/40）… 63
Fig.49　袋状貯蔵穴E38号、E55号実測図（1/40）…… 64
Fig.50　袋状貯蔵穴E60、E61号実測図（1/40）…… 65
Fig.51　袋状貯蔵穴３号、19号、20号、22号、43号出土の土器（1/4）…… 66
Fig.52　袋状貯蔵穴42号出土の土器（1/4）…… 67
Fig.53　袋状貯蔵穴45号出土の土器（1/4）…… 69
Fig.54　袋状貯蔵穴47号出土の土器（1/4）…… 70
Fig.55　袋状貯蔵穴E７号出土の土器（1/4）…… 71
Fig.56　袋状貯蔵穴E22号出土の土器（1/4）…… 73
Fig.57　袋状貯蔵穴E24号、E25号、E26号出土の土器（1/4）…… 74
Fig.58　袋状貯蔵穴E29号出土の土器（1/4）…… 76
Fig.59　袋状貯蔵穴E29号出土の土器（1/4）…… 77
Fig.60　袋状貯蔵穴E30号出土の土器（1/4）…… 78
Fig.61　袋状貯蔵穴E38号出土の土器（1/4）…… 79
Fig.62　袋状貯蔵穴E41、E42、E43、E45、E46号出土の土器（1/4）…… 81
Fig.63　袋状貯蔵穴E50号出土の土器（1/4）…… 82

Fig.64　袋状貯蔵穴E52号出土の土器（1/4）---------- 83
Fig.65　袋状貯蔵穴E53号出土の土器（1/4）---------- 84
Fig.66　袋状貯蔵穴E55号出土の土器（1/4）---------- 86
Fig.67　袋状貯蔵穴E55号出土の土器（1/4）---------- 87
Fig.68　袋状貯蔵穴E60号出土の土器（1/4）---------- 88
Fig.69　袋状貯蔵穴E61、E62号出土の土器（1/4）---------- 90
Fig.70　配石遺構平面図（1/100）---------- 90～91
Fig.71　配石遺構東群配石状況図（1/30）---------- 92
Fig.72　配石遺構101平面図、断面図（1/20）---------- 93
Fig.73　配石遺構出土の土器（1/4）---------- 94
Fig.74　配石遺構出土の土器（1/4）---------- 95
Fig.75　配石遺構101出土の土器（1/4）---------- 97
Fig.76　石棒実測図（1/2）---------- 98
Fig.77　谷部トレンチ発見の溝断面図（1/40）---------- 100
Fig.78　谷部トレンチ配置図（1/1000）---------- 101
Fig.79　谷部トレンチ土層断面図（1/120）---------- 101
Fig.80　古墳石室平面図、断面図（1/30）---------- 107
Fig.81　壺形土器編年表（1/8）---------- 109
Fig.82　甕形土器編年表（1/8）---------- 110
Fig.83　鉢形土器、椀形土器編年表（1/8）---------- 111
Fig.84　高坏形土器編年表（1/8）---------- 112
Fig.85　蓋形土器及び器台形土器編年表（1/8）---------- 113
Fig.86　住居変遷模式図（1/1000）---------- 127
Fig.87　プエブロインディアン貯蔵穴模式図---------- 129
Fig.88　袋状貯蔵穴時期別配置図（1/2000）---------- 130
Fig.89　鉄器実測図（2/3）---------- 136
Fig.90　石器実測図（1/2）---------- 138
Fig.91　石器実測図（1/2）---------- 139
Fig.92　石器実測図（1/2）---------- 140
Fig.93　岡山県邑久町門田遺跡出土の石棒（1/2）---------- 99

図　版　目　次

挿図対象頁

PL. 1　全景写真 …… 13
PL. 2　1号住居址 …… 15
PL. 3　2号住居址、3号住居址 …… 19、22
PL. 4　4号住居址、5号住居址、6号住居址 …… 24、26、28
PL. 5　7号段状遺構、8号住居址、9号住居址 …… 31、32、34
PL. 6　9号住居址、10号住居址、12号住居址 …… 34、37、39
PL. 7　13号住居址 …… 41
PL. 8　14号住居址 …… 45
PL. 9　15号住居址、16号住居址、19号住居址 …… 47、49
PL. 10　18号住居址、20号住居址、21号住居址、22、23号段状遺構 …… 50、51、53
PL. 11　西平担部遠景及び貯蔵穴群 …… 13
PL. 12　袋状貯蔵穴 …… 64
PL. 13　配石遺構 (1) …… 91、92
PL. 14　配石遺構 (2) …… 91、92
PL. 15　配石遺構 (3) …… 93
PL. 16　配石遺構 (4) …… 93
PL. 17　古墳石室 …… 107
PL. 18　谷部トレンチ発見の溝断面 …… 101
PL. 19　第1式土器 …… 108～121
PL. 20　第2式土器 …… 108～121
PL. 21　第3式土器 …… 108～121
PL. 22　第4式土器 (1) …… 108～121
PL. 23　第4式土器 (2) …… 108～121
PL. 24　第4式土器 (3) …… 108～121
PL. 25　第4式土器 (4) …… 108～121
PL. 26　第5式土器 (1) …… 108～121
PL. 27　第5式土器 (2) …… 108～121
PL. 28　鼓形器台及び石棒 …… 78、97、98
PL. 29　鉄器及び石器 …… 136、138～140

昭和49年７月31日、大田十二社遺跡の発掘作業に誠実かつ献身的に御尽力いただいていた井上正之さんが、帰宅途上不慮の災害にあわれ翌々日他界された。

ここに謹しんで哀悼の意を表するとともに、ささやかな報告書が出来上がったことを御霊前に報告したい。

第1章　は　じ　め　に

1．発掘調査に至るまで

津山盆地の谷がちな地形は、初期水田耕作にかっこうの地理的条件を備えており、各所に弥生時代以降のさまざまな遺跡が残されている。

この地方には、古くから遠古の歴史に関心をよせる人が多く、なかでも斎藤安夫、植月壮介、江坂　進、御船恭平といった篤実な人々、さらに今井　堯、神原英朗、河本　清、渡辺健治、土居　徹といった若手の研究者にその関心は受け継がれてきた。40年代前半までの津山地方には、破壊を前提とした大規模な発掘調査はほとんどなく、時にはこれらの人々により発掘調査もおこなわれたが、主として遺跡の踏査、遺物の表面採集に努力が注がれ、着実に基礎資料が整備されるとともに各時代にわたる遺跡の分布が明らかにされてきた。

また、昭和27年～33年には近藤義郎に率いられた岡山大学考古学研究室によって沼弥生住居址群が、昭和42年には横野の上原弥生時代土壙墓群が弥生社会の解明をめざして発掘調査され、戦後の弥生時代集落址、墓址研究の基礎資料となった。沼遺跡はその後津山市の教材公園として整備され、年間数万人の見学者が今も同地を訪れている。

こういった歩みの中で、40年代後半にいたり事態は深刻な急変をとげたようにみえる。高度経済成長下の大規模開発にともなう事前発掘調査が、中国縦貫道敷設を契機に津山地方でもおこなわれるようになったのである。岡山県教育委員会が実施した津山市内の縦貫道関係の調査件数は６件ある。いずれもこれ以前の調査面積に較べはるかに広大なもので、天神原遺跡や国府の調査には２年の調査期間が費された。

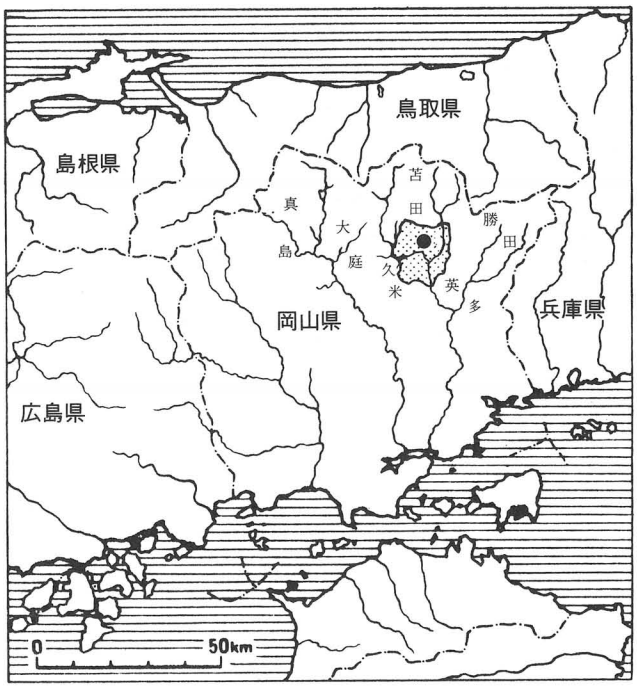


Fig. 1　大田十二社遺跡位置図

津山市教育委員会が、本格的な事前発掘調査の実施を余儀なくされたのは昭和48年から昭和51年に

かけて実施した統合中学校４校の建設着手にともなうものが最初のものといえる。

統合中学校建設計画は、老朽校舎と学校間格差の解消をめざすもので、校地の選定にあたっては周知の遺跡をさけるための配慮がなされたが、津山盆地の谷がちな地形にあっては、低地部分の宅地化はすでに相当進んでおり、かなりな規模の開発はいきおい周辺部の丘陵上へと向うこととなり、この低地周辺部の丘陵上にはいたるところに弥生時代の集落址、墓址、あるいは古墳群が存在していて、このうち３校の建設予定地に遺跡の存在が確認されたのである。

本報告は、このうちの仮称第２中学校（現北陵中学校）に存在した弥生時代集落址の調査記録である。

問題の北陵中学校建設予定地の決定にともない、緊急分布調査を実施したのは、昭和47年８月で、当時津山市には埋蔵文化財担当の専門職員がおらず、美作考古学研究会々員の渡辺健治、土居　徹の協力を得て実施した。灌木、雑草の生茂る荒蕪地の踏査で土師器、須恵器、各１片を採集したのみで、集落遺跡の存在する可能性が推測されたとはいえ、その性格、範囲の確認にまでは至らなかった。

開校時期は51年４月、自衛隊による造成工事着工が49年10月と決定していたにかかわらず、仮称第１中学校の調査が48年度末まで継続しており、用地買収も難行して、８月以降日程の上で異常事態を引きおこす結果となった。結局同年５月８日になりやっと買収済の部分にトレンチを入れ、遺跡の性格、範囲の確認に着手した。その上、調査作業員の不足もあって対象地約１万５千㎡に遺跡の広がることを確認するまでに約２ケ月を要した。

２．発掘調査の組織

調査主体　　津山市教育委員会

調査責任者　木村岩治（津山市教育委員会、教育長）

調査担当　　津山市教育委員会　社会教育課文化係

事務担当　山本正毅、須江尚志、国貞美佐子

発掘担当　河本　清、中山俊紀、国貞圭也

調査委員　浅野克己、植月壮介、土居　徹、宗森英之、渡辺健治

整理担当　河本　清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、日笠月子

調査協力者

赤堀浩子、芦田幸子、井上富子、井上正之、畝山高子、江原　博、岡田　博、小田昌生、角野千恵、北原郁子、北原和子、北原たね代、北原多美子、北原はるの、河野美代子、近藤　健、佐々木浩美、沢田啓治、島崎　東、清水喜美子、清水源五郎、清水節代、清水常子、清水富子、清水孫一、清水道子、曽根　孝、多湖富美子、豊田菊野、中島　博、中塚欣子、二木菅三、仁木奎子、仁木静子、早島玉代、福田誠司、藤田幸治、真木敏之、牧野

通義、実石登美子、皆木美智子、宮本芳一、宗近史郎、安川豊史、山下　都、山根良二
報告書の作成にあたっては、遺構、遺物の評価、図版の作成その他の作業にわたって下記の他多くの方々の協力教示を得た。記して感謝の意を表したい。

池崎譲二、今井　堯、奥　和之、小野　昭、小原貴樹、笠原安夫、鎌木義昌、亀井正道、近藤正友、近藤義郎、真田広幸、清水真一、清水芳裕、島崎　東、杉山紀子、高畑知功、名越　勉、春成秀爾、東森市良、平川　誠、櫃本誠一、藤田憲司、前島基己、間壁忠彦、間壁葭子、松下　勝、光延稲造、森　　潤、森広琢之、矢島宏雄、柳瀬昭彦、山本　清

3．遺跡の立地と環境

美作はもと備前の国に属し、和銅6年北部6郡を合わせ分国された国である。この6郡には、西から真島、大庭、久米、苫田、勝田、英多の各郡がある。いずれも海岸線からほど遠い中国山地南ろくの起伏の多い地形を呈している。弥生時代中期土器の特徴をみると、美作一円の土器に共通性が著しく、県南部地方や山陰地方のものとは差をみせており、律令体制下に美作の国が単に政治的領域として設定されたのではなく、その形成に逆のぼる共通の基盤をもっていたことが、暗示されている。

その地理的環境から大づかみにみて、美作は西の大庭、真島ブロック、津山盆地を中心にした苫田、久米ブロック、東部の英多、勝田ブロックに3区分して考えることができる。

国内には、中国山地に発する二本の主要河川が南流し、いずれも備前を通って瀬戸内海に流れ込んでいる。

その一つは、旭川である。蒜山原より発する旭川主流と、西方新庄、美甘を通過して東流する新庄川は勝山町で合流し、東流して久世町へ、さらに南流して落合町に流れ入り、備中川と合流して備前に流れ込むが、この勝山、久世、落合にかけて比較的肥沃な小平野を形成し、古くから美作西部の中心をなしてきた。土器の特徴から見て、弥生時代中期の汎美作的基盤から後期に至り、徐々に地域色を強め、真島、大庭ブロック文化圏を形成しつつあるようにみえる。特にこの地域は、蒜山原を越えた山陰、旭川を通じた備前、備中との南北線と出雲街道沿いの東西線との十字路としての文化的特質が明らかとなりつつある。

この地域の弥生遺跡としては、久世町五反遺跡、鍋屋遺跡①、宮脇住居址②等が古くから知られており、五反遺跡では前期の土器が出土している。近年中国縦貫道敷設に伴う弥生時代集落遺跡（宮の前遺跡③、下市瀬遺跡④、旦の原遺跡⑤、西原遺跡⑥）の発掘調査や、木材流通センター建設に先だつ中山遺跡の大土壙墓群の調査⑦によって、その特質を解明するための多くの資料の増加をみている。

一方、美作東部を流れる主要河川の一つ吉井川の支流、吉野川、滝川、梶並川流域には、各所に小盆地がひらけ、中でも勝北、日本原、勝間田、植月、楢原、江見といった小地域を中心

1．大田十二社遺跡
2．沼遺跡
3．沼E遺跡
4．京免遺跡
5．竹ノ下遺跡
6．紫保井遺跡
7．上原遺跡
8．権現山遺跡
9．下道山遺跡
10．一丁田遺跡
11．桃山遺跡
12．丸山遺跡
13．二宮遺跡
14．押入西遺跡
15．天神原遺跡
16．金井遺跡

Fig. 2　津山市内主要弥生遺跡分布図（1/60,000）
（国土地理院発行　1/50,000地形図　津山東部及び津山西部）

に、やはり弥生時代後期以降、美作東部英多、勝田文化圏が設定できそうである。概して、出雲街道を通じた播磨との、また吉井川を通じた備前との結びつきが強い地域である。

この地域も従来からの考古学的知見に加え、高本遺跡⑧、小中遺跡⑨、天神原遺跡⑩、狼谷遺跡⑪といった中国縦貫道敷設に伴なう事前発掘調査によって弥生文化の特質が明らかとなりつつある。さらに、近年勝央中核工業団地の造成に先だつ調査⑫によって中期集落遺跡の資料の増加をみている。

苫田郡、久米郡は、美作中央部吉井川中流域に位置し、美作分国以後苫田郡に国府がおかれ、近世津山城が築かれるなど、現代に至るまで美作の政治的，経済的中心をになってきた。

古くから、下道山遺跡⑬、一丁田遺跡⑭、沼遺跡⑮、桃山遺跡⑯、上原遺跡⑰といった発掘調査ないしは、かなりな資料の表採された遺跡が知られており、特に近年では急激な開発の波をかぶって、数多くの弥生時代集落、墓地遺跡が発掘調査されている。後期以降、山陰地方及び播磨、但馬地方の影響が強く出てくる特異な文化圏を形成している。

中期の「単位集団」の実体にせまるものとして、近年、押入西遺跡⑱、紫保井遺跡⑲、沼Ｅ遺跡⑳、稼山遺跡㉑、鮒込遺跡㉒、京免遺跡㉓、竹ノ下遺跡㉓等が調査されており、このうち沼Ｅ遺跡、京免遺跡、竹ノ下遺跡では、集落に近接して墓地が発見されている。

さらに、後期社会の解明の手がかりを与える資料として、二宮遺跡㉔、大成遺跡㉕、京免遺跡、竹ノ下遺跡といった集落遺跡があり、低丘陵上に位置する下道山遺跡㉖、権現山遺跡㉗、丸山遺跡㉘、桃山遺跡㉙といった墓地遺跡がある。前三者からは、向木見型の特殊器台が発見されており、桃山遺跡を含めその葬送用土器の著しい発達ぶりを知ることができる。

大田十二社遺跡の所在する津山市大田は、平安時代倭名抄による美作国苫東郡苫田郷に位置する。苫東郡には、この他高野，綾部、美和、賀和、賀茂、林田、高倉、高田の各郷が記るされており、その多くは現在も農村地帯で農業経営形態からみて今日でもそのそれぞれが一つのまとまりとして機能しているようにみえる。

ここでは、旧苫田郷を中心にその遺跡のありかたを考えてみたい。

苫田郡東域には、沼、大田、紫保井、志戸部、勝部、籾保の６ケ村が含まれ、各村が伝統的な閉鎖性と水利組合を通じた統一性を保っている。弥生時代の遺跡のありかたを考える場合も、この伝統的枠組がある程度参考になるものと思われる。

この地域の集落遺跡の立地をみると、大ざっぱには宮川左岸の河岸段丘上の京免遺跡、竹ノ下遺跡の平地に位置する遺跡と、鳥趾状に延びた谷水田を見おろす丘陵上の大田十二社遺跡、沼遺跡、沼Ｅ遺跡、紫保井遺跡、高専地内遺跡、酪農試験場地内遺跡等がある。

中期をみた場合、平地に位置するものも丘陵上㉚に位置するものも小住居群㉛のまとまりと考えられ、基本的性格差はない。しかし後期をみた場合、京免遺跡の環濠集落址と丘陵上のものと

Fig. 3　大田十二社遺跡周辺の地形図（1／25000）

は少くとも集落規模の点で大きな相違となってあらわれているようにみえる。

郷内の弥生遺跡では、一丁田遺跡京免遺跡で弥生時代前期土器片が比較的まとまって出土しているが、明確な遺構は伴なっておらず、もっとも古い遺構としては、竹ノ下遺跡の中期中葉に属するV字溝がある。このV字溝は、幅1.8m 、深さ1.5m の規模で、30m は少くとも延びていることが確認されているが、溝内に土器片の流入があまりないことから、水田水利用のものと思われる

丘陵上にほぼ同時期の住居址が、沼E遺跡及び紫保井遺跡で発見されていることと考え合せせて、この頃から水田経営が成りたちはじめていたこと及び開発の手は谷すじに延びていったことを少くとも知ることができる。中期後葉に至り、郷内のおびただしい箇所で集落遺跡の増加をみるが、これらのうち発掘調査された沼遺跡、紫保井遺跡、沼E遺跡などの住居群のありかたは、住居規模の大小が後期に較べ顕著であること、建物の機能分化が顕著なこと及び近接して小規模な墓地が発見される点に特徴がある。

美作においても、後期中頃から葬送用土器の発達をみるが、前記6ケ村域にはいまだこの時期の墓地は発見されていない。既述のように、宮川をはさんだ対岸の丘陵上、下道山遺跡、権現山遺跡には多数の木棺墓群が発見されており、これらの関係の解明は農業共同体域の推定にもつながる重要な課題となろうとしている。

(注)

① 松本和男「久世町の夜あけ」『久世町史』、久世町教育委員会　1975年

② 船津昭雄「美作久世町宮脇住居址をめぐって」『古代吉備第1集』　1958年

③ 二宮治夫、浅倉秀昭「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』　岡山県教育委員会　1958年

④ 新東晃一、田中満雄「下市瀬」　『　〃　3』　〃　1976年

⑤ 山磨康平、高畑知功「旦の原」　『　〃　4』　〃　1977年

⑥ 橋本惣司、栗野克己「西原遺跡」　『　〃　6』　〃　1973年

⑦ 山磨康平、奥和之『中山遺跡』落合町教育委員会　1978年

⑧ 井上弘、山磨康平、岡田博「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会　1975年

⑨ 栗野克己、高畑知功「小中遺跡」　『　〃　7』　〃

⑩ 下沢公明、柳瀬昭彦、河本清、橋本惣司「天神原遺跡」『　〃　7』　〃

⑪ 松本和男、二宮治夫「狼谷遺跡」　『　〃　7』　〃

⑫ 山磨康平他『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』岡山県勝央町教育委員会　1976年

⑬ 御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21・22合併号』1976年

⑭ 近藤義郎、植月荘介「山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究』津山郷土館　1957年

⑮ 近藤義郎、渋谷泰彦編　『　〃　』　〃

⑯ 河本清「津山市桃山作陽高等学校　弥生時代竪穴群」『古代吉備第5集』　1963年

⑰ 近藤義郎、春成秀爾「岡山県津山市上原遺跡」『日本考古学年報19』　1966年

⑱ 橋本惣司、下沢公明、井上弘、柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』 1973年

⑲ 1976年　大規模農道敷設に伴ない発掘調査された。弥生時代中後期集落遺跡。報告書未刊

⑳ 河本清、柳瀬昭彦「沼Ｅ遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告９』岡山県教育委員会 1978年

㉑ 村上幸雄、橋本惣司『糠山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴なう文化財調査委員会 1979年

㉒ 津山市草加部に所在する中期後半の集落遺跡、工業団地造成に伴い1977～79年にかけ、草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が調査。報告書未刊

㉓ 津山市沼に所在する前期から後期に至る集落遺跡。1977～80年にかけ土地区画整理事業に伴い津山市教育委員会が調査。一部で墓地が見つかっている。報告書未刊

㉔ 高畑知功、二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会 1979年

㉕ 栗野克己、山磨康平「二宮大成遺跡」『　〃　６』　〃 1973年

㉖ 栗野克己、岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『　〃　17』　〃 1977年

㉗ 津山市小原に所在する弥生時代後期木棺墓群、墓地造成に伴ない津山市教育委員会が1976年に調査。

㉘ 河本清「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山文化財年報Ⅰ』津山市教育委員会 1975年

㉙ 作陽高等学校グランド造成時に発見された葬送用土器の一群が、同校に保存されている。

㉚ 津山高等工業専門学校造成時に、沼遺跡と同規模の住居群が発見された。調査なし。今井堯によると、同対象地には中期から後期の土器が散布していたという。

㉛ 津山市大田に所在する酪農試験場内に広く弥生式土器が散布している。

第２章　発掘調査の概要

１．発掘調査の経過

発掘調査は、昭和49年５月８日から着手された。当時現地は、西平担面と西斜面が桧林、西平担面より約２ｍ下段の東平担面は、旧畑地で樹木はなく茅が生い茂っていた。桧林の用地買収は、調査開始後も難行しており、調査はまず東半部の茅を始めとする雑草の刈り取り作業から始まった。グリッドの設定にあたっては、工事用測量杭Ｒ－６（対象地ほぼ中央）を基点に、トランシットの磁北にあわせ東西南北に10ｍの方眼を設定した。Ｒ－６杭がＭ８となるように、この線を北から南に各Ａ、Ｂ、Ｃ……、東から西に１、２、３……とし、区画番号は10ｍ方眼の北東角の杭番号で呼ぶこととした。

草刈りと平行して、Ｍ８杭を中心に各区一本あて、東西、南北にトレンチを設定し、掘り下げをおこなった。最初に掘り下げをおこなったＪ８、Ｋ８、Ｌ８区のトレンチで、基本的層序、及び弥生式土器包含層の存在が確認された。第１層は、表土灰褐色土層（旧畑耕土）、第２層は褐色土層、第３層は黒色土層（黒ボク）で以下黄色ないしは黄褐色の粘質自然層に至る。弥生式土器片は概ね３層中に含まれていた。

５月末、Ｍ６、Ｍ７区トレンチで１号住居址が発見され、初めて弥生時代の遺構の存在が確認された。出土遺物から、弥生時代後期後半、大略県南部編年の酒津式併行期のものと思われた。

一方、西平担面南端Ｍ14区に古墳の残骸とみられる盛土が存在しており、同時に全掘にかかったが、これは古墳ではなく、時期不明のものの祠の基壇ではなかろうかと考えられた。しかし、この盛土の中に弥生式土器片と炭が比較的多く混じっていたので、小トレンチを入れてさらに掘り下げをおこなった結果、住居址床面（14号住居址）を確認した。

つづいて、Ｌ14区のトレンチで２号住居址の存在を確認し、またＨ６区のトレンチで３号住居址を確認した。この結果、対象地の全面に弥生時代の住居が広がるという予測がついた。出土土器からみて概ね弥生時代後期に属する集落址であろうと考えられた。

遺構が全面に広がるという推測がついたため、トレンチをさらに密に入れると共に、一部で区ごとの全面掘り下げをおこなう必要にせまられ、土の捨場を確保するため、東斜面下段のＱ５区にトレンチを入れ遺構の有無を調べた結果、袋状貯蔵穴１基が検出され、ただちにこれを完掘した。遺物を伴わず時期判定は困難であったが、袋状貯蔵穴は群在する傾向をもち、これ以外の袋状貯蔵穴の存在する可能性が浮びあがってきた。

６月末、急転直下西平担面及西斜面桧林の用地買収が成立し、森林組合の手で伐採をおこな

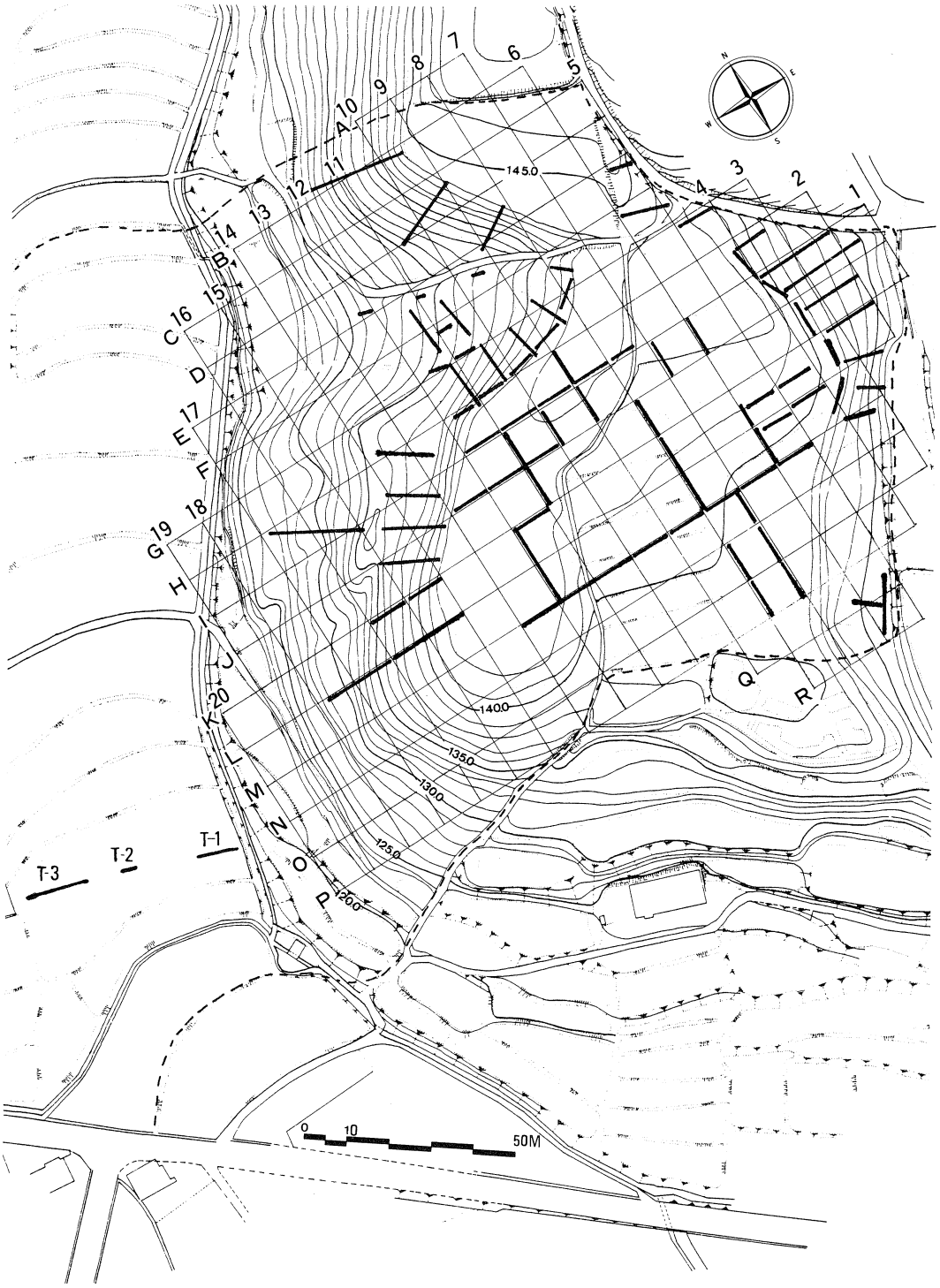


Fig. 4　グリッド及びトレンチ配置図（縮尺1/1600）1974年10月

い、伐採後、ただちにトレンチ調査にかかった。西平担面の堆積層は薄く表土をとりのぞくとすぐ黄褐色自然層が露呈し、遺跡に広く分布する黒色土層は遺構内にのみ残存していた。トレ

ンチを掘り進めた結果、J10、I11、I12区トレンチにかかって4、5、6号住居址が発見され、また多数の袋状貯蔵穴の存在が知られた。同時に掘り進めた東丘陵東端のＩ４、Ｉ５、Ｉ６、Ｉ７区のトレンチでも袋状貯蔵穴が発見され、大まかに東西二群の貯蔵穴群の存在が考えられた。

7月に入り、作業員の数にも余裕が出てきたため、この頃からトレンチ調査と併行して、トレンチにかかった遺構を広げるかたちで、遺構の掘り下げにかかった。

一方、西斜面北方で桧林の伐採時、地表に「山道」らしい大小の石を敷きつめた幅約２ｍ、長さ約40ｍの石敷が露出しているのが発見された。この石にはさまり、弥生式土器片がわずかに発見されたので、弥生時代の遺構である可能性もあり、これを二本のトレンチで断ち切ったところ、これは層位からみて、後世のものと判断できた。しかし、表土下40～50cm以下黒色土の厚い堆積層があって、この黒色土上層に大小の礫とともに弥生式土器片多数が発見された。この結果をもとに、さらにこの部分にトレンチを密に入れたところ、斜面の広い範囲にわたって礫群、弥生式土器片が密に分布することが明らかになった。この他、古墳時代終末期のものと思われる石室1基が検出された。このため地形にあわせ東西約30ｍ、南北約15ｍ程度を限って部分掘り下げを行なうこととし、その主要部分について実測をおこなった。

遺構の性格については不明な点が多かったが、一応墓地、祭祀遺構の両者が考えられた。

10月、眼下の水田部分のグランド造成予定地で排水工事がはじまった。これを利用し、ユンボによって谷の断ちわりをおこなった。この結果、トレンチ西部分で幅約70cmの小溝が検出された。肩の部分で弥生式土器片その上層で須恵器片が認められた。このトレンチについて、岡山大学の笠原安夫は、種子分析のサンプルを層ごとに採集した。

11月15日、多くの掘り残し部分を残しつつも自衛隊による造成工事が着工された。掘り残しは、特に袋状貯蔵穴東群部分に多く、この結果ブルドーザーの表土はぎによって16号住居址、袋状貯蔵穴40数基が検出された。工事に猶余はなく、袋状貯蔵穴は位置をおとすことと、法量の略測、写真撮影をおこなったのみで土器は一括してとりあげた。位置図の作成においてすでに測量杭はとんでおり、作図上若干の混乱が生じた。こういった混乱した状態が12月末まで続いた。

12月末をもって、遺跡北半の第１工区の遺構は造成によりほぼ姿を消してしまい、翌50年１月から遺跡南半の第２工区の遺構の調査に専念した。第２工区の発掘調査で、新たに奈良時代の柱穴群及びカジ炉状遺構が検出された。しかし奈良時代柱穴群は、大半が深さ数センチを残すのみで上部は削りとられており、建物としてのまとまりをもつものではなかった。

全調査は、翌50年３月末日をもって終了し、４月初旬より始まった自衛隊造成工事により遺跡の大半は消失した。

2. 遺構の概要

地形から判断して、大田十二社遺跡は北ないし北東部へさらに広がっていた可能性はある。しかし、遺構の組み合わせからいって、これら遺構群は一群の集団の居住地をほぼ示すとみるに十分であり、大略一住居群の大半に発掘範囲が該当するとみて差しつかえない。

主要検出遺構は、弥生時代後期竪穴式住居16棟、同段状遺構３基、同袋状貯蔵穴79基、同祭祀遺構群１、谷水田部発見の小溝１、奈良時代竪穴式住居１棟、同カジ炉１がある。

本項では、弥生時代遺構に限って概要を報告したい。

竪穴式住居平面形態は、大まかに隅丸方形（１号の一部、３号、８号、９号、10号、14号の一部、15号、18号、19号、21号）と円形（１号、２号、４号、５号、６号、９号、10号、12号、13号、14号、16号）に分かれる。

隅丸方形住居はすべて４本柱で、円形住居には４本柱（２号、13号の一部）５本柱（５号、13号の一部、16号)、６本柱(12号)、７本柱（１号）がある。一般に隅丸方形住居は規模が小さく、円形住居は床面積が広い。円形住居主柱数にバラツキがあるのは、主にこの事実にかかわっているとみられる。

時期別にみると、住居平面プランは概ね隅丸方形から円形へと推移し、従って床面積は時期が新しくなるに従って大きくなる傾向にあるといえる。

住居床面積を比較した場合、同時併存住居間にきわだった面積の大小は認めがたい。いずれの竪穴式住居にも床面中央部に柱穴掘方状のピットがあり、１、３、８、９、12、18、19号住居址では、この小穴をとりまくように土堤状遺構がめぐっていた。この穴の機能については諸説あるが、近年の調査例から推すとイロリ跡である可能性が強い。

また、３、８、９号住居址では、壁体溝中に小穴群が検出されており、壁体を支える杭のあとであろうと思われた。なお12号住居址では、壁体溝中にミニチュア土器２点が発見されており、これなどは室内祭祀を示す好例といえる。付属施設としては、５号住居址でベッド状遺構、９号住居址で機能不明の貯蔵穴状ピット群が検出されている。

この他、７、23号段状遺構が発見されているが、その機能の推定は今後に残された問題である。

79基発見されている袋状貯蔵穴は、形態の点ではほぼ一様で、深さは50～ 230cmと多様である。これは、削平度とも多分にかかわることであるが、口径は60～70cm、底径120～180cmで深さが90～180cm程度が標準規模である。

底面中央ないしは辺部に柱穴痕を残すものがあるが、大半のものには柱穴痕は認められなかった。

貯蔵穴の占地は慎重に配慮されていたらしく、いずれも旧地形でやや高燥、安定した基盤層

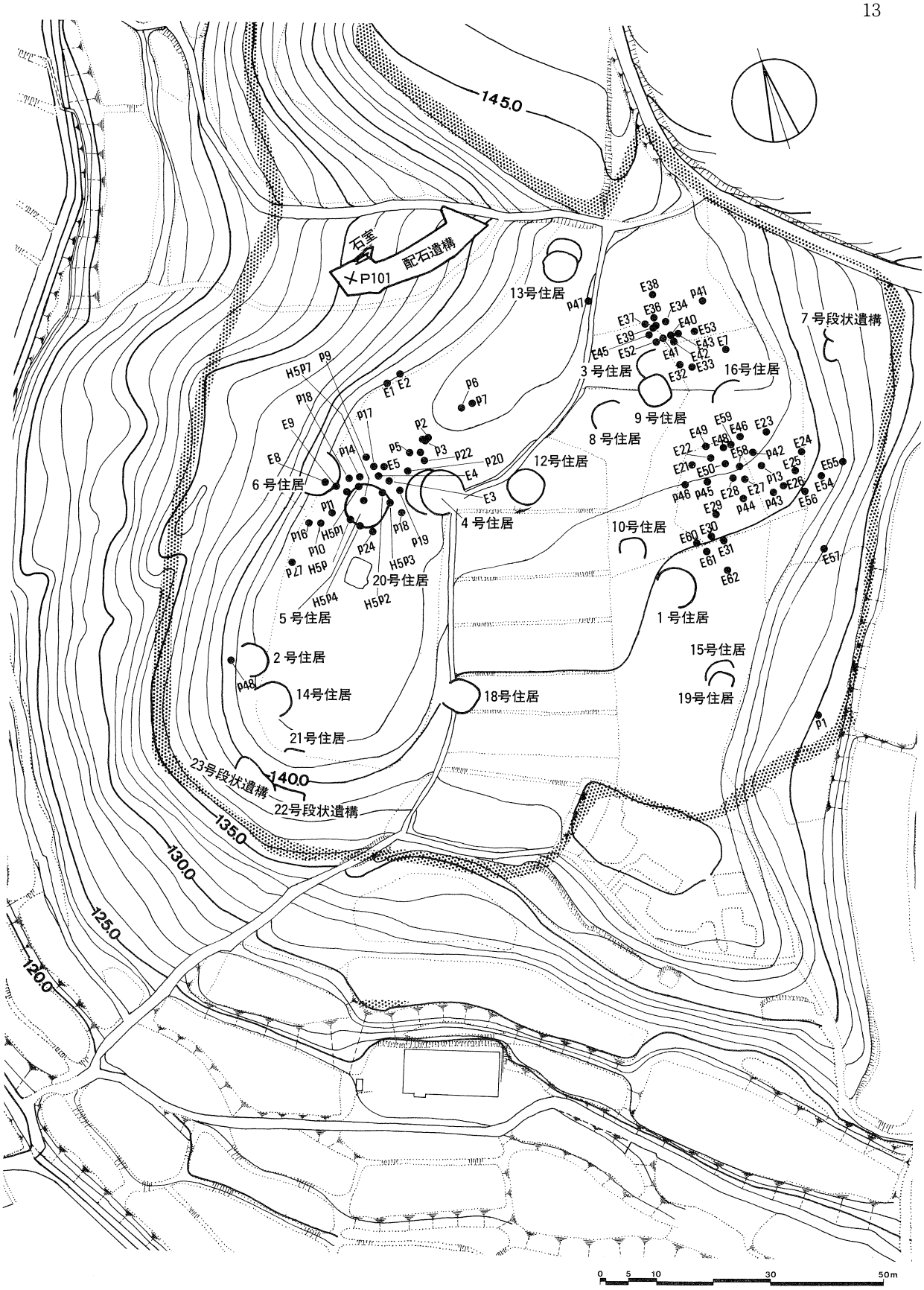


Fig. 5　遺構全体図（縮尺1/1000）

が浅い位置で得られるところに位置している。時期別にみると、貯蔵穴群は群在する傾向をもち、一般に新しくなるに従い貯蔵穴数は増加の傾向にあるとみられる。

集落北西部の斜面で、黒色土層上面に大小の礫に混って、弥生式土器片多数が発見された。それらは、斜面に雑然と散布し、この地区が石や土器片の捨場という印象を与える。しかし、詳細にみると、それらは1m弱の小ブロックにまとまるようにも見える。

当初この「遺構」の解釈に苦しみ、墓地、祭祀遺構の両面が考えられた。平面実測後、礫群をトレンチで断ち切った結果も、墓壙とみられる落ち込みは確認できなかった。土器の器種をみると、高坏形土器や内面をていねいに仕上げた壺形土器等が目だつとはいえ、特に明確な祭祀用土器は発見されなかった。調査後半、この調査区の一角で特に集石の厚い礫群が発見され、これを掘り下げた結果、石棒1本、鼓形器台片3個体分、椀形土器があるまとまりをもって発見された。この発見があって、この地区は祭祀遺構であろうと評価することとなった。この地区で発見される土器は、形式からみて2～5期のものが多く、永年にわたって祭祀場として利用されたものと思われる。

谷部分で発見された小溝は、丘陵から谷部へかけての接点部分に位置し、谷と平行に流れている。溝幅は70cm、深さ40cmで人工の溝であることに疑いはなかった。溝肩部分で弥生式土器片が検出されており、弥生時代後期、丘陵上の集落と一致する時期の溝である可能性が強い。水田を想定するとすると、溝より東の谷側に考えられ、その位置は現在の谷水田にみられる用排水溝ときわめて類似している。おそらく水田の溝と考えてよかろう。

大田十二社遺跡の住居配置は、貯蔵穴群を考慮に入れても、中期後半のこの種の住居群とは異り、一コンパウンドを復元するにはあまりにもまとまりに欠けているようにみえる。とはいえ、一まとまりの住居群であることは確かで、住居群の空間配置を明らかにすることは後期社会の理解にもつながるものであろう。

第３章　出土遺構及び出土土器

１．住　居　址

１号住居址（Fig.６）

円形竪穴住居址で、隅丸方形住居との重複がみられた。浅い谷への傾斜面に位置するため、西半の残存状況は悪い。円形住居の規模は、長径７ｍ、短径 6.6m 程度である。周壁高は、もっとも残存状況のよい東北辺で約25cmである。円形住居貼床面を掘り下げ、隅丸方形４本の壁体溝痕跡を検出した。壁体溝検出状況から概略①→②→③→④→⑤という住居築造順序がおさ

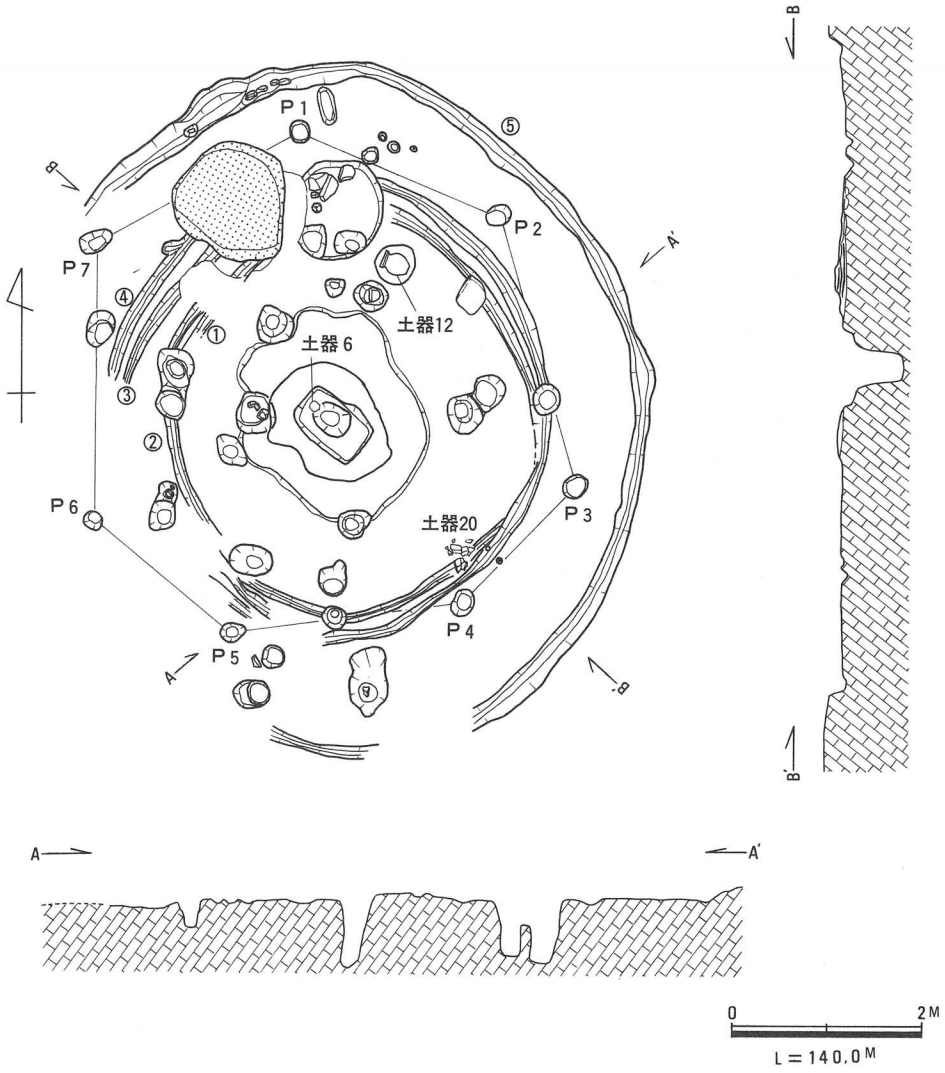


Fig.６　１号住居址平面図、断面図（1/80）

えられた。いずれの隅丸方形住居壁体溝も全周せず推定値にとどまるが、①、②から復元される住居規模は、辺長４ｍ、③、④の示す値は長辺4.6m、短辺4.4m程度とみられる。円形住居の主柱穴は、Ｐ１～Ｐ７の７本が考えられ、隅丸方形住居は各柱組合わせは不明であるが、いずれも４本柱であったと判断できる。各柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２、2.30m、Ｐ２～Ｐ３、3.00m、Ｐ３～Ｐ４、1.72m、Ｐ４～Ｐ５、2.54m、Ｐ５～Ｐ６、1.93m、Ｐ６～Ｐ７、2.88m、Ｐ７～Ｐ１、2.50mである。

中央穴には、楕円形の土堤が巡り、土堤断面に「版築」状の黄色粘土と黒色土層互層の縞が観察された。中央穴上面は長方形で長、短辺76cm×50cmである。中段以下は円形ピットとなり、円形部上面直径は31～40cmである。土堤上面よりの中央穴深度は、62cmである。

各住居とも、中央穴の位置を同じくしているとみられ、これら五軒の住居は継続して営まれた可能性がある。

床面に焼土面はなく、上面平な作業台とみられる石がＰ１、Ｐ８付近で各１個検出された。いずれの作業石も、床検出面より数センチ浮き上がっている。

なお、Ｐ１付近の壁体溝中に４個の拳大の石が落ち込んでいたが、６号住居址でも同様の現象がみられ、住居構造にかかわるものとして注意される。

Ｐ８は、浅い窪みで、甕形土器１点（Fig.７－12）が横倒しの状態で発見された。これは最終円形住居に伴うものである。住居廃絶時期の判定資料としては、この他Ｐ４付近で高坏の坏部が（Fig.７－20）床面に貼り付き出土した。これら以外椀形土器（Fig.７－28）がトレンチ調査の際床面近くで掘り上げられており、これも本住居廃絶時期を示すものと思われる。

これら三点は、いずれも４式土器に分類され、本住居の廃絶は４期と考えられよう。埋土中には、若干の２式土器とともに３式土器も多く、隅丸方形住居は２期ないしは３期に営まれたものと考えられよう。

１号住居址出土の土器（Fig.7）

壺形土器（１～５）

１、２は、ラッパ状に開く口縁部端を上下に肥厚拡張させ、端面に２条の凹線文を巡らす。内外面ともヨコナデ仕上げ。３は、二重口縁形壺の口縁立上がり部片で、外面にかすかに凹線風の段を残すが、内外面とも仕上げはヨコナデによっている。４は、壺胴部片とみられ、形態不明であるが、巴形スタンプ文様三単位が認められる。内面は、ヘラ削りである。５は、いわゆる二重口縁を呈する壺で、口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面には極めて目の細いタテ方向の刷毛目痕が残されている。内面は、頸部下半よりヘラ削り痕が認められ、頸部外面にわずかにススの付着が認められる。

甕形土器（７～17）

13は、口縁端を肥厚拡張させ、内外面ともヨコナデ仕上げ。外面頸部にわずかにタテ方向の

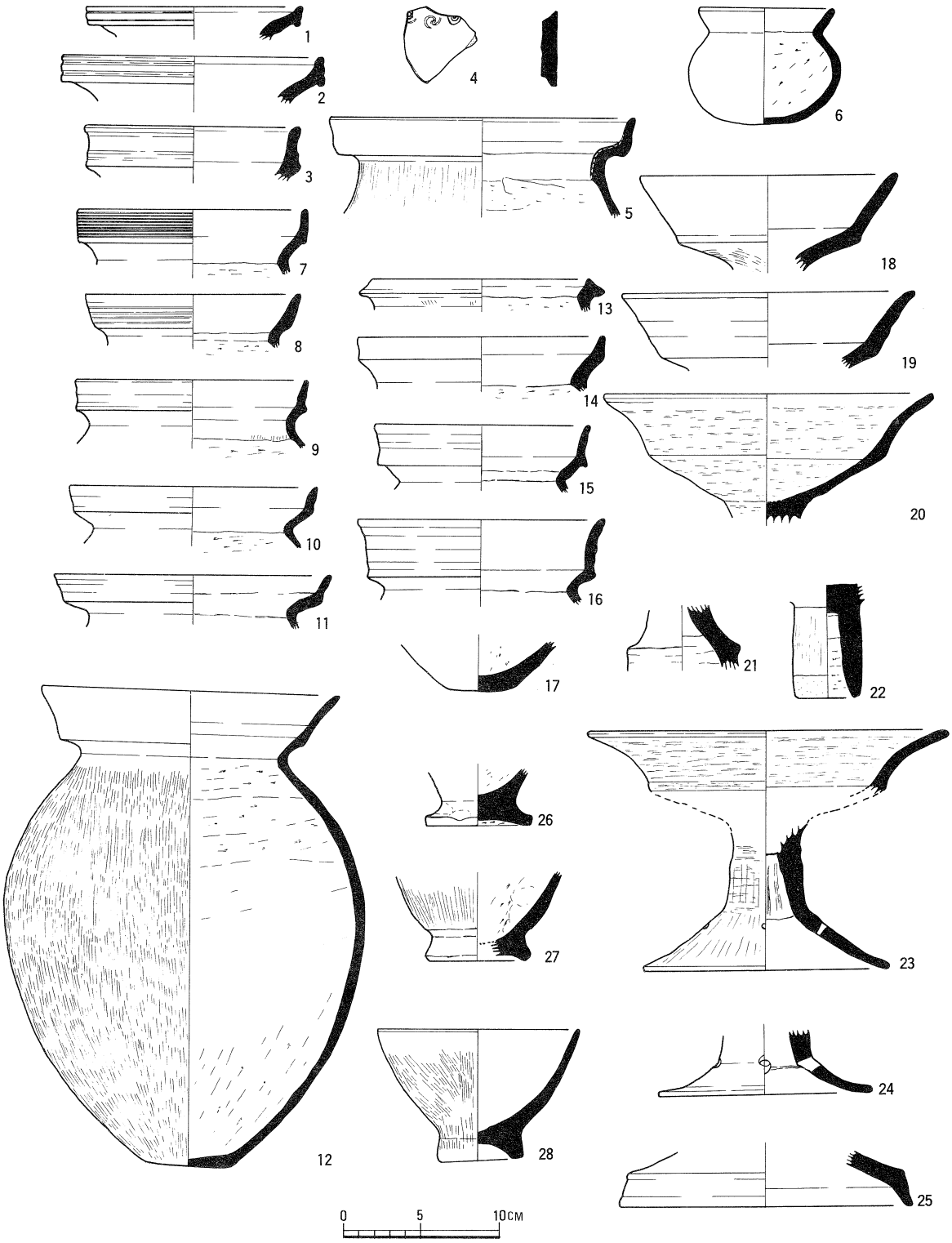


Fig. 7　1号住居址出土の土器 (1/4)

刷毛目痕が認められる。14は、口縁端を上方に立上がらせ、内外面ともヨコナデ仕上げ。いずれも胴部内面にヘラ削り痕を残す。７～12、15、16は、二重口縁を呈する甕形土器で、立上がり部端は丸くおさめられている。７、８が、立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文を残す他は、口縁部内外面ともヨコナデ仕上げである。いずれも胴部内面は、ヘラ削りによると思われる。12は、ほぼ全形の分かる土器で、外面頸部以下にタテ方向の刷毛目痕を残し、肩部分はヨコ方向の刷毛調整がさらに加えられている。胴部内面上半は、ヨコ方向のヘラ削り、下半にはタテ方向のヘラによる削り上げ痕を残している。平底を有し、底面はナデ仕上げ。

高坏形土器（18～25）

いずれも外面及び坏部内面に丹彩痕を残す。丹彩部分に細いヘラ磨き痕を残すもの(20、23)、ヨコナデないしは刷毛目痕のみをとどめるものに分かれる。23は、外面筒部以下にタテ方向の刷毛目痕を残し、坏内外面及び筒部にヨコ方向のヘラ磨きが加えられている他、筒部内面に絞り痕が観察される。脚外面のヘラ磨きの有無は不明である。

小型壺形土器（６）

くの字状に折れ曲がり外反する口縁部端は丸くおさめられ、口縁内外面はヨコナデ仕上げ。外面及び口縁内面に丹彩が認められる。胴部内面上半は、ヨコ方向のヘラ削り、下半はタテ方向の削り上げが加えられている。底部にわずかにフラットな面を残すが、丸底壺とみてよい。保存状態が悪く、外面調整は不明である。

鉢形土器（26、27）

26は、外面ヨコナデ、内面にヘラ削り痕を残し、台部外面に指頭圧痕が認められる。27底部には、荒いタテ方向の刷毛目が認められ、台部分は内外面ヨコナデ仕上げで、台内面に指頭圧痕が認められる。

椀形土器（28）

28は、かるく内彎する立上がり部をもち、立上がり部端は丸くおさめられ、比較的厚手の台部がつく。外面には、タテ及びナナメ方向の刷毛目痕を残し、口縁端部及び内面、台部内面はナデ仕上げである。

２号住居址（Fig.８）

西平担面南端で、斜面にかかる津山市街を一望できる見晴しの良い場所に占地している。平面形態はやや角をもつ円形住居で、最大径は６ｍを計る。周壁高は、残存良好な東部分で60cmを残す。住居床面には、住居拡張を思わす壁体溝痕跡が部分的に認められ、これと対応するように主柱穴Ｐ１、Ｐ1′、Ｐ２、Ｐ2′、Ｐ３、Ｐ3′、Ｐ４、Ｐ4′が対になって発見された。各柱間の切合は明確とならなかったが、柱穴配置からみて先行する住居はＰ１～Ｐ４、建てかえ住居がＰ1′～Ｐ4′で構成されていたとみられる。各柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２、1.82m、Ｐ２～Ｐ３、2.02m、Ｐ３～Ｐ４、1.98m、Ｐ４～Ｐ１、2.10m、Ｐ1′～Ｐ2′、2.72m、Ｐ2′～Ｐ3′、

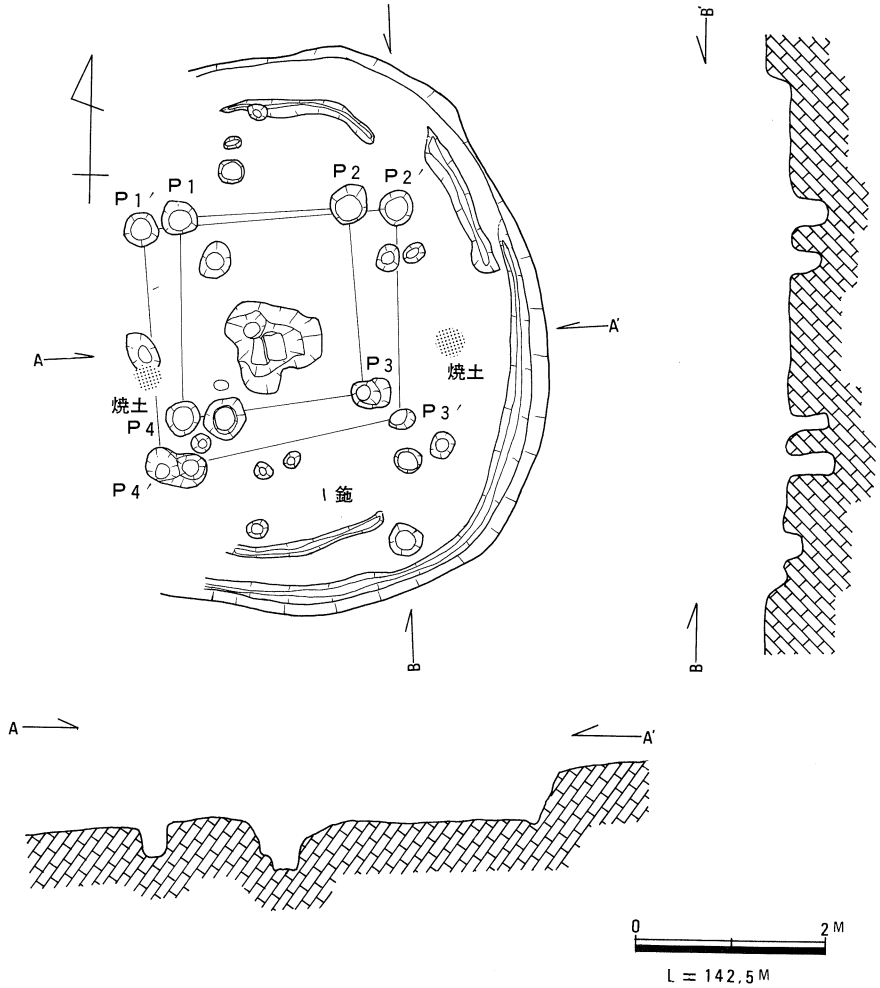


Fig. 8　2号住居址平面図、断面図（1/80）

2.35m、P3′～P4′、2.60m、P4′～P1′、2.60mである。

中央穴に土堤をみないが、重複があり、住居拡張に際し若干位置をずらしたことが知られる。東西2ケ所で、炉とみられる小円形焼土面が検出された。

本住居には、火災痕跡がないが床面で鉄製鉈及び石庖丁が出土している。

床面出土の土器はなく時期決定のきめ手に欠くが、埋土中より若干数の4～5式土器が出土しており、廃絶時期を概略4～5期とすることができよう。

2号住居址出土の土器（Fig. 9）

壺形土器（1～7）

1、2は、口縁端部をやや上方へ拡張させ、端面に三条の凹線文を一巡させる。1は、内面ヘラ磨き、外面ナデ仕上げで、2は剝離激しく調整不明である。5は、二重口縁形壺立上がり部片で、内外面ヨコナデ仕上げ。6は、長手の首をもつ二重口縁形壺で、胴部内面にヘラ削り

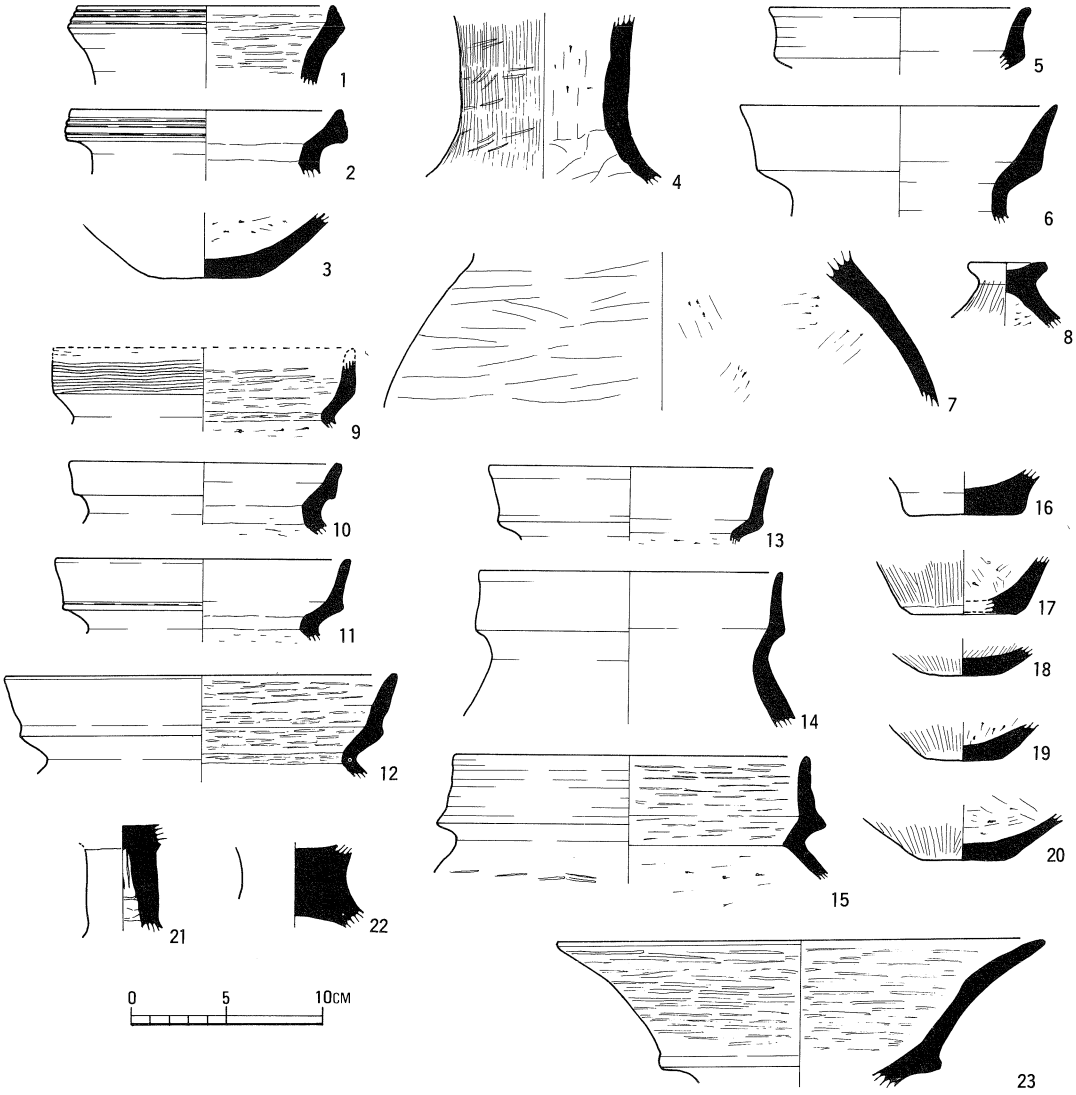


Fig. 9　2号住居址出土の土器（1/4）

痕を残すが、内外面とも器壁の荒が激しく調整不明である。4は、筒状頸部片で、外面はタテ方向の刷毛目調整ののち雑なヘラ磨きが加えられている。内面は、上部$\frac{2}{3}$は不定方向のヘラ削り、下部$\frac{1}{3}$はヨコ方向のヘラ削り痕をとどめる。7は、肩から胴部にかけての破片で、外面に丹彩があり、荒いヘラ磨きが加えられている。内面には、不定方向のヘラ削り痕が認められる。3は、外面にかすかに丹彩痕を残し、内面にヘラ削り痕を残す。

甕形土器（9～20）

甕形土器は、いずれも二重口縁を呈し、立上がり部外面に9は櫛状工具による平行沈線文を、11は下端に一条の沈線文を巡らす他はヨコナデ仕上げである。口縁部内面は、ヘラ磨き痕を残すもの（9、12、15）、ヨコナデによるもの（10、11、13、14）に分かれる。いずれも胴部内面は

ヘラ削りである。16は、剝離激しく調整不明。17～20は、外面タテの刷毛目調整、内面は18が刷毛仕上げの他ヘラ削りが加えられている。底面は、19に刷毛目が残されている以外いずれもナデ仕上げ。９、11、15、20に吹きこぼれとみられる炭化物の付着が認められる。17は、二次的赤化現象が顕著である。

高坏形土器（21、22）

いずれも筒部片で、丹彩痕が認められる。遺存状況悪く、外面調整は不明である。21には、内面上半に絞り痕が観察され、下半に指ナデ痕がある。21は、ほとんど砂粒を含まない。

鼓形器台（23）

内外面とも丹彩され、口縁立上がり部端とくびれ部がヨコナデされている他、内外面にヘラ磨きが加えられている。胎土中に２～３㎜の砂粒を多く含む。

蓋形土器（８）

８は、つまみ部分をナデ仕上げ、外面にタテ方向のヘラ磨きが加えられ、内面はヘラ削りのあと、雑にナデ仕上げされている。

３号住居址（Fig.10）

表土下20㎝前後で検出された住居址で、畑地耕作によりその大部分がすでに削りとられわずかに床面を残すのみであった。北側の最も残存良好部分でも周壁高数センチを残すのみである。壁体溝も約半分を残すのみであるが、柱配置とあわせ推定すると一辺約５ｍでＰ１～Ｐ４の柱で構成される隅丸方形四本柱住居と考えられる。Ｐ４は、四本柱を構成する柱として位置が少々ずれるのでこの部分をたんねんに検出したが、他の柱穴は発見されずＰ４を主柱と考えざるえない。

各柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２、3.00m、Ｐ２～Ｐ４、2.45m、Ｐ４～Ｐ３、3.70m、Ｐ１～Ｐ３、2.25m である。壁体溝は、幅20～25㎝、深さ５～６㎝であるが、この溝中に直径約10㎝の杭跡とみられる穴が20～30㎝おきに点々と検出された。これらはいずれも竪穴住居壁面の崩壊防護用板材の支柱杭痕と考えられよう。

中央穴は、上部平面形長方形下半円形ピットで１号住居とその特徴を同じくする。中央穴にともなう盛土による土堤は部分的に検出したのみであるが、本来一巡していたものと思われる。土堤上面から中央穴底までの深さは85㎝である。炉跡とみられる焼土面の検出はない。

本住居は、南半で８号住居と重複しており、８号住居埋土上面に３号住居貼床面がかすかに広がっていた。８号住居を埋めて建造したことは明白である。

火災痕跡は認められず、床面出土遺物は土器細片と同心円形スタンプ文様を付した把手（Fig.11－２）のみで、耕土層と埋土層境で若干の土器片の出土をみている。

床面出土土器から判断して、２期の住居である可能性が強い。

３号住居址出土の土器（Fig.11）

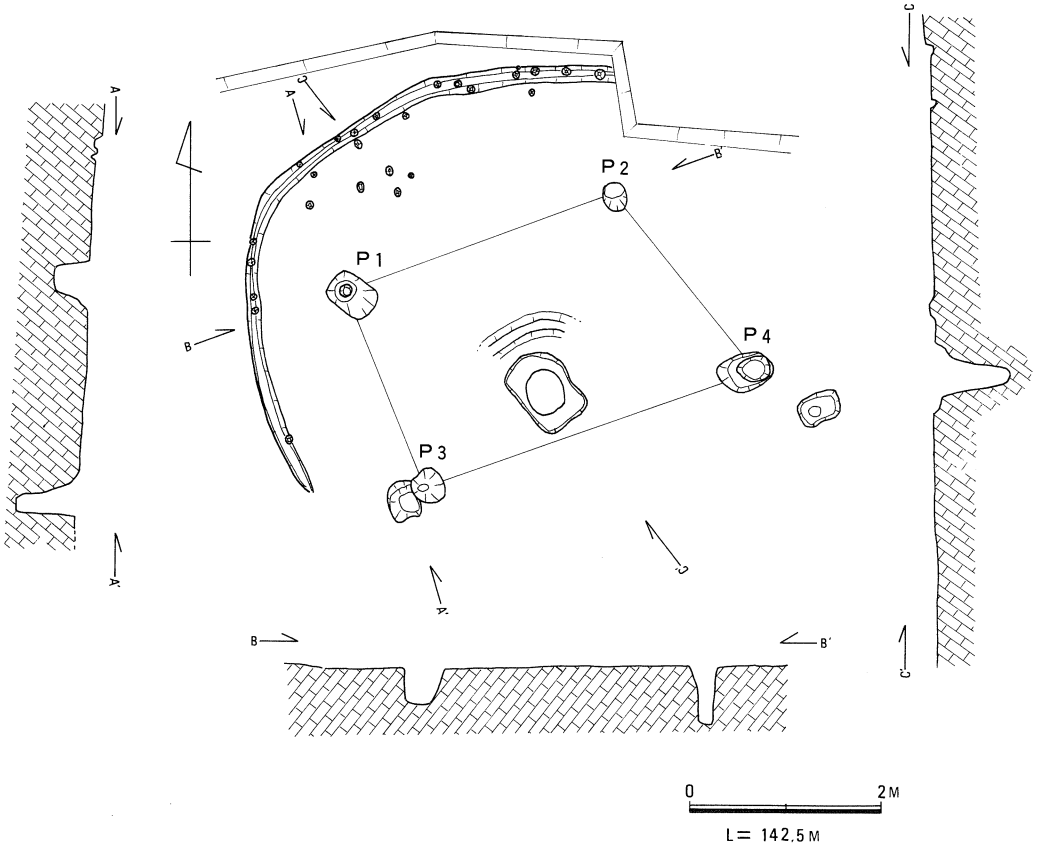


Fig.10　3号住居址平面図、断面図（1/80）

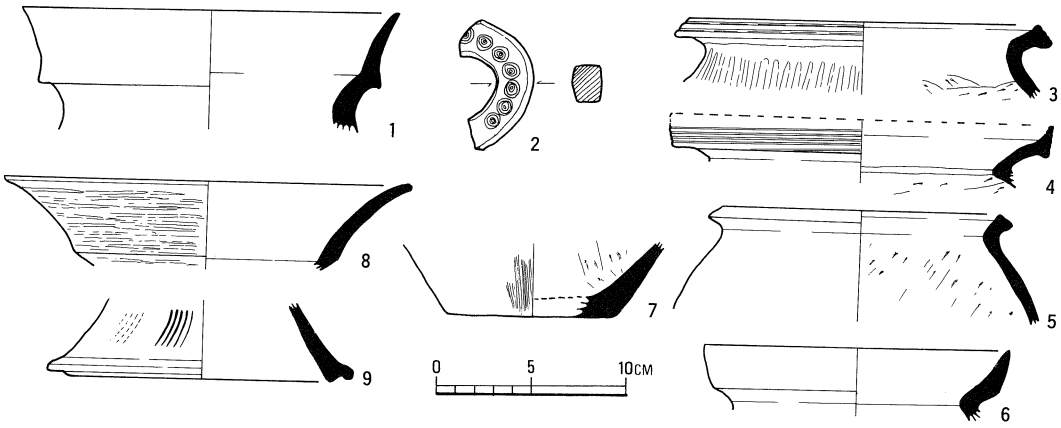


Fig.11　3号住居址出土の土器（1/4）

壺形土器（１、２）

１は、二重口縁を呈する壺形土器で、器壁の荒が激しいが内外面ともヨコナデ仕上げと思われる。２は、壺形土器把手とみられる破片で、四重の同心円形スタンプ文様で飾られている。

甕形土器（３～７）

３、５は、口縁端部を肥厚拡張させ、３は端面に二条の凹線文を一巡させる。頸部外面にタテ方向のヘラ磨き痕を残している。いずれも、胴部内面はヘラ削りである。４、６は、二重口縁形の甕形土器で、４は立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文が巡る。７は、底部片で外面に極めて細い刷毛目痕を残し、内面はヘラ削り、底面はナデ仕上げである。

高坏形土器（８、９）

８は、坏部立上がり部片で、内外面とも丹彩されている。外面ヘラ磨き、内面ヨコナデで、端部はヨコナデが加えられている。９は、脚部片で内外面ナデ、外面に猫描状のヘラ描沈線文様がつけられている。

４号住居址（Fig.12）

多数の住居が重複しており、きわめて複雑な様相を呈する住居址群である。西半分の残存状況はよい。大まかには、中央穴群とみられるＰ１、Ｐ２を中心とする同心円形の住居群２群の重複と考えられる。壁体溝から復元できるいずれの住居も大形の部類に属し、直径７～９ｍを計る。主柱穴と考えられるピット多数が存在するが、各柱穴がいずれの住居に伴うものか定かでない。

壁体溝の検出状況からいって、大まかにはＰ１に伴う住居群がＰ２に伴う住居群より古いことは確かである。

出土遺物には、鉄器３、石庖丁、スタンプ状石器、土器片多数があるが、いずれも埋土中のもので台付鉢形土器（Fig. 13—21）のみが最終住居に伴うものと考えられる。

埋土中の出土土器には、２式～５式土器がみられるが概ね４式土器以降が集中している。従って、４期から５期にいとなまれた住居群の可能性が強い。

住居中央部を南北に通る幅１ｍ弱、深さ30cm前後の溝は、奈良時代の遺物を伴い同時代のものと思われる。

４号住居址出土の土器（Fig.13）

壺形土器（１～７）

１は、口縁端部をつまみ出し、口縁部内外面はヨコナデ仕上げ、胎土中に砂粒は少い。２～４は、二重口縁形を呈し、２、４は、内外面ともヨコナデ、３は内面ヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。いずれも胴部内面はヘラ削りと思われる。底部片５は、外面にタタキ痕を残し、その上を刷毛目調整されている。内面はナデ仕上げ。６、７は、外面ヘラ磨き、７は内面にヘラ削り痕を残す。２の外面にススの付着が認められる。

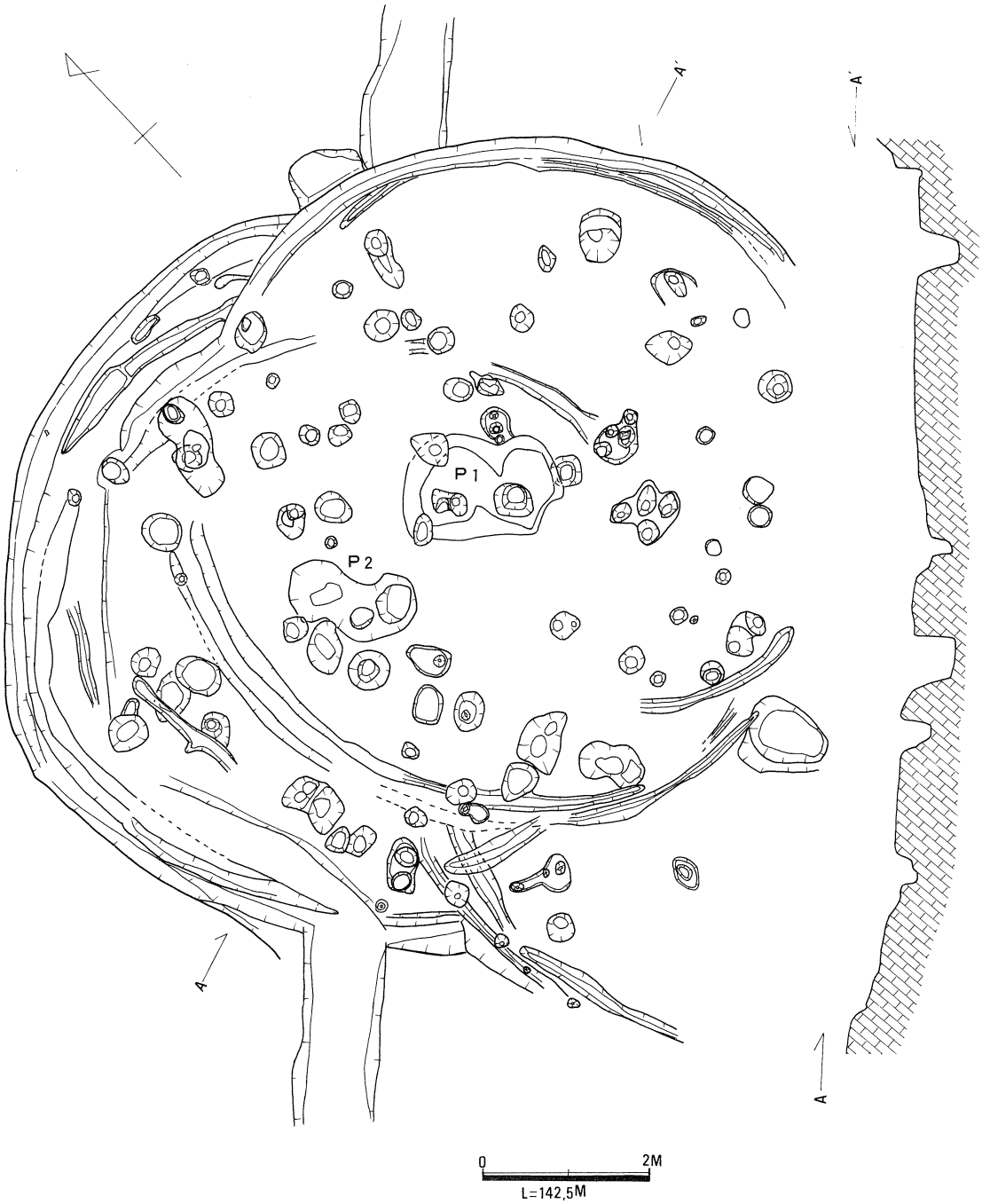


Fig.12　4号住居址平面図、断面図（1/80）

甕形土器（10～14）

12、14は、二重口縁形を呈し、12は立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。14は口縁部内外面ともヨコナデ仕上げ、いずれも胴部内面はヘラ削りによると考えられる。10、11は、小形甕で、11はくの字口縁を呈し、肩から胴部にかけて右上がりのタタキ目痕をとどめ

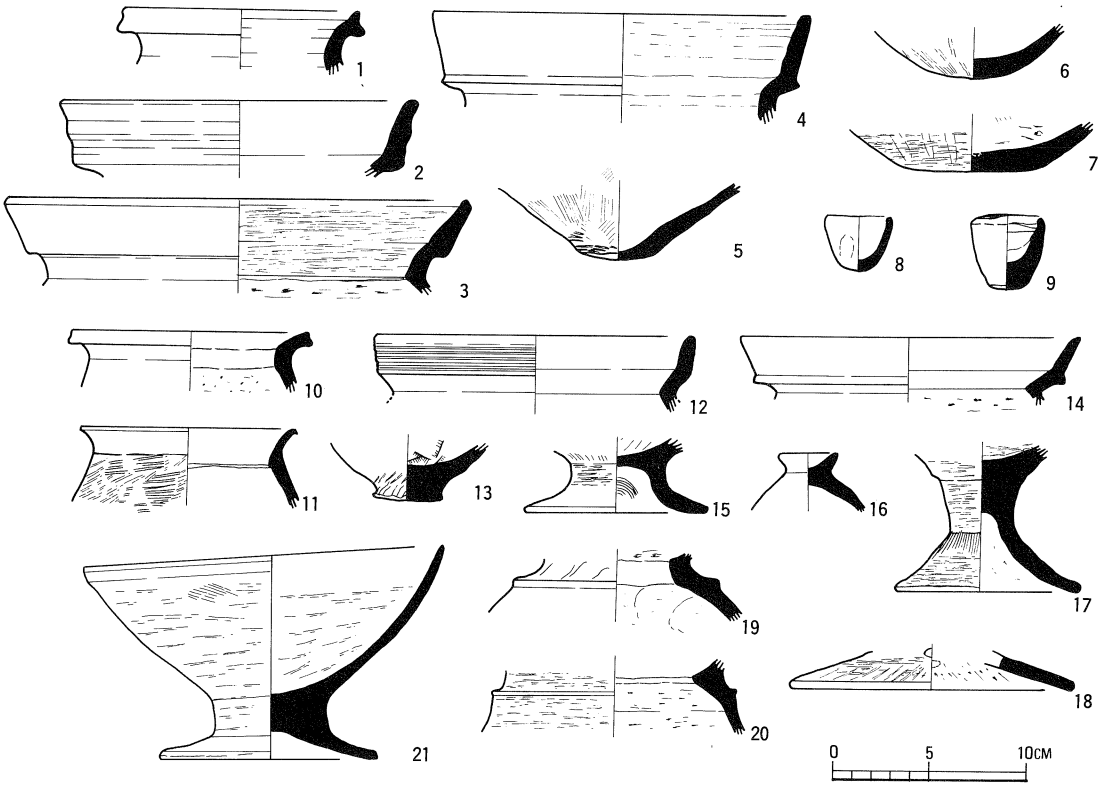


Fig.13　4号住居址出土の土器（1/4）

ている。内面はナデ仕上げである。13の底部片にも、外面にタタキ目痕が残されており、内面にはクモの巣状の刷毛目痕を残している。

高坏形土器（15、17、18）

15は、短脚坏脚部分で、外面は坏部に刷毛目、筒部に細いヘラ磨き痕を残し、ヨコナデが加えられている。坏内面には、荒いヘラ磨きが加えられ、赤褐色のスリップが認められる。脚部内面に刷毛目痕を残し、下半にヨコナデが加えられている。17は、丹彩が顕著で、脚部上半に刷毛目痕を残す以外ヘラ磨きが加えられている。脚内面は、ヘラ削りのあとナデ仕上げされている。18は、外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り痕を残し、脚端部はヨコナデされている。

蓋形土器（16）

蓋形土器つまみ部片で、外面に丹彩痕がわずかに残るが剝離激しく調整不明。

鼓形器台（19、20）

19、20は、鼓形器台胴部片で、外面及び立上がり部内面に丹彩されている。外面くびれ部はヨコナデ、脚部外面にはヘラ磨きが加えられている。脚部内面はいずれもヘラ削りのままである。

台付鉢（21）

21は、ほぼ全形が復元される台付丹彩鉢で、外面は刷毛調整のあとヘラ磨き、内面にもヘラ

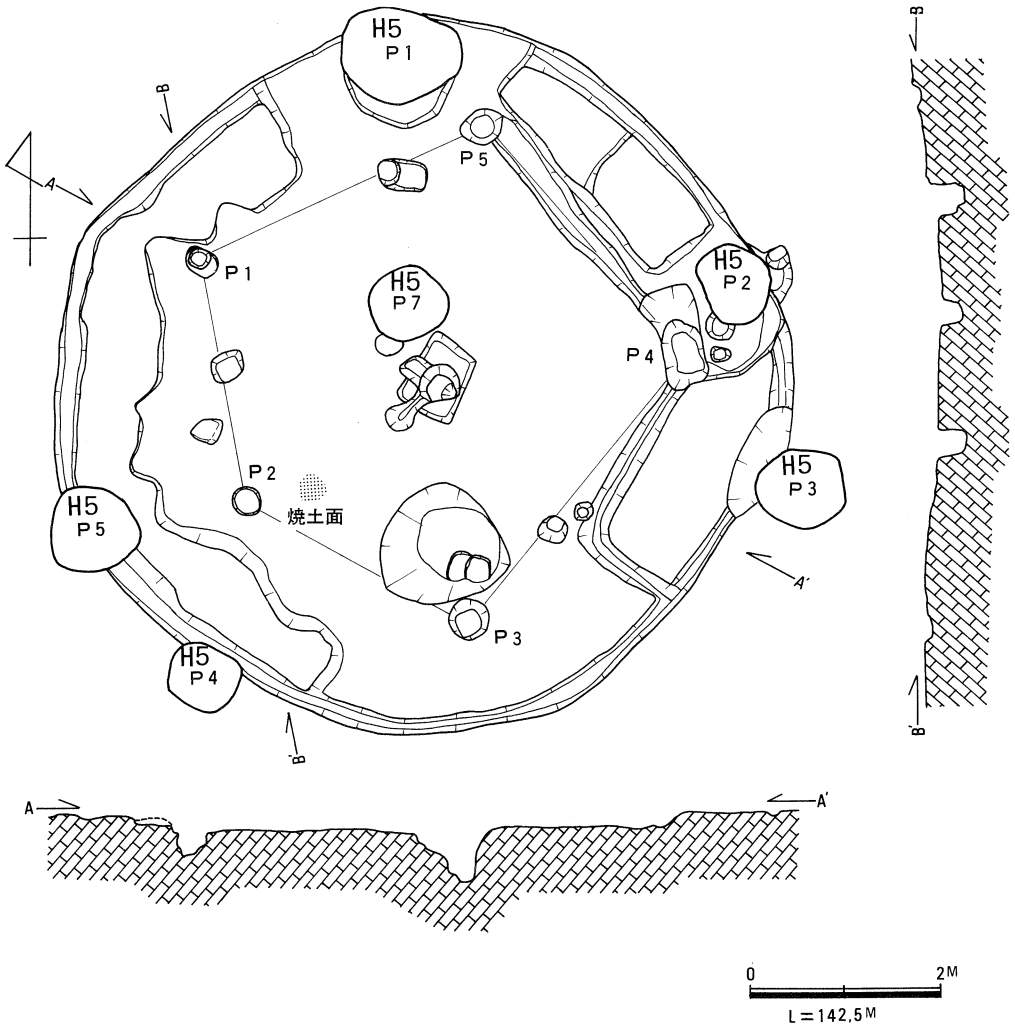


Fig.14　5号住居址平面図、断面図（1/80）

磨きが加えられている。

手づくね土器

いずれも砂粒少く、内外面とも丹彩痕跡が残されている。

5号住居址（Fig.14）

平担部に位置する竪穴式住居で、床面とプラン検出面との差は少く、大きく削手されているとみられる。平面形は、柱位置の周壁が角ばる5角形状の円形住居で、直径約 7.5m を計り大形住居の部類に属する。柱は、P1～P5で構成される5本柱と考えられる。各柱間距離は、P1～P2、2.61m、P2～P3、2.70m、P3～P4、3.65m、P4～P5、3.24m、P5～P1、3.31m である。

計6基の袋状貯蔵穴と重複するが、いずれも概ね住居に先行するものと思われる。壁体溝は、

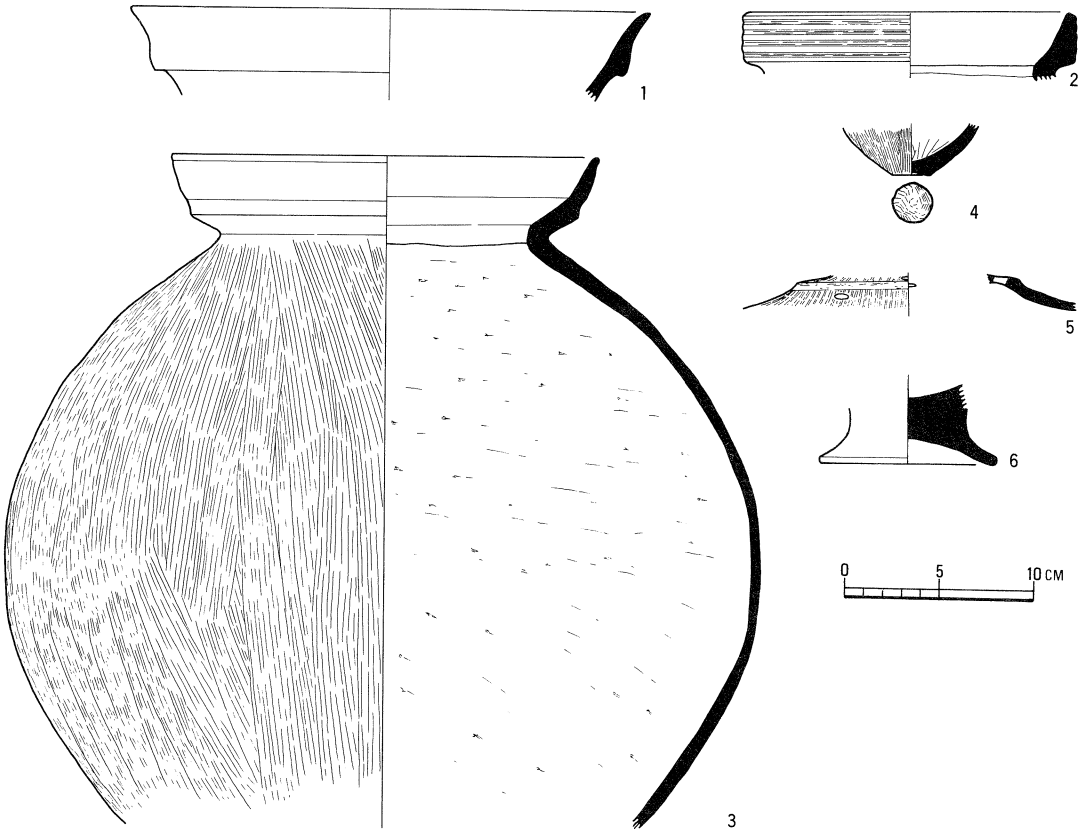


Fig.15　5号住居址出土の土器（1/4）

袋状貯蔵穴No.1部分が不明瞭な他住居床面外周を一周している。住居東、西部分でベット状遺構が検出されているが、東部分のものには幅約30cmの壁体溝状の溝が巡る。

中央穴には土堤がなく上面長方形で下半は円形ピットとなっている。P1付近には、炉址とみられる円形焼土面が検出された。またP2北で作業台とみられる台石が発見されている。

住居床面出土土器は、Fig.15－3の甕形土器1点でP3南側の壁沿に発見された。この甕形土器は4式土器に属し、5号住居廃絶時期は4期とみられる。

5号住居址出土の土器（Fig.15）

壺形土器（1、2）

1は、器壁の荒激しく調整不明。2は口縁部片で、内外面に丹彩が施されている。外面には4条の沈線が巡り、内面はヨコナデ仕上げ。胴部内面はヘラ削りによると思われる。

甕形土器

3は、大形の甕形土器で、やや外反するクセのある口縁部をもっている。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面には荒い刷毛目痕を残し、内面はヘラ削りである。4は底部片で、外面はタテ

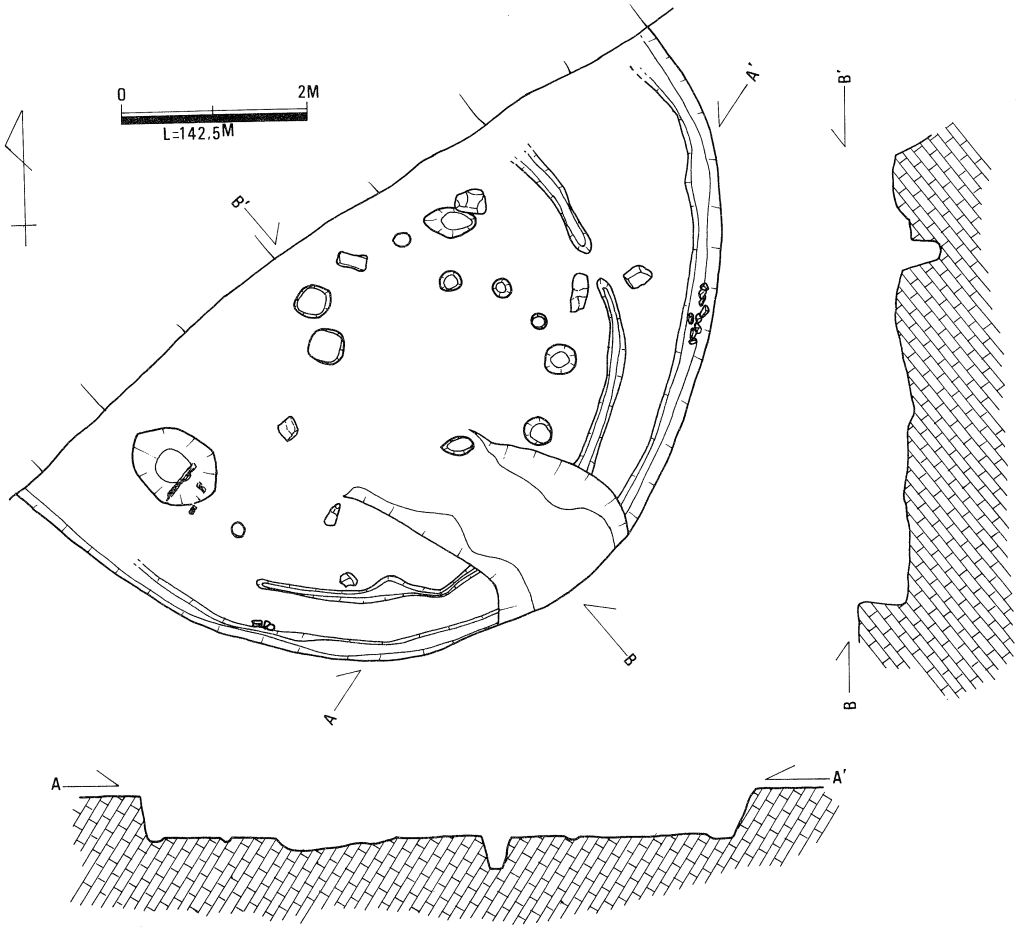


Fig.16　6号住居址平面図、断面図（1/80）

方向の刷毛目調整、内面はクモノ巣状の刷毛目痕を残す。上げ底状の底面にも刷毛目痕が残されている。

高坏形土器（５）

５は、脚部片で外面タテ方向のヘラ磨き、内面ヨコナデ仕上げで、二段の飾孔が巡ぐる。

鉢形土器（６）

６は、台付鉢台部片でナデ仕上げである。

６号住居址（Fig.16）

西平担面西端に位置し、大半を大規模な土砂崩れによって失っている。復元形は直径約８ｍの大形住居とみられる。一度の拡張痕を残しているが、それぞれに伴う主柱穴がいずれかは不明である。

住居床面は、土砂崩れにともなう凹凸が激しい。南壁から北西にのびる落ち込みは当初土砂崩れによる床面の陥没と考えられたが、袋状貯蔵穴ＰＥ８、９の埋土が圧縮し床面が落ち込んだことが後に判明した。ちなみに、これら貯蔵穴埋土には黒色土が混じっておらず人意的に埋

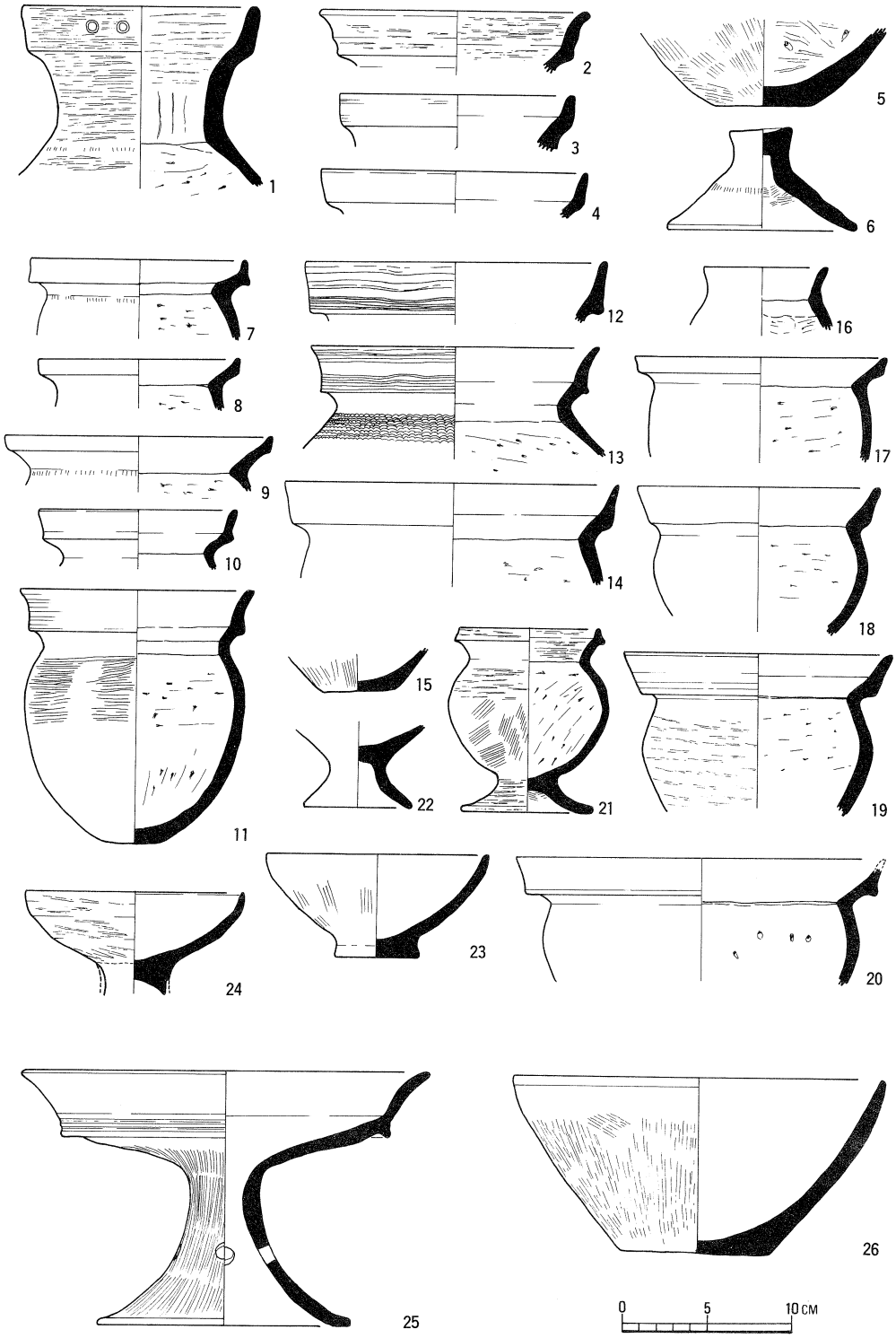


Fig.17　6号住居址出土の土器（1/4）

められた可能性が強い。

壁体溝中に、拳大の石が集積した箇所が２ケ所で認められた。

６号住居は、火災放棄されたもので、床面には炭化材とともにFig.17—11、13、19、20、21、23、25の土器が残されていた。

特異なのは、炭化材上層に火を受けた黄色土の堆積層が認められた点で、この種の現象は今まで消火活動の痕とされてきたが、今後屋根の構造等と考えあわせるべきではないかと思われた。

６号住居址出土の土器（Fig.17）

壺形土器（１～５）

１は、やや外びらきの筒状頸部をもち、なだらかに立上がる二重口縁を呈する。外面は、ヨコ方向のヘラ磨きを主体とし、わずかに肩の部分にタテ方向の刷毛目痕をとどめる。口縁部外面に２個１単位の円形スタンプ文がつけられている。内面は、頸部ヘラ磨き以下ヘラ削り痕を残す。２は、外反傾向をもつ二重口縁部片で、内外面ともヨコ方向のヘラ磨き仕上げである。３、４の口縁部片は、なだらかに立上がり、端部は丸くおさめられている。いずれもナデ仕上げである。５は、外面に刷毛目痕を残し、部分的にナデ消されている。内面は、ヘラ削りのあと雑なヘラ磨きが加えられている。底面は、刷毛仕上げである。

甕形土器（７～17）

７、８、９、17は、口縁をわずかに立上がらせ、内外面はヨコナデ調整を主とする。頸部に刷毛目痕を残すものがある。いずれも、胴部内面はヘラ削りである。10～14は、いわゆる二重口縁形を呈し、立上がり部は外面ナデ仕上げのもの(10～11、14)、櫛状工具による平行沈線文を巡らすもの（12、13）に分かれる。11は、肩部から胴部にかけヨコ方向の刷毛目状の痕跡を残し、13は櫛描波状文を巡らしているのが注意される。胴部内面は、いずれもヘラ削りされている。16は、くの字形の口縁部をもつ小型甕で、外面ナデ、内面頸部屈曲部よりやや下方までヨコナデ以下ヘラ削り痕をとどめる。

高坏形土器（24、25）

24は、椀形の坏部をもつ丹彩高坏で、内外面ともにていねいなヘラ磨きが加えられている。25は、坏部底がつまっておらず、粘土板の剝離痕も現状では観察されないので器台の可能性もあるが、ここでは連続成形手法による高坏に分類した。立上がり部外面下端に３条の凹線文を巡らしている。坏部外面屈曲部わずか下方までヨコナデ、以下タテ方向のヘラ磨きが加えられ、丹彩痕跡をわずかにとどめる。坏部内面は、器壁の荒激しく調整不明である。

鉢形土器（18～20、22、26）

18～20は、口縁部の形態は甕形土器に類似するが、全般に扁平で胴部は浅い。ナデ仕上げを基調とし、胴内面はヘラ削りのあときれいにナデられている。いずれも丹彩痕跡をわずかにとどめている。22は、台付鉢台部分とみられるが、器壁の荒れ激しく調整不明である。26は、逆

ハの字形に立上がるこね鉢状の鉢で、口縁部端はナデ、外面にはタテ方向の刷毛目痕を残し、内面にもかすかに刷毛目痕が残る。不明瞭な丹彩痕がある。

蓋形土器（６）

６は、外面タテ方向の刷毛目をナデ消し、内面も刷毛及びナデで仕上げられている。

小型台付壺（21）

21は、口縁部を肥厚拡張させ、端面はヨコナデ、内面にヨコ方向のヘラ磨きを加えている。口縁部端面には、かすかに三条の沈線が痕跡的に認められる。胴部から脚部にかけ、ヘラ磨き

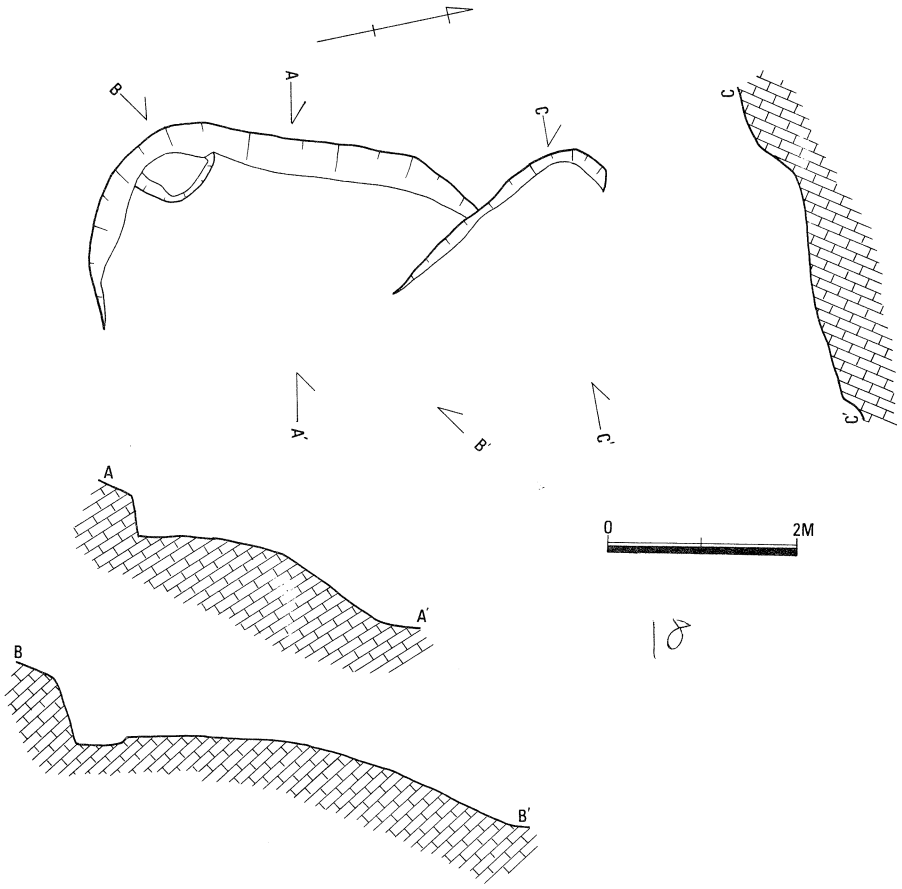


Fig.18　７号段状遺構平面図、断面図（1/80）

を基調とし一部刷毛目痕を残し内面はヘラ削りである。

７号段状遺構（Fig.18）

東平担部東斜面に位置する不明瞭な造成面で、一見竪穴住居状の掘方を残す。しかし、壁体溝もなく、柱穴も検出できなかった。竪穴住居址とする可能性はほとんどなく、機能推定する根拠に乏しい。埋土中に遺物はまったく含まれていないが、人意的な造成面であることはまちが

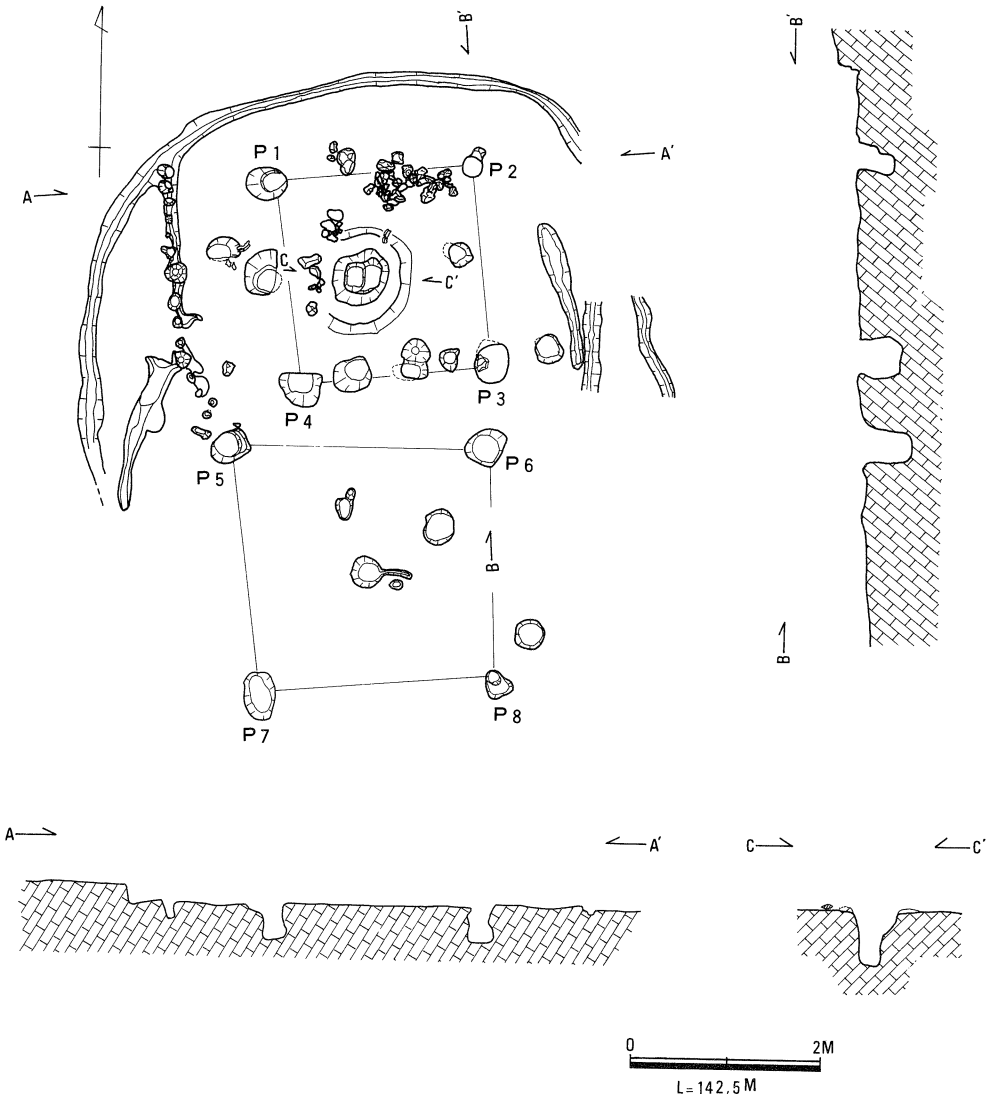


Fig.19　8号住居址平面図、断面図（1/80）

いない。弥生時代のものかどうかも不明で、いわゆる段状遺構としたのは便ぎ的なものである。

8号住居址（Fig.19）

隅丸方形竪穴住居址群で、畑耕作により南半は削りとられていた。最も残存状況の良い北壁は床面まで約30cmを残している。少くとも三軒が重なっており、柱位置と中央穴の関係からＰ１～Ｐ４で構成されるものと、Ｐ５～Ｐ８で構成される住居が確認されるが、いま一軒の壁体溝に伴う柱は定かでない。いずれの住居も一辺４ｍ程度の規模とみられる。

各柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２、2.18m、Ｐ２～Ｐ３、2.10m、Ｐ３～Ｐ４、2.11m、Ｐ４～Ｐ１、2.15m、Ｐ５～Ｐ６、2.75m、Ｐ６～Ｐ８、2.50m、Ｐ８～Ｐ７、2.50m、Ｐ７～Ｐ５、

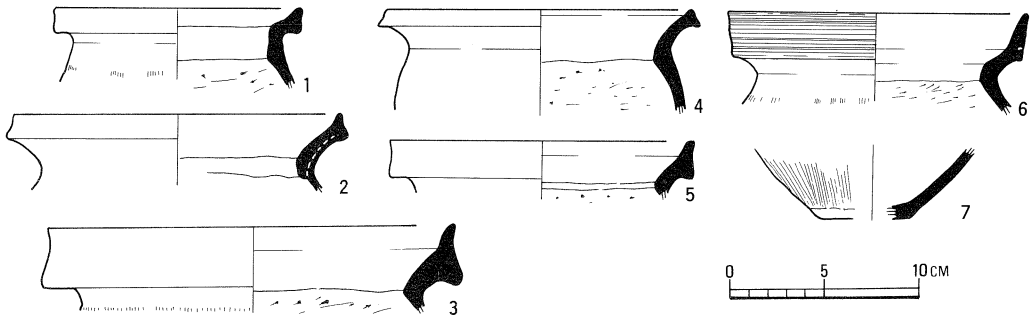


Fig.20　8号住居址出土の土器（1/4）

2.70m である。

北住居の中央穴には、礫を含む盛土でつくられた円形の土堤が巡る。床面に炉と考えられる焼土面は確認されなかった。西辺内側の壁体溝中に杭跡とみられる小穴が集中して発見された。

床面及び柱穴Ｐ４中から７点の土器小片が出土しており、いずれも２式土器に属するもので、８号住居廃絶時期は２期とみられる。

８号住居址出土の土器（Fig.20）

壺形土器（１～３）

１～３は、いずれも上方につまみ上げる口縁部をもち、１は明確な頸部をもつ。甕形土器との区別が困難であるが、丹彩を有することから壺形土器に分類した。口縁部内外面はヨコナデ、１、３は外面頸部ないしは肩部分にかすかにタテ方向の刷毛目痕を残す他ナデ仕上げで、胴部内面にヘラ削り痕を残す。

甕形土器（４～７）

４、５は、口縁端部を拡張させ、５は上方に立上がりをみせる。内外面とも、ヨコナデ仕上げ、胴部内面にヘラ削り痕をとどめる。６は、二重口縁を呈し、直立した立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文が巡らされている。口縁部内面はヨコナデ、胴部外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、内面にはヘラ削り痕を残している。７は、底部片で外面に細い刷毛目痕を残し、内面調整は不明であるが、内外面ともにススの付着が認められ底部に二次的火を受けたための赤化現象が認められる。

９号住居址（Fig.21）

一辺５m 弱の隅丸方形竪穴住居址で、残存状況は良好。壁体溝は全周し、部分的に壁体溝中に小穴が確認された。主柱穴は四本で、各柱間距離はＰ１～Ｐ２、2.30m、Ｐ２～Ｐ３、2.31m、Ｐ３～Ｐ４、2.35m、Ｐ４～Ｐ１、2.53m である。

中央穴は円形で、まわりに土堤が一周する。床面に炉とみられる焼土面は検出されなかった。

床面検出時、床に浅い窪みが６ケ所で認められたので、貯蔵穴が床面下に存在する可能性あ

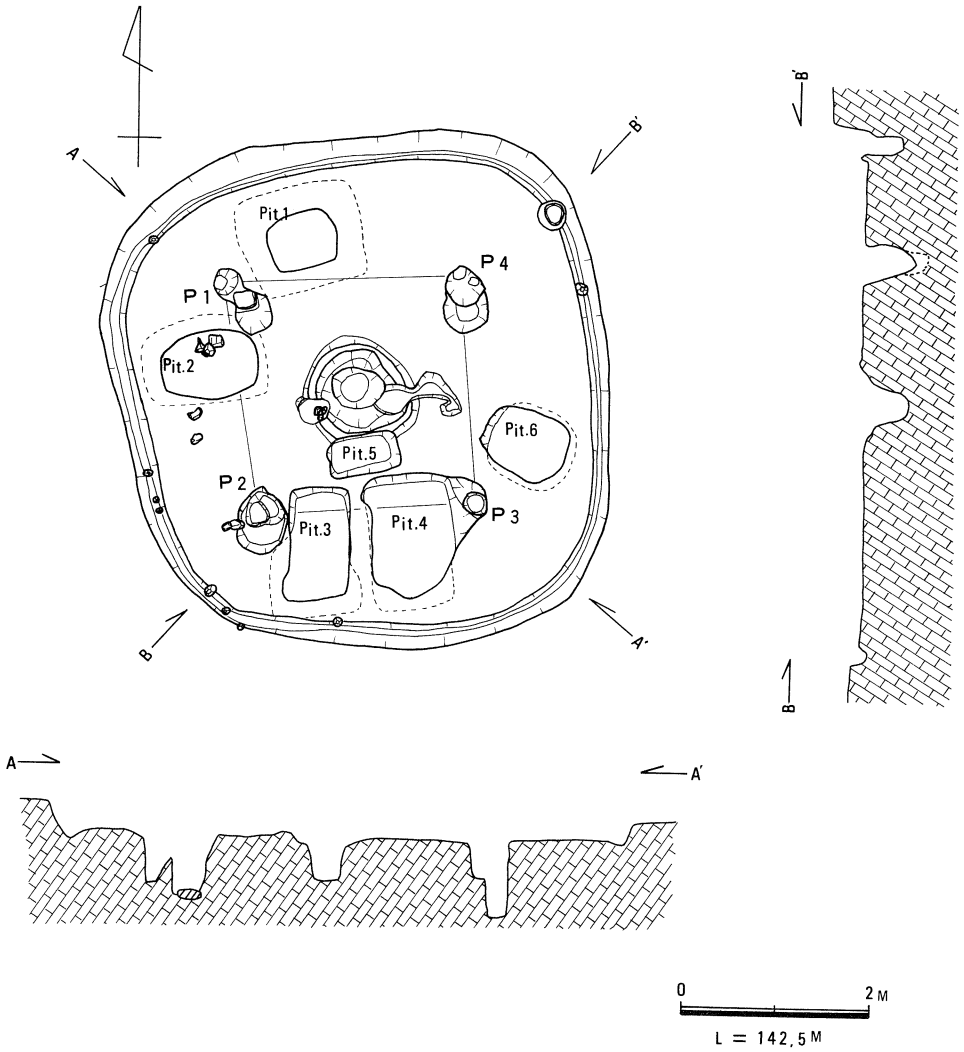


Fig.21　9号住居址平面図、断面図（1/80）

りとみてこの浅い窪部分を掘り下げた。その結果、「きんちゃく形」の竪穴1、長方体状の竪穴2、3、4、5、6が検出された。いずれも通常の袋状貯蔵穴と趣を異にし、住居に付設されていた可能性が強い。竪穴内の埋土は、いずれも住居基盤の土と区別がつかず、住居廃絶時にはすでに人意的に埋められていたはずである。これら竪穴内からは遺物の出土をみなかった。

土器の出土状況は、いずれも住居廃絶後に流入したことを示しているが、壁体溝を中心とし

竪穴計測値

	口部辺長	底部辺長	深さ
Pit 1	65×55 cm	128×106 cm	96 cm
Pit 2	100×64 cm	125×100 cm	135 cm
Pit 3	120×64 cm	130× 98 cm	99 cm
Pit 4	133×82 cm	134× 84 cm	119 cm
Pit 5	75×41 cm	64× 48 cm	40 cm
Pit 6	100×80 cm	90× 80 cm	80 cm

て床面に近いものが多く、各土器とも１式土器としての型式差は認め難いので一括資料とみてよい。また９号住居址は、２期の３号住居建造時にはすでに埋められていたはずで、この点からも時期限定可能である。９号住居廃絶時期は１期と考えられよう。

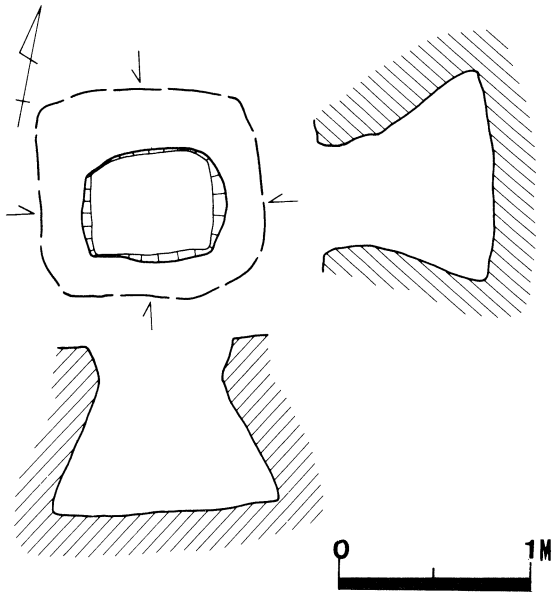


Fig.22　９号住居址１号竪穴（1/40）

９号住居址出土の土器（Fig.23）

壺形土器（１～４）

１は、大形壺の肩から胴部にかけての破片で、外面は刷毛仕上げ、内面はヘラ削りのあと刷毛調整が加えられているとみられるが、ヘラ削り痕はとどめていない。２は、小形壺形土器口縁部で、外面にはヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。内面口縁部はヨコナデ、胴部にはヘラ削り痕を残す。３は、薄手の壺口縁部で、端部をやや立上がらせ端面には二条の凹線文を巡らしている。内外面ともヨコナデ仕上げである。４は底部片で、外面刷毛調整のあとヘラ磨きが加えられている。内面は、ヘラ削りのあと刷毛調整されている。底面はナデで平滑に仕上げられている。

甕形土器（５～15）

５～15は、いずれも口縁端を肥厚拡張させ、端面に２～３条の凹線文を巡らすもの（５、６、８、９、10)、ナデ仕上げのもの（７、12、13）に分かれる。口縁部内面は概ねヨコナデによっているが、６、13は刷毛目痕を残す。外面頸部以下の調整は、刷毛によるもの（５、７、13)、ヘラ磨きによるもの（６）がある。底部片15は、外面に刷毛目を残し、内面はヘラ削り、底面にも刷毛目痕が残されている。

高坏形土器（16、17、18、20）

16は、高坏形土器坏部片で、口縁端面に３条、坏内面上端部に一条の凹線文を巡らす。18、20は、脚端に凹線文風の段をもち、20は右上がりの浅い溝が彫り込まれている。

鉢形土器（21）

甕類似の鉢形土器で、口縁部端を肥厚させ、端面に二条の凹線を巡らす。胴部外面ナデ、内面はヘラ削りである。

器台形土器（19、22）

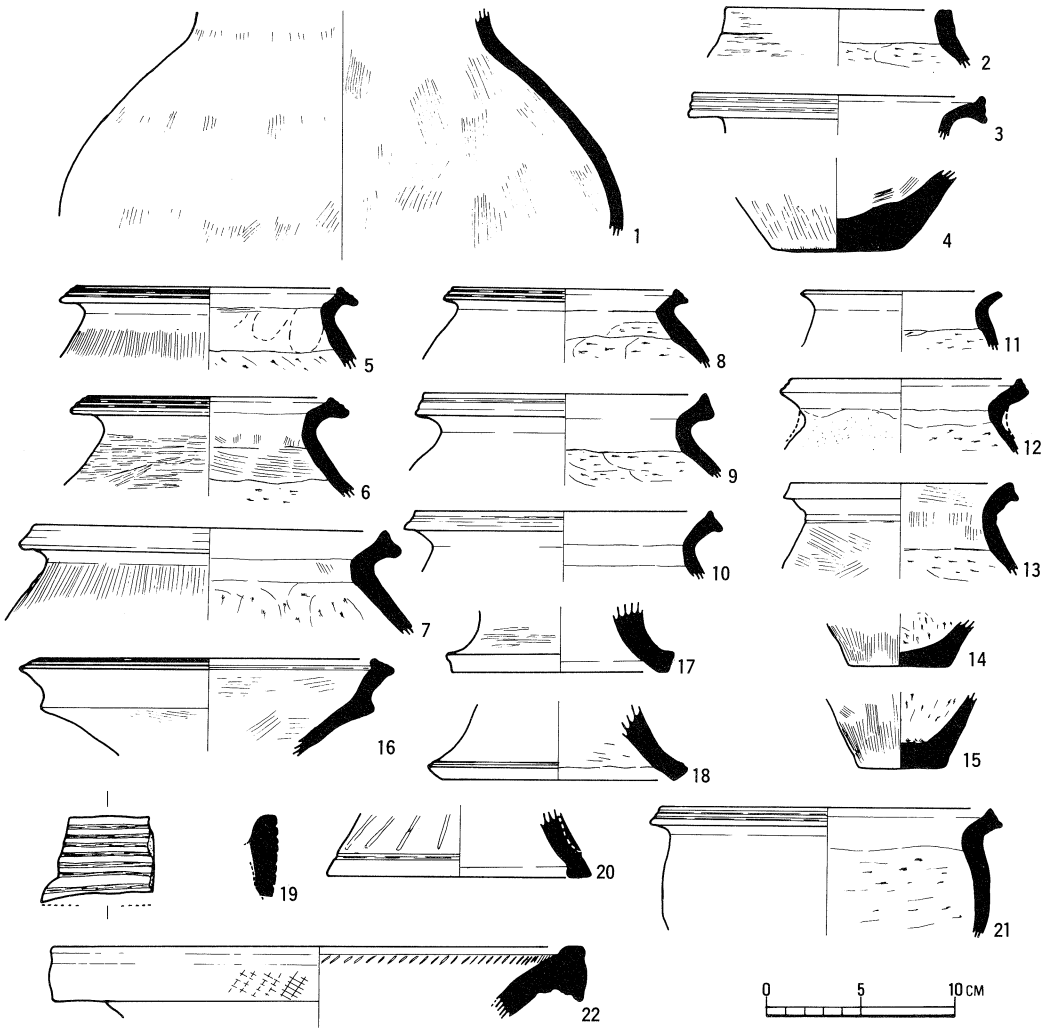


Fig.23　9号住居址出土の土器（1/4）

19、22は、ともに器台形土器口縁部とみられる。19は、4cm角の小片で、器形は不明であるが、外面に7条の沈線が認められる。22は、口縁部端面に格子状のヘラ描文様、上面には、円形スタンプ文様を巡らす。外面くびれ部には3条の凹線文が一巡する。口縁部内面上端には、連続刺突文が巡り、装飾が著しい。

10号住居址（Fig.24）

隅丸方形四本柱の竪穴住居址で、一辺約4mの小形住居である。南半が流出しているが、比較的遺存状況がよく、北壁高は25cmを残す。壁体溝は全周せず、部分的に認められるのみである。中央穴には、円形の土堤が巡りピット上部に長方形の段をとどめている。

各柱間距離は、P1～P2、2.30m、P2～P3、2.63m、P3～P4、2.40m、P4～P1、2.50mである。

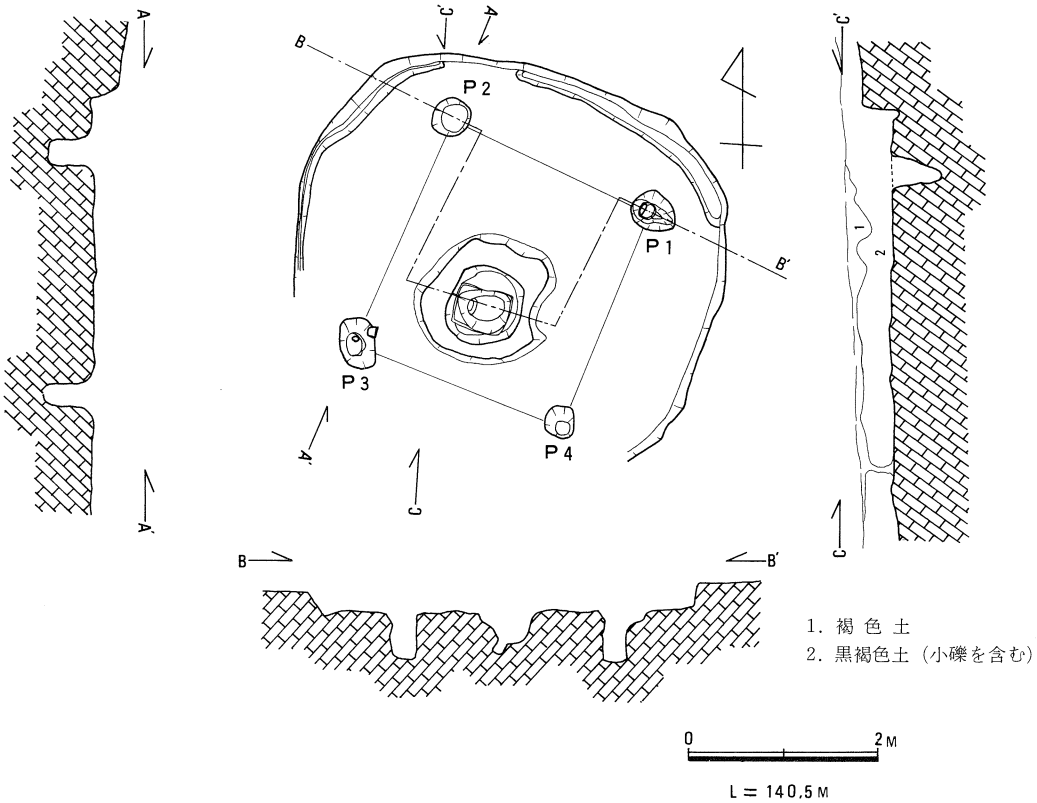


Fig.24　10号住居址平面図、断面図（1/80）

土層堆積状況は上方からの流れ込みによる自然堆積を思わせる。火災痕跡はなく、床面に焼土痕もない。土器小片が埋土中より出土したが、床面出土のものはなく出土土器には型式差が認められる。下層出土土器には、１式、２式のものがあり、住居廃絶時期は２期の可能性が強い。

10号住居址出土の土器（Fig.25）

壺形土器（１～３）

１は、ラッパ状口縁を呈し、口縁端部を肥厚させる。内外面ナデ仕上げ。２、３は、直立ぎみの二重口縁壺で、2は口縁内面、3は口縁部内外面にヘラ磨きが加えられている。３は、胴部内面ヘラ削りであるが、残存部分にはヘラ削りの上をさらにヘラ磨きが加えられている。

甕形土器（４～19）

甕形土器は、口縁部端を肥厚拡張させ端面に２～３条の凹線文を巡らすもの（４、５）と二重口縁を呈し、立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らすもの(６～８、19)、同じく二重口縁で、内外面ともヨコナデ仕上げのもの（９～14）に分かれる。これらはいずれも胴部外面ヨコナデ、胴部内面はヨコヘラ削りである。底部は、外面ナデによるもの（17、18）、刷毛によるもの（15）があり、いずれも内面にヘラ削り痕を残している。６、９、12、13、19

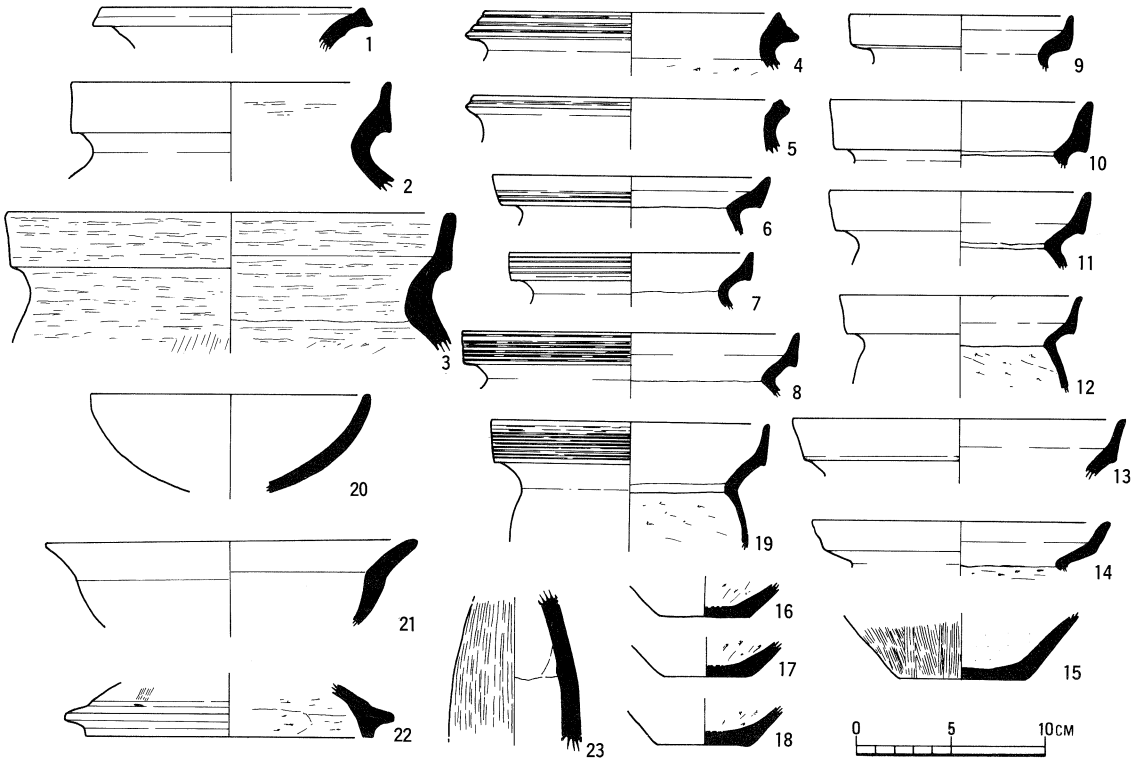


Fig.25　10号住居址出土の土器（1/4）

にススの付着が認められる。

高坏形土器（20、22、23）

20は、椀形の丹彩坏部片で、器壁の荒激しく調整不明である。23は、筒部片で外面に荒い刷毛目痕をとどめる。22は、外面ヨコナデ部分的に刷毛目痕を残す。内面はヘラ削りである。

鉢形土器（21）

21は、くの字口縁を呈する浅鉢形土器で、外面は剝離激しく調整不明。内面はナデで丹彩が施されている。

12号住居址（Fig.26）

４号住居址東方、約１ｍ下段に位置し、柱位置の周壁が角ばる６角形状の円形住居である。一度の拡張痕が認められる。各住居とも六本柱で、古い住居はＰ1′～Ｐ6′、新しい住居はＰ１～Ｐ６で構成されている。各柱間距離は、Ｐ1′～Ｐ2′、2.50m 、Ｐ2′～Ｐ3′、2.40m 、Ｐ3′～Ｐ4′、1.91m 、Ｐ4′～Ｐ5′、2.46m 、Ｐ5′～Ｐ6′、1.88m 、Ｐ6′～Ｐ1′、2.14m 、Ｐ１～Ｐ２、2.82m 、Ｐ２～Ｐ３、2.45m 、Ｐ３～Ｐ４、2.60m 、Ｐ４～Ｐ５、2.75m 、Ｐ５～Ｐ６、2.48m 、Ｐ６～Ｐ１、2.40m である。

住居拡張に伴い中央穴はやや東方に位置をずらしているが、建築構造からいってこの拡張は連続的なものであったと思われる。

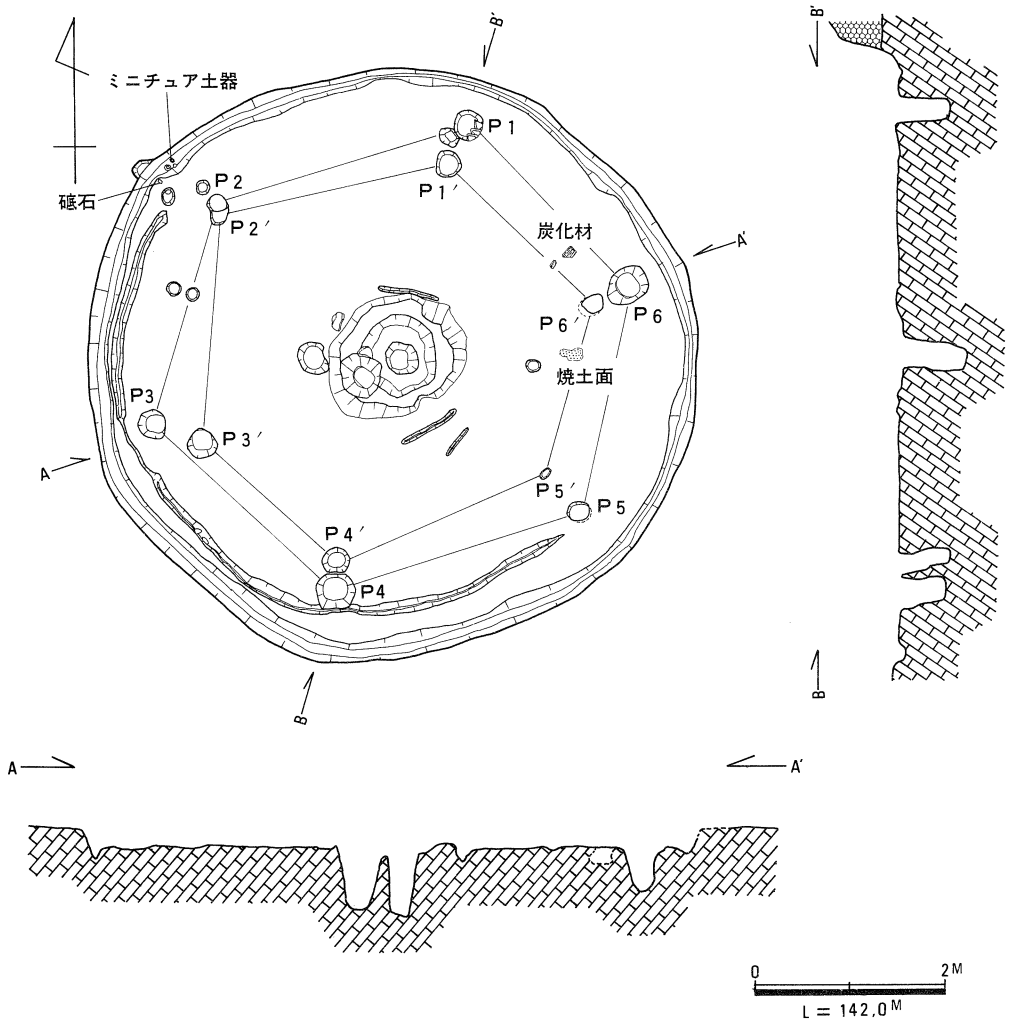


Fig.26　12号住居址平面図、断面図（1/80）

古い住居は新しい住居建造に際しわずかに床面を地下げしたらしく、壁体溝は西部分約半分を残すのみであるが、新しい住居に伴う壁体溝は一周している。新住居にともなう中央穴には土堤が一巡する。

Ｐ２北西部の壁体溝中にミニチュア土器２点が出土し、これに接した壁面に小穴があけられていた。これなどは、室内祭祀をさぐる一つの手がかりとなろう。

本住居は、火災廃棄されたもので炭化材若干と床面に赤化箇所が点在していた。しかし、床面出土土器は少く、このミニチュア土器２点と高坏形土器（Fig.27－６）のみが床面出土のものである。これら３点から判断する限りいずれもやや新しい傾向を示すとはいえ、２式土器の範疇でとらえられ、12号住居廃絶時期は２期と考えられる。

12号住居址出土の土器（Fig.27）

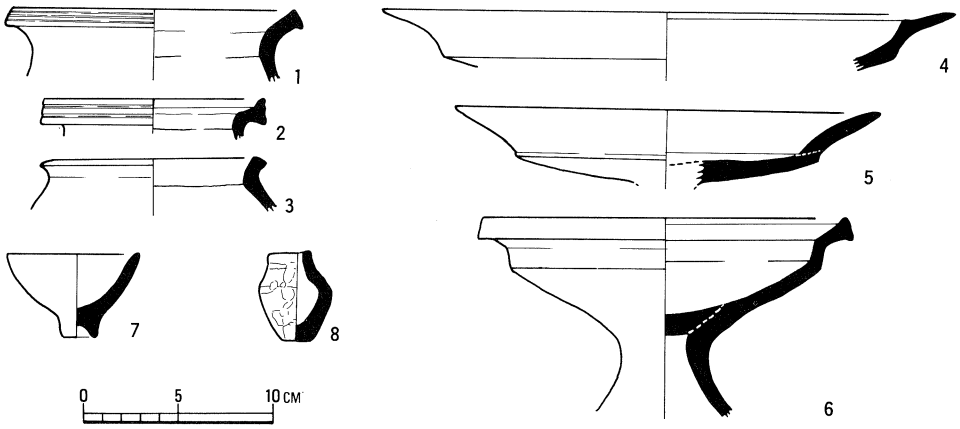


Fig.27　12号住居址出土の土器（1/4）

甕形土器（１～３）

いずれも口縁部端を肥厚させ、２はやや上方に拡張をみせる。１は３条、２は２条の凹線文を端面に一巡させ、３はナデ仕上げされている。

高坏形土器（４～６）

４は、立上がり部が屈曲をみせ、外方に延び広がり端部を鋭くおさめる。内外面とも剝離激しく調整不明である。端部上面の凹線文は消失している。６は、立上がり部をさらに外方に折りまげ、端部を肥厚拡張させている。内外面とも器壁の荒激しく調整不明であるが、脚部と坏部の接合は円盤充填法によるとみられる。

ミニュチュア土器（７、８）

７、８は、いずれも手づくね土器で、指頭圧痕による凹凸が観察される。７は、外面にヨコナデ痕がみられる。８は、壺形で外面$\frac{1}{3}$に黒斑がみられる。７、８とも遺存状態が悪く、いずれも丹彩の有無については不明である。

13号住居址（Fig.28）

西平担面北方に位置する円形住居址で、少くとも南北２軒の住居が重っている。南住居は、長径約６ｍ、短径５ｍでＰ１～Ｐ４の４本柱で構成されている。北住居は、直径約６ｍでＰ５～Ｐ９の5本で構成されていたようにみえる。土層観察による各住居の切合関係は明確でないが、南住居は火災廃棄されたもので、炭化材の出土状況及び遺物の出土状況からいって、北住居が南住居に先行することは明白である。

各柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２、2.34m、Ｐ２～Ｐ３、3.04m、Ｐ３～Ｐ４、2.30m、Ｐ４～Ｐ１、3.00m、Ｐ５～Ｐ６、2.42m、Ｐ６～Ｐ７、2.65m、Ｐ７～Ｐ８、2.60m、Ｐ８～Ｐ９、2.30m、Ｐ９～Ｐ５、2.65mである。

Ｐ10は、土堤を伴わないが南住居に伴う中央穴と考えられ、北住居の中央穴は明確にならなかった。北住居に伴い、ベッド状遺構が発見されている。

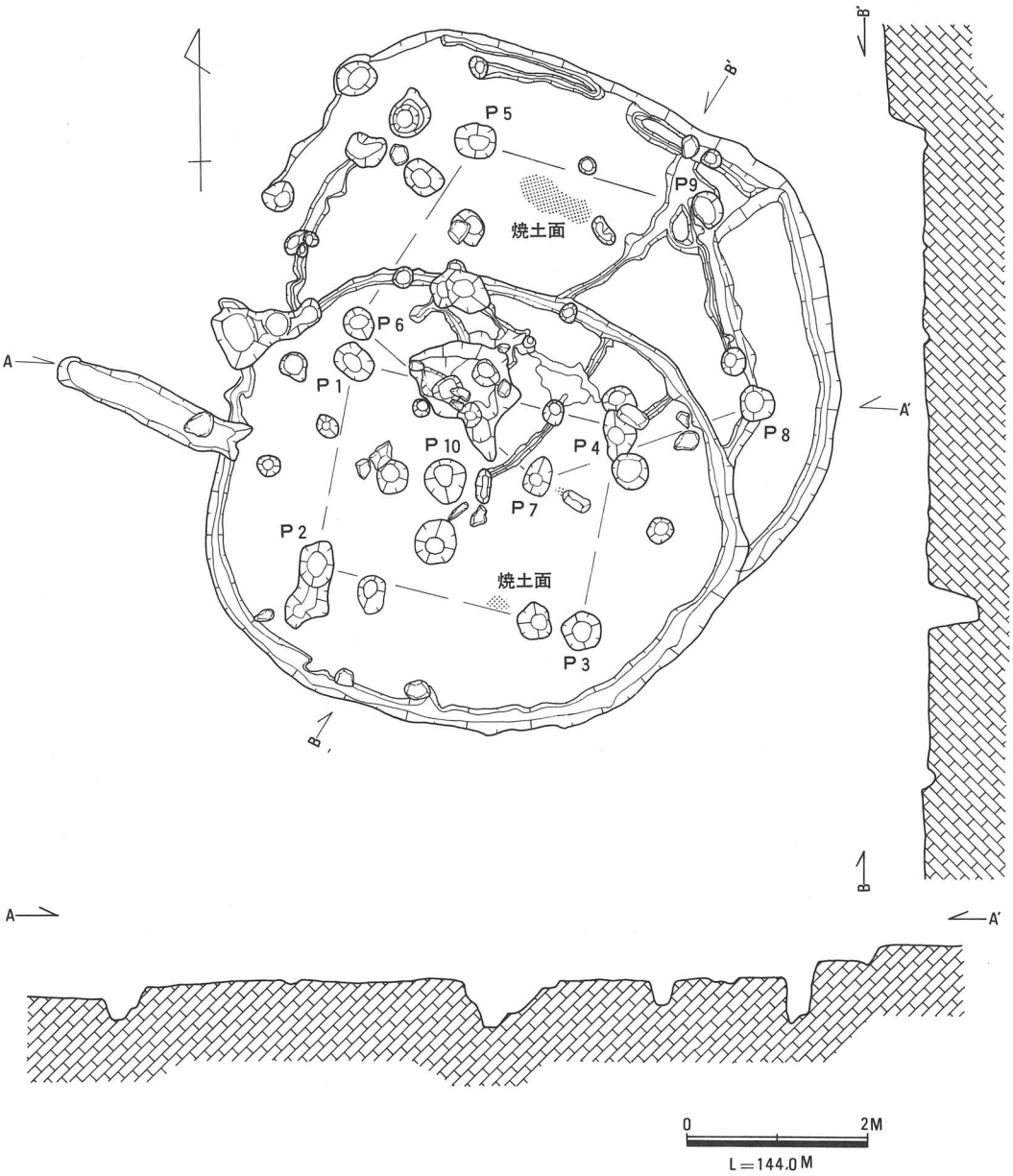


Fig.28　13号住居址平面図、断面図（1/80）

南住居に伴い、床面から完形に近い土器が比較的まとまり出土している（Fig.29—1、8、16、23、26、27、29、38、39、40)。このうち39の鉢形土器底部に赤色化粧土とみられる粘土がはりついており、この鉢付近にすりこぎ状の棒石1点(Fig.93—20)が出土している。また、石庖丁1点（北住居）同未製品1点、つりさげ用のヒモ穴をもつ手砥石1点、砥石1点（以上南住居）が出土している。

床面出土土器は、概ね3式土器に属し、南住居廃絶時期は3期とみられる。

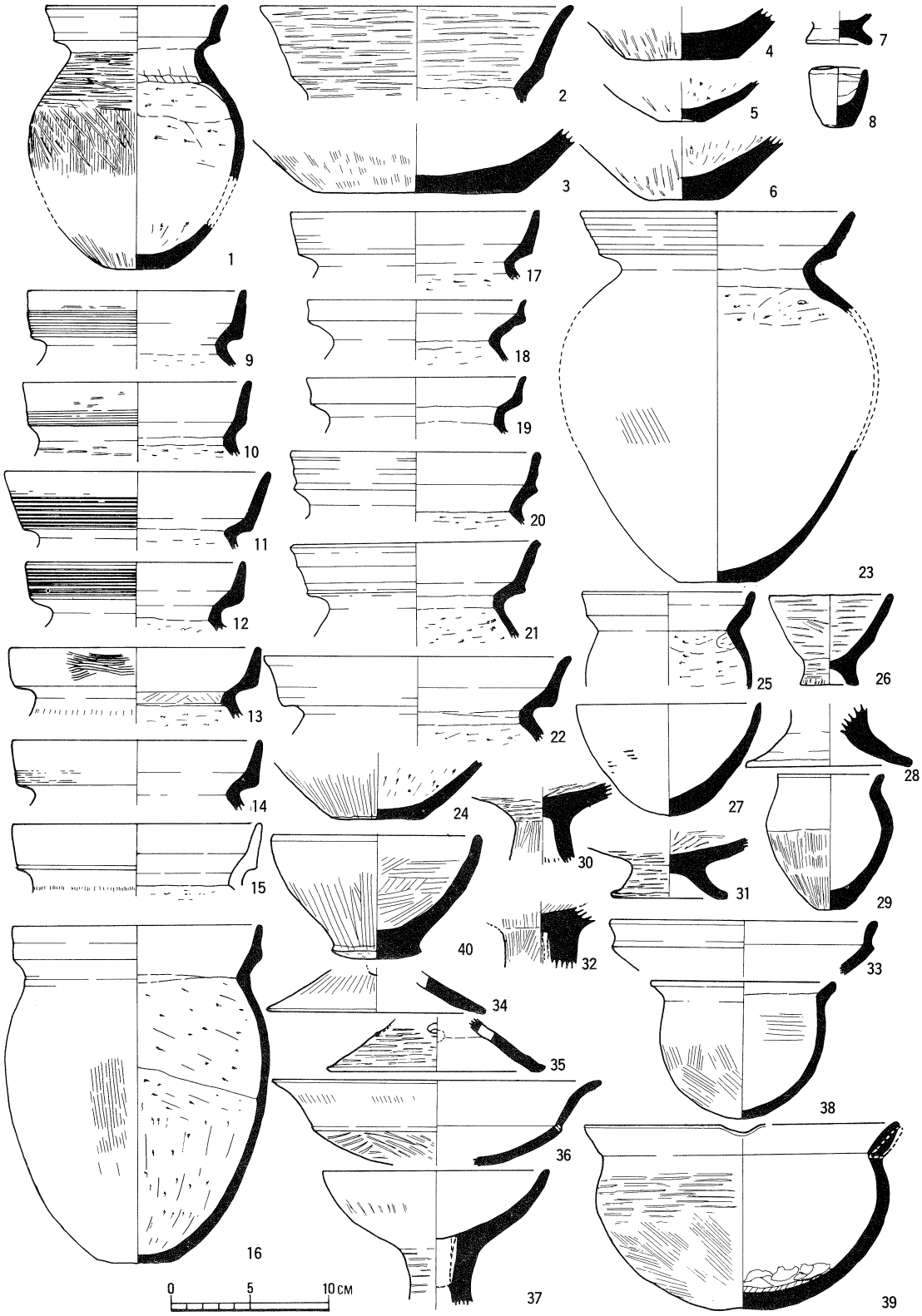


Fig.29　13号住居址出土の土器（1/4）

13号住居址出土の土器（Fig.29）

壺形土器（１～６）

１はほぼ全形が復元できた。わずかに外反する二重口縁を呈し、内外面ともヨコナデである。外面は、頸部以下胴部上半までタテ方向の刷毛目調整のあと、ヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。胴部下半から底部にかけタテ及びナナメ方向のヘラ磨き痕を残す。底面は平滑に仕上げられ、わずかにヘラ磨き痕とみられる条痕を残している。頸部内面は、ヘラによりナデ上げられており、胴部にヘラ削り痕を残す。底部には、２次的火を受けたための赤化現象が認められる。２は、内外面に丹彩痕跡を残し、ヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。胴内面は、ヘラ削りであろう。３～６は底部片で、４～６は外面タテ方向のヘラ磨きが加えられている。３は、外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、部分的にナデ消されている。いずれも内面にヘラ削り痕をとどめる。

甕形土器（９～25）

いずれも二重口縁を呈する土器で、直立に近い立上がり部をもち、口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らすもの（９～14）、その痕跡を残さないヨコナデ仕上げのものに区別される。９～11、14で観察されるように、平行沈線文の主として上半をナデ消されるものがあることは注意される。ナデ仕上げのものは、丸みのあるつくりのものと、角ばったシャープなつくりのものに区別される。16、23は、ほぼ全形のわかる甕形土器で、口縁部内外はナデ仕上げ、胴部外面に刷毛目を残し部分的にナデ消されている。胴部内面にはヘラ削りが加えられ明白な平底を有する。９、10、14、16、17、19、20、21、25には、ススの付着が認められる。

高坏形土器（28、30、32～37）

28は、内外面ナデ仕上げ、丹彩痕をとどめる。30はヘラ磨きを主とし、32は筒部内面に絞り痕をとどめている。いずれも丹彩痕がある。30にはユビナデ痕が認められる。33は、端部に折り返しによる立上がり部をもち、内外面ヨコナデ、部分的にススの付着が認められる。34は刷毛、35はヘラ磨きを残し、ともに丹彩高坏である。36は、外面立上がり部にタテ方向の刷毛目痕を残し、ヨコナデ仕上げされている。坏部下段外面には、多角形状に加えられたヘラ磨痕があり、立上がり部内面はヨコナデ、坏下段は調整不明である。胎土に砂粒を含まず、薄手の丁寧なつくりの土器で、搬入品の可能性が強い。37は、椀状の坏部をもち、丹彩されている。外面に刷毛目痕をかすかに残し、ヘラ磨きが加えられている。

鉢形土器（27、29、38、39）

29、38は、くの字形の口縁を有する深鉢形の土器で、29は外面上半ヨコナデ、下半にヘラ磨き痕を有し、内面はナデ仕上げである。38は、口縁部内外面ナデ、胴部外面に刷毛目痕を残す。内面上半は刷毛、以下ナデ仕上げである。27は、内外面ともナデ仕上げで、外面にタタキ状の痕跡を残す点注意される。39は、片口付浅鉢で、くの字形の口縁部を有し、平底を残す。口縁

部内外面はヨコナデ、外面肩から胴にかけヨコ方向のヘラ磨き、下半は刷毛調整である。黒斑を有し、ススの付着が顕著である。内面底部に赤色粘土が4～5㎜の厚さで付着していた。

台付坏（7、31）

7は、台付坏片とみられ、剝離激しく調整不明。31は、低脚坏を思わす台部片で、内外面ともヘラ磨き、褐色の光沢を呈し化粧土がかかっているようにみえる。

椀形土器（26、40）

26は、内外面とも丁寧にヘラ磨きされており、高台部分にユビナデの痕跡を残している。40は、底面半球状の高台部をもち、口縁部はヨコナデ、下半に刷毛目痕跡を残す。

14号住居址（Fig.30）

西平担面南端に位置する住居址群で、同心円状に隅丸方形、円形住居が複雑に重なっている。最終住居は、もっとも大きい円形住居で直径7ｍあり、この住居貼床面を掘り下げて各壁体溝を検出した。

住居残存状況は良く、北東部のもっともよく残った部分は壁高80㎝を計る。中央部に、中央穴とみられる穴が3穴あり、いずれも土堤をともなっていないが、各住居とも中央穴を備えていた可能性が強い。中央穴から東壁に直線上に壁体溝状の溝が出ている。

特異な点は、最終円形住居床面に拳大の石をもちいた石囲炉状の遺構が存在する点で、円形部分が良く焼け炉址とみてほぼまちがいがない。

14号住居も火災廃棄されたことが明確で、炭化材の残存とともに火災により形成されたとみられる広い範囲の焼土面が認められた。

住居床面に遺物はなく、埋土も傾斜面にかかわらず水平堆積していることから、人意的に上屋を焼き払い、埋めもどしたのではなかろうかと考えられた。

出土遺物は、すべて埋土中のもので、多少の混入品が認められるが、概ね2式土器に属するものが多く、本住居廃絶時期は2期と考えられる。

14号住居址出土の土器（Fig.31）

壺形土器（1～6）

1～3、5は、二重口縁形を呈し、立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文が一巡している。いずれも丹彩が顕著で、1、2は口縁部内面にヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。6は、なだらかに屈曲して立上がる口縁部片で外面ヨコヘラ磨き、内面はナデ仕上げである。

甕形土器（7～12）

8、9は、くの字に折れまがる口縁部端をやや下方にたれさがらせている。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面には頸部以下タテ方向の刷毛目痕を残す。胴部内面はヘラ削りである。10は、口縁端部を肥厚拡張させ、口縁部内外面ヨコナデ、内面頸部以下ヘラ削りである。7、12、13、14は、いずれもいわゆる二重口縁形の甕で、13は立上がり部外面に櫛状工具による平行沈

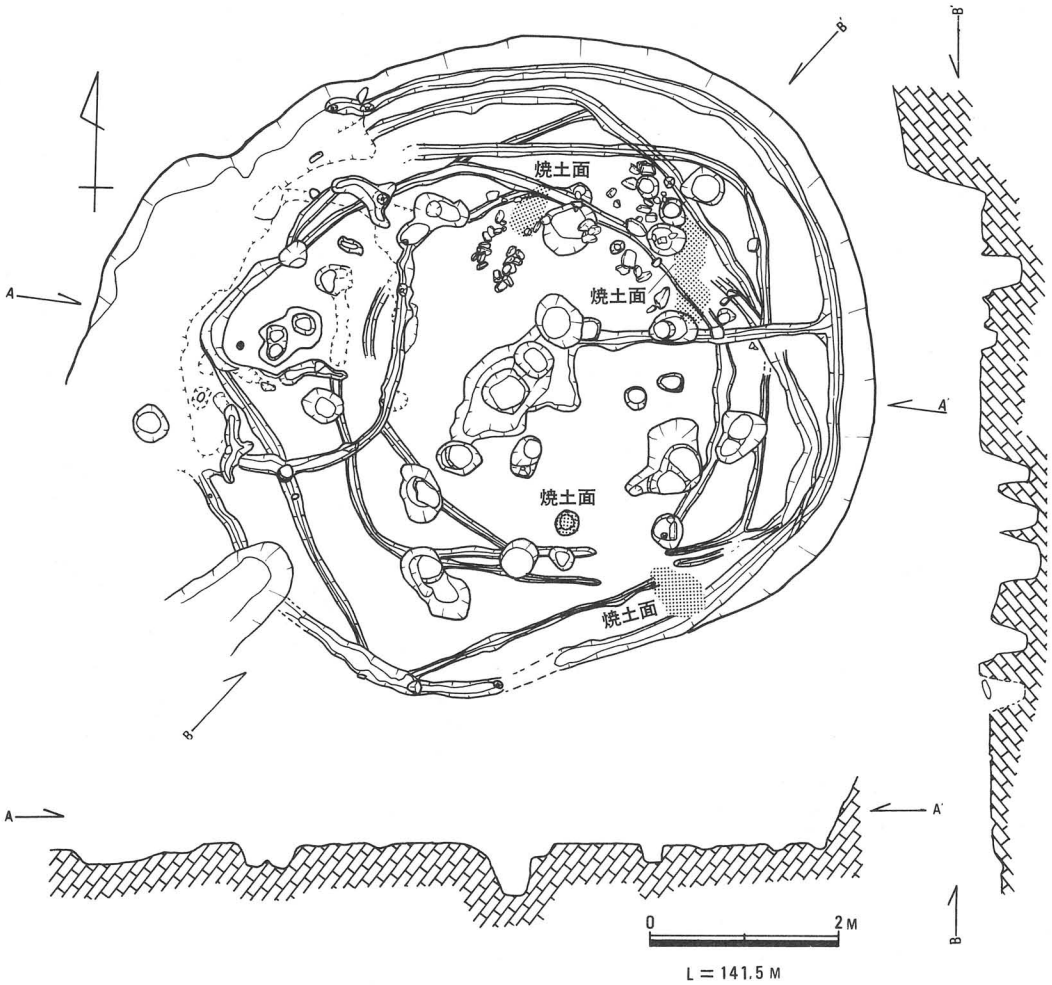


Fig.30　14号住居址平面図、断面図（1/80）

線文を巡らしている。7、12、14は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ。胴部内面は、いずれもヘラ削りによると思われる。15～17は底部片で、外面に刷毛目を残し、内面ヘラ削りで、15、17には刷毛目が加わっている。17には、外面に雑なヘラ磨きも加わっている。8、9、15にススの付着が認められる。

高坏形土器（21、22、23）

21は、浅い皿に外反する立上がり部をもち、内外面ともナデ調整で内面屈曲部にヘラ磨き状の痕跡を残している。22は、内外面とも丹彩があり、坏部と脚部の接合は円盤充塡法によっている。23は、脚部に二段の透し孔をもち接合部は同様に円盤充塡によっている。胴部外面はヘラ磨き、内面に絞り痕が残されているが、剝離が激しく調整の詳細は不明である。

鉢形土器（18～20）

18は、くの字に折れまがる口縁部をもち、内外面ともヨコナデ仕上げ。19、20は、台付鉢台

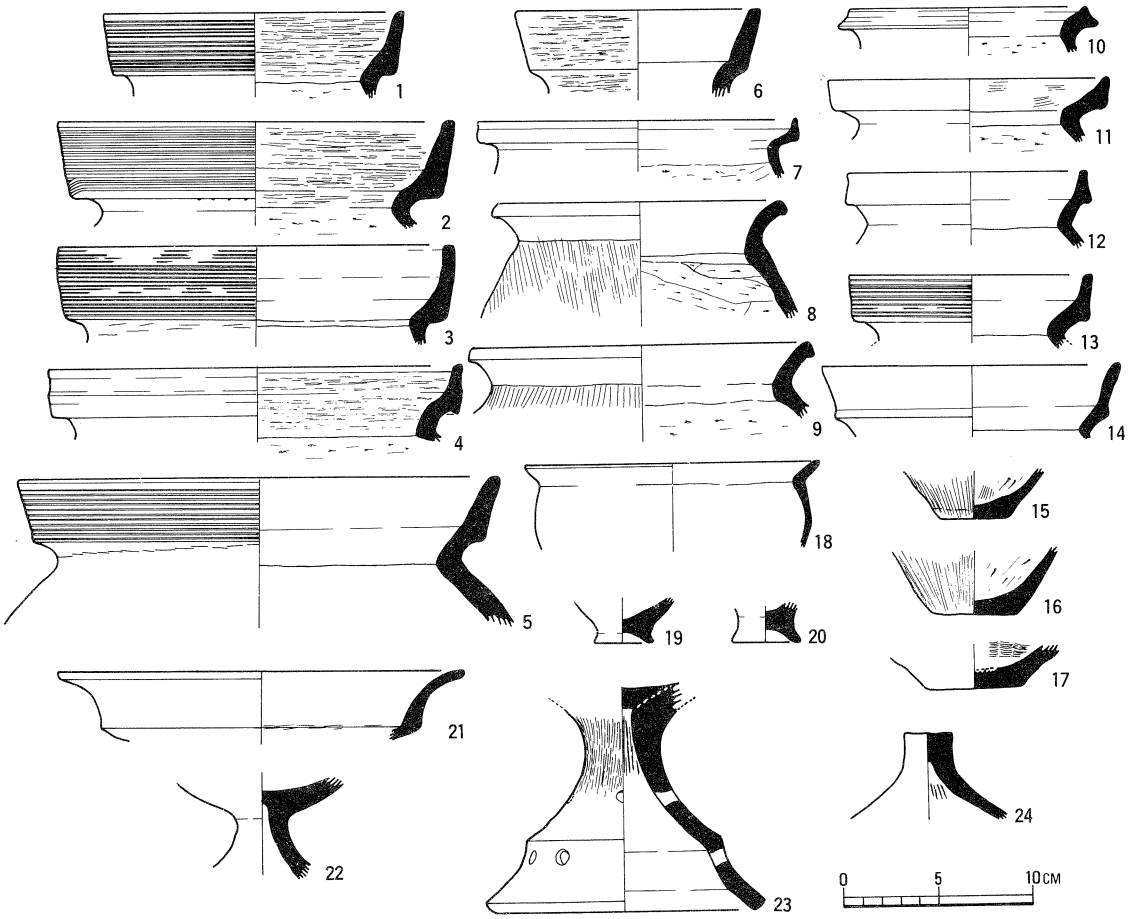


Fig.31　14号住居址出土の土器（1/4）

部片とみられ、20には内外面とも丹彩痕がある。

蓋形土器（24）

24は、剝離激しく調整不明。内面に絞り痕とみられる凹凸がある。器形については不明の点が多いが、壺蓋と考えられる。

15号及び19号住居址（Fig.32）

隅丸方形住居が、心をずらして切り合っていた。いずれも一辺 3.6m ～ 4 m 程度で小形住居の部類に入る。19号住居埋土上面に15号住居貼床面がつづいており、19号住居が先行することは明である。

19号住居は、Ｐ１～Ｐ４の四本柱で、各柱間距離はＰ１～Ｐ２、2.1m 、Ｐ２～Ｐ３、2.1m 、Ｐ３～Ｐ４、2.2m 、Ｐ４～Ｐ１、2.2m を計る。19号住居の中央穴には、土堤が一巡しており、土堤及び中央穴の平面形はやや長方形を呈する。土堤上面より中央穴底までの深さは60cmを計る。

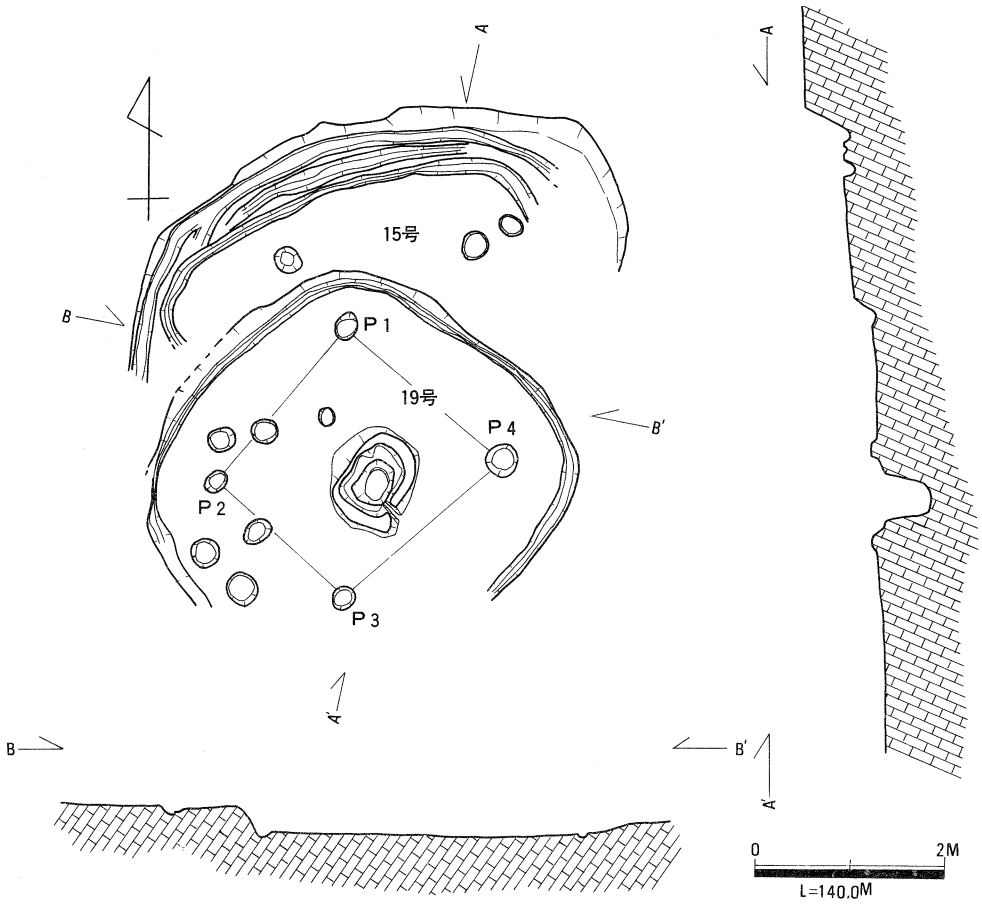


Fig.32　15号、19号住居址平面図、断面図（1/80）

19号住居埋土中には、一点の遺物もなかった。

15号住居は、北辺を部分的に残すのみで柱穴配置も不明であるが、少くとも三度は上屋の建て直し、ないしは補修をしたらしく、壁体溝三本が残されていた。いずれも隅丸方形住居に伴うものと思われる。

15号住居埋土上層の攪乱は激しく、弥生時代終末期の土器及び須恵器片を混入していたが、埋土下層の土器は、１式及び２式土器が多く、15号住居廃絶時期を２期としてよいように思われる。

15号住居址出土の土器（Fig.33）

壺形土器（１～６）

１、２は、ハの字形の頸部がラッパ状に開き、口縁端部を上下に拡張させ、端面に２～４条の凹線文を一巡させる。いずれもヨコナデ仕上げで、１の頸部はナナメの列点文を一巡させている。３、４は、いわゆる二重口縁を呈し、いずれもナデ仕上げを主としている。４は、内面ヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。５は、ソロバン玉状の壺形土器胴部片で、２本３単位

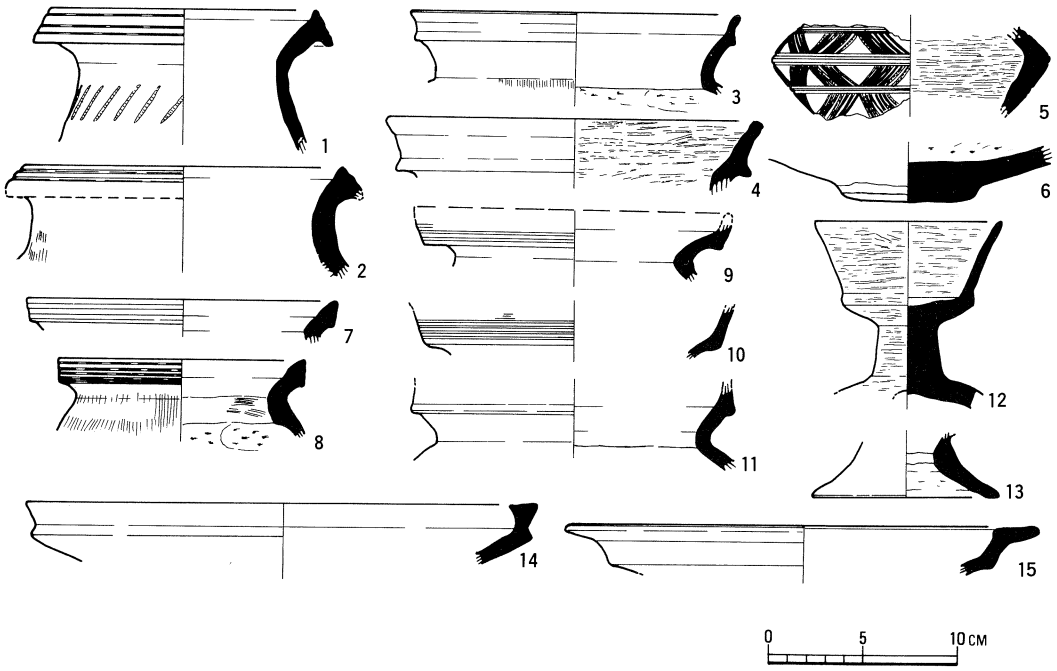


Fig.33　15号住居址出土の土器（1/4）

のヘラ描沈線文を巡らし、各単位間に貝殻腹縁文による羽状文が巡る。6は、底部輪台法により成形され、内面にヘラ削り痕を残す。

甕形土器（7～11）

7、8は、上方にやや立上がる口縁端面に4条の凹線文を一巡させ、口縁部内外面をナデにより仕上げている。8は、外面に刷毛目痕をとどめている。9、10の口縁立上がり部外面には、櫛状工具による平行沈線文が巡る。11は、内外面ナデ仕上げ、10にはススの付着が認められる。

高坏形土器（12、14、15）

12は、やや異形の小形高坏形土器で、脚部裏面以外全面に丹彩されている。立上がり端以外の丹彩部分には、綿密にヘラ磨きが加えられている。脚部には4孔の透し孔が穿たれている。

台付鉢（13）

13は、台付鉢台部分とみられ、不明瞭であるが丹彩痕跡がある。外面ナデ、内面ヘラ削りのあとナデによる調整が加えられている。

16号住居址（Fig.34）

造成工事にかかってから、掘り残し部分でブルドーザーによって発見された住居址で、ほとんど床面を残すのみである。北部分に残された壁体溝の形から復元して、本来6m前後の円形竪穴住居であったと考えられる。

柱穴配置は、必ずしも明確でないが、P1～P6の6本柱で構成されていたとみられる。各柱間距離は、P1～P2、2.68m、P2～P3、2.50m、P3～P4、2.44m、P4～P5、

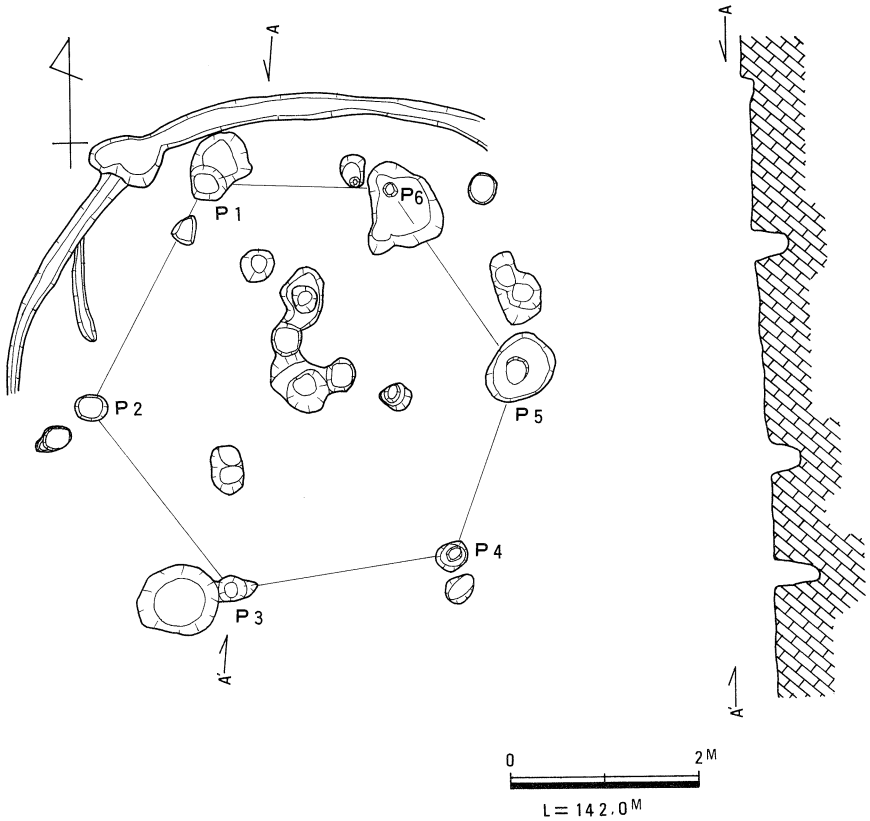


Fig.34　16号住居址平面図、断面図（1/80）

2.05m、P5～P6、2.39m、P6～P1、2.02mである。

P7が中央穴と考えられるが、土堤は伴っていない。炉とみられる焼土面はない。P3西側のピットは、85×78cm、深さ55cmのもので、18号住居に伴うかどうか不明である。P1付近に作業台とみられる石が発見されている。

出土遺物は、P1北側のピットで高坏形土器、床面で壺形土器各1点が出土している他、埋土中より若干の土器片が出土している。いずれも3式土器に属し、16号住居廃絶時期は3期と考えられる。

16号住居址出土の土器（Fig.35）

壺形土器（1、2）

1、2は同一個体とみられる。1は、二重口縁を呈

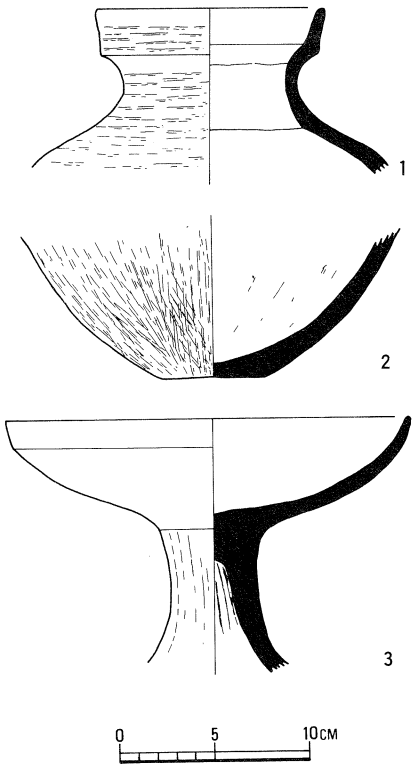


Fig.35　16号住居址出土の土器（1/4）

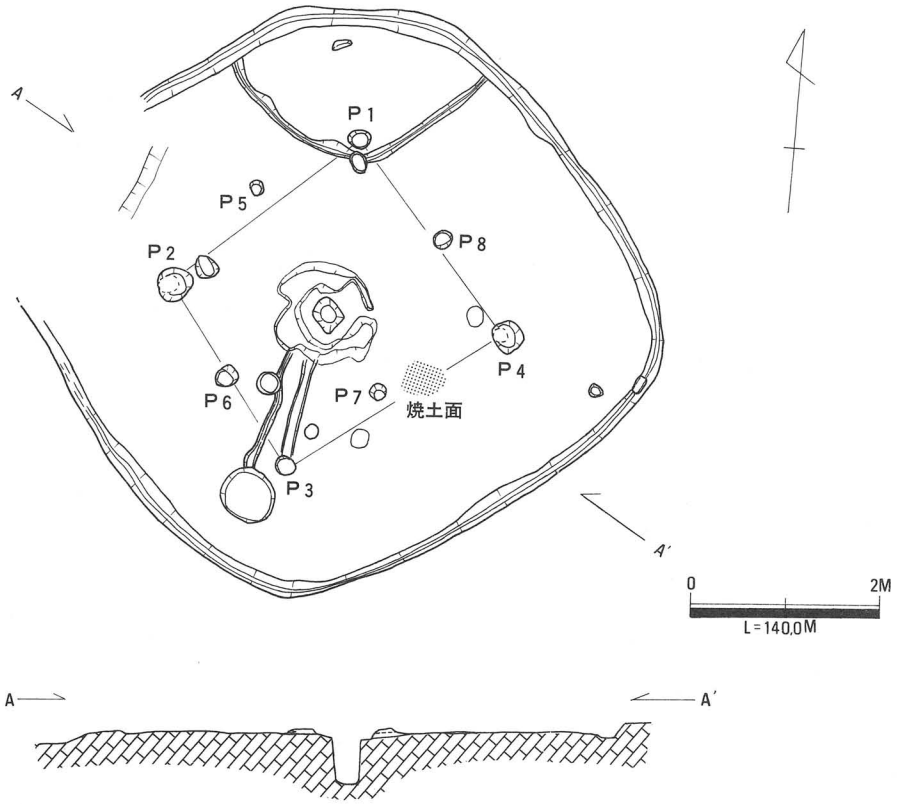


Fig.36　18号住居址平面図、断面図（1/80）

し、口縁部外面及び頸部から胴部にかけヨコ方向のヘラ磨きが加えられており、内面は、口縁から頸部にかけヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りである。２は、明白な平底を有し、外面にタテ及びナナメ方向のヘラ磨きが加えられ、内面は上方へヘラ削りされている。

高坏形土器（３）

丹彩土器で、立上がり部をわずかに屈曲させる。浅い皿状の坏部をもち、脚部はハの字形に広がり長脚に属す。脚部外面にかすかにヘラ磨きが認められ、内面に絞り痕を残している。

18号住居址（Fig.36）

一辺６ｍ弱の隅丸方形住居で、隅丸方形住居としては最も大きい。残存良好な北東部の壁高は16cmを計る。柱構成は、Ｐ１～Ｐ４の４本柱と考えられ、この他Ｐ５～Ｐ８が主柱線上にのっているので、それぞれ間柱と考えられる。各柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２、2.55m、Ｐ２～Ｐ３、2.31m、Ｐ３～Ｐ４、2.70m、Ｐ４～Ｐ１、2.55mである。

中央穴には、土盛による円形の土堤が巡ぐり、中央穴より暗渠状に２本の小溝が土堤の下を通り、Ｐ３付近に延びている。また、Ｐ３～Ｐ４の中ほどに炉址とみられる焼土面が検出され

た。Ｐ２、Ｐ４で柱根痕が確認されており、いずれもその直径は17cm前後の太さを示している。

床面出土土器はなく、埋土中に土器の小片を少量含むのみで、時期決定は困難である。埋土中の土器は、２式土器及び３式土器が含まれ、しいて推定するとすれば３期に廃絶された可能性がある。

18号住居址出土の土器（Fig.37）

甕形土器（１～３）

１は、口縁部を上方に低く立上がらせ、内外面ともナデ仕上げされている。２、３はいずれもいわゆる二重口縁の甕で、３は口縁部立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文が巡らされているが、上半はさらにナデ消されている。いずれも、胴部内面にはヘラ削りが加えられている。

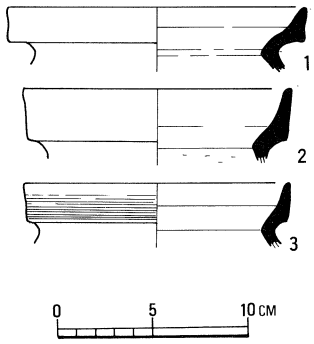


Fig.37　18号住居址出土の土器（1/4）

20号住居址（Fig.38）

長辺4.6m、短辺3.6m の長方形竪穴住居で、東長辺南端

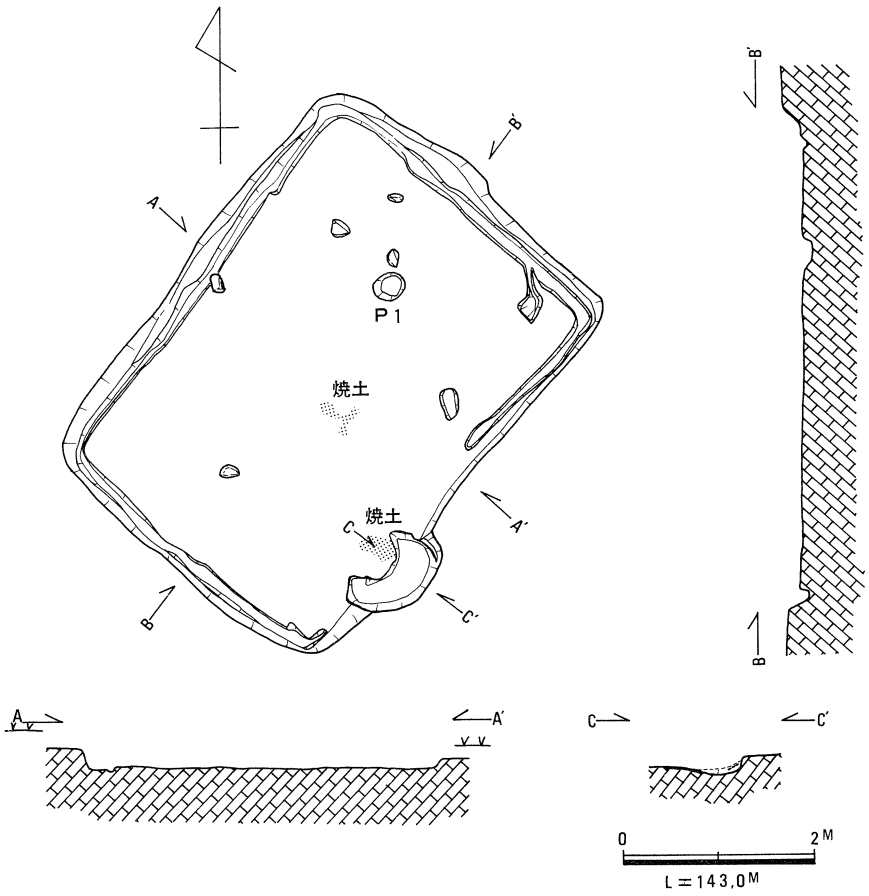


Fig.38　20号住居址平面図、断面図（1/80）

部にカマドとみられる造り出しがある。カマド炊口部底には、火床とみられる５～７cmの窪があり良く焼け、まきの焼け残りとみられる炭が窪部に残されていた。壁体溝は、このカマド部分以外ほぼ全周している。Ｐ１は、深さ４～５cmの浅い窪で明確な主柱は確認されず、主柱位置不明である。床面南部分で広い範囲に不整形の焼土が広がっていたが、火災によるものかどうか判断できなかった。

遺物は、床面出土のものがなく、埋土中より奈良時代とみられる須恵器片が出土しており、20号住居は奈良時代の竪穴住居とみられる。

20号住居址出土の土器（Fig.39）

１～４は、須恵器坏蓋部破片で１～３はつまみ部をもつ。４は､端部にかえりを伴っている。５～10は、須恵器坏身破片で、７～10には貼付高台をもつ。わずかに明暗の差をもつもののいずれも灰色を呈し、焼成良好で堅く焼きしまっている。概ね内外面ともヨコナデ仕上げ、１内面は、ナデ仕上げである。いずれも、奈良時代に属するものと思われる。

11は、須恵器甕形土器底部片で暗灰色を呈す。焼成良好で非常に堅く焼きしまっている。内面に青海波を残し、外面にカキ目を残す。12は、須恵器坏蓋破片でなだらかにおりた端部は丸くおさまる。灰白色を呈し内外面ともヨコナデにより仕上げられている。11、12とも古墳時代のものと考えられる。

21号住居址（Fig.40）

西平担部南斜面に位置する。流出激しくその大部分を失っている。残存部からみて、隅丸方形の竪穴住居址であった可能性が強い。Ｐ２は、主柱穴の１つとみられるがその他は不明。壁体溝中より石庖丁１点と１期の高坏形土器小片１点が出土した。

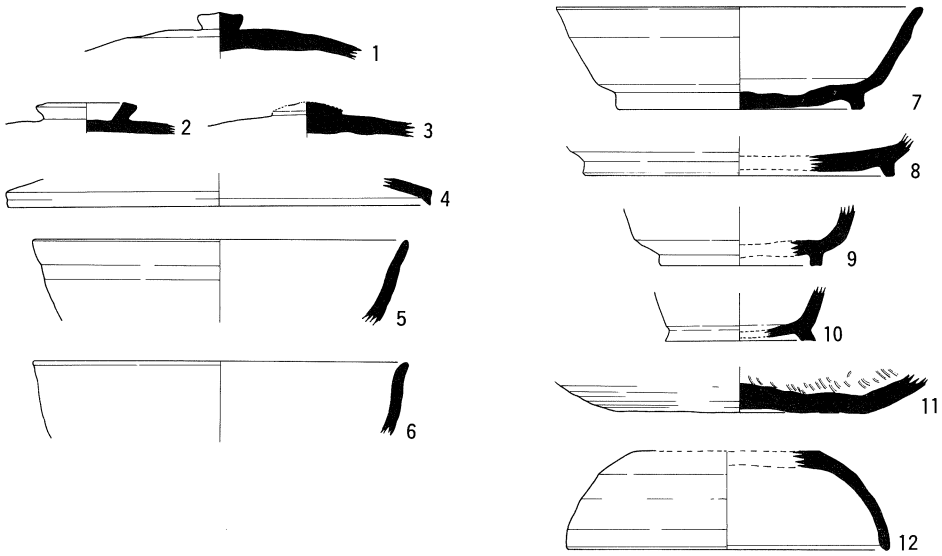
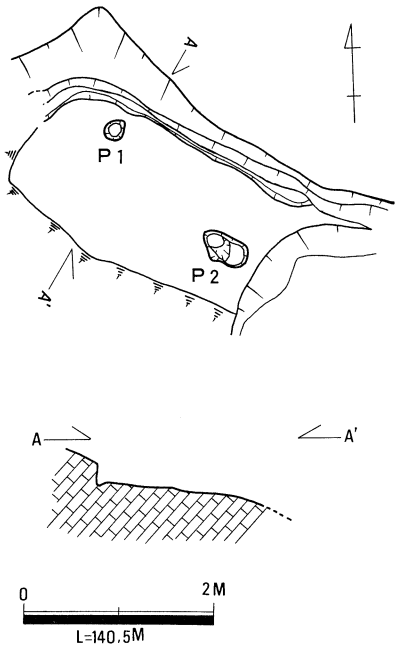


Fig.39　20号住居址出土の土器（縮尺1/3）



23号段状遺構

急峻な斜面を削り出し平担な面を造成したもの。平担面はかなりな部分流出した模様、残存面に壁体溝はなく、柱穴が散在するが、建物としてのまとまりに欠く。本来なんらかの建物を建てるための造成面であると考えられるがその詳細は不明である。上方より流入したと考えられる弥生式土器多数が埋積していた。埋土中の土器は、２～３期のものが多い。

Fig.40　21号住居址平面図、断面図（1/80）

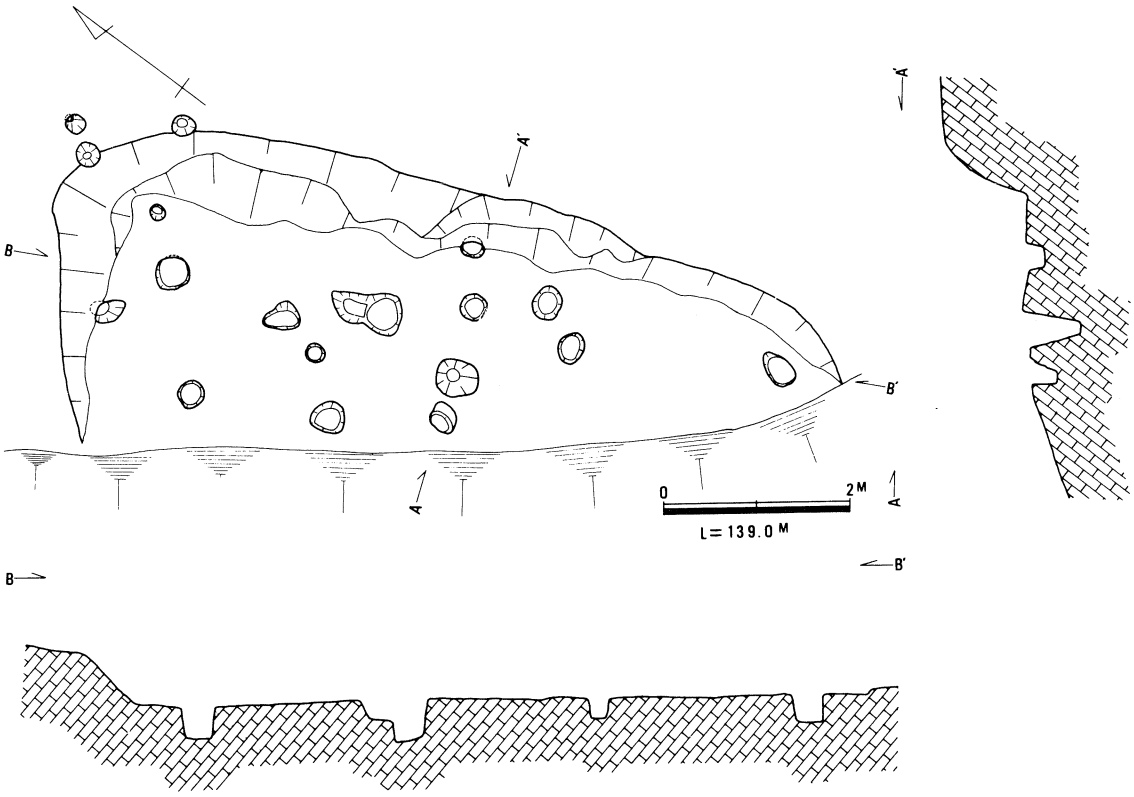


Fig.41　23号段状遺構平面図、断面図（1/80）

2. 袋状貯蔵穴

地下式貯蔵穴とみられる袋状竪穴遺構で、本遺跡では主として東西平担部で79基が検出された。

平面形態は、口部及び底面はほぼ円形を呈し、断面形態は台形ないしは肩をもつフラスコ状を呈する。口部直径は、削平度ないしは廃棄後の崩壊程度によってかなり変異にとむが、本来は、70～90cm程度であったと思われる。底面直径は、100～180cm程度である。深さは、造成工事により削り出されたものを除外すると検出面から床面までもっとも浅いものがP－3の50cm、もっとも深いものは、P－13の 230cmである。浅いものも、深いものも廃棄以降にそれほど削平度に極端な差があったとはみられず、深さは本来かなりバラエティーにとむものであったことが知られる。

断面形態における二者は、特に肩部分の崩落がいずれも著しくまた検出面の差を考慮に入れると、両者の区別があった可能性は強いものの本来の形態上の差かどうかを識別することは困難である。袋状竪穴遺構の機能という点からいうと、両者にその差を考える根拠はまったくない。

底面のありかたには、二種類あり、大多数が皿状に中心部を深くしているが、ＰＥ41やＰＥ42等は、床が水平ないしは中央部が逆に高くなっており、この種のものには床面外辺に壁体溝状の小溝を伴うもののあることが注意された。

床中央ないしは外周部に柱穴状の穴を伴うものがあるが、いずれも少数の貯蔵穴で確認されたのみである。

壁面への粘土の塗付及び焼成を示す資料はなかった。

貯蔵穴相互の切合は、Ｐ２、Ｐ３及びＰＥ39(新、古)、ＰＥ40、41で認められた以外なく、概ね貯蔵穴相互の切合はないといえる。

使用に耐えうるとみられる土器を出土したのは、ＰＥ24及びＰＥ55のみで、多数の土器片を出土するものも多いが、いずれも破片としてのものである。いずれの場合も床面に密着して出土するものはほとんどなく、最も下位から出土する土器も床面より数センチ浮いているようにみえた。

貯蔵穴には、人意的に埋められたとみられるものも多く、小児頭大の礫が層状に埋められるものもあった。特に、６号住居址と切り合い関係にあるＰＥ８、ＰＥ９は、遺構基盤層の黄褐色土で埋められていて黒色土の混入はなく６号住居建造に際し埋められたのではなかろうかと思われた。

貯蔵穴は、いっきに掘り下げ、出土土器は貯蔵穴ごとに一括して取り上げられたためか、一貯蔵穴内出土土器は概ね複数型式にわたる。一括遺物とみてまず矛盾しないものは、ＰＥ７、

ＰＥ29、ＰＥ55の三基のみである。従って、貯蔵穴使用の時期を限定することは困難であるが、その主体をしめる土器群の時期が、貯蔵穴の年代にもっとも近いであろうという推定から、暫定的な時期決定をおこない、貯蔵穴の推移を大まかにたどる手段とした。

貯蔵穴占地の点では、すべてに共通現象が認められる。すなわち、例外なく高燥で基盤層の安定した水はけの良い位置に立地しているのである。いずれの貯蔵穴も口部の密閉を十分すれば湿気を容易に排除出来たであろうと思われる。貯蔵穴占地の主要因は防湿にあったことは明らかである。

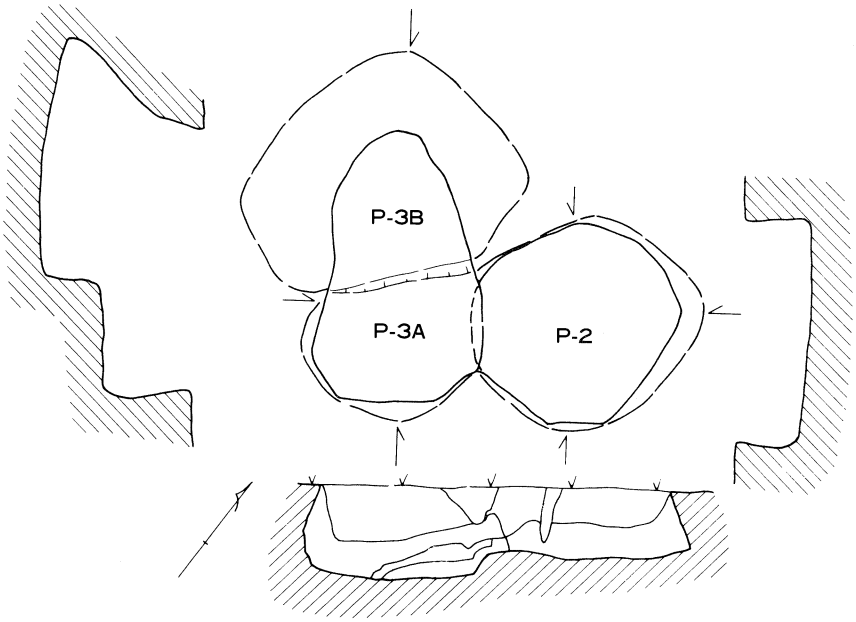
なお、５号住居址で貯蔵穴が６基住居址に重複しているが、いずれもしいて共存を考える根拠はなく、出土土器の示す時期は住居廃絶の時期より１～２時期古い。

袋状貯蔵穴計測値及び時期一覧表（単位、cm）

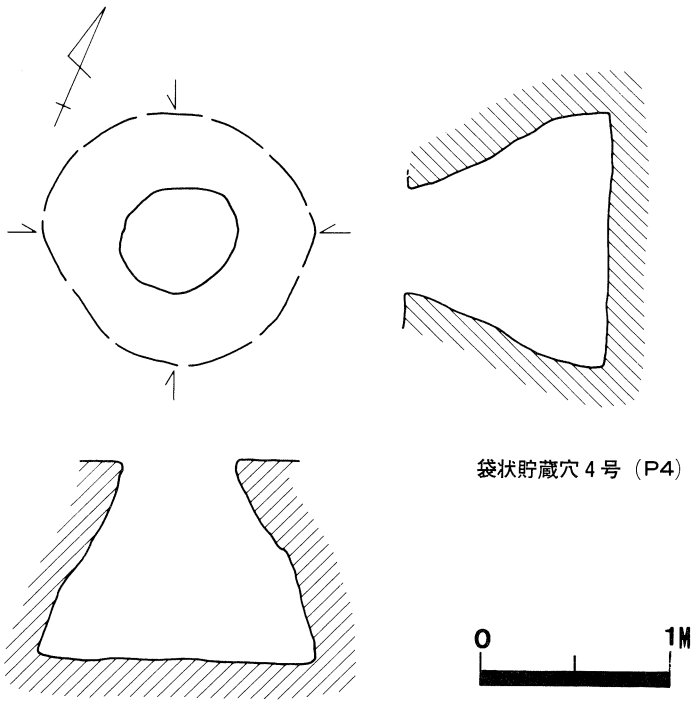
ピット番号	口部直径	下底直径	深　さ	土器の有無	時　期	ピット番号	口部直径	下底直径	深　さ	土器の有無	時　期
Ｐ－１	80	110～120	50	×	?	Ｐ－42	110	150～160	180	○	４期
Ｐ－２	105	115～120	40	○	２期	Ｐ－43	110	160	120	○	５期
Ｐ－３	（Ａ）90 （Ｂ）60	（Ａ）90 (B)120~150	（Ａ）50 （Ｂ）90	○	２期	Ｐ－44	85～90	100～140	110	○	３期
Ｐ－４	55～60	130～140	110	×	?	Ｐ－45	90～100	110～130	90	○	４期
Ｐ－５	70	130～140	105	○	２期?	Ｐ－46	90～100	140～150	90	○	４期
Ｐ－６	75～100	150～160	130	○	２期	Ｐ－47	100～130	130～140	98	○	２期
Ｐ－７	80	120	110	○	３期	Ｈ－５ Ｐ－１	90～120	130～140	80	○	３期
Ｐ－９	85～100	140	80	○	２期	Ｈ－５ Ｐ－２	70～80	180～190	135	○	２期
Ｐ－10	110～140	117	120	○	３期	Ｈ－５ Ｐ－３	80～90	160	160	○	３期
Ｐ－11	60～70	110～120	90	○	2期～3期	Ｈ－５ Ｐ－４	60～70	150	130	○	２期
Ｐ－13	80～85	170	230	○	３期	Ｈ－５ Ｐ－５	80～90	130～140	95	○	３期
Ｐ－14	85～90	180～190	150	○	２期	Ｈ－５ Ｐ－７	85～90	135	70	×	?
Ｐ－16	70	135	84	○	２期	ＰＥ－１	60	不明	不明	○	３期?
Ｐ－17	80～90	130	97	○	２期	ＰＥ－２	50～60	不明	不明	×	?
Ｐ－18	90	150	80	○	３期	ＰＥ－３	150～160	150	48	×	?
Ｐ－19	65	130	110	○	３期	ＰＥ－４	150～160	160	15	×	?
Ｐ－20	70～75	145	140	○	３期	ＰＥ－５	120～140	150	12	×	?
Ｐ－22	100～110	125	91	○	２期	ＰＥ－７	70	190	121	○	１期
Ｐ－24	60	130	120	○	３期	ＰＥ－８	150	170～180	24	×	?
Ｐ－27	80～100	130～135	71	○	３期	ＰＥ－９	150	160～170	20	×	?
Ｐ－41	100～120	130	59	○	３期	ＰＥ－21	120	160	215	○	４期

ピット番号	口部直径	下底直径	深　さ	土器の有無	時　期	ピット番号	口部直径	下底直径	深　さ	土器の有無	時　期
ＰＥ－22	80～100	155～160	130	○	5期	ＰＥ－43	80	160	140	○	5期
ＰＥ－23	90～100	140～145	60	○	3期	ＰＥ－45	100	150～170	110	○	5期
ＰＥ－24	100	130～135	130	○	4期	ＰＥ－46	100	110	10	○	4期
ＰＥ－25	90～95	165～175	123	○	4期	ＰＥ－48	150	160～170	33	×	?
ＰＥ－26	80～90	150～155	107	○	4期	ＰＥ－49	140	160	40	×	?
ＰＥ－27	70～75	150	104	○	4期	ＰＥ－50	95～100	140～145	100	○	4期
ＰＥ－28	80～90	135～140	122	○	4期	ＰＥ－52	床面のみ	126	?	○	4期
ＰＥ－29	95～110	150～155	81	○	4期	ＰＥ－53	〃	170	?	○	4期
ＰＥ－30	80～85	170	103	○	5期	ＰＥ－54	95～100	150	96	○	3期
ＰＥ－31	90	90	39	○	3期	ＰＥ－55	70～80	120～130	120	○	4期
ＰＥ－32	?	?	?	○	3期	ＰＥ－56	85～100	160～165	129	○	5期
ＰＥ－33	110～130	130	43	○	2期	ＰＥ－58	105	130～150	86	○	4期
ＰＥ－34	70～75	120	60	○	3期	ＰＥ－59	110	130～150	38	○	2期
ＰＥ－36	100～120	120	79	○	2期	ＰＥ－60	80～100	160	85	○	5期
ＰＥ－37	140	150	43	×	?	ＰＥ－61	90～100	170～180	110	○	4期
ＰＥ－38	90～105	200	100	○	5期	ＰＥ－62	80	165～170	98	○	4期
ＰＥ－39	80(古) 60(新)	120(古) 100(新)	68(古) 58(新)	○	2期						
ＰＥ－40	75～80	140～160	80	○	2期						
ＰＥ－41	80～90	150	90	○	3期						
ＰＥ－42	75	150	85	○	3期						

※　ピット番号のうちＥを付したのは、造成時掘り残し部分でブルドーザーにより削り出され検出されたものである。



袋状貯蔵穴２、３号（P2、P3A、P3B）



袋状貯蔵穴４号（P4）

Fig.42　袋状貯蔵穴２、３、４号実測図（1/40）

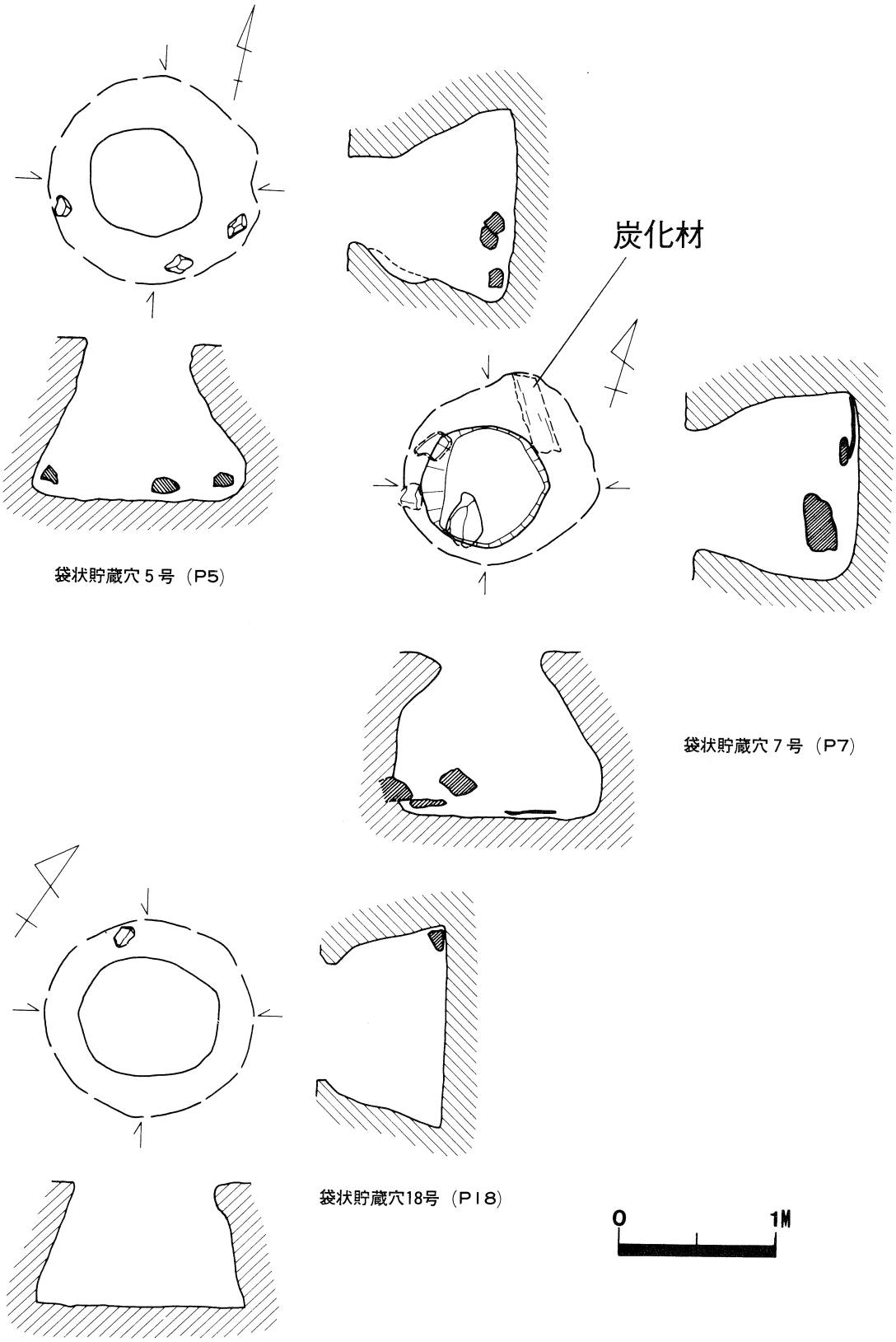
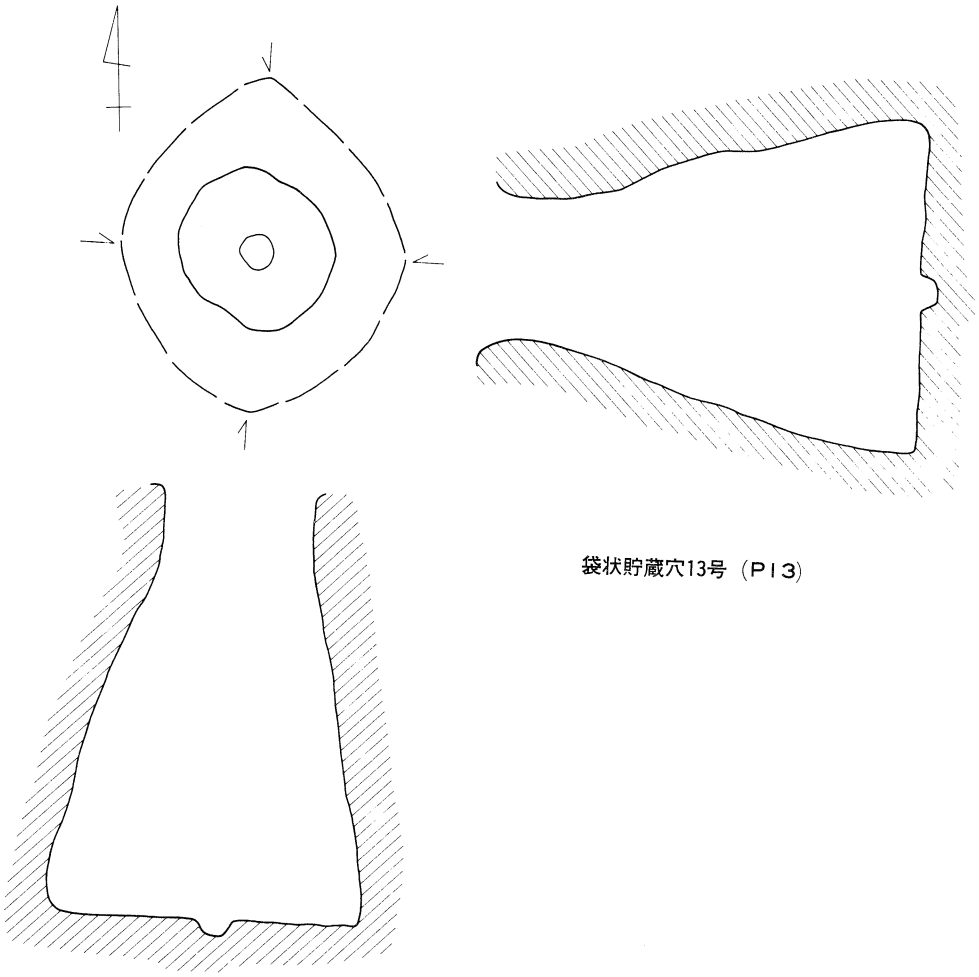


Fig.43　袋状貯蔵穴５、７、18号実測図（1/40）



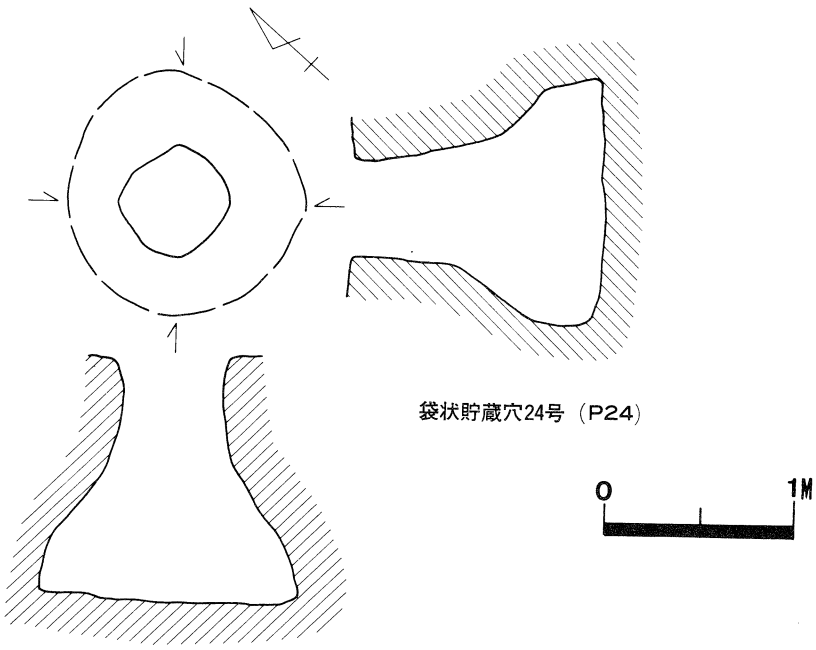


Fig.44　袋状貯蔵穴13、24号実測図（1/40）

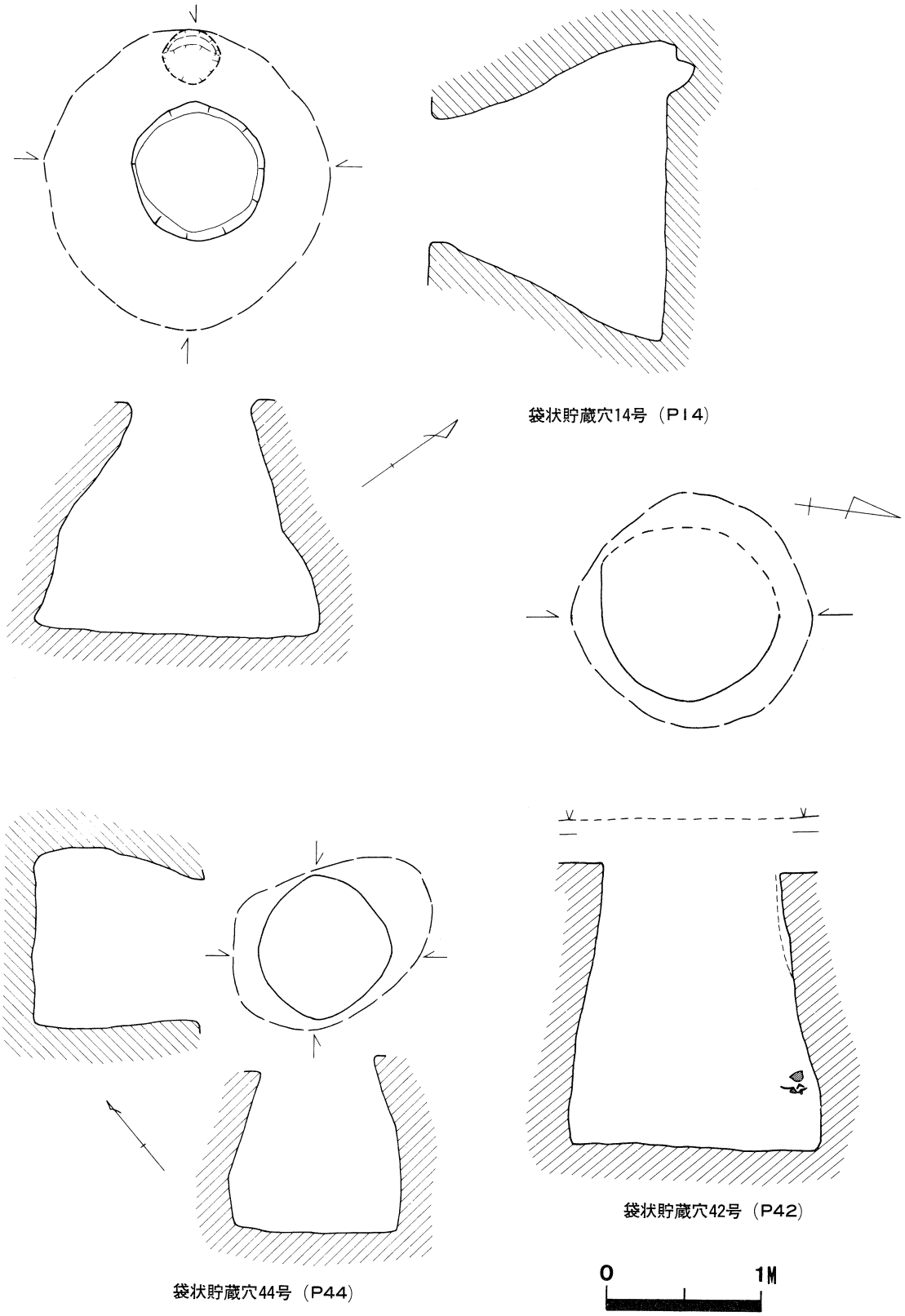


Fig.45　袋状貯蔵穴14、42、44実測図（1/40）

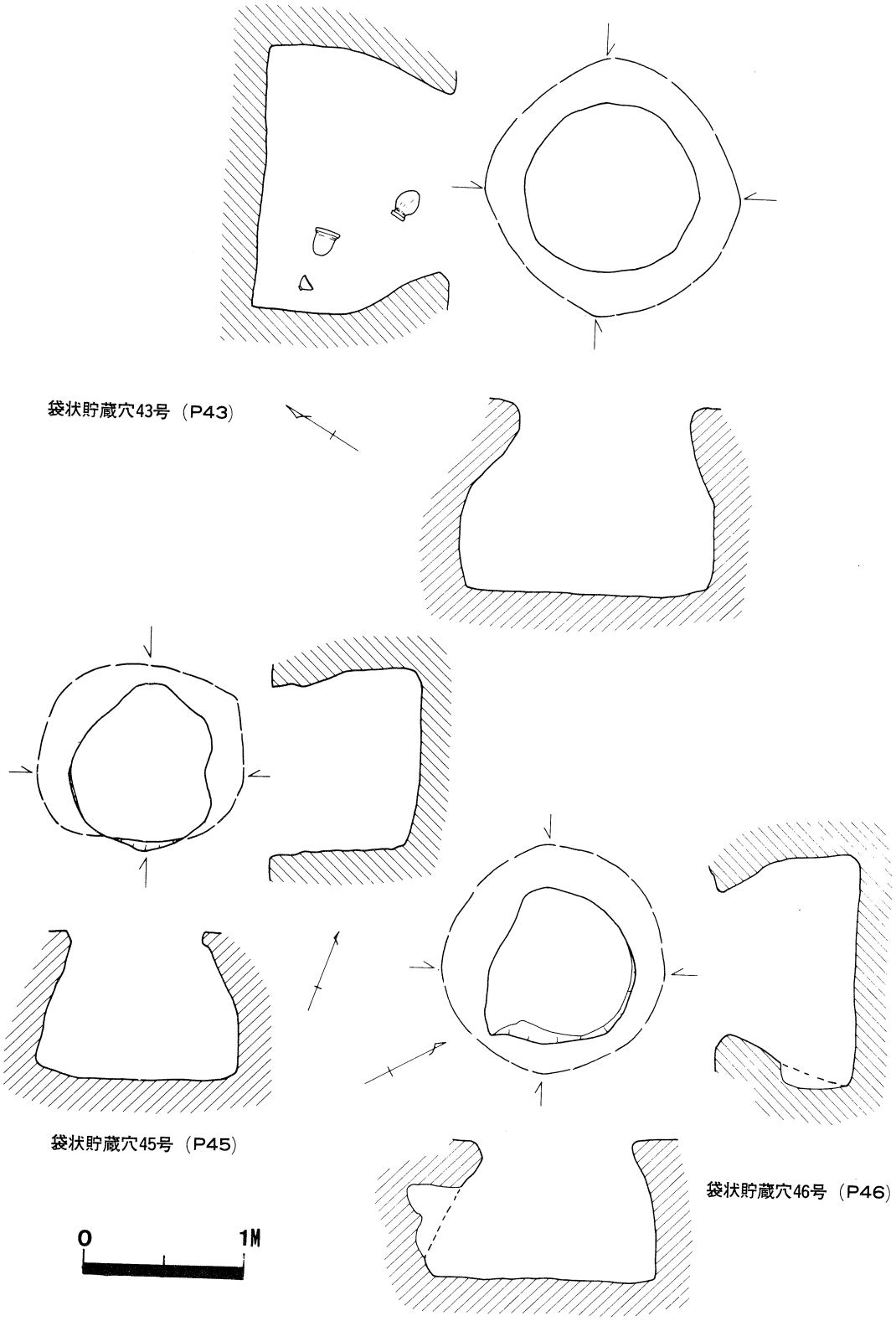


Fig.46　袋状貯蔵穴43、45、46号実測図（1/40）

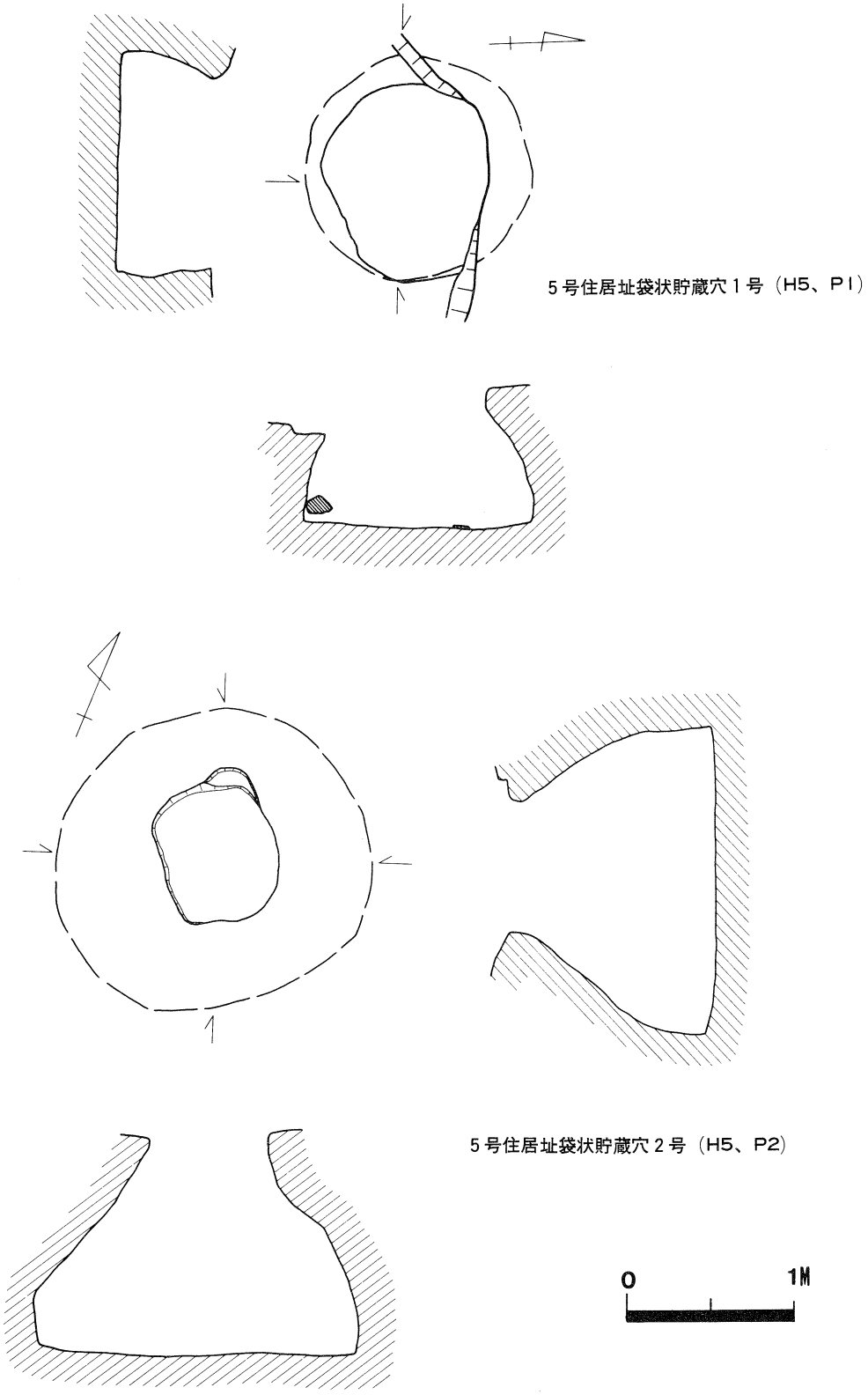


Fig.47　5号住居址袋状貯蔵穴1、2号実測図（1/40）

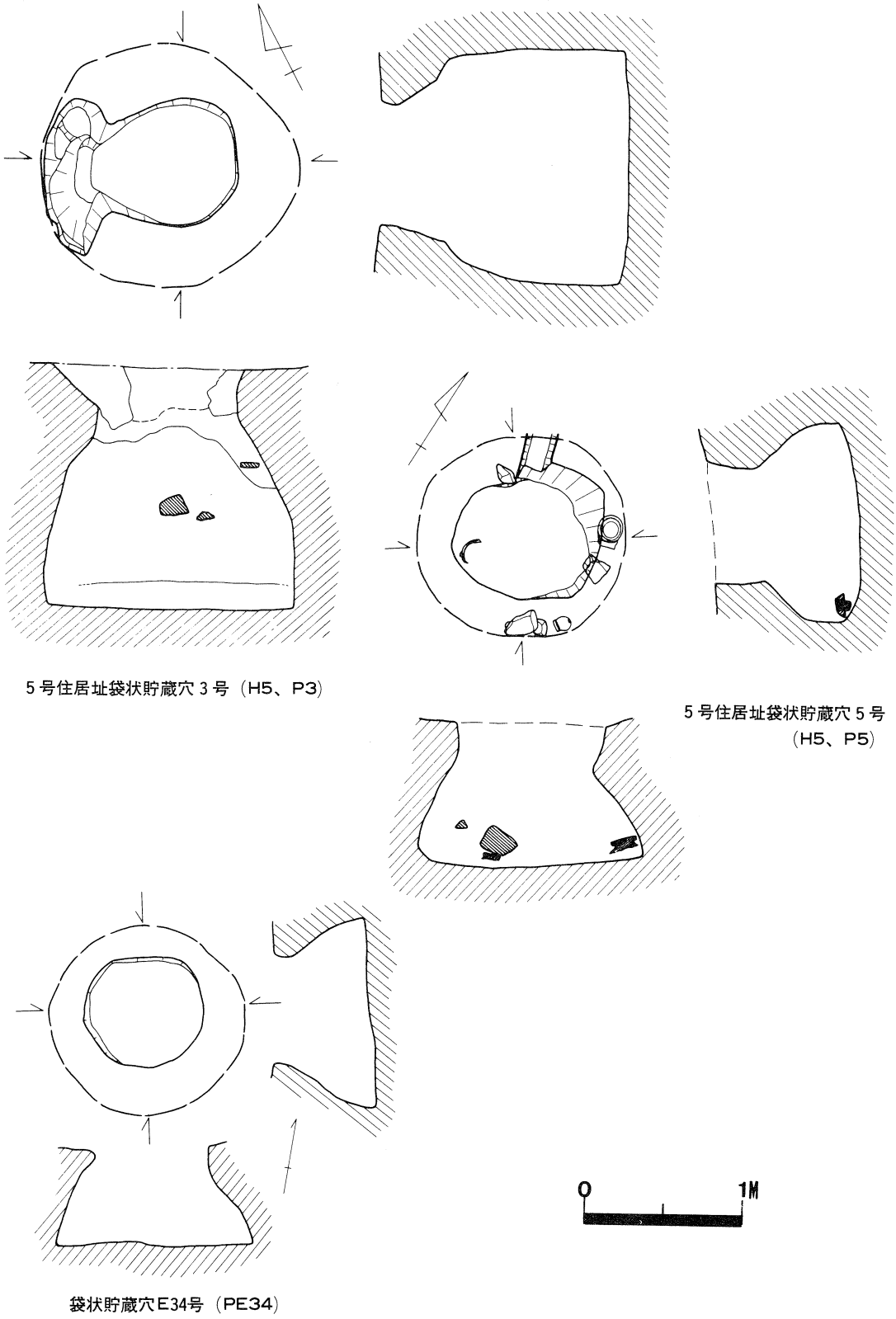
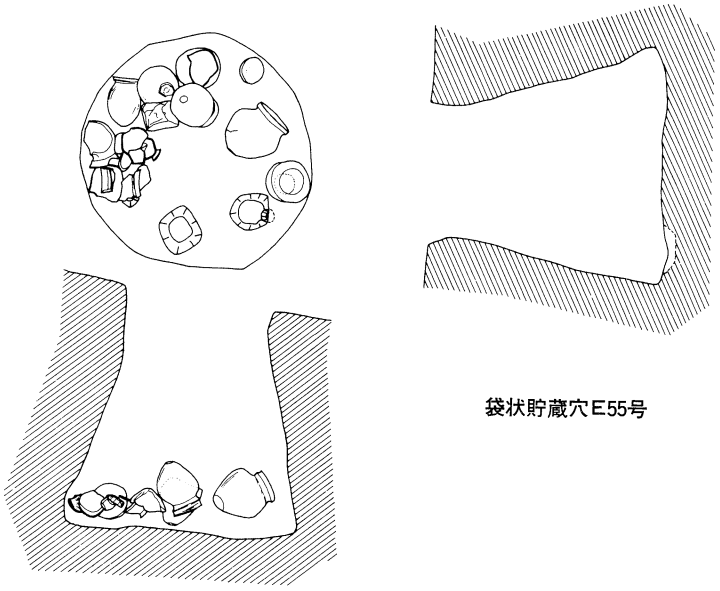


Fig.48　5号住居址袋状貯蔵穴3、5号及び袋状貯蔵穴E34号実測図（1/40）



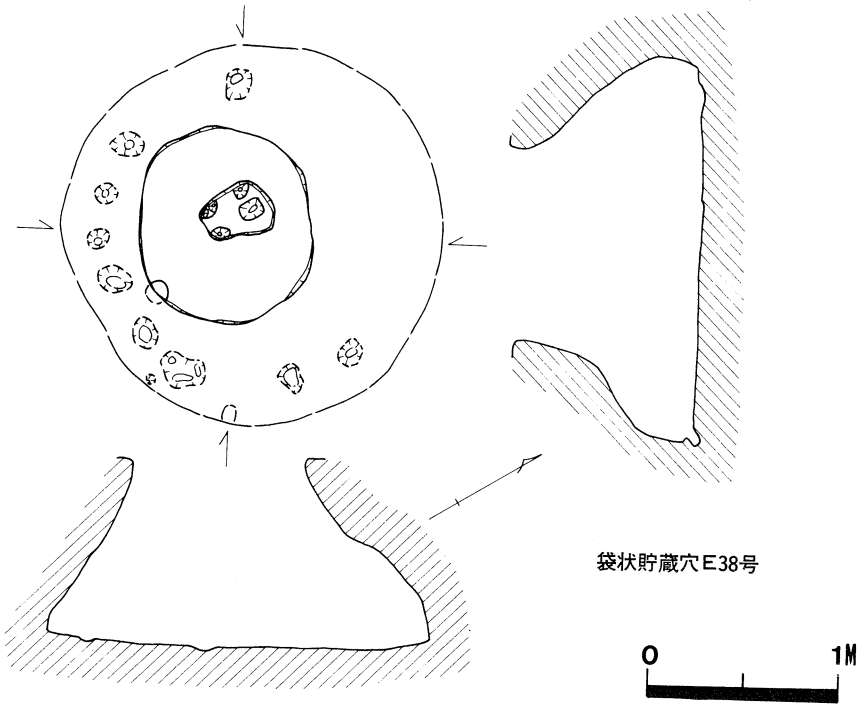


Fig.49　袋状貯蔵穴E38号、E55号実測図（1/40）

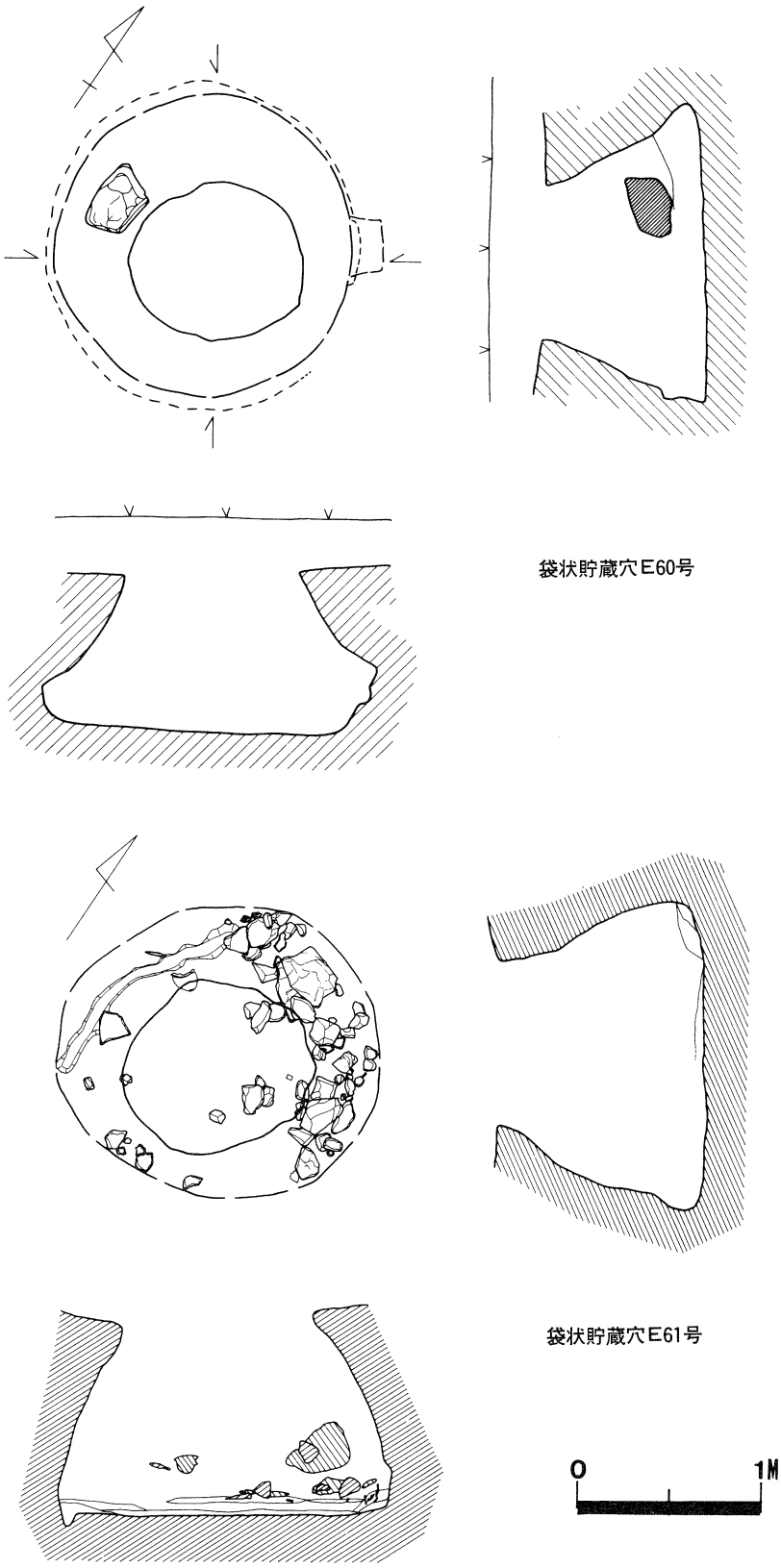


Fig.50　袋状貯蔵穴E60、E61号実測図（1/40）

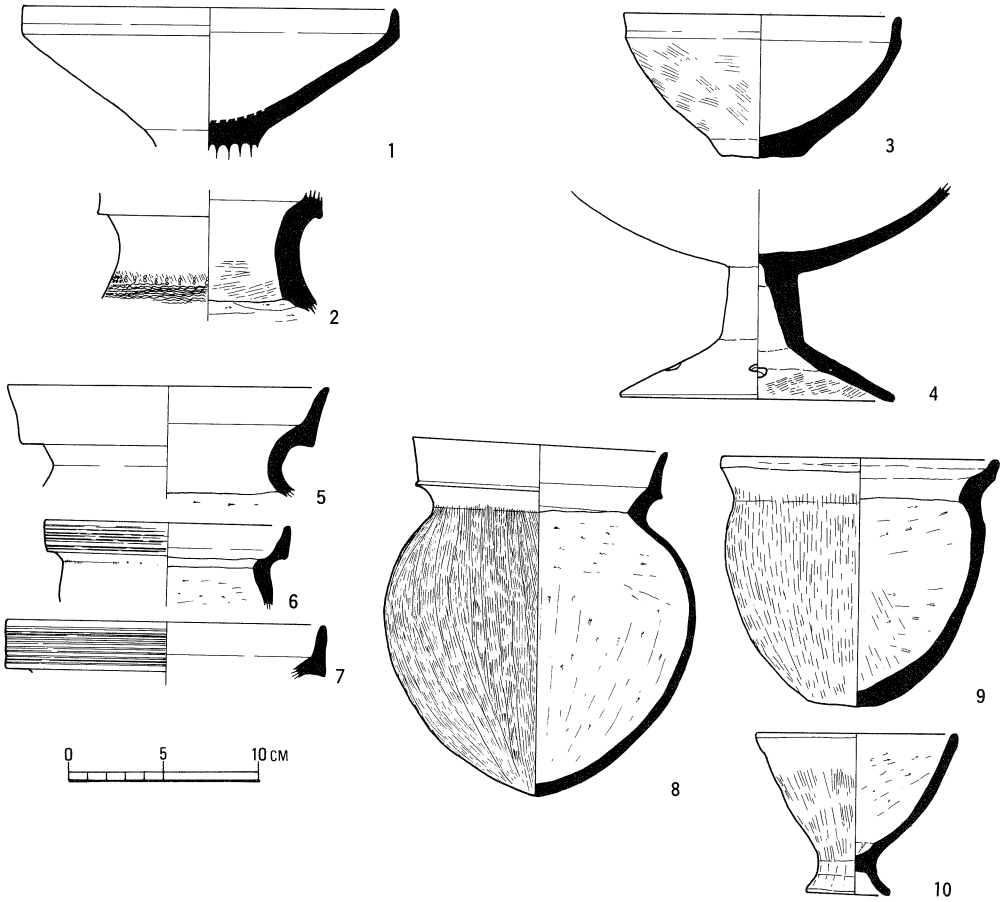


Fig.51　袋状貯蔵穴３号、19号、20号、22号、43号出土の土器（1/4）

袋状貯蔵穴３出土の土器（P.３－B　　Fig.51）

高坏形土器（１）

坏上部を直上に折りまげ立上がらせる。立上がり部内外面はヨコナデ仕上げ、その他は剝離激しく不明である。全面に丹彩痕をとどめる。

袋状貯蔵穴19出土の土器（P.19　　Fig.51）

鉢形土器（３）

口縁部端を直上に立ち上がらせるくせをもつ。立上がり部内外面ともヨコナデ仕上げ、外面に刷毛目痕を残し、内面はナデ仕上げ。平底で、底面未調整である。大粒の砂粒を含む。

高坏形土器（４）

立上がり部を欠くが、比較的明瞭な筒部をもち、筒内面にわずかに絞り痕をとどめている。内外面とも丹彩され、脚部に４孔の穿孔がある。

袋状貯蔵穴20出土の土器（P.20　　Fig.51）

壺形土器（２）

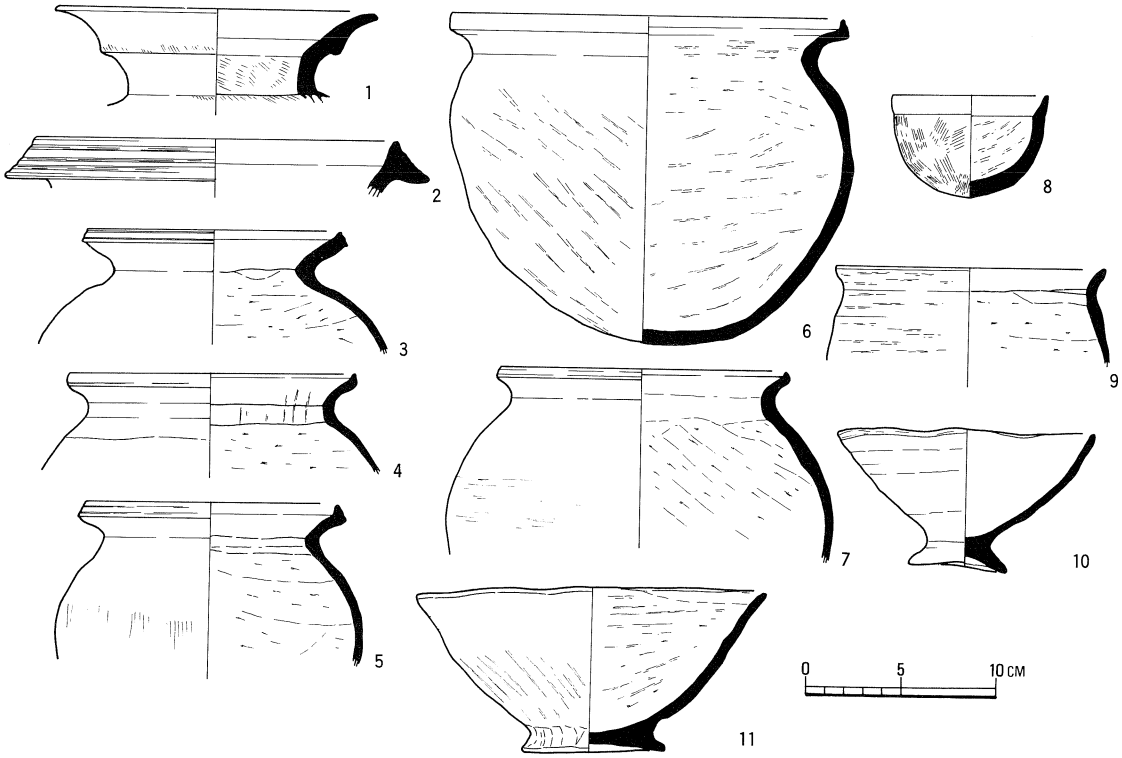


Fig.52　袋状貯蔵穴42号出土の土器（1/4）

口縁立上がり部を欠くが、立上がりは低くおさめられるとみられる。口縁部及び頸部内外面上半はナデ仕上げ、外面頸部下半に刺突文が一巡し、直下に櫛描波状文が巡ぐる。内面頸部下半に刷毛目痕を残し、胴部内面はヘラ削りである。

袋状貯蔵穴22出土の土器（P.22　　Fig.51）

壺形土器（5、7）

5は、ラッパ状に開く頸部が屈曲し、口縁部はやや外反して立上がる。頸部から口縁部にかけて内外面ヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りである。

7は、直立に立上がる口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文が巡る。内面ナデで、内外面丹彩されていた可能性がある。胎土中砂粒をほとんど含まない。

甕形土器（6）

二重口縁の甕で、口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文が施されている。外面頸部以下は、タテ方向の刷毛目をヨコナデで消している。口縁部内面ヨコナデ、胴部内面ヘラ削りである。

袋状貯蔵穴43出土の土器（P.43　　Fig.51）

甕形土器（8、9）

8は、やや外反する口縁部をもち、口縁部下端に段状の突出部を巡らす。尖底状の底部をもち、口縁部内外面ナデで、胴部外面にタテ方向の刷毛目痕を残す。内面ヘラ削りで全般に非常

に薄く仕上げられている。外面にススの付着が著しく、２次的火を受けた痕が顕著である。９は、厚手の小型甕で、低く立上がる口縁部を有し、口縁部内外面ヨコナデで外面はタテ方向の刷毛をナデ消している。内面にヘラ削り痕を残し、底面平滑でナデ仕上げされている。胴部から底部にかけタマネギ状の剝離が認められる。

椀形土器（10）

口縁端部ヨコナデで、外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、内面はヘラの削り放しである。

袋状貯蔵穴42出土の土器（P.42　Fig.52）

壺形土器（１、２）

１は、大きく外反する二重口縁形壺形土器口縁部片で、外面に一部刷毛目痕を残すが概ねヨコナデ仕上げ。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部に刷毛目痕が残されている。２は、口縁端部を肥厚させ上下に拡張する壺形土器口縁部片で、端面に４条の凹線文を巡らしている。

鉢形土器（３～７、９）

３～７、９は、ほぼ共通した器形を示し、口縁部端を低く折りかえし立上がらせている。このうち３と５には、口縁立上がり部外面に凹線風の段を巡らしている他ナデ仕上げである。胴部外面は丁寧にヘラ磨きされるもの(６)の他、いずれも刷毛とナデを主とし部分的にヘラ磨きが加えられている。内面は、６がヘラ削りのあとヘラ磨きが加えられている他は、いずれもヘラ削り痕のみを残し、４は頸部に絞り痕を残している。９は、くの字形口縁をもつ小型鉢で、外面及び口縁部内面にヘラ磨き痕が顕著で、胴部内面はヘラ削りである。

椀形土器（10、11）

10、11は、いずれも台付椀形土器で、10は内外面ヨコナデを主に仕上げられている。11は、外面ヘラ磨き、台部に指頭圧痕が顕著で、内面はヘラ削りのあと雑にヘラ磨きが加えられている。いずれも台部はナデ仕上げされている。

袋状貯蔵穴45出土の土器（P.45　Fig.53）

壺形土器（１～５）

１は、口縁端部をやや外方に立上がらせ、立上がり部外面に三条の沈線文を巡らしている。口縁部から頸部にかけ内外面ヨコナデ仕上げされている。２は、口縁立上がり部外面に山形の３条の沈線及びその上下に各一本の沈線が一巡している。３は、立上がり部内外面に丹彩が施され、ヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。５は、口縁部から頸部にかけて内外面ヨコナデ、肩部以下は内外面刷毛仕上げである。タタキ成形を思わすが、タタキ痕は認められない。

甕形土器（７～８）

６は、口縁端部を肥厚拡張させ、頸部をくの字形に屈曲させている。外面頸部以下は、タテ方向の刷毛目痕を残し、内面はヘラ削りである。７は、内外面肩部に至るまでヨコナデ、外面は肩部下半にナナメの刷毛目痕が残されている。内面ヘラ削りは、上方にまで至っていない。

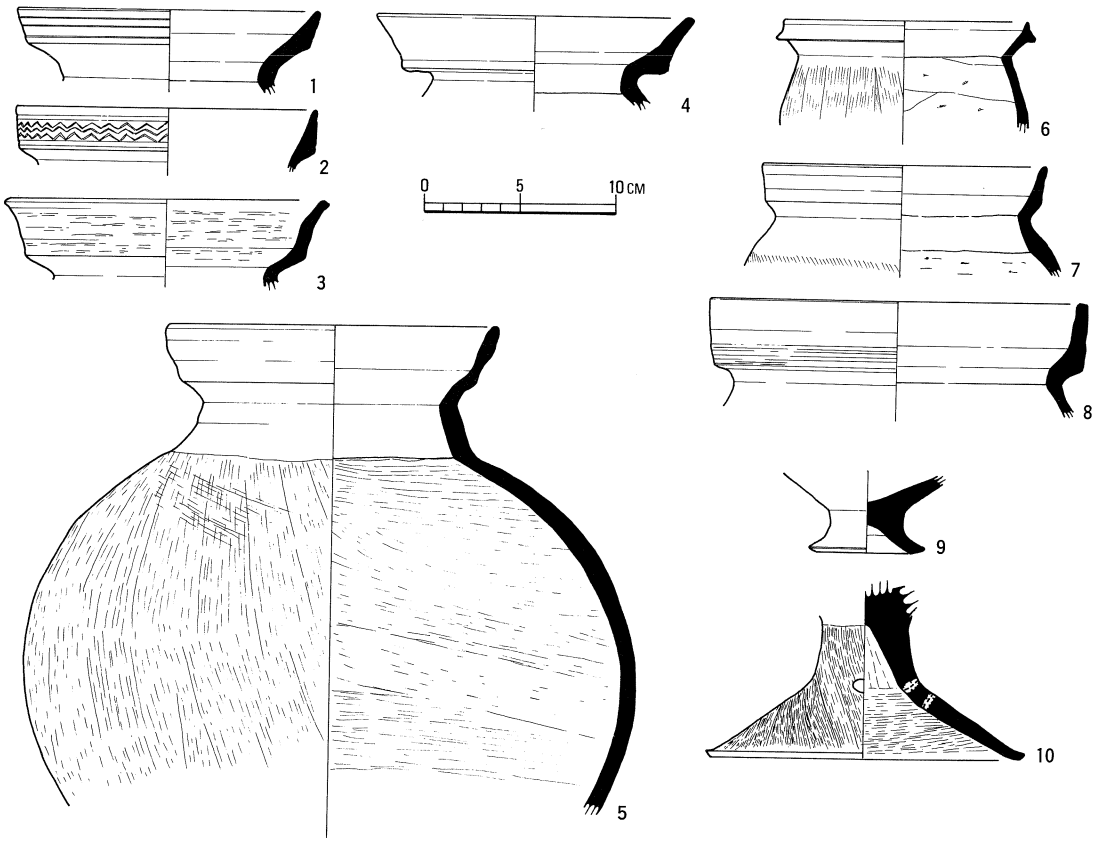


Fig.53　袋状貯蔵穴45号出土の土器（1/4）

台 付 鉢（9）

剝離激しく調整不明であるが、内面に一部丹彩痕跡をとどめている。

高坏形土器（10）

筒部と脚部の折れ曲り部分に三孔の飾孔が巡り、外面にナナメ方向の刷毛目痕を残す。内面筒部分に絞り痕を残し、脚部には刷毛目痕を残す。

袋状貯蔵穴47出土の土器（P.47　　Fig.54）

壺形土器（1～7）

1は、直立ぎみの筒状頸部上端を肥厚させ、端面に二条の凹線を巡らす。内外面ともヨコナデ仕上げ。5は、外反する単純口縁部片で、内外面ともヨコナデ、砂粒をほとんど含まない。6は、直口壺口縁部片で、内外面ともに丹彩がありナデ仕上げされている。7は、台付壺脚部片とみられ、外面に二条の沈線と間をおいて三条の沈線が一巡し、その間に羽状の貝殻腹縁文が巡る。また脚端部にも6条以上の平行沈線文が巡る。全般に丁寧な仕上げで、綿密なヘラ磨きが内面にも加えられている。

甕形土器（8～19）

8、15、16、18、19は、くの字形口縁の甕破片とみられ、口縁部内外面ヨコナデ、15、16、

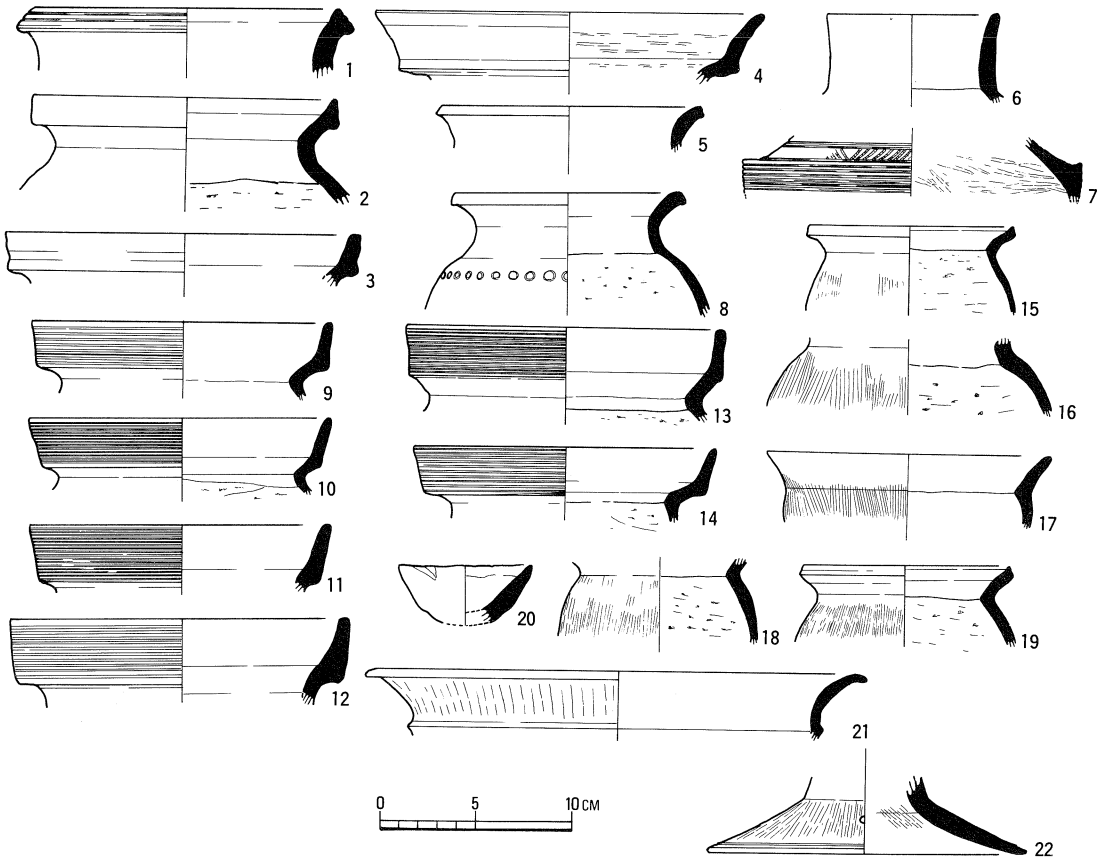


Fig.54　袋状貯蔵穴47号出土の土器（1/4）

18、19は、胴部外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、内面にはいずれもヘラ削り痕を残す。8は、肩部分に竹管文を一巡させている。9～14は、二重口縁部片で、立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文が巡る。口縁部内面はヨコナデ、胴部内面にヘラ削り痕が残されている。このうち、8、9、11～14、19にススの付着が認められる。

高坏形土器（21、22）

21は坏部立上がり部片で、大きく外反する。内外面に丹彩があり、外面はタテ方向の刷毛調整のあとヨコナデが加えられている。内面調整は不明である。22は、脚部片で脚端に段をもつ。外面に刷毛目痕を残し、内面にもかすかに刷毛目をとどめている。

手づくね土器（20）

20は、内外面に指頭圧痕を残し、黒斑顕著で砂粒は少い。

袋状貯蔵穴Ｅ７出土の土器（PE. 7　　Fig. 55）

壺形土器（１～７）

いずれも口縁部端を肥厚拡張させ、端面に凹線文を数条巡らす。１は、頸部にラセン状の沈線文を、頸部下端に連続刺突文を巡ぐらす。２には頸部に、６は頸部と肩部分に連点文が巡る。

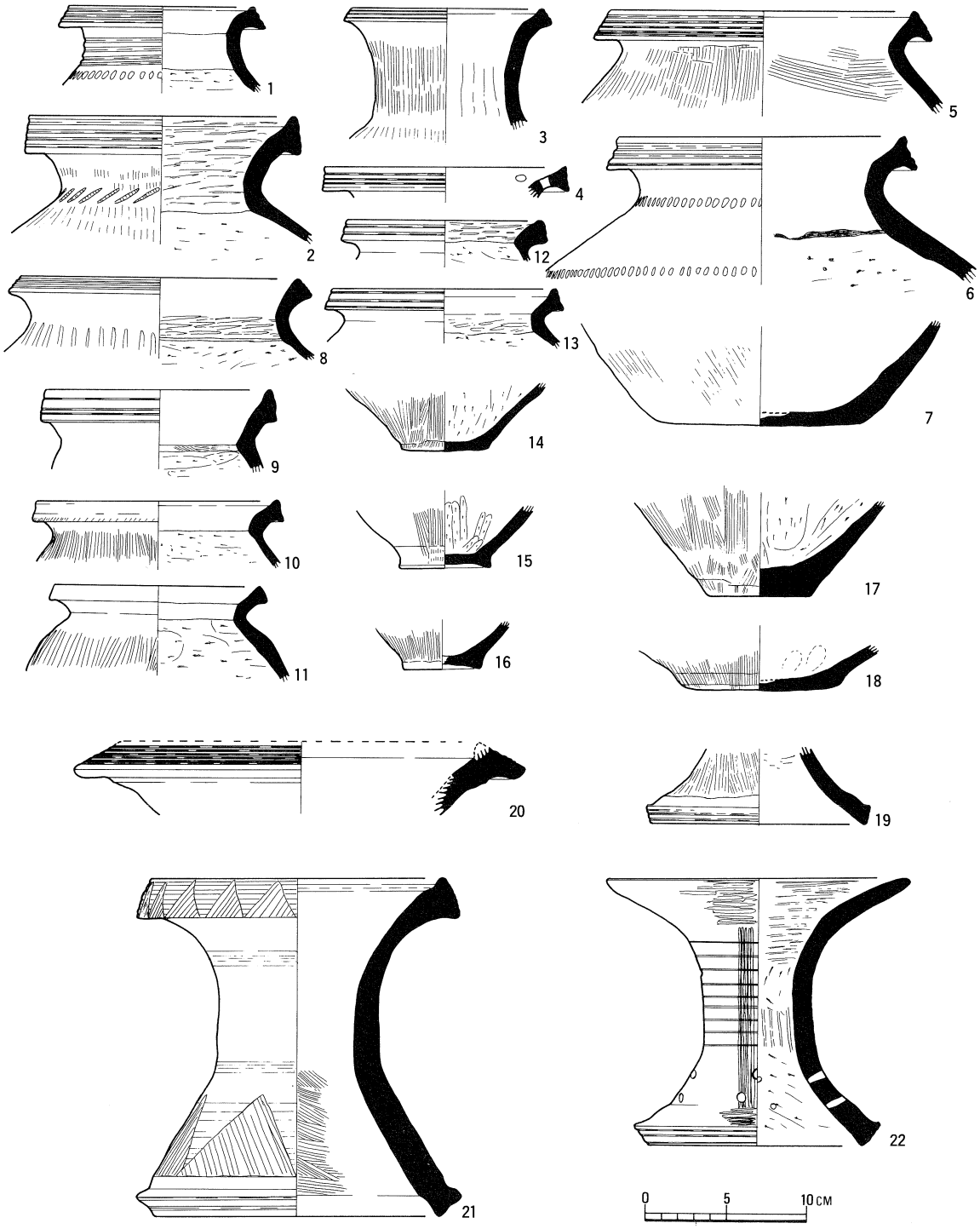


Fig.55　袋状貯蔵穴E７号出土の土器（1/4）

口縁部分は概ねヨコナデ仕上げとみられるが、２の内面にはヘラ磨き、５の肩部内面には刷毛のあとが残されている。長手の頸をもつ３の内面には、絞り痕が認められる。底部片７は、外面刷毛調整のあとナデ消されており、内面もヘラ削りのあと丁寧にナデ仕上げされている。底面はナデにより平滑に仕上げられている。

甕形土器（８～18）

いずれも口縁端部をやや肥厚させ拡張をみせる。端面に凹線文を巡らすもの（８、12、13）、沈線を巡らすもの（９）、無文のもの（10、11）がある。胴外面は刷毛仕上げを主とするが、８はタテ方向のヘラ磨き痕を残している。底部は、やや上げ底風のもの（15、16）、平底のもの（14、17、18）があり、外面はタテ方向の刷毛目仕上げ、内面にヘラ削り痕を残す。16には、焼成後の穿孔があり、甑底部とみられる。９、10、13、14、16にススの付着が認められる。

高坏形土器（19）

ハの字に開く脚端部は肥厚し、端面にかすかに凹線文を三条巡ぐらしている。外面は、タテ方向の刷毛目、内面はヘラ削りのあとヨコナデを加えている。

器台形土器（20～22）

20は、小片からの復元で器形は不明であるが、残存部は口縁端をナナメ下方に突出させ、外面に凹線文を数条巡らしている。21は、口縁端部を肥厚させ端面に７条の沈線を巡らし、鋸歯文が一巡する。胴部にも数条の沈線が巡り、脚部に鋸歯文が配される。脚端はヨコナデ仕上げ、内面脚部に目の荒い刷毛目痕をとどめている。22は、ラッパ状に口縁部が開き、端部を丸くおさめている。脚端部は肥厚拡張され、端面に三条の沈線が巡る。胴部に９条の沈線が一巡し、４孔の小穴が穿たれていたらしい。脚部に３孔一単位で４単位の飾穴が巡ぐる。外面及び内面上半ヘラ磨きで、筒部に絞り痕があり、脚部内面はヘラの削り放なしである。

袋状貯蔵穴Ｅ22出土の土器（PE.22　Fig56）

壺形土器（１～４）

１は、タタキ成形による壺形土器で肩部と底部にわずかにタタキ目痕を残す他は刷毛で消されている。内面は、ヘラ削りのあとさらに刷毛調整が加えられている。２、３は、いわゆる二重口縁の口縁部片で、３は内外面に丹彩痕跡がある。いずれもヨコナデ仕上げされており、胴部内面はヘラ削りと思われる。４は、くの字形口縁の壺で、口縁部内外面ヨコナデ胴外面はタテの刷毛目痕を残し内面はヘラ削りである。

甕形土器（６～10）

６は、くの字口縁の口縁部片で、口縁部端にくせをもつ。口縁部内外面ヨコナデ、外面肩部にわずかに刷毛目痕をとどめる。胴部内面はヘラ削りである。５、７～９は、二重口縁を呈し、７胴部に櫛描波状文及び直線文が巡る他、外面は概ね刷毛仕上げで、内面はいずれもヘラ削りである。９は、底部を欠くが、残存部分からみて丸底土器とみられ、10は尖底ぎみの丸底土器で、

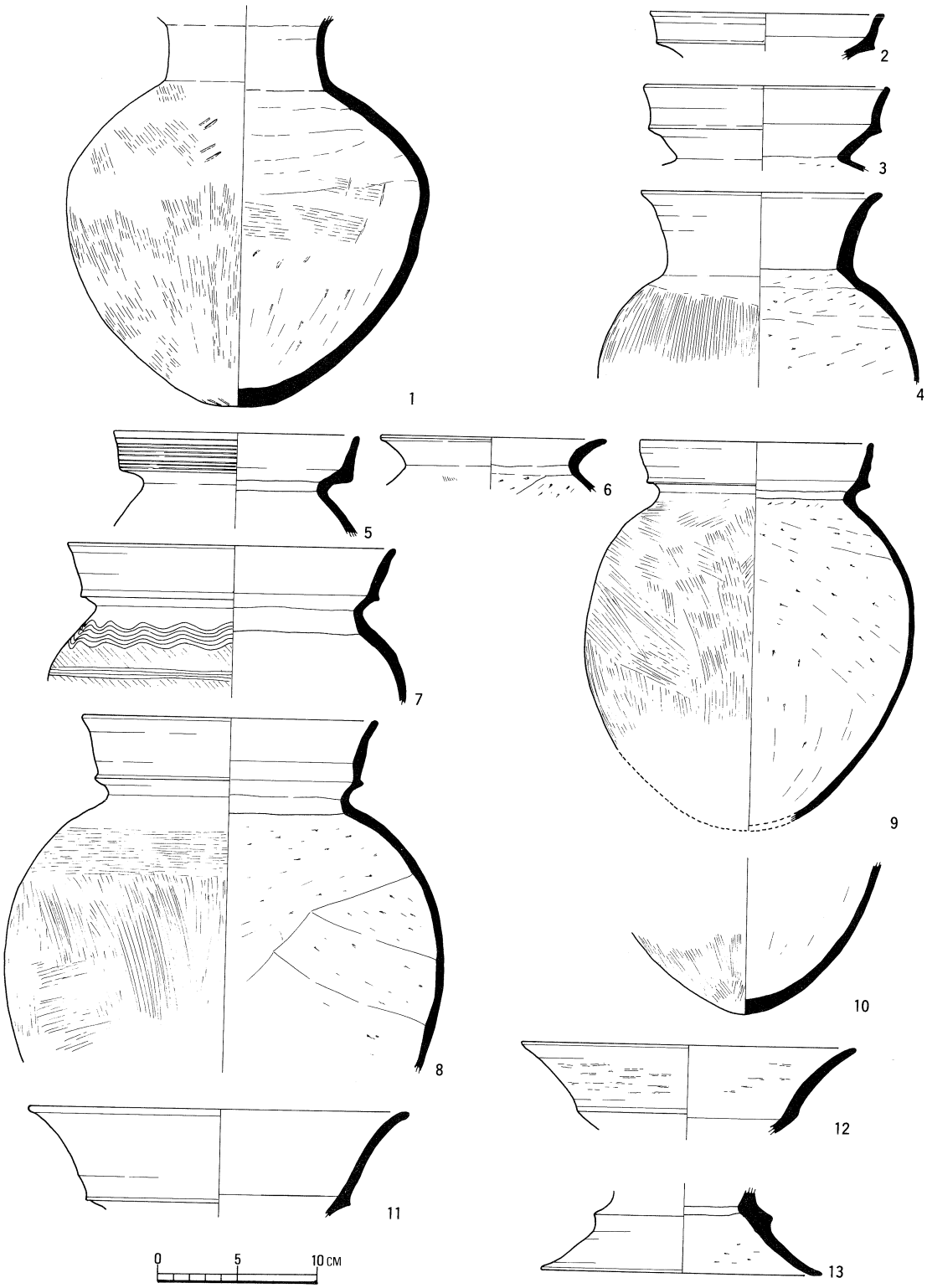
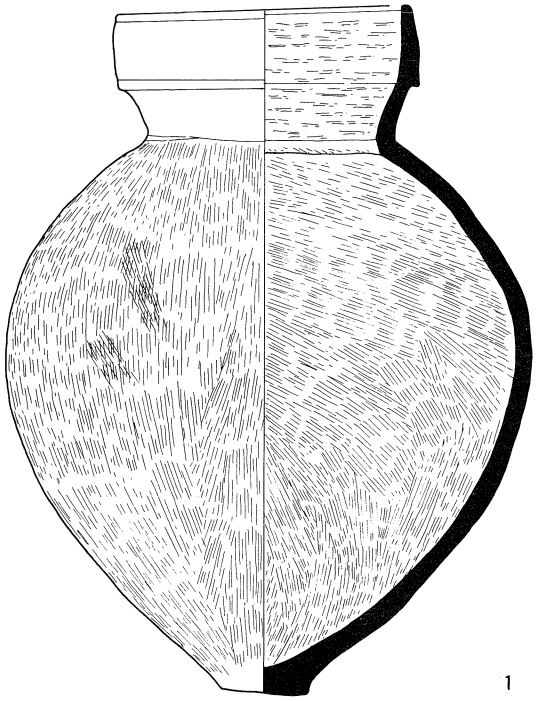
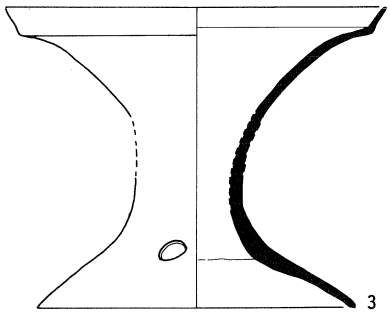
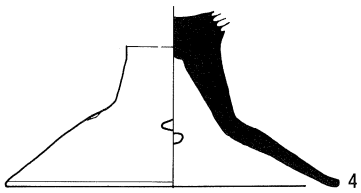
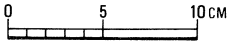


Fig.56　袋状貯蔵穴E22号出土の土器（1/4）









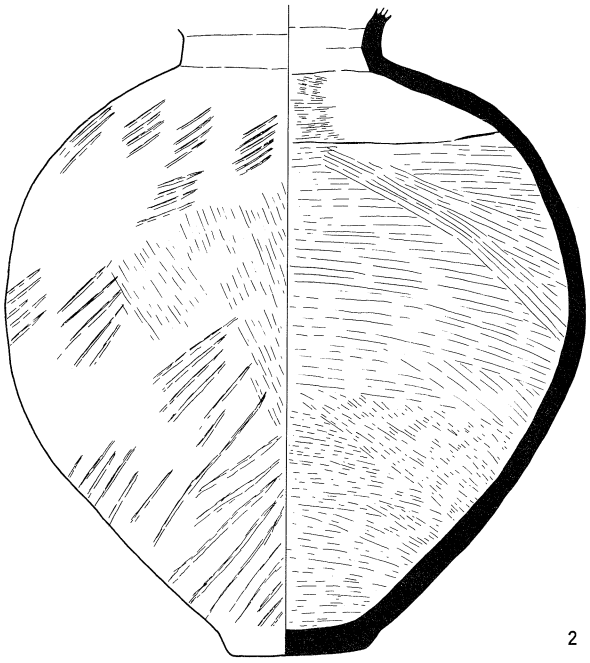


Fig.57　袋状貯蔵穴E24号、E25号、E26号出土の土器（1/4）

外面刷毛内面ヘラ削りである。9、10にススの付着が著しい。

高坏形土器（12）

12は、内外面ともタテ刷毛のあとヨコ方向のヘラ磨きを加える。丹彩顕著。

鼓形器台（11、13）

11は、鼓形器台上半、13は鼓形器台下半片と思われるが、12は内外面とも剝離激しく調整は不明。13は、外面ヨコナデ、丹彩があり内面はヘラ削りである。

袋状貯蔵穴Ｅ25出土の土器

（PE.25　Fig.57）

壺形土器（１、２）

１は、やや内彎して立上がる

口縁部をもち、細身の胴部が輪台成形による突出底におさまる。外面には刷毛目痕を残す。口縁部外面はヨコナデ、内面にはヘラ磨きが加えられており、胴部内面も刷毛で丁寧に仕上げられている。タタキ成形によると思われるが、外面にタタキ痕はなく、胴下部に帯状にススが付着している。2も、輪台法による突出底部をもち、外面にタタキ痕を顕著に残し、雑な刷毛調整が加えられている。内面は刷毛調整により丁寧に仕上げられている。いずれも底面はナデ仕上げ。形態、胎土からみて、搬入品の可能性が強い。

袋状貯蔵穴E24出土の土器（PE.24　Fig.57）

器台形土器（3）

ラッパ状に開く口縁部端を折り返し、外反した立上がり部をつくり端部を丸くおさめる。脚部に3孔の穿孔が認められる。胎土、器形の点で特異で搬入品の可能性が強い。表面風化激しく調整不明である。

袋状貯蔵穴E26出土の土器（PE.26　Fig.57）

高坏形土器（4）

4は、ややハの字に開く筒部をもち、脚端部を丸くおさめる。脚部に4孔の穿孔がある。内外とも器壁の荒激しく調整不明である。

袋状貯蔵穴E29出土の土器（PE.29　Fig.58、59）

壺形土器（1～7、12）

2の口縁は、頸部からラッパ状に大きく開き、端部にクセをもつ。胴部は大きく張り出し、丸底を呈する。底部にタタキ痕を残す他外面は刷毛でタタキを消し、その上にさらにヘラ磨きが加えられている。胴内面にかすかにヘラ削り痕を残すが、その上を丁寧にナデ仕上げしている。外面胴部下半にススの付着が著しい。1、4～7、12は、二重口縁形の壺で、1は胴部外面及び口縁部内面にヘラ磨き、4は、頸部にラセン状の沈線をかすかにとどめ、頸部下端に刺突文をめぐらしている。5～7は、口縁部内外面ヨコナデ、外面にはタテ方向の刷毛目痕を残し、いずれも胴内面はヘラ削りである。12は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ、胴部にタテ方向のヘラ磨き痕をかすかに残し、内面はヘラ削りである。

高坏形土器（9～11）

10は、内外面とも丹彩があり、外面筒部はヨコのヘラ磨き、脚部はナナメのヘラ磨き、脚部に4孔の飾穴がある。坏部内面もヘラ磨きが加えられている。11は、筒部が中実の他10とほぼその特徴を同じくするが、器壁の荒が激しく調整不明である。

鉢形土器（15～17）

いずれも二重口縁を呈する鉢で、16は外面にタテ方向の刷毛を加え、さらにヨコ方向のヘラ磨き仕上げをおこなっている。15は外面タテ方向の刷毛。17は、口縁部外面及び内面に赤色粘土がかけられている。

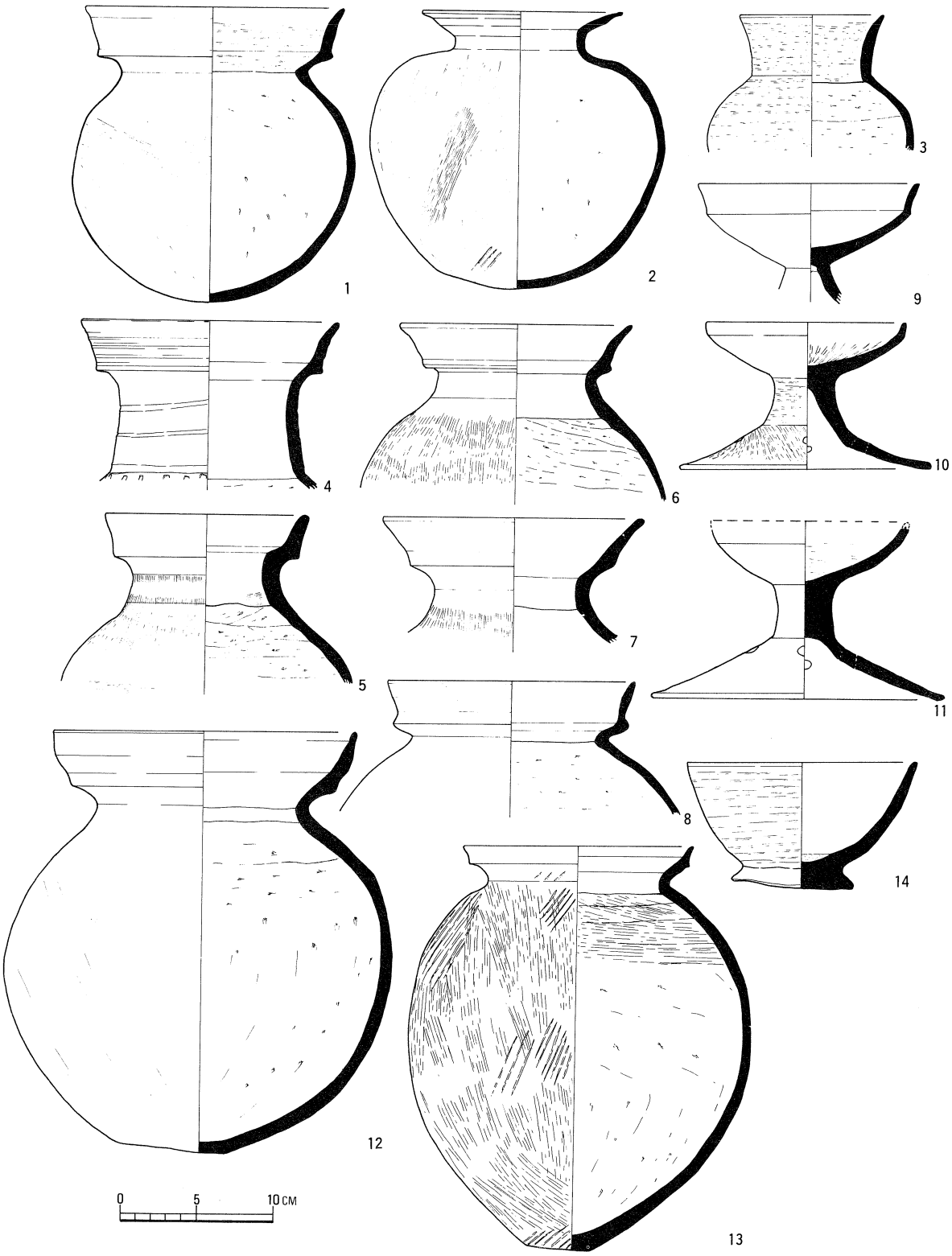


Fig.58　袋状貯蔵穴E29号出土の土器（1/4）

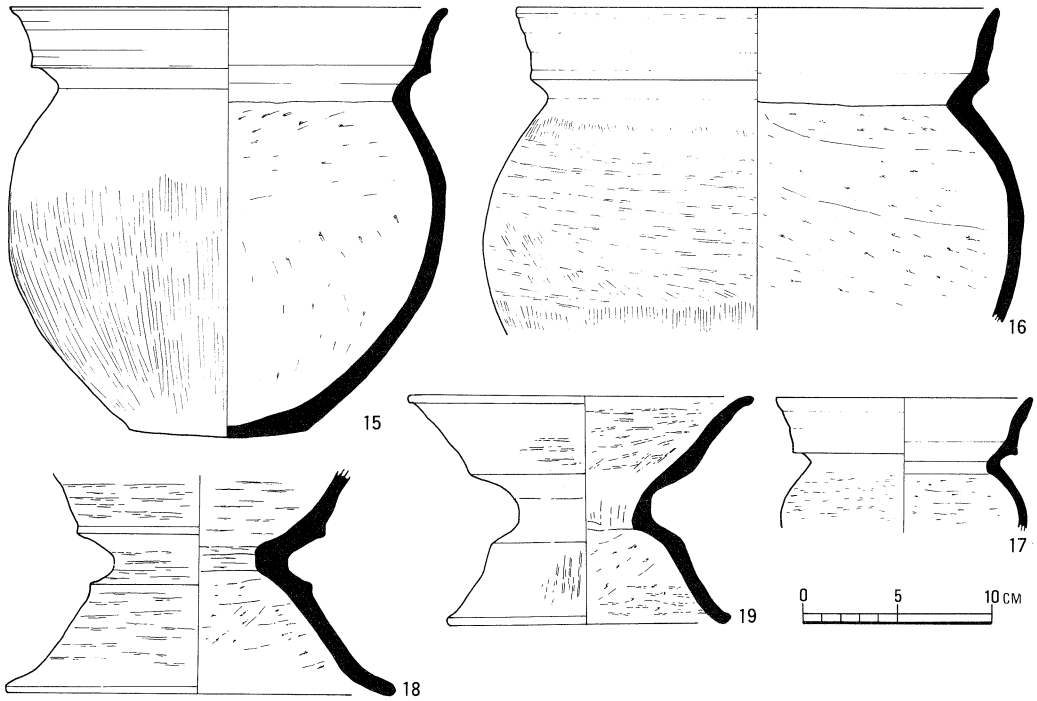


Fig.59　袋状貯蔵穴E29号出土の土器（1/4）

鼓形土器（18、19）

18は、立上がり部内外面ヨコ方向のヘラ磨き、くびれ部上半はヨコナデで、くびれ部下半から脚部外面にかけヨコヘラ磨き、脚内面はヘラの削り放なしである。内外面とも丹彩されている。19は、立上がり部内外面ヨコ方向のヘラ磨き、くびれ部外面はヨコナデ、内面に絞り痕を残す。脚外面には部分的にタテ方向のヘラ磨き痕を残し、内面は、ヘラ削りのあと雑にヘラ磨きが加えられている。

袋状貯蔵穴Ｅ30出土の土器（PE.30　　Fig.60）

壺形土器（１～２）

二重口縁を呈する土器で、口縁部内外はヨコナデ仕上げ、１は大きく外反する立上がり部をもつ。１は口縁部端を丸くおさめ、２は平担に仕上げられている。

甕形土器（３～14）

11は、口縁部端をやや肥厚させ丸くおさめ、６はやや立上がりをみせる。７はほぼ直立の立上がり部をもち、８は外反傾向を示す。いずれも口縁部内外面はヨコナデ仕上げで、胴部内面にはヨコのヘラ削り痕をとどめている。５は、くの字口縁の粗製甕で、外面に荒いタタキ痕を残し、雑な刷毛目調整が加えられている。内面は、ヘラによる削り上げ痕をかすかに残しているが、砂粒の動きは顕著でない。３、４、９、10は、外反して立上がる口縁部をもち、角のあ

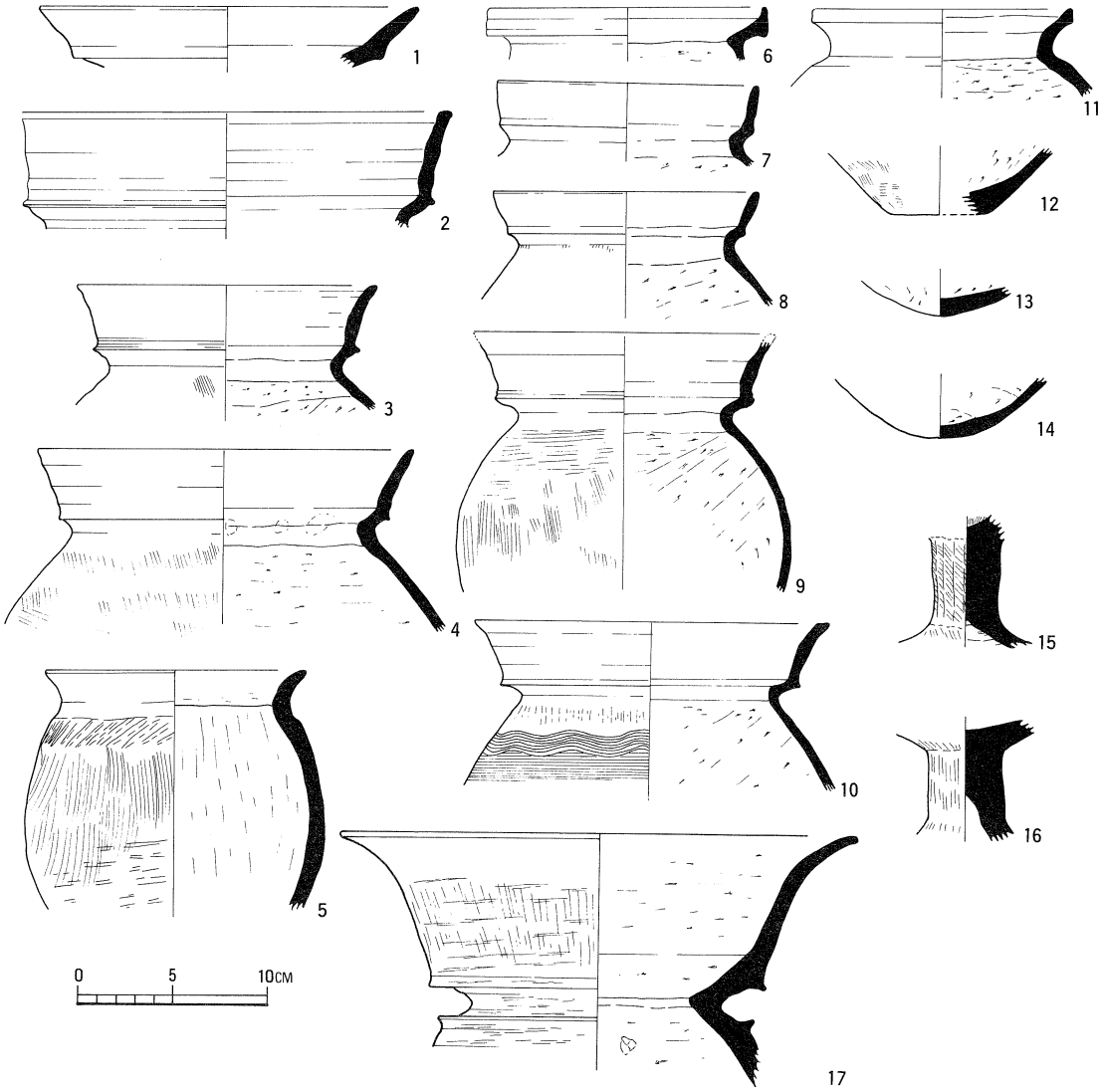


Fig.60　袋状貯蔵穴E30出土の土器（1/4）

るシャープなつくりを特色とする。10が肩に櫛状工具による波状文及び平行沈線文を巡らす他、胴部にはいずれも細い刷毛目痕をとどめている。胴部内面のヘラ削りは洗練されており、きわめてシャープで器壁は薄い。12～14は底部片で、外面に刷毛目痕を残し内面にはいずれもヘラ削り痕を残す。12は平底、13は丸底に属し、14はかすかに平底の痕跡を残している。5、9、14にススが付着しており、5は内面にもススの付着がみられる。

高坏形土器（15、16）

筒部資料であるが、いずれも中実で、15は外面タテ方向のヘラ削りのあとナナメの刷毛目調整が加えられている。16は丹彩顕著で刷毛目が残されている。

鼓形器台（17）

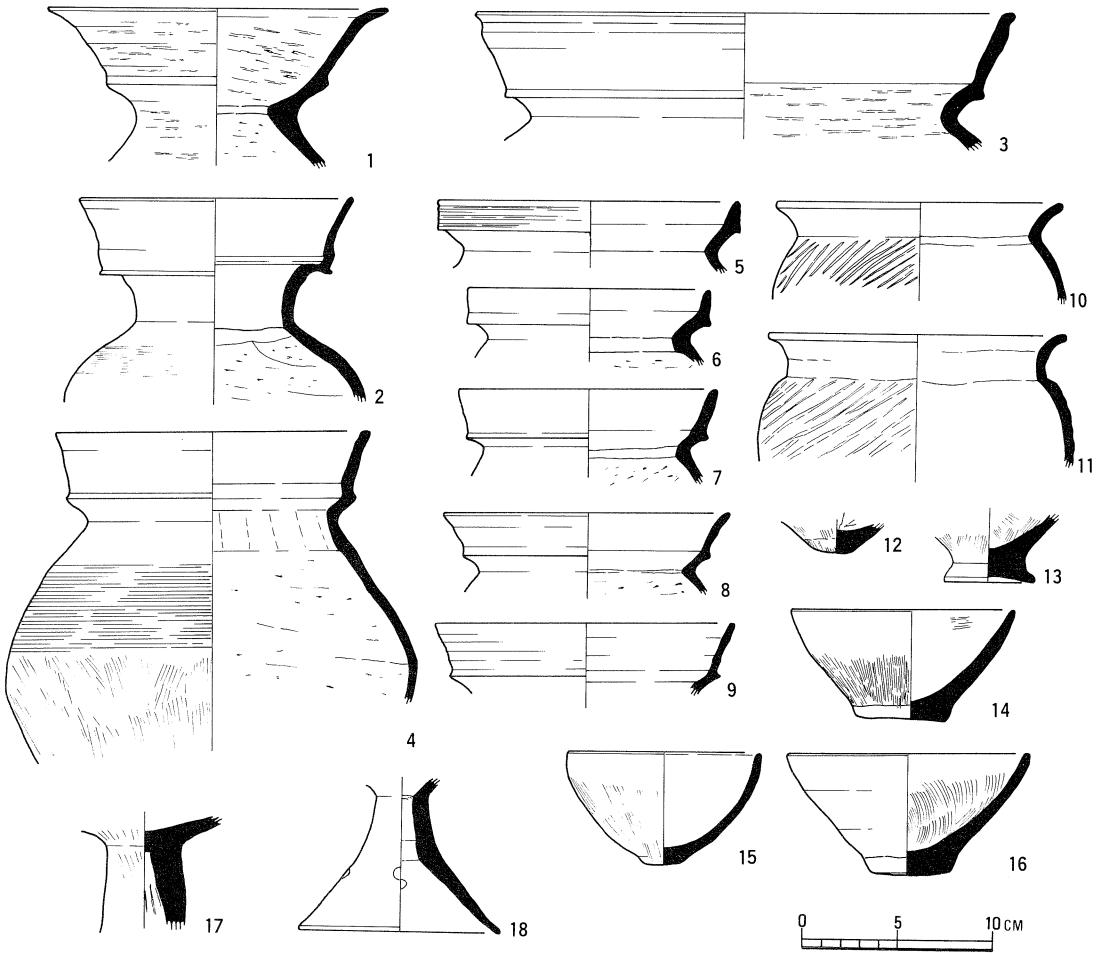


Fig.61　袋状貯蔵穴E38号出土の土器（1/4）

大形の鼓形器台で、外面は刷毛目調整のあとヨコ方向にヘラ磨きが加えられている。内面は、上下ともヘラ削り痕を顕著に残し、立上がり部内面は雑なヘラナデが加えられている。

袋状貯蔵穴Ｅ38出土の土器（PE.38　　Fig.61）

壺形土器（１、２）

１は、大きく外反する口縁部をもち、外面はヘラ磨き、内面口縁部にヘラ削り痕を残すが、さらにヘラ磨きが加えられている。胴部内面はヘラ削りで、外面及び内面口縁部に赤褐色の化粧土がかかっている。多くの点で鼓形器台に類似し、器台に転用された可能性もある。２は、口縁部及び頸部内外面ヨコナデで、胴部外面にヨコ方向の刷毛目痕をとどめている。胴部内面にはヘラ削り痕を残し、外面にススの付着が認められる。

甕形土器（３～12）

二重口縁のものとくの字口縁のものに基本的に二分できるが、二重口縁のものは、５のように立上がり部が低く、外面に凹線文を巡らすものから、４のように外反して高く立上がり、胴

部にヨコ方向の刷毛目痕を残すものまで幅がある。3、4は、口縁端を平におさめている。くの字形口縁の10、11は、胴部にいずれもタタキ痕を残し、胴部内面はナデ仕上げされている。12は、外面刷毛、内面底にクモの巣状の刷毛目痕が残されている。3、4、8、10にススの付着が認められる。

高坏形土器（17、18）

17の筒部は中空で、外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、丹彩されている。内面に絞り痕が認められる。18も中空の筒部をもつ高坏で脚部に4孔の穿孔があるが、器壁の荒が激しく調整不明である。

椀形土器及び小形鉢形土器（13～16）

13が、やや上げ底状の高台をもつ椀で他はいずれも平底の鉢、外面は16がナデ仕上げの他いずれも刷毛目痕を残す。内面は13、16に刷毛目が残る他ナデ仕上げである。

袋状貯蔵穴E41出土の土器（PE.41　Fig.62）

壺形土器（2）

2は、やや外反する立上がり部をもち、立上がり部には粘土帯状の3段の凹凸をもつ。胴部外面はタテ方向の刷毛目、内面はヘラ削り痕を残す。

甕形土器（1）

やや外彎する立上がり部をもち、細身の胴部をもつとみられる。外面及び口縁部内面はヨコナデ仕上げ。胴部内面はヘラ削りである。

袋状貯蔵穴E42出土の土器（PE.42　Fig.62）

高坏形土器（3）

3は、浅い坏下段が外彎して大きく立上がる長脚の高坏で、内外面ともに丹彩があり、丹彩部分はヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。筒部内面に刷毛目痕を残し、下半に指ナデと思われる凹凸がある。坏中央に剝離痕があり、粘土板がはがれたものとみえる。

袋状貯蔵穴E43出土の土器（PE.43　Fig.62）

壺形土器（4）

4は、やや外反する高い立上がり部をもち、ややハの字開きの頸部をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はタテ方向の刷毛調整、内面にヨコ方向の刷毛目を残している。胴内面はヘラ削りである。

袋状貯蔵穴E45出土の土器（PE.45　Fig.62）

壺形土器（10）

10は、やや上げ底風の小さな底部が大きく開いて立上がる。外面にかすかにタタキ目を残し、その上にヘラ磨きが加えられている。内面は、刷毛仕上げである。

甕形土器（6～9）

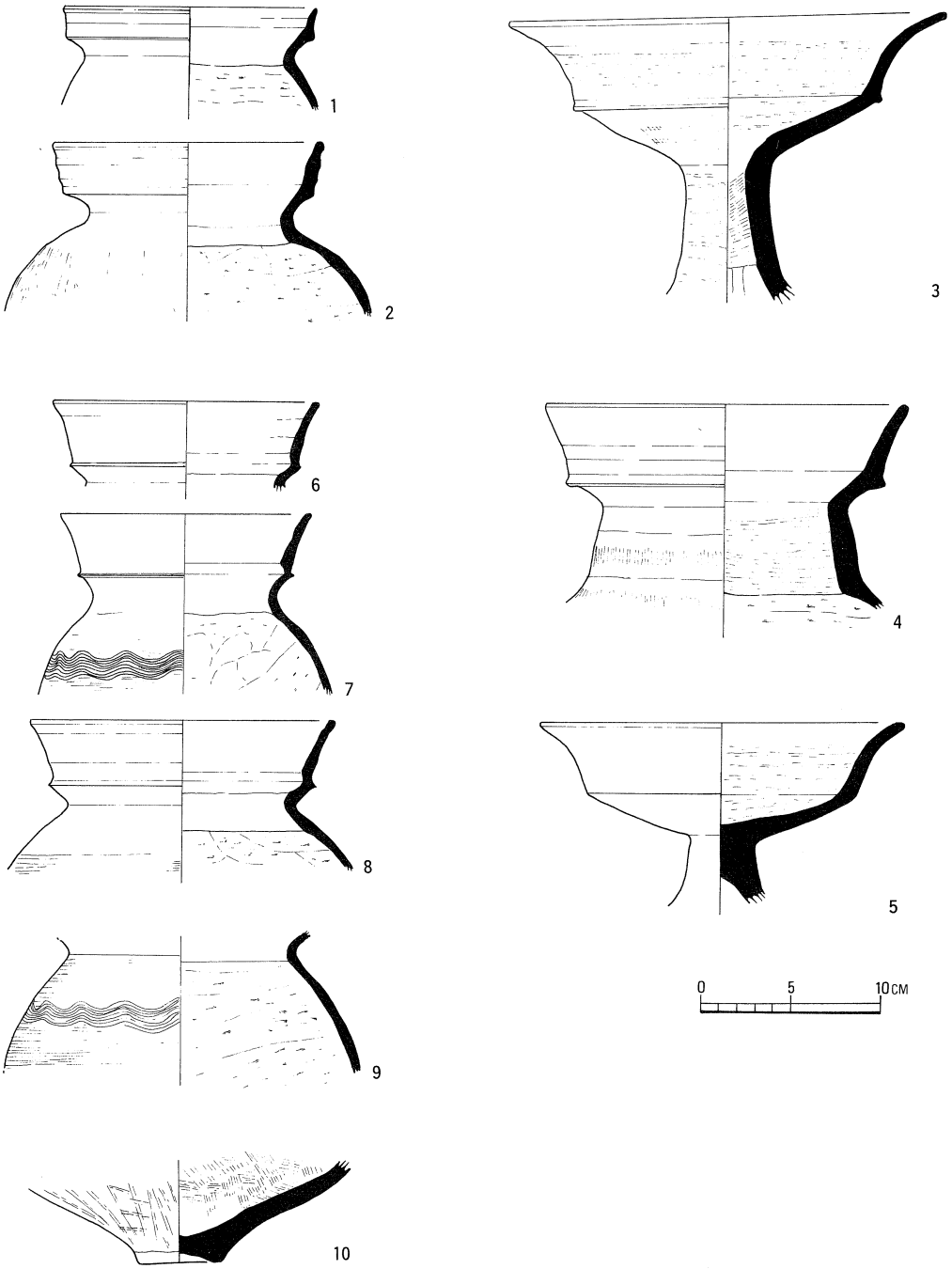


Fig.62　袋状貯蔵穴E41号、E42号、E43号、E45号、E46号出土の土器（1/4）

6～8は、口縁を高く立上がらせ、シャープに仕上げられている。7、9は、胴部に櫛描波状文を伴う他、肩から胴部にかけ、ヨコ方向の刷毛目痕が顕著である。胴部内面はヘラ削りが加えられ、ヘラ削り痕はシャープで、器壁は薄い。

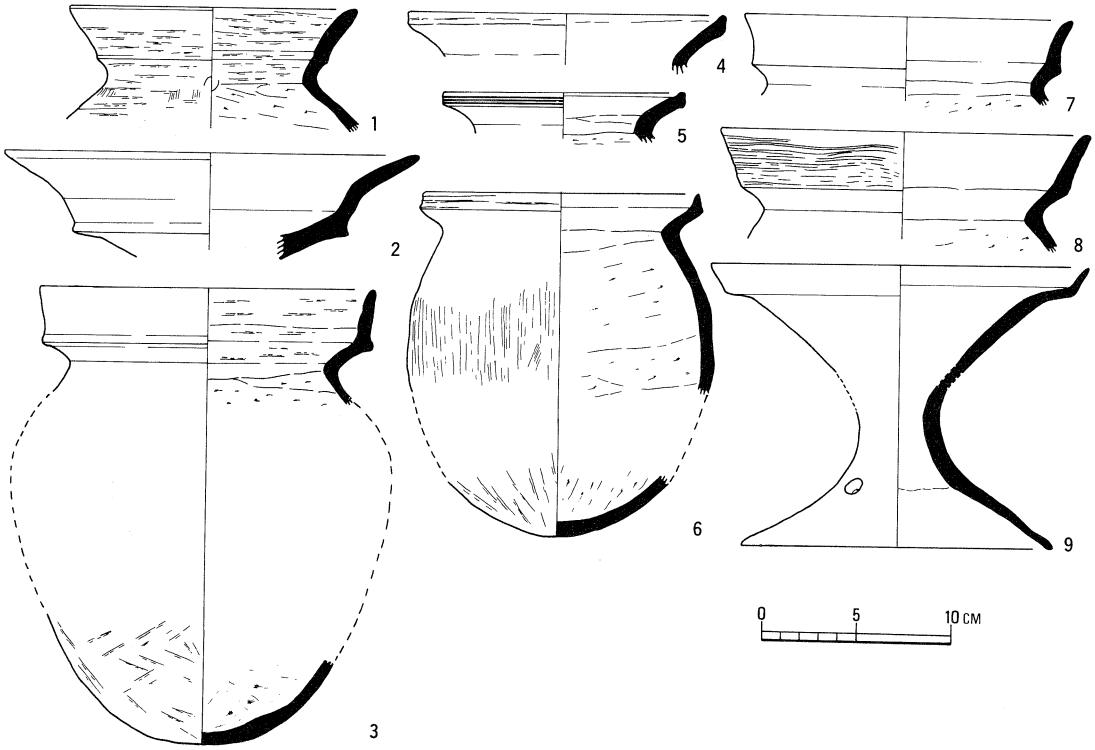


Fig.63　袋状貯蔵穴E50出土の土器（1/4）

袋状貯蔵穴Ｅ46出土の土器（PE.46　　Fig.62）

高坏形土器（５）

ハの字開きの筒部に、浅い坏下段がのり、やや外反ぎみに高く立上がる。外面に、丹彩痕跡がかすかに認められる。坏部内面にはヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。

袋状貯蔵穴Ｅ50出土の土器（PE. 50　　Fig.63）

壺形土器（１～５）

１口縁は、頸部から直線上に立上がり部に至り、屈曲は痕跡的に残すのみである。内外面ともヘラ磨きが顕著で、外面頸部下半に刷毛目をとどめている。頸部に２孔が穿孔されている。胴内面はヘラ削りである。２は小片で、壺か否かは判別困難であるが一応壺と分類した。大きく外反し立上がる口縁部をもつ。内面には丹彩がかすかに残るが、剝離激しく調整不明。３は、二重口縁を呈し、口縁部内面にヘラ磨きが加えられている。底部は丸底化しており、不定方向の雑なヘラ磨きが加えられている。４、５は、くの字形の口縁部をもち、端部を肥厚させ、５には端面に三条の凹線文が一巡する。

甕形土器（６～８）

６は、口縁端部をやや肥厚拡張させる細身の丸底甕で、胴部外面に刷毛を残し、底部にタテ方向のヘラ磨き痕を残す。胴部内面はヘラ削りである。７、８は、二重口縁の甕形土器で、外

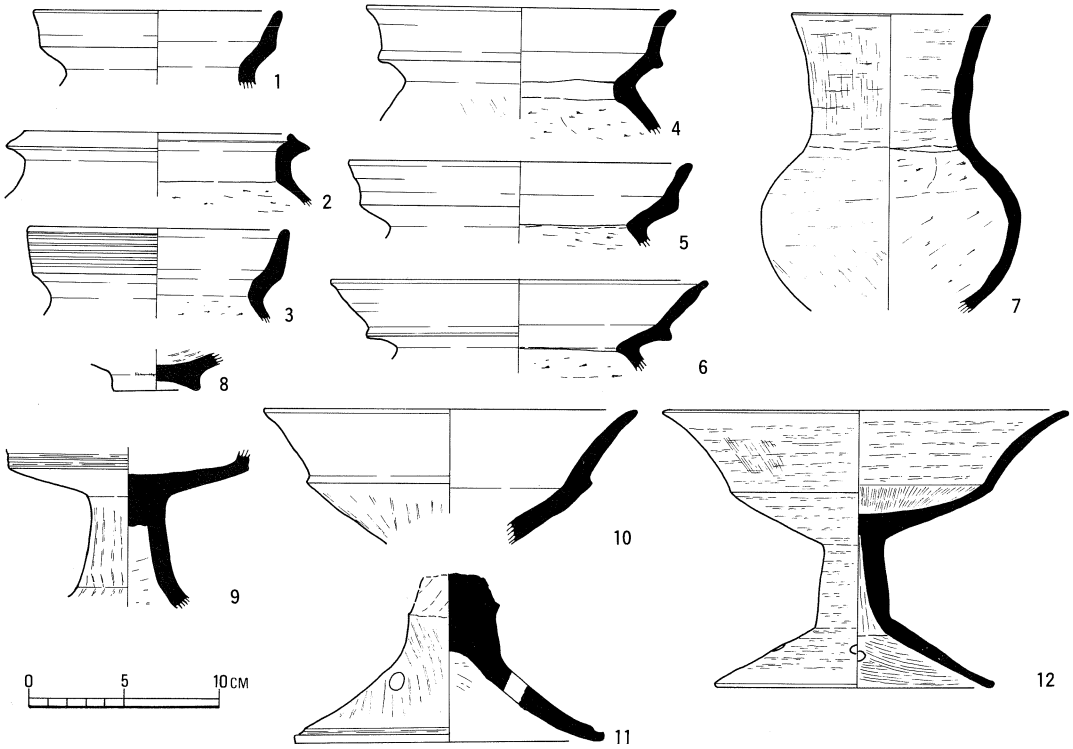


Fig.64　袋状貯蔵穴E52号出土の土器（1/4）

反傾向を有する立上がり部をもつ８は、外面に雑な櫛描平行沈線文が付けられている。６底部は、２次的火を受けたための赤化現象が顕著である。

器台形土器（９）

ＰＥ24出土の器台とほぼ特徴を同じくし、胎土も類似していて搬入品である可能性が強い。

袋状貯蔵穴Ｅ52出土の土器（PE.52　　Fig.64）

壺形土器（１、７）

１は、つまみ上げた丸みのある立上がり部をもち、内外面ともヨコナデ仕上げ。７は、直口壺で、口縁部外面はタテ方向の刷毛のあとヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。胴部上半は、ヨコ方向のヘラ磨き、下半はナナメのヘラ磨きが加えられている。口縁部内面にもヘラ磨きが加えられ、頸部より下はヘラ削りである。

甕形土器（２～６）

２が、口縁端部をやや肥厚拡張させる他いずれも二重口縁を呈し、口縁部内外面は概ねヨコナデを基調とする。このうち６は、大きく外反しくせのある口縁をもつ他、３は外面に櫛状工具による平行沈線文を一巡させている。

高坏形土器（９～12）

９は、ハの字形に開く筒部に浅い坏部下段がのり、直立して立上がる立上がり部に凹線文を

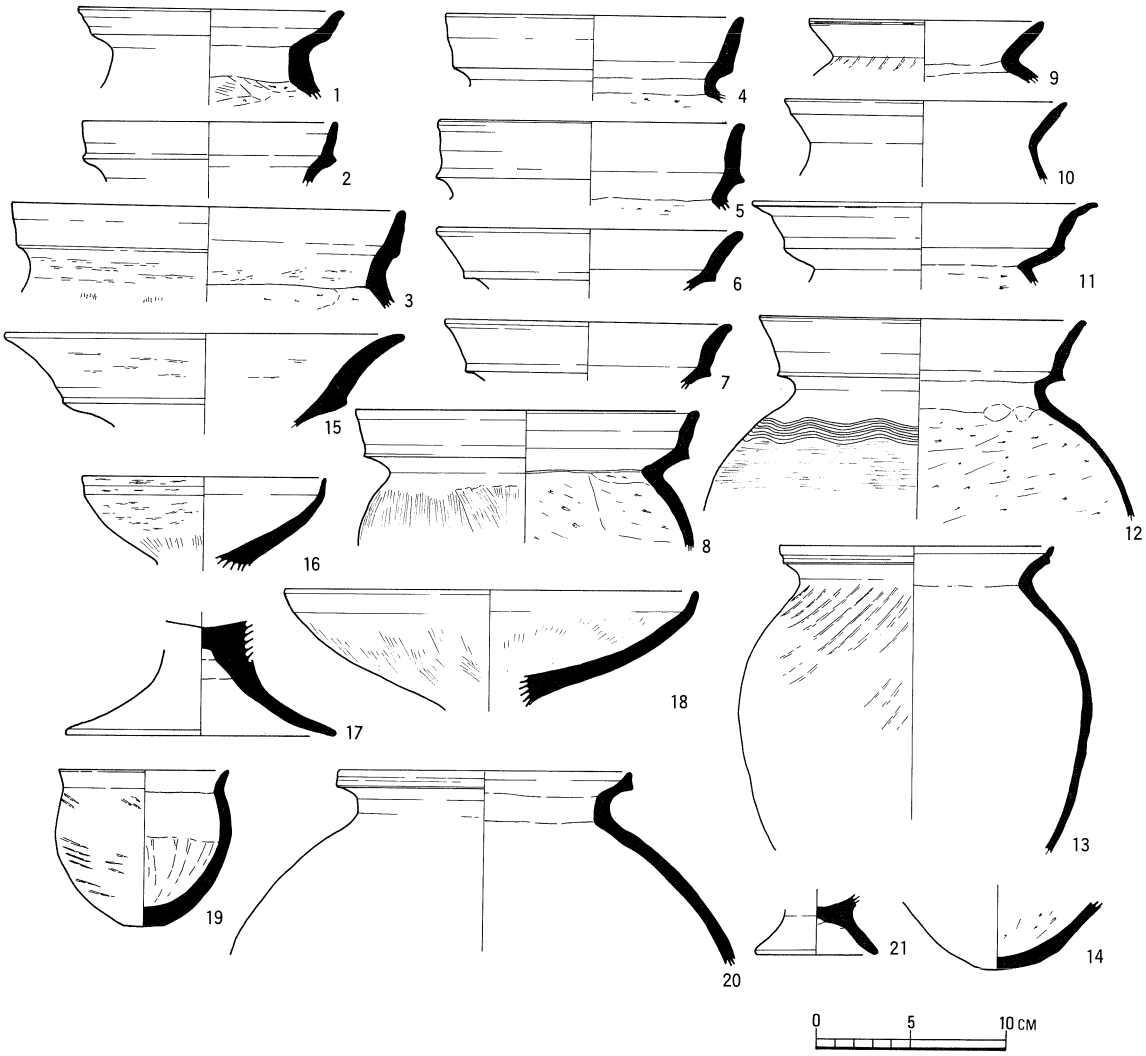


Fig.65　袋状貯蔵穴E53号出土の土器（1/4）

巡らしている。11も、筒から脚にかけてゆるやかに開き、坏部は屈曲部で段を残し立上がる。脚部には３孔の穿孔があったとみられ、脚端はクセのある段をもっている。12は、筒部と脚部が明確に分かれ、筒部内面には絞り痕が認められる。11、12には丹彩があり、外面はいずれもヘラ磨きが加えられている。11の坏内面はナデ仕上げで、12は刷毛目の上にヘラ磨きが加えられている。

鉢形土器（８）

上げ底風の底面はナデ仕上げされ、外面ナデで丹彩痕があり、内面にも丹彩があってさらにヘラ磨きが加えられている。

袋状貯蔵穴Ｅ53出土の土器（PE.53　　Fig.65）

壺形土器（１～３、15）

1、2は、低く立上がる二重口縁の土器で、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ。15は壺としてはやや異形であるが、内外面とも丹彩があり、ヨコ方向のヘラ磨き痕は顕著である。

甕形土器（4～14、20）

4～7は、二重口縁の甕口縁部で、内外面ヨコナデ。9、10は、くの字形の口縁部をもち、9はタタキ成形の痕跡を残すが、10は剝離激しく不明である。8、11、12は、シャープなつくりの口縁部を有する甕で、10は外面胴部にタテ方向の刷毛目を残し、11は櫛状工具による波状文及びヨコ方向の刷毛目痕をとどめている。いずれも、胴部内面はヘラ削りである。13は、口縁端部をつまみだし、胴外面にタタキ痕を残す。内面は剝離激しく不明瞭であるが、ナデ上げられているものと思われる。20は、口縁端部をやや肥厚させ、胴張りは強い。口縁部内外面ヨコナデ、胴内面はナデ仕上げとみられる。14は、底部片で内面にヘラ削り痕を残す。4、6、7、8、10、12、13にススの付着が認められる。

高坏形土器（16～18）

16、18は、丸く立上がる坏部端を折り曲げ立上がらせるクセをもつ。いずれも内外面に丹彩され、16はヘラ磨き、18は刷毛目をとどめている。

鉢形土器（19、21）

19は小形鉢で、外面タタキによる成形痕を残す。内面は下半ヘラの削り上げの他上半はナデ仕上げされている。21は、小形台付鉢の台部と思われる破片で、丹彩があり一部刷毛目が残されている。台内面は、ナデ仕上げである。

袋状貯蔵穴E55出土の土器（PE.55　Fig.66、67）

壺形土器（1～5）

1、2は、上層出土土器でそれぞれほぼ特徴を同じくする。いずれもやや長めの頸部をもち、口縁部はやや外彎ぎみに立上がる。頸部及び口縁部内外面はヨコナデ仕上げで、1は胴部外面の器壁の荒が激しく不明であるが、2は胴部外面に刷毛目を残し、内面はいずれもヘラ削りである。いずれもふきこぼれとみられるススの付着が著しい。3は丹彩土器で、内外面ともヨコ方向のヘラ磨きが顕著である。胴部内面はヘラ削りである。4は、大きく外反する立上がり部をもち、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面にタテ方向の刷毛目痕を残す。胴部内面はヘラ削りであるが、胴上部に至るまで削り上げられている。底部を欠くが平底土器とみて差しつかえない。胴部最大径はほぼ胴中位にある。5も丹彩土器で、口縁端は平たくおさめられている。口縁部内外面はヨコナデ、外面胴部は刷毛調整のあとヘラ磨きが加えられている。胴部内面はヘラ削りである。

甕形土器（6～9、12～18）

6～9は、二重口縁を呈する甕形土器で、口縁部内外はヨコナデ。7、8は、胴部外面にタテ方向の刷毛目痕を残し、胴部内面はヘラ削りである。9は、肩の部分にタタキ目を残してい

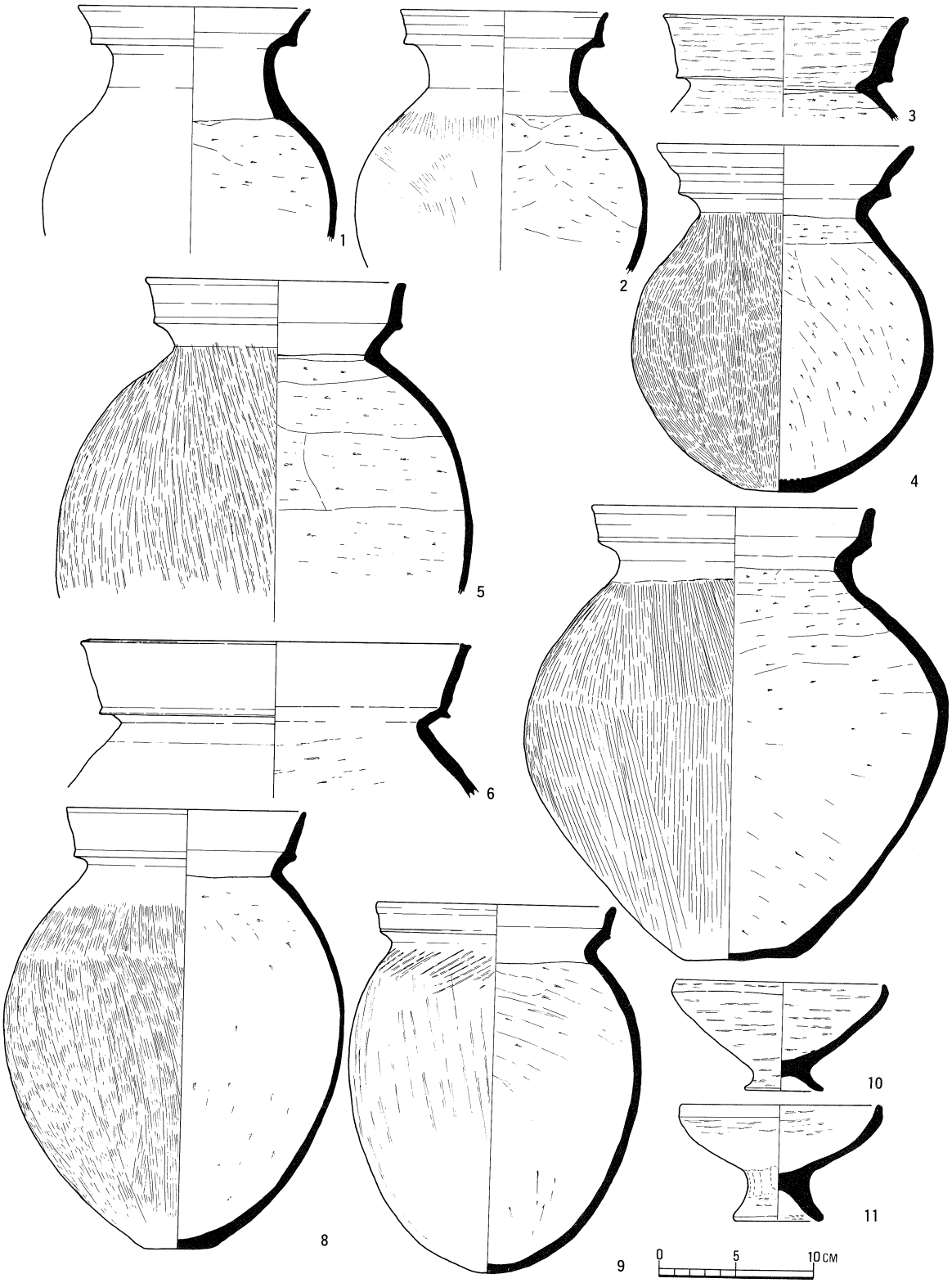


Fig.66　袋状貯蔵穴E55出土の土器（1/4）

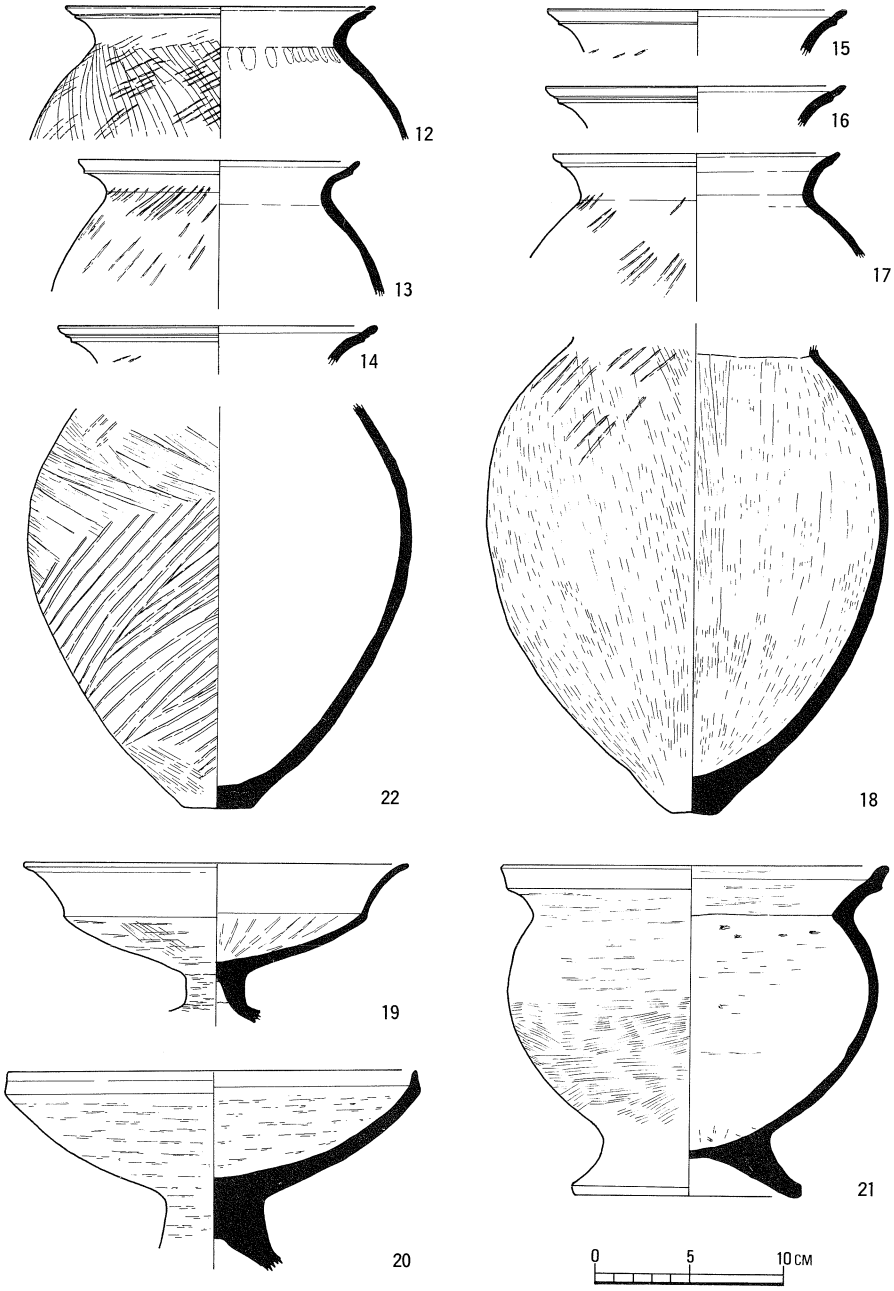


Fig.67　袋状貯蔵穴E55出土の土器（1/4）

る。胴部外面は、タタキ成形のあと細い条痕を残す刷毛調整が加えられている。胴部内面はヘラ削りである。底部は痕跡的に平底をとどめている。18、22は、口縁部を欠くが外面にタタキ目を残し刷毛が加えられている。18は内面に刷毛目を残し、部分的に指頭圧痕とみられる凹凸がある。輪台底で底面はナデ仕上げである。22内面はナデ仕上げ、木の葉底である。12～16はほぼ特徴を同じくする土器で、くの字形の口縁端部に小さな立上がりが認められる。胴外面に

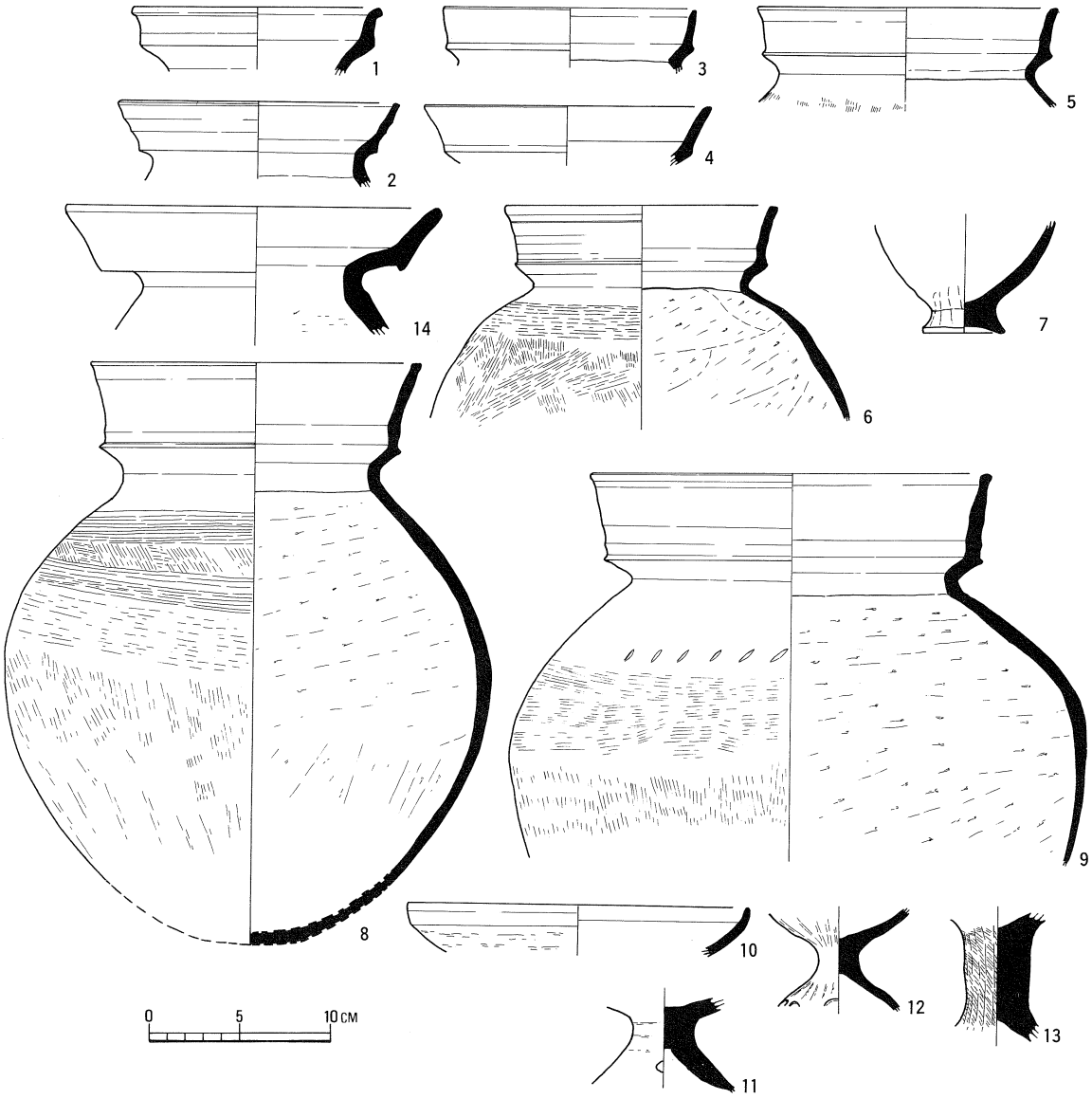


Fig.68　袋状貯蔵穴E60号出土の土器（1/4）

は、いずれもタタキ目痕を残し、12には刷毛調整が加えられている。内面はいずれもナデ仕上げ。7～9、12、16、18、22にススの付着が著しい。

高坏形土器（19、20）

19は、短脚高坏で坏下段内外及び筒部外面にヘラ磨きが加えられている。砂粒を含まぬ粘土で薄くつくられている。20は、比較的短いハの字形の筒部をもち、大きく開く坏部端に内傾する低い立ち上がり部を付けている。丹彩されヘラ磨きが加えられている。

椀形土器（10、11）

10は丹彩土器で、口縁端の内傾傾向が顕著である。内外面ともヨコ方向のヘラ磨きが加えられ一部黒斑が認められる。11は背の高い高台部をもつ丹彩土器で、内外ともヨコ方向のヘラ磨きをともなう。筒部に成形時の指頭圧痕を残している。

鉢形土器（21）

低く立上がる口縁をもつ台付鉢で、胴部上半及び口縁部内面にヘラ磨きが加えられている。外面胴下半に細い刷毛目痕を残し胴内面はヘラ削りであるが下半にヘラ磨きが加えられている。

袋状貯蔵穴Ｅ60出土の土器（PE.60　　Fig.68）

壺形土器（１～２、８、14）

いずれも二重口縁を呈する壺形土器で、14は割れ口からみて器台に転用された可能性が強い。８は、大きく立上がる口縁をもち、口縁部のつくりは角がありシャープで立上がり端部は平たくおさめられている。肩部分に平行沈線文が二単位一巡し、胴部全面にきわめて目の細い刷毛目痕が残されている。胴部内面はヘラ削りで、ヘラ削り痕はきわめてシャープである。胴下半には、ヘラ削りのあとさらに雑にヘラ磨きが加えられている。

甕形土器（３～６）

いずれも二重口縁の甕形土器で、口縁内外面はヨコナデ仕上げである。６は、肩部分外面に横方向の刷毛目痕を残し以下方向のみだれた刷毛目が加えられている。胴部内面はシャープなヘラ削りで、器壁は全般に薄く仕上げられている。

高坏形土器（10～13）

10は、高坏々部片とみられ、坏端部をやや折りまげ立上がらせている。内外面とも丹彩をともない立ち上がり部はヨコナデの他ヘラ磨きが加えられている。13の筒部はヘラ削りのあとナナメ方向に刷毛目調整されている。

鉢形土器（９）

ほぼ直立する口縁部をもつ鉢形土器で、口縁部内外面はヨコナデ、肩部分に列点文をともなうが一巡していない。列点文以下胴中位にかけヨコ方向の刷毛目が残され、下半はタテ方向の刷毛仕上げである。胴部内面は、ヨコ方向のヘラ削りで全般に赤く焼き上げられている。

椀形土器（７）

高台部に指頭圧痕とみられる凹凸があるが、器壁の荒れが激しく詳細はほとんど不明である。

袋状貯蔵穴Ｅ61出土の土器（PE.61　　Fig.69）

甕形土器（１～４）

１、２は二重口縁土器で、口縁部のつくりはシャープである。内外ともヨコナデ仕上げ。３は、東海地方のＳ字口縁をおもわす立上がり部をもち、球形の胴外面にはタテ方向の刷毛目、内面にはヘラ削り痕をとどめる。４は、くの字形口縁の甕で、口縁端をわずかに上方につまみだしている。外面にはかすかに刷毛目痕をとどめているが剝離激しく調整不明である。内面は

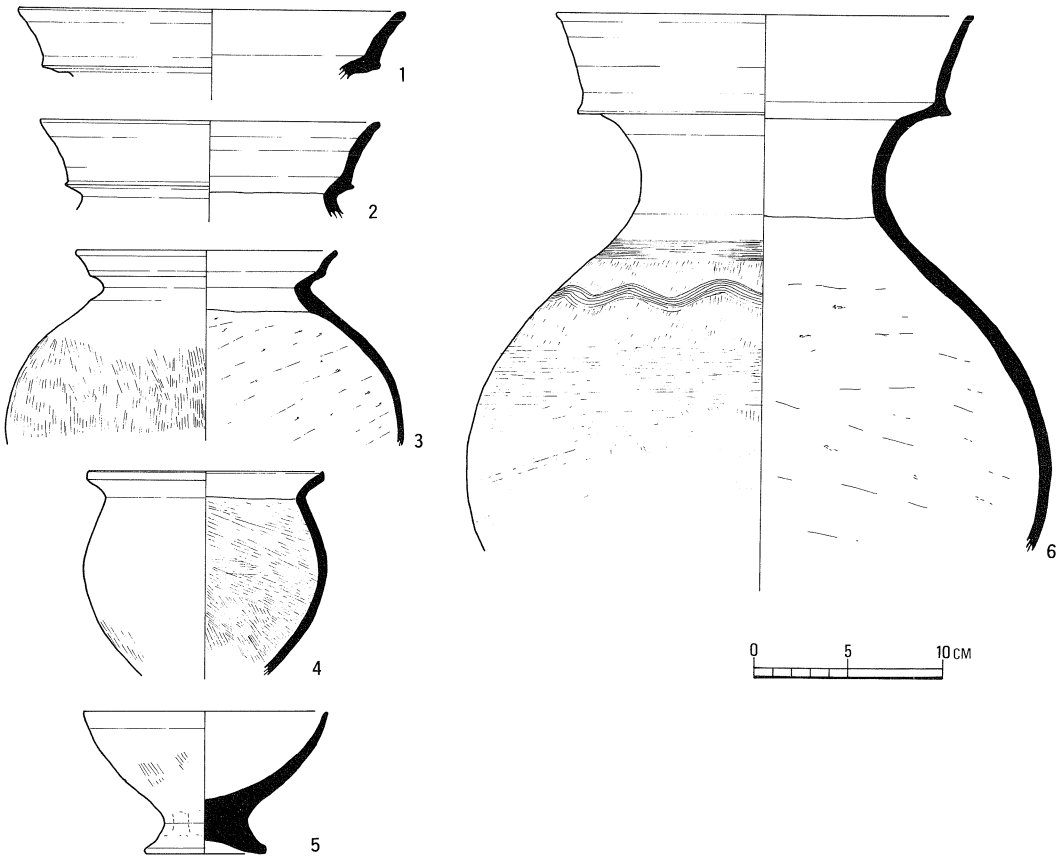


Fig.69　袋状貯蔵穴E61、E62出土の土器（1/4）

刷毛仕上げである。

椀形土器（5）

外面にかすかに刷毛目痕を残す他、全般に剝離激しく調整不明である。

袋状貯蔵穴E62出土の土器（PE.62　　Fig.69）

壺形土器（1）

明白な頸部をもつ二重口縁の壺形土器で、口縁部はシャープに仕上げられている。口縁部及び頸部内外面はヨコナデ仕上げ、外面肩部分には櫛状工具による波状文が巡らされている。胴部上半は、ヨコ及びタテ方向の刷毛目が残され、胴下半は不定方向の刷毛目が走っている。胴部内面にはヘラ削りが加えられている。

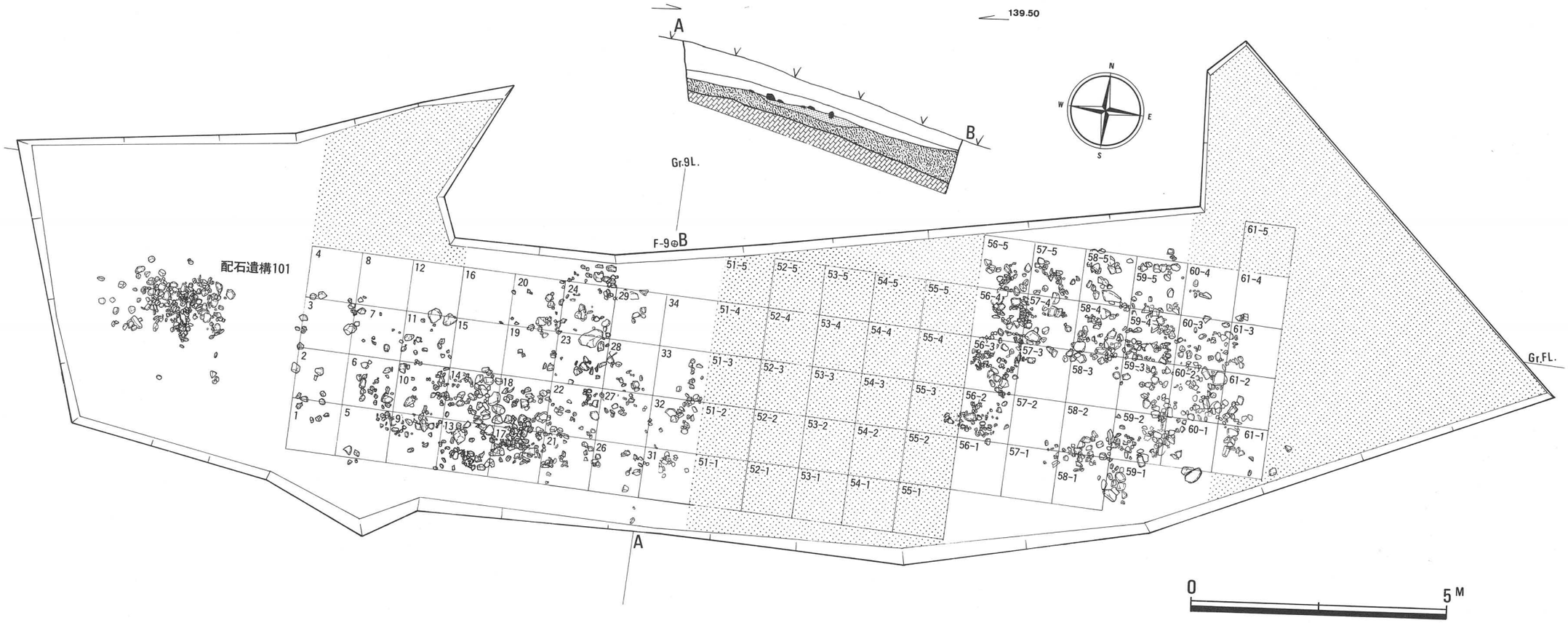


Fig.70　配石遺構平面図（1/100）

3. 配石遺構

西丘陵北西斜面の中位やや傾斜が緩かとなった部分で、トレンチ調査の際黒色土上面に大小の山石と弥生式土器片多数の散布することが知られた。この部分の約30m×7mの範囲を掘り下げたところ、配石遺構とみられる集石群が発見された。山石の大きさは、人頭大のものから拳大のものまであり、この中には砥石として使用されたとみられるものもあった。

集石は、東西二群に大まかに分かれ、各群はそれぞれ直径5～6mの環状を呈するようにみえる。また詳細に見ると、各群中に直径1m内外の円形小集石群が認められる。

墓の可能性も考えられたので、集石群下部を断ち切ったけれど墓壙とみられる落ち込みを確認することはできなかった。ただし集石以下に黒色土の厚い堆積があり、墓壙が黒色土下の淡褐色自然層に達さない浅いものであった場合、黒色土が再堆積し落ち込みが確認できなかった可能性もある。

出土土器は、概ね2期から5期にわたり日常土器としてあらわれた器種のほぼすべてが出土しており、高坏形土器、器台等が眼につくが、同時期の墓地で広くみられる葬送用土器小片1点を除いて墓地特有の土器の出土をみていない。

発掘区西隅で、2m×1.5mの範囲に特に石が密集し数重につみ重なっている集石があった(配石遺構101)。上層の石を取り除くと石棒1本と鼓形器台片3個体(Fig.75-9.10.11)が長方形の角を構成するような配置で発見された。さらに石を取り除くと最下部で完形椀形土器(Fig.75-8)がふせられ出土した。

これら各遺物相互の発見状況は、単なる偶然とはみられず、そこでとりおこなわれたであろう祭祀における使用状況をある程度反映したあり方をしているものと思われる。

配石遺構101について断ち割りをおこなった結果、これについては下部の落ち込みを示すとみられる不明瞭な線が断面に観察された。

配石遺構出土の土器(Fig.73、74)

壺形土器(1～12)

1は、口縁端を肥厚拡張させ内外面とも概ねヨコナデ仕上げである。口縁部外面にかすかに沈線文風の横線が認められるが剝離激しく明瞭でない。2は、やや長手の内彎する頸部がなだらかに口縁部に移り、口縁を上方に立上がらせている。内外面ヨコナデ仕上げで胴部内面はヘラ削りが加えられている。3は2と類した形態を呈し、口縁部内外面、頸部内面はヨコナデ、頸部外面にはヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。4、5は、二重口縁を呈する小型の壺形土器で、内外面ヨコナデ仕上げである。6は、やや長手の首をもつ壺形土器で、外面は頸部から胴部にタテ方向の刷毛を加え、頸部に5条の沈線文を一巡させている。内面はナデ仕上げされており、胴部にかすかにヘラ削り痕が残されている。7、8は、二重口縁を呈する大形壺形

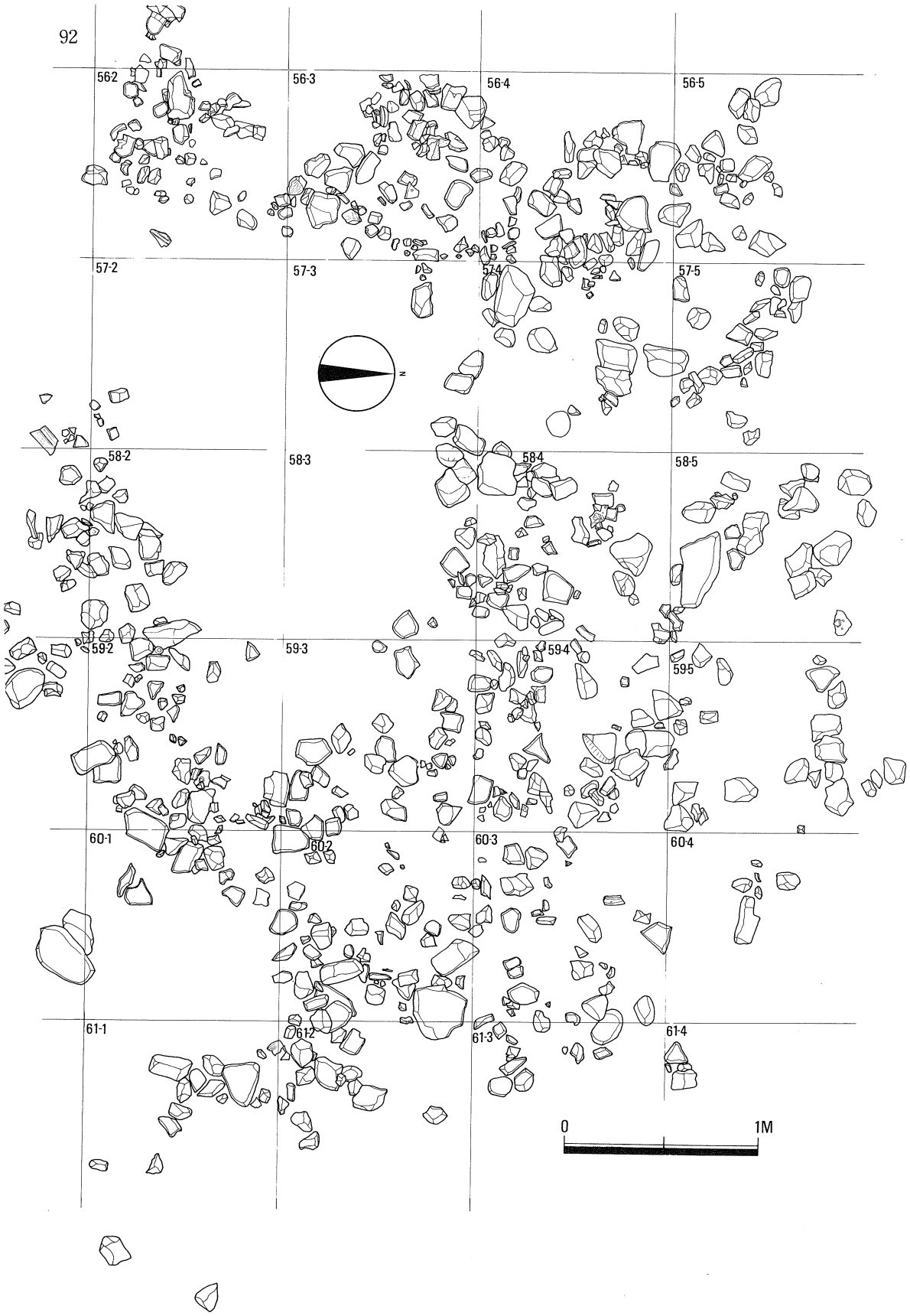


Fig.71　配石遺構東群配石状況図（1/30）

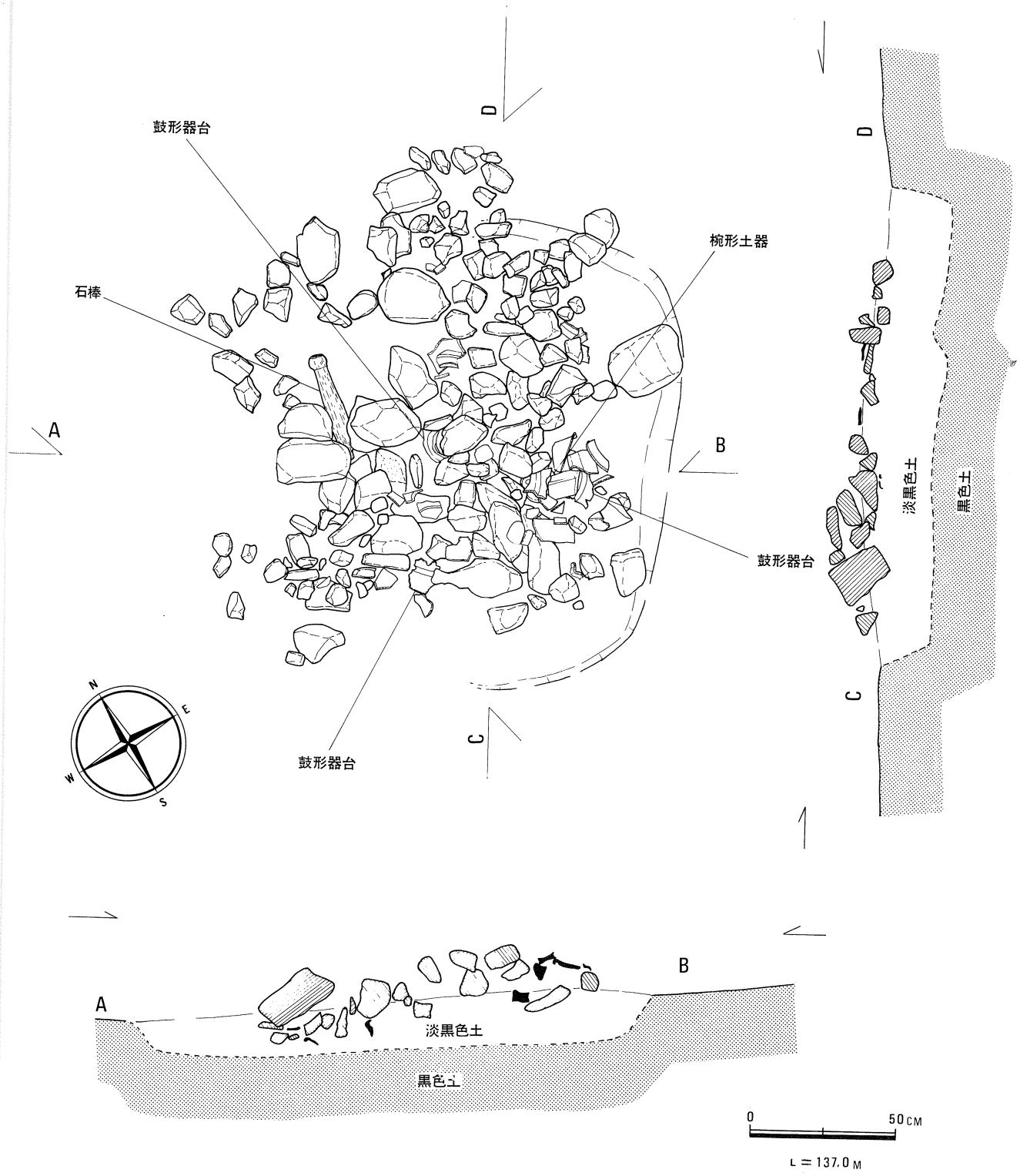


Fig.72　配石遺構101平面図、断面図（1/20）

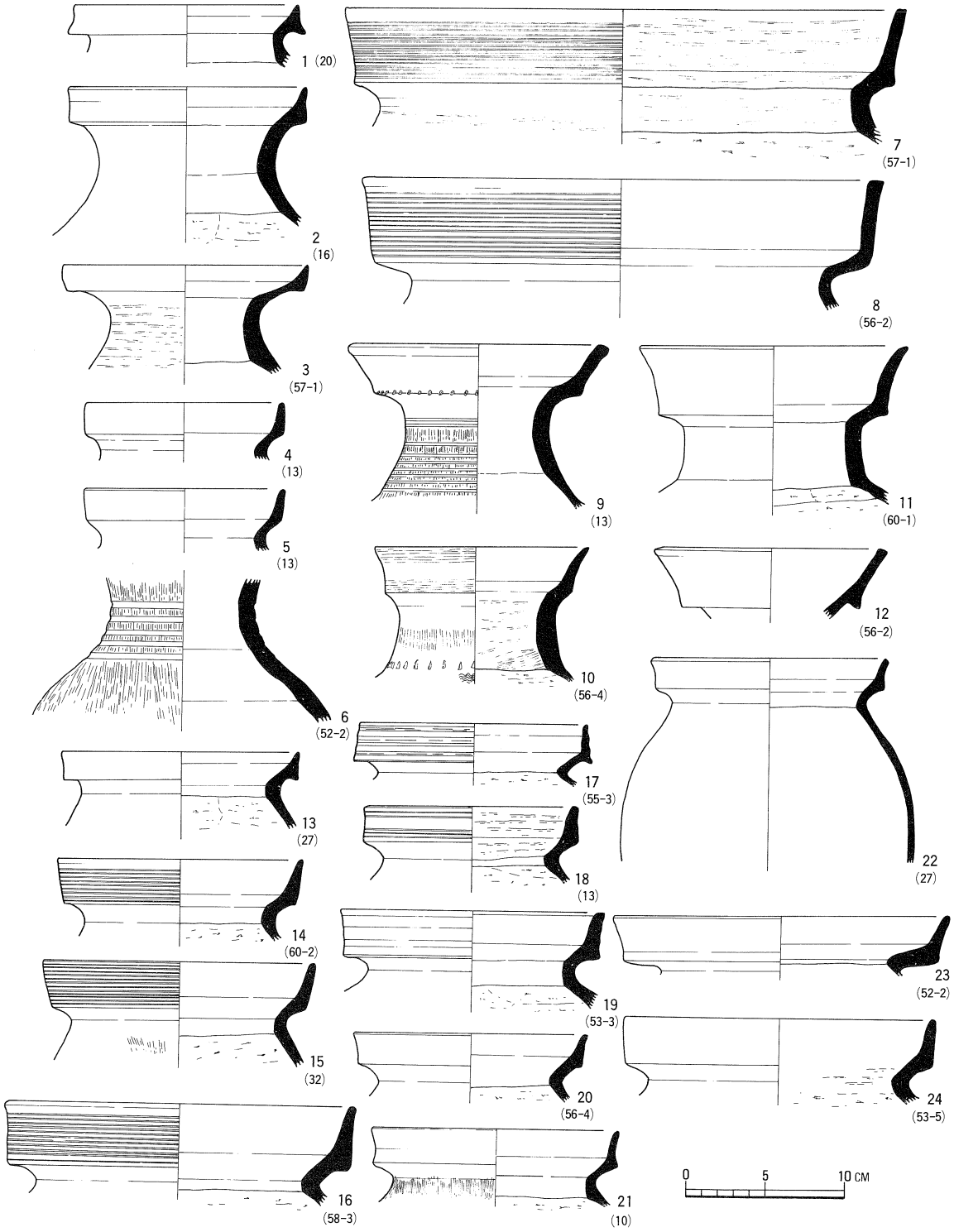


Fig.73　配石遺構出土の土器

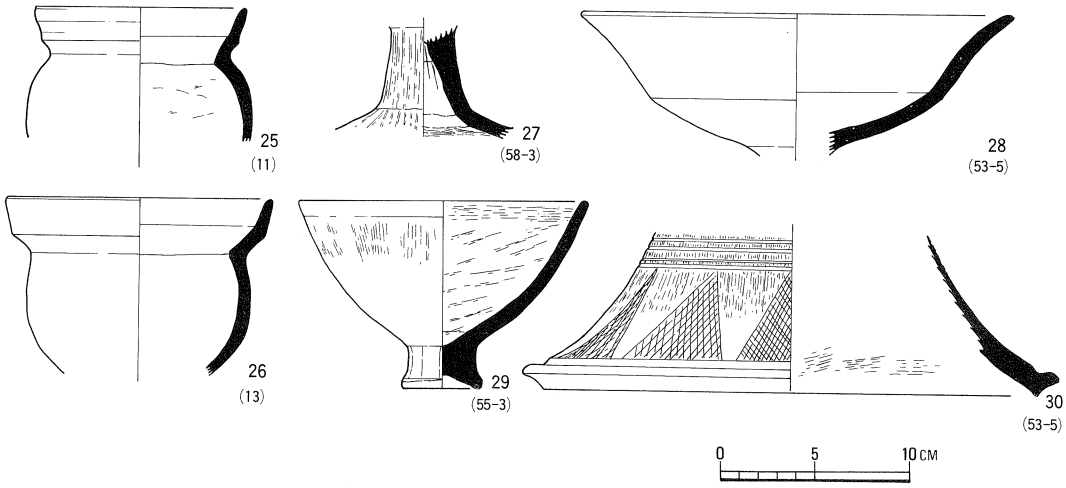


Fig.74　配石遺構出土の土器（1/4）

土器口縁部片で、７は口縁端を平におさめ平担面中央部が窪んで凹線文が端面を一巡する観を呈す。口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らし、頸部外面及び口縁部内面、頸部にヨコ方向のヘラ磨きが加えられている。胴部内面にはヘラ削り痕が残っている。８は、口縁端面を平に仕上げ口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を一巡させ、以下概ねヨコナデ仕上げである。９は、ハの字形の頸部をもち外反する立上がり部を平におさめている。外面立上がり部下端に連続刺突文を一巡させる。頸部にタテ方向の刷毛調整を施し10本の沈線文を巡らしている。口縁部内外面ヨコナデ、外面頸部以下もヨコナデ仕上げである。11は、やや外反ぎみの立上がり部端を、鋭角にとじている。内外面ヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラ削りである。

10は、やや長手の頸部をもち、外反ぎみの立上がり部は端部を鋭角におさめる。口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を一巡させ、口縁部上半にはさらにヨコナデが加えられたため、平行沈線文は一部すり消された状態を呈す。口縁部内面はヨコナデ仕上げ、頸部外面はタテ方向の刷毛目痕をとどめ、さらにヨコナデが加えられている。頸部下端には連続刺突文が一巡し、その下方に櫛描波状文が巡っていたものと思われる。頸部内面はヨコ方向のヘラ磨きが加えられ、一部に刷毛目を残す。胴部内面はヘラ削りである。12は、器台の可能性もあるが、類例が管見に及ばず壺と分類した。全般に器壁の荒が激しく調整は明瞭でない。

甕形土器（13～24）

13は口縁部を肥厚拡張させやや上方へ立上がりがみられる他、いずれもいわゆる二重口縁形を呈す。17には、口縁部外面に三条の凹線文、14～16、18に櫛状工具による平行沈線文が巡らされ、これ以外はヨコナデ仕上げされている。口縁部内面は、18、24にヨコ方向のヘラ磨き痕が残されているが、他はヨコナデ仕上げである。胴部外面は、21が明瞭な刷毛目痕を残す他、15が部分的に刷毛目を残しており、これら以外はヨコナデによって仕上げられている。22は、胴

部内面をヘラ削りのあとナデているが、概ね胴部内面はヘラ削りのままである。このうち、17は形態、胎土、成形においてこの地方のものとは異質で、恐らく県南部地方からの搬入品であろうと思われる。また22には丹彩痕があり、カメとしては特異で、壺に分類される可能性を残している。17にはススの付着が認められるが、これ以外にススの付着は認められない。

鉢形土器（25～26）

いずれも二重口縁を呈する小形の鉢で、口縁部内外面ヨコナデ、胴外面もヨコナデ仕上げ、胴内面はいずれも不明瞭であるが、ヘラ削りを加えたのちナデ仕上げされているとみられる。25にススの付着が認められ、いずれも１～３㎜の砂粒を混入している。

高坏形土器（27．28）

27は、高坏筒部片で外面に丹彩されタテのヘラ磨きが加えられている。内面に絞痕が残されナデが加えられている。脚部内面には刷毛目が残されている。28は、立上がり部はやや外反し、端部を丸くおさめている。内外面とも器壁のあれが激しく、丹彩の有無調整は不明である。

椀形土器（29）

29は、上げ底風の台部をもつ椀形土器で全面に丹彩されている。外面には一部にタテ方向の刷毛目痕を残し、概ねヨコナデ仕上げである。内面は立上がり部端に刷毛目を残し、以下ヘラ磨きが加えられている。

器台形土器（30）

30は、ハの字に開く器台脚部で外面にタテ方向の刷毛目痕が認められる。筒部下方に4 条の沈線文がみられ、沈線と脚端の間にヘラ描の鋸歯文を巡らしている。内面は大きく剝離しているが、脚端部にヨコ方向の刷毛目が加えられている。

配石遺構 101出土の土器（Fig. 75）

壺形土器（１～５．13）

１は、口縁部を肥厚拡張させ内外面ヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りである。2、３は、二重口縁を呈する壺形土器で、３は立上がり部が外反し内外面ヨコナデ仕上げ。頸部外面はタテ方向の刷毛、内面はヨコナデ仕上げである。胴内面はヘラ削りである。２は、立上がり部端を欠くが、口縁部内外面、頸部外面ヨコナデ仕上げで、頸部内面にはヨコ方向の刷毛目が残されている。胴部内面はヘラ削りである。４は、朝顔形に大きく開く単純口縁の壺で内外面に丹彩されている。口縁部内外面ともヨコナデ仕上げ、外面頸部にタテ方向の刷毛目が残されている。胴内面はヘラ削りである。15は、直口壺で全般に器壁の荒激しく調整不明であるが、底部にタテ方向のヘラ磨き痕がかすかに認められる。胴内面はヘラ削りのあと雑にナデ仕上げされている。13は、大形の二重口縁壺口縁部片で、口縁部端は中央部が窪み凹線文が一巡するようにみえる。内外面ともヨコナデで、胴部内面はヘラ削りであろう。

甕形土器（６～７）

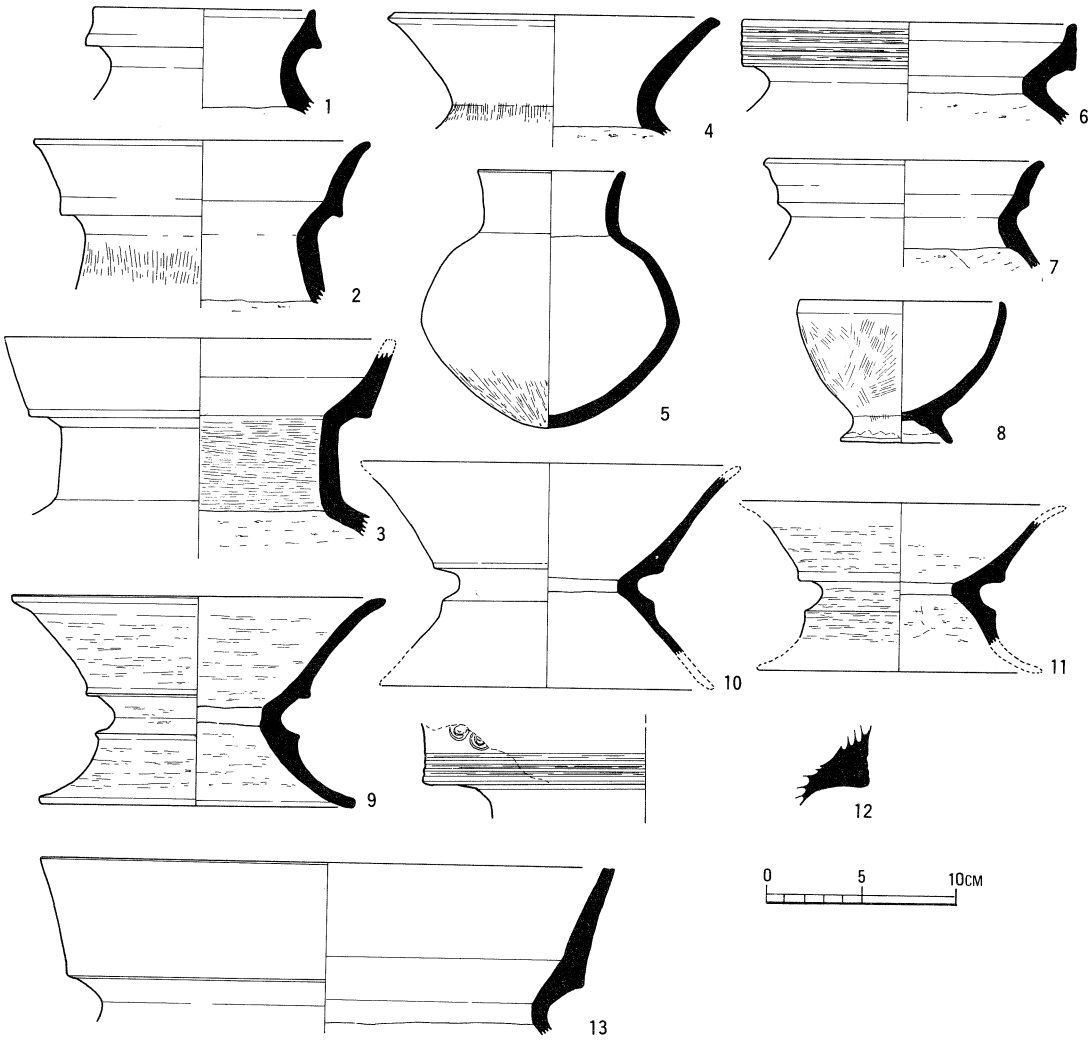


Fig.75　配石遺構101出土の土器（1/4）

いずれも二重口縁形の甕形土器で、６は口縁部外面に凹線風の横線を４条巡らしている。口縁部内面はヨコナデで、外面に丹彩痕をとどめるが、内面の丹彩の有無は不明である。胴内面はヘラ削りである。７は、内外面ともヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りである。いずれにもススの付着は認められない。

椀形土器（８）

ハの字にふんばる高台をもつ椀形土器で、立上がり部端にわずかに内傾さすくせがある。立上がり部端は内外面ヨコナデ、外面に乱雑な刷毛目が加えられ、内面はナデでていねいに仕上げられている。

器台形土器（９～12）

９～11は、鼓形器台で10は器壁のあれ荒しく丹彩の有無調整不明の他いずれにも丹彩があり、

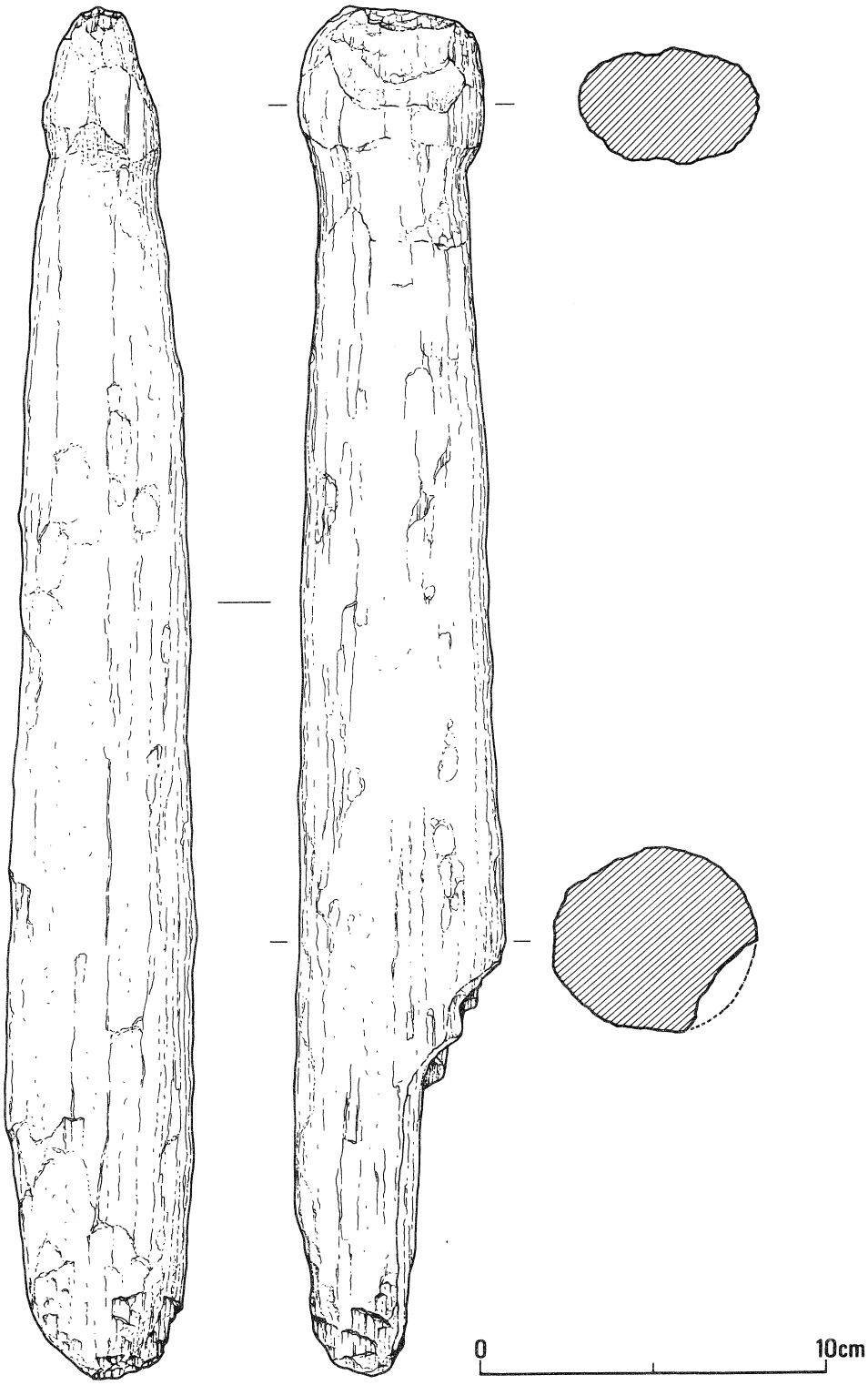


Fig.76 石　棒 (1/2)

ヨコ方向のヘラ磨きが外面及び立上がり部内面に顕著に認められる。脚部内面は10が不明であるが、9にはヘラ削りのあとヘラ磨きが加えられており、11はヘラ削りのままである。いずれも胎土中に1～3㎜の砂粒を含んでいる。11は、6×13cmの器台形土器小片で、口縁立上がり部下半に相当する破片であろう。外面に三条の凹線文を一巡させ、その上にややくずれたS字形スタンプ文が巡っていたものと思われる。類似土器は、小原権現山遺跡で木棺墓群にともない発見されており、祭祀用土器であったことはまちがいない。

石　棒（Fig.76）

淡灰色の結晶片岩製で、断面円形の中ぶくらみの棒状を呈するが、最大径は中央からかなり下方に位置する。下半に大きく破損した痕跡が認められるが、その上に加工を加えており、旧状をそのまま残していると考えられる。先端から5cmの箇所に、3cm程の幅で敲打による浅い抉りを入れて扁平な先端部を作り出している。全体の整形はすべて敲打によっておこなわれ、表面は細かな凹凸に富む。先端には、何か堅いものにぶつけた痕跡があり、その時生じた細かい破損が認められる。下端は丸味をもって終っており、全長40cm、最大径6.1cmをはかる。

弥生時代に属する類例に岡山県邑久町門田遺跡出土のもの（Fig.93）がある。発見者の川崎努氏によれば、これは遺跡の貝塚部分の貝層中から出土したもので、前期に属する。(注) 黒灰色を呈する片岩製で下半部を欠失している。材質、形態、加工ともに大田十二社例に酷似するが、門田例の方がひとまわり大きく、表裏の一部に研磨の痕跡を残している。先端部には、やはり何かにぶつけた痕跡が認められ、その時の破損面が表裏に存在する。

（注）本資料の掲載を承諾された川崎努氏及び邑久町教育委員会に感謝します。

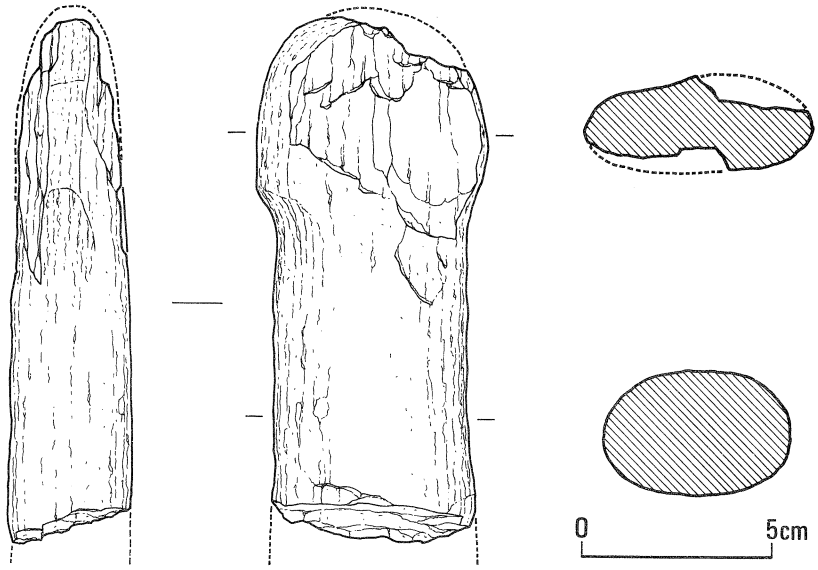


Fig.93　岡山県邑久町門田遺跡出土の石棒（1/2）

4．水田部のトレンチ調査

① トレンチ調査概況

10月、運動場造成予定地の西側谷部分で造成に先だつ排水工事が着手された。弥生時代の居住者は、付近の谷部分を水田に利用していたと考えられたので、この工事を利用しユンボによる谷の断ち割り調査を実施することにした。断ち割りは、Fig.78に示した谷尻の三ケ所でおこない、東からそれぞれトレンチⅠ、Ⅱ、Ⅲと命名した。調査中瞬時に壁面が崩壊することもあって、調査には危険がともない、必ずしも十分な観察がおこなわれたわけではない 、第Ⅲトレンチ第４、５地点で谷部分の基本層序が比較的明瞭に把握できたので、この部分の層序について概述したい。第１層は、現水田耕土で、第４層までいずれも褐色味をおびた水田耕土層とみられる類似の特徴を有する。第２層上面に、不明瞭に酸化鉄層が薄く広がるのが認められる部分があった他、第２～３層にマンガン粒とみられる褐色の斑文が存在した。以上４層は、第３、第６地点の最上層及び第１地点の１～３層に概ね対応するとみてよい。５～７層は、いずれも谷部に向かいやや傾斜堆積する粘土層で、各層の色調による区分は明瞭であった。６層には、腐植物及び炭化物が含まれていた。このうち第６層は、概ね第２地点第５層と対応するとみられ、同層には、瓦質土器が包含されていた。第７層下位で、古墳時代とみられる須恵器片が発見された。第７層以下は、黄色を呈する粘土質自然層である。第５地点で発見された小溝は、この自然層を切り込みつくられており、上幅70cm、深さ45cmを計る。溝は谷に平行して走っていた。溝内堆積土は、上下三層に分層でき、上下黒色粘土を割って黄色粘土層が堆積していた。溝東肩をおおうように、マンガン粒ないしは木炭を含む灰褐色粘土層が堆積しており、この土層中より弥生時代後期に属するとみられる土器細片が発見された。

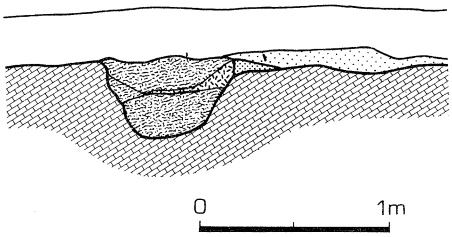


Fig.77　谷部トレンチ発見の溝断面図（1/40）

出土土器から判断できる各層の時期は、概略、小溝は弥生時代後期、第７層古墳時代～奈良時代、第６層平安末～鎌倉時代と考えられる。層序からみて、第１層～第４層は、近世以降の水田層と考えられよう。

最下部発見の小溝は、その掘方からみて人工のものであることは明白で、その位置からみて集落に伴う可能性はまずない。その溝のあり方は、現谷水田の水利用溝と類似しており、種子分析の結果、積極的支持が得られなかったとはいえ、水田水利用に関係するものと考えたい。

なお、種子分析は、岡山大学農業生物研究所教授、笠原安夫に依頼し報告をいただいた。断面図（Fig.79)の黒丸は、種子分析サンプリング位置を示している。

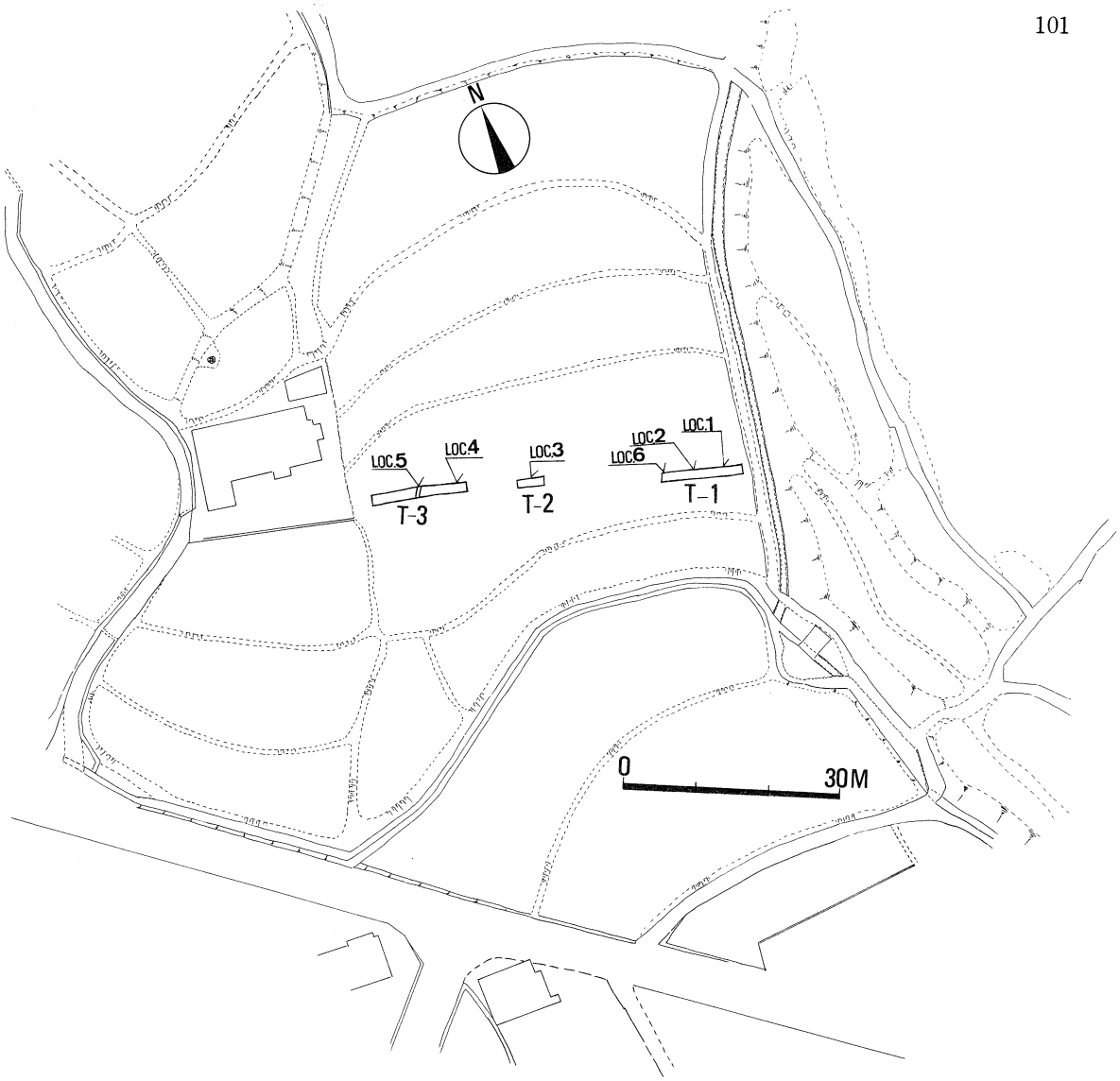


Fig.78　谷部トレンチ配置図（1/1000）

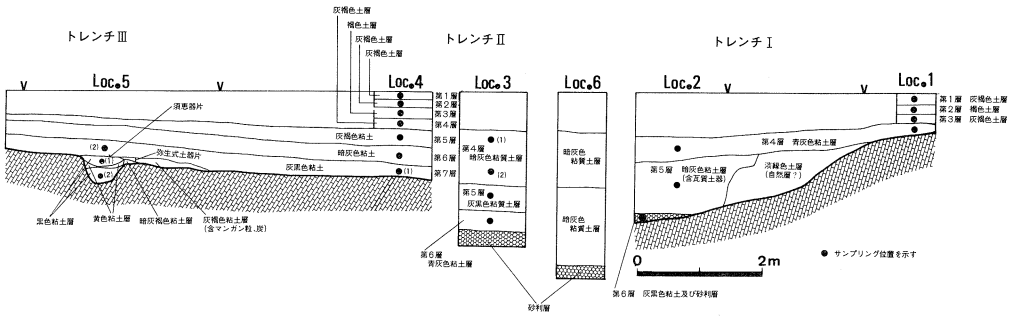


Fig.79　谷部トレンチ土層断面図（1/120）

② 津山大田十二社遺跡からの発掘植物種子の種類同定

笠 原 安 夫

はしがき

津山市大田十二社、北陵中学校の予定地の丘陵地から弥生時代後期の住居址と共に多数のピットが発見された。また、その丘陵地を下る谷間は弥生期からの谷水田跡と推定されている。筆者は津山市教育委員会がこの地層の植物遺物、主として種子の分析同定を依頼されたので、1974年11月9日現地に出向き土層サンプルを採取し、1975年12月以降この地層の分析を行った。これらの種実は管ビンで水中に保存し、1976年10月から12月までに実体顕微鏡を用いて種類の同定と粒数および若干の種類について描図した。

この土層の種子分析は武田満子氏、また試料採取には津山市教育委員会河本主査および当所の藤沢浅技官に負うところが多い。

調査試料と方法

津山市教育委員会によって発掘採集された地層のトレンチ番号およびサンプル番号はFig.79のようである。

トレンチⅠ第1地点は、第1層現代、第2層江戸時代、第3層同初期(桃山時代)、第4層—96cm層であり、同第2地点は第4層(—90cm)、第5層(—150cm)で平安時代の土器を伴い共に暗灰色粘土、第6層(— 200cm)黒灰色粘土に砂利が混合している。そして、第4、5層が水田層と推定されていた。また、トレンチⅡ第3地点では、第4層(1)(—90cm)暗灰色粘土、同(2)(— 144cm)、第5層(— 180cm)、第6層(— 210cm)共に青灰色粘土である。また、トレンチⅢは、第1層(—15cm)現代から第7層(— 150cm)古墳期から奈良時代までの層位がはっきり示されている。また、このトレンチⅢの第5地点には溝の断面が認められ、溝の上部は第4地点の第7層古墳期、須恵器を含む地層が認められ、その下の溝は第8層(1)(2)であって、地表下— 125〜 150cmで黒灰色で弥生後半土器片を含合していた。

それらの各地層から土塊を煉瓦状に採土した。土壌からの種実の抜出は、湿土のまま 200〜500g をビーカーに取って水道水を入れ、1〜数日間置き、後に土を静かに砕きながら杓子状の金網にガーゼ3枚重ねて敷いた上に流して、小石、砂、土粒と有機物に分けた。そして、実体顕微鏡下において植物種子をより分けて検出した。

調査結果と考察

調査結果は第1〜3表のようであり全部で23科40種類の種子が検出された。

第1表に示されたトレンチⅢの第5地点の下層の溝— 150cmの第8層(2)は 500g の土塊から、ヤナギタデ10粒、同(1)(— 125cm)の弥生後期後半の層からは、ホタルイが6粒と不明4粒の少数が検出された。ホタルイ、ヤナギタデは現在は休耕田に多い種類であるが、恐

らく、この層ではまだ典型的な水稲栽培はなかったと思われる。その溝の上の第７層（２）（-110cm）と第４地点の第７層（-150cm）とは古墳期から奈良期層と推定された。この両地層からはコナギ、ホタルイ、スブタ、オモダカ、イバラモなど今日の水稲田の雑草が多く認められ、典型的な湿田水稲栽培が行なわれたと認められる。それ以後の第６層（-115cm）奈良期から第３層（-56cm)室町（桃山初期の土器片含合層下）までは、水田雑草粒数が２～５倍に増加し、とくに、コナギと水生のシャジクモ、イバラモ、ヤナギスブタなどが多く、水田雑草が94％以上占める。この時代も依然として湿田水稲耕作が長く続いたと考えられる。そして、第２層（－35cm）江戸時代では雑草粒数が$\frac{1}{5}$に減少したが、それは、水田の乾田化のために分解消失したと考えられた。しかし、この谷間は現在も半湿田状態なので、恐らく、江戸、明治以後に裏作のあった乾田土の土入があったのではないかと思われる。そのため、前期のコナギ、シャジクモ、イバラモも少くなり、少数のコゴメガヤツリ、ザクロソウ、ヒメシバ、カモジグサなどの畑や乾田雑草が出土した。とくに現代には水田裏作雑草のスズメノテッポウ、ノミノフスマなどが多く出土した。

第２表に示されたトレンチⅠ第５層の平安時代、第４層鎌倉から第３層の江戸初期桃山時代までは、湿田での水稲作と見られ、第２層江戸時代で乾田土を土入れしたようである。

また、第３表のトレンチⅡの第３地点では、第５～４層ともコナギが最も多く、ついで、イバラモ、シャジクモ、ヤナギスブタの他に、水田畦畔のコウガイゼキショウ、コゴメカヤツリ、ヒメクグ、イボクサなども多く出土している。それらのうち、湿田雑草が94％に達し、各トレンチの各地点とも湿田水稲栽培があったと考えられる。なお、若干の畑地雑草があるが、これは付近に住居地か、また畑地があり、そこから流れ込んだものであろう。

以上によってこの地帯は弥生後期に典型的水稲作があったかどうか疑問がある。しかし、古墳期からははっきりと湿田稲作が行なわれ、以後江戸時代初期までそれが長く続いたと考えられる。江戸、明治時代になって埋土種子の遺存が急に減少し、少数の乾田雑草と一部には水田裏作雑草が加わり、とくに、明治以後にスズメノテッポウなどが多く出土した。しかし、現在も半乾田ないし湿田状態であったことから考えて、それらの乾田雑草は、この時期に乾田土を土入れしたのではなかろうかと思われる。そして、岡山県南部の津島、雄町、川入、上東などの諸遺跡と比較し、畑や乾田雑草がきわめて少数で、湿田雑草が多いことが特徴であり、それらは先に報告した宮尾遺跡の弥生後期以後の水田雑草とよく似ていることである。

（前岡山大学農業生物研究所教授・農学博士）

表　1

トレンチⅢ　第４地点（湿土）　　同Ⅲ　第５地点

採集位置	第７層(1) ― 150cm 灰黒色粘土	第６層 ― 115cm 灰色粘土	第５層 灰褐色	第４層 ―66cm 灰褐色	第３層 ―56cm 灰褐色	第２層 ―35cm 赤褐色	第１層 ―15cm	第７層(2) ― 110cm	第８層(2) ― 150cm 溝中下 黒色	第８層(1) 125cm 溝中上 黒色
推定時代	古墳～奈良	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代	古墳	弥生	後期
土量g / 種名	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500
モミ殻							5			
炭化米							12			
コナギ	257	570	578	210	233	68	10	277		
シヤジクモ		11	119	354	1050	27				
イバラモ	5	1	29	38	183	1	8			
ヤナギスブタ		93	54	72	182	141		1		
スブタ	24	12	16	7	25	3				
ホタルイ	5	10	42	10	18	1		10		6
ハリイ		1	26	3	5	14		10		
オモダカ	10	5	18	4	7	3		14		
ホシクサ		9	107							
ヤナギタデ									10	
ミクリＳＰ					41					
イボクサ			3					2		
コウガイゼキショウ		9	54		51	2				
コゴメガヤツリ	2			6	11	2	5	2		
ツルボ				5						
ハコベ			1			1				
ノミノフスマ			1				103			
スズメノテッポウ			1				315			
ザクロソウ		1					2			
カモジグサ							328			
キク科							20			
シソ科			2		1					
タデ科			2							
イチゴＳＰ										
ヒサカキＳＰ						1				
黒粒						128				
計	303	722	1053	709	1807	392	808	316	10	6

表　2

トレンチⅠ　第2地点　　同Ⅰ　第1地点

採集位置	第6層 -200cm 黒灰色粘土 砂利混	第5層 -150cm 黒色粘土	第4層 -70cm 青灰色粘土	第4層 青灰色粘土	第3層 灰褐色	第2層 褐色	第1層 灰褐色
推定時代	（奈良）	平安	（鎌倉～室町）		江戸初期（桃山）	江戸	現代
種名＼土量g	500	500	500	500	500	500	500
炭化米		3	5				
コナギ	663	125	726	825	758	80	23
シャジクモ			160	523	338	38	
イバクモ	5	93	38	38	3	2	8
ヤナギスブタ	3	8	139	93	103	30	
スブタ			38	20	28	14	
ホタルイ	18	13	25	33	17		
ハリイ	5	5		10		40	
オモダカ	5	3		8	5	3	
ミクリSP			5	25	3		
コウガイゼキショウ		13	40	10			
ヒメクグ					3		
コゴメガヤツリ	25	5	8	18	14	5	5
ウシクグ					3		
イボクサ		8					3
ハコベ					25		20
ノミノフスマ		15					
チドメグサ						3	
オヘビイチゴ					5		
スズメノテッポウ							288
ツルボ		28		8			
ザクロソウ	3		5	3		5	1
ヒメシバ		5				3	
カモジグサ							5
エノキグサ	33	5					
キク科		3					3
シソ科		3		10			
アブラナ科		23					5
タデ科				3			
マメ科							3
イネ科	65	23					5
ヒエ科	50						
ナデシコ科	3						
計	878	381	1189	1627	1355	223	369

表　3

トレンチⅡ　第3地点

	第6層 ― 210cm 灰青色粘土	第5層 ― 150cm 黒色土	第5層 ― 150cm	第4層 ― 144cm 灰黒色土層	第4層 ―90cm 暗灰色	第3～1層は第4地点に対応する
種名 ＼ 土量g	500	500	500	500	500	
炭化米		8				
コナギ	種	1635	925	1818	1011	
シヤジクモ	子	3	3		582	
イバラモ	な	50	78	35		
ヤナギスブタ	し	43	3	160	124	
スブタ					35	
ホタルイ		8	63	130	22	
ハリイ			25	48	65	
オモダカ		48	28	40	17	
キクモ		765			92	
コウガイゼキショウ		5	3	430	87	
コゴメガヤツリ		93	45	35	8	
ヒメクグ		5		113		
イボクサ		18	13	15	6	
セリ科				5		
ハコベ				3		
ノミノツヅリ					1	
チドメグサ		3				
ヘビイチゴ		5				
ツルボ		15		95		
バラ科				43		
ザクロソウ			3			
キランソウ			3			
メヒシバ		5		8		
イヌホホズキ		3	3			
イヌビエ		8				
シソ科		3	3		6	
カタバミ			3			
アワ				3	3	
ヒエ					1	
ヒサカキ						
計		2723	1201	2981	2060	

5．古墳石室

配石遺構の北に接してトレンチを掘り下げた結果古墳時代のものと思われる石室一基を発見した。天床石は、地表にすでにみえかくれしており、墳丘の有無はもはや明確とすることはできなかった。表土層を取り除くと石室プランが露呈し石室は黒色土中に埋没したような状況であった。天床石は、二個の石が現位置を保っていた他、一部は石室内に転落しており残りはすでに取りさられていた。石室内には黒色土が埋積しており、石室内のこの黒色土と落下天床石を取り除く過程で底石とみられる数石の平石が発掘の不手際により取りさられてしまった。

石室プランはやや胴ばりで西にゆくにしたがい巾を減じている。石室内測は東辺33cm、西辺20cm、南北壁長 175cm、床面から天床石下面までは25cmを計る。

石室構築法は、東西辺にやや大型の自然石各１個を鏡石として据えつけ、側壁はいずれも下段やや大形の自然石を横づみに立てならべ、上段は小形の山石を小口積みし積み上げている。

石室掘方は、地山に達せず黒色土を掘り下げたのちうらごめに黒色土をもちいており、掘方と堆積土の区別はまったくなかった。

石室内外より、これに伴うとみられる遺物の発見は皆無で、時期決定のきめてに欠くが、石室構築法が横穴式石室に類似し、やや粗雑な感じをうけるので、終末期古墳石室の可能性が強い。

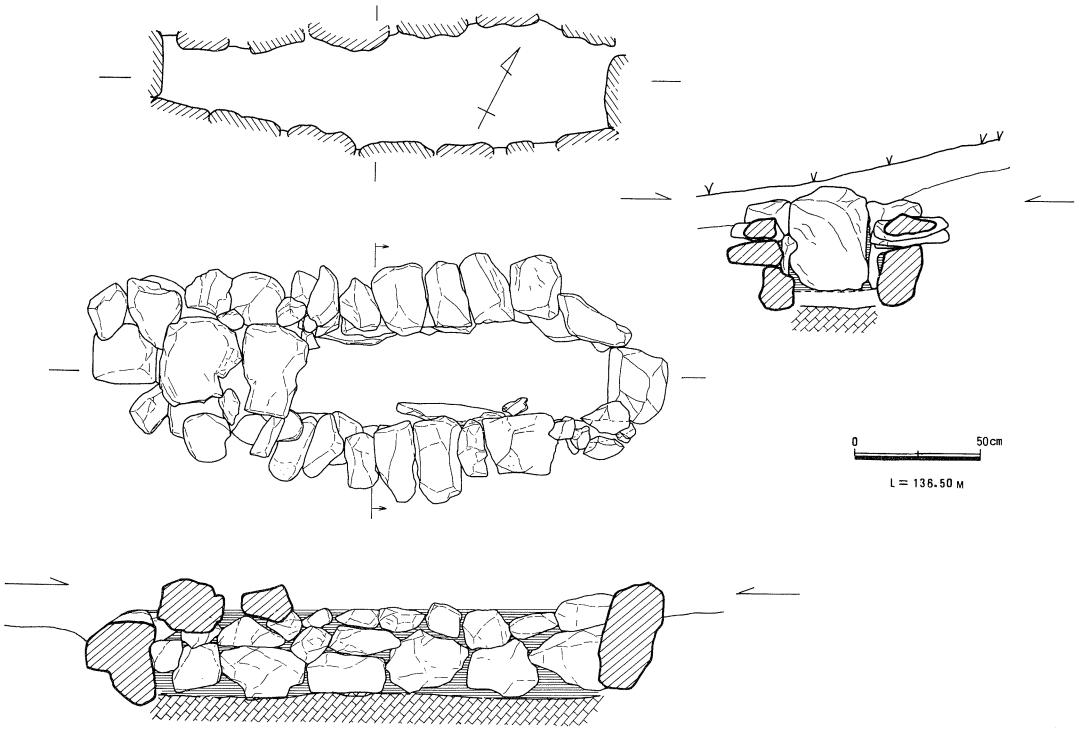


Fig.80　古墳石室平面図、断面図（1/30）

第４章　遺構遺物について

１．土器編年について

土器編年を確立する上で、大田十二社遺跡の資料は、その出土量の割には必ずしも良好なものとはいえない。その大半が住居址、袋状貯蔵穴出土のものとはいえ、一括品として取り扱うには問題が多いからである。すでに見たように大半の住居址の出土土器には、後期初頭のものと後半のものが混在しているのが明らかである。厳密な分層発掘がおこなわれなかったための現象ともみれるが、必ずしもそのためとのみ言えないものもある。
この種の現象の原因は今後解明されねばならぬとしても、こういう状況下で当面土器編年を確立するためには、比較的共伴関係の高いとみられる資料を基礎に、型式学的方法に多くをたよらざるをえない。

方法上の制約を受けつつも、本報告をなすにあたって、従来とかく遅れがちであった宮川流域の土器編年についての試案を呈示し、今後より確実な編年を築くための捨石としたい。

住居址、袋状貯蔵穴の資料をもとに、現在大田十二社遺跡の出土土器を大きく五型式に分類することが可能なように思われる。その各区分を大田十二社第１式、２式、３式、４式、５式と呼び、その各土器を使用した時期を大田１期、２期、３期、４期、５期と命名することにした。

１式土器の基礎資料は、９号住居址と袋状貯蔵穴ＰＥ７である。いずれも廃棄品の一括資料であるが、９号住居址については、2期に属すとみられる３号住居址によって埋められており、本遺跡で中期土器の出土をみていないので、９号住居の土器はきわめて限定された時期のものであることに疑いはない。またＰＥ７の土器も袋状貯蔵穴底部発見の一括廃棄遺物とみられ、型式上両者の間に矛盾はない。

２式土器の基礎資料には、８号住居址床面出土の７点の土器片がある。型式設定するには不十分な資料であるとはいえ、その特徴はいずれも１式土器及び３式土器以降のものとは相違し時期差を示すことは明らかである。大田十二社遺跡発掘調査以後、眼下の沼京免遺跡の発掘調査が進み、火災廃棄され住居床面に残された良好一括資料に恵まれた。それは２式そのもので、これを援用し、基礎資料の欠を補いたい。

３式土器の基礎資料に、6、13号住居址出土の土器がある、各住居とも火災廃棄されたもので、埋土中に若干の混入が考えられるが、大むね一括遺物とみられる。

４式土器の基礎資料には、袋状貯蔵穴ＰＥ55、ＰＥ29、がある。すでにみたように、ＰＥ55は一部を除いて一括廃棄が明らかで、ＰＥ29は、すべてを一括遺物とみることに多少の問題は

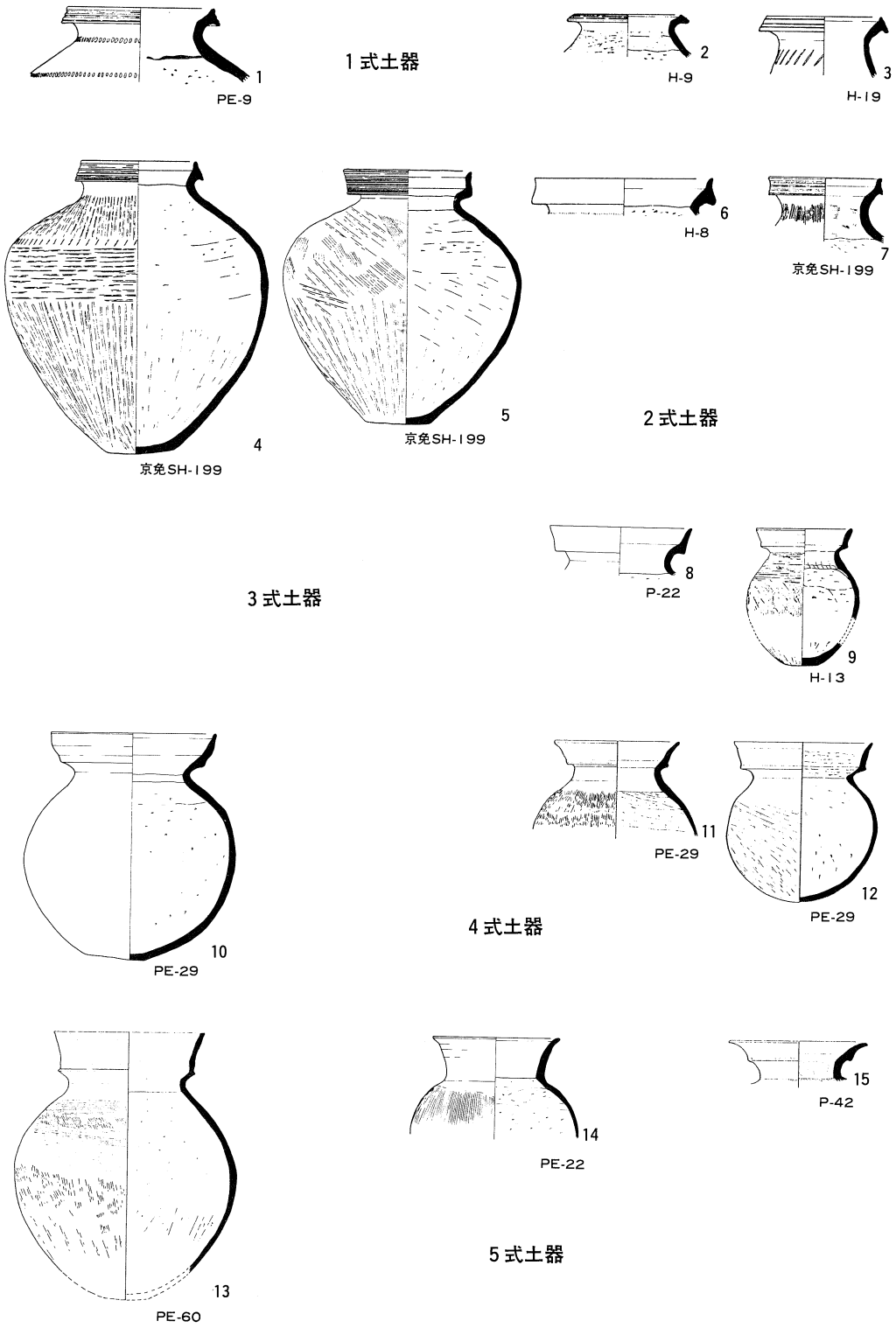


Fig.81　壺形土器編年表（1/8）

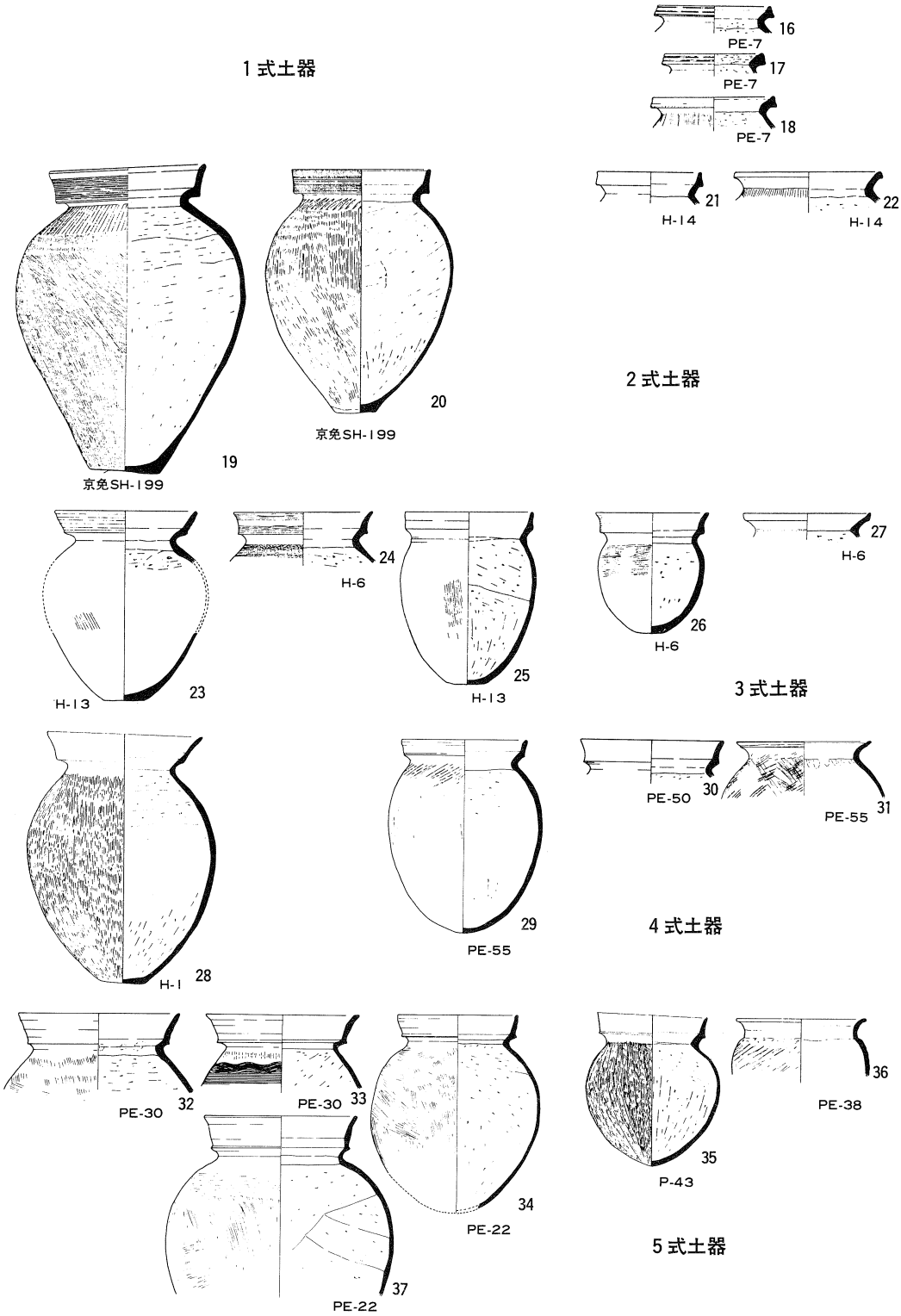


Fig.82　甕形土器編年表（1/8）

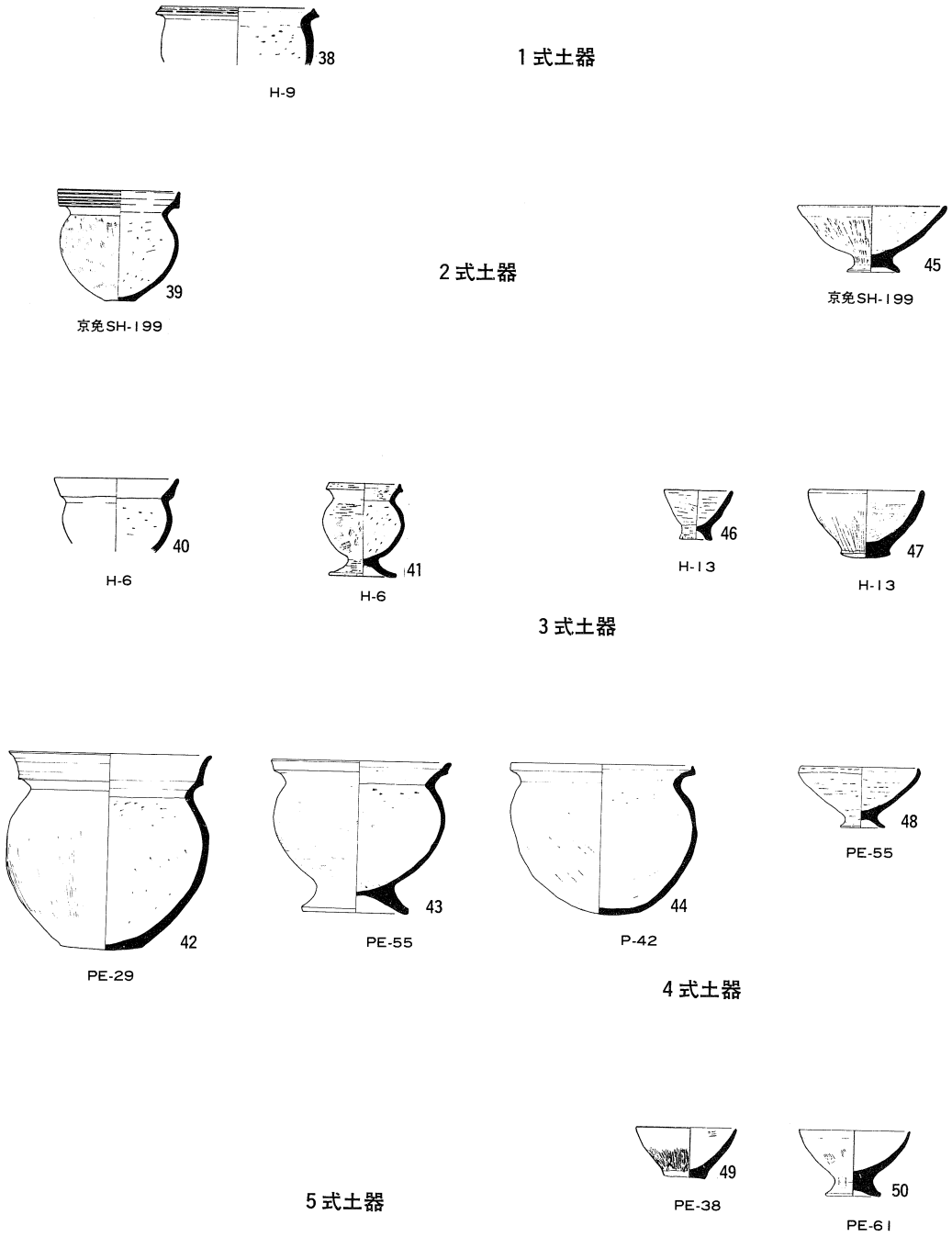


Fig.83　鉢形土器（台付壺）、椀形土器編年表（1/8）

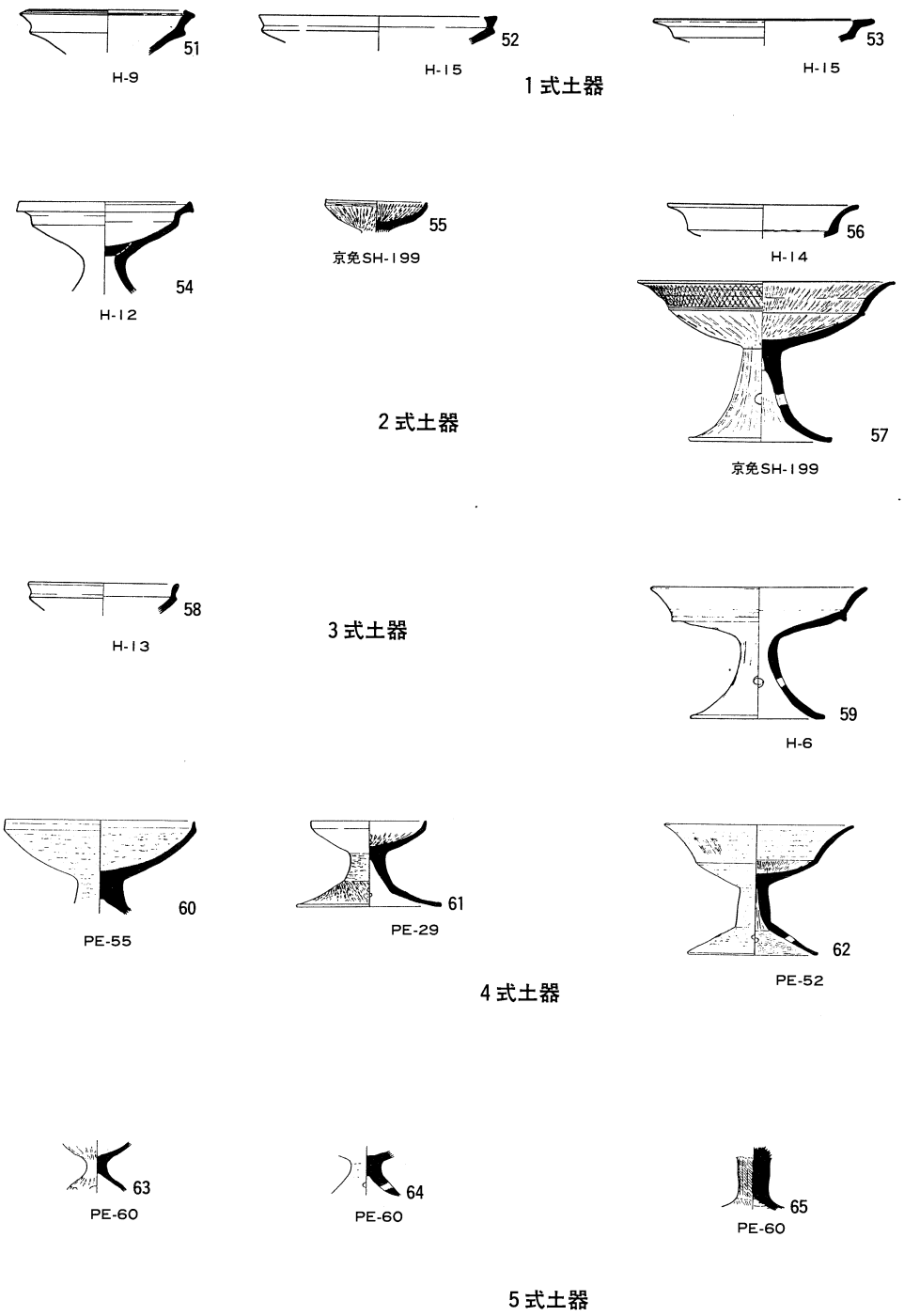
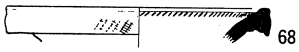


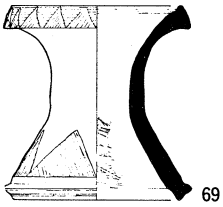
Fig.84　高杯形土器編年表（1/8）

京免SP-59

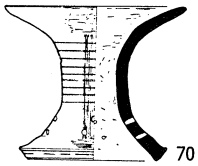
1式土器



H-9



PE-7

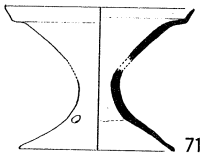


PE-7

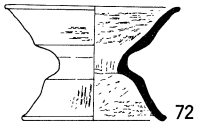
H-6

3式土器

4式土器

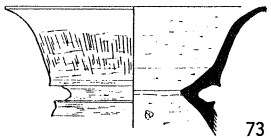


PE-50



PE-29

5式土器



PE-30

Fig.85　蓋形土器及び器台形土器編集表（1/8）

あるが、袋状貯蔵穴底部でおり重なり発見された土器が主で、概ね一括品とみてよいように思われる。

５式土器の基礎資料としては、袋状貯蔵穴ＰＥ22、30、38、60出土土器の一部をあてることができるが、もとより一括遺物であることを出土状況から説明するにたるものではない。５式土器の検討にあたっては、いまのところ型式学的な根拠しかない。

①　各型式土器の特色

第１式土器

壺形土器

やや肥厚させた口縁部端面に数条の凹線を巡らすのが多い。頸部にらせん状に沈線をめぐらすもの、ななめの列点文をめぐらすものがある。肩部に連続刺突文を伴うものが多く、胴部最大径も肩にある。口縁部内面から頸部にかけてヨコナデ仕上げが一般でヘラ磨きが加えられるものもある。大半は内面の頸部以下にヘラ削りが加えられている。色調は、淡褐色ないしは暗褐色を呈し丹彩痕跡を残すものはない。全般に器壁は厚く重量感のあるものが多い。

法量に大小二形態が認められ、それぞれ形態に相異が存在する。

甕形土器

甕形土器も、口縁部外面に数条の凹線風文様を残すものが主流で、外面は肩部以下ハケにより仕上げられている。胴部内面は、いずれもヘラ削り痕を残すが、頸部以下ヘラ削り痕を残すものの中にわずかにやや下方より始まるものがある。底部には、やや上げ底風のもの、ハケ目痕を残すものがある。色調は、暗褐色ないしは淡褐色のものが多い。

鉢形土器

その特徴は、多くをカメ形土器と共通しており、口縁部片では甕との識別は困難である。

多くは、復元器高を推測し扁平なものを鉢とした。

高坏形土器

高坏形土器には、坏部分中ほどで屈曲部をもち、立上がり端部を肥厚させるもの、さらに外方に延び端部を鋭角にとじるものがある。前者は、中期高坏の形態をよくとどめているが、端部凹線文が痕跡的に残されているのみである。

蓋形土器

壺形土器の蓋と考えられるものがあり、外面は比較的ていねいに、内面は部分的にヘラ磨きが加えられている。

器台形土器

上東式土器の影響とみられる器台形土器、68、69とともに、70のようなやや異形の器台形土器がある。70は、外面及び内面上半はヘラ磨きが顕著で胴部に９条の沈線文をめぐらしている。この器台などは、ヘラ磨きを多用する手法や器形の点において、２式土器の急激な変化を暗示

する個体とみられる。

第２式土器

壺形土器

４は、１式土器大型壺１の系譜を引くもので、１式壺に比べ口縁部の凹線風凹凸は不明瞭になるとともに、口縁部端がやや上方に拡張をみせる。外面は、タテ及びヨコ方向のヘラ磨きが顕著で、底部まで綿密に磨きあげられており、内面のヘラ削りも頸部屈曲部にいたる。１式土器に比べ胴部最大径も、やや下方に移動し丸みをおびている。

５は、この種の壺に二重口縁が付いたもので口縁部外面には、櫛状工具による平行沈線文が一巡している。６は４の壺と共通点が多いが、口縁部外面には凹線の痕跡がなく、全体に器高が低くなり、さらに丸みをおびているとともに、この種の壺には丹彩されたものが目だっている。７は小形の長手の頸部をもつ壺３の系譜をひくもので、口縁部の立上がりが顕著になるとともに、口縁部外面の凹線風文様は不明瞭となっている。この種の壺の肩部には列点文を伴なうものがある。一般に２式の壺は、口縁部の凹線文の衰退と櫛状工具による施文の出現、丹彩土器の盛行とそれに伴なうヘラ磨きの多用に特色づけられる。

甕形土器

直立した二重口縁をもつ細身の甕が主流で、口縁部外面に櫛状工具により平行沈線文を施すものが多い。19・20は肩部に列点文を伴ない、外面はハケ仕上げである。内面は下半がタテのヘラ削り、上半はヨコヘラ削りで頸部屈曲部までいたっている。21は、小形甕で口縁部はやや上方に立ちあがり、口縁部内外面はヨコナデによって仕上げられている。

これらとともに少数ではあるが、くの字風に口縁部を単純に仕上げる小形甕形土器があり、この手のものには、竹管文で肩部を飾るものがある。総じて、この期の甕形土器は装飾性が強く、入念な仕上げのものが目につく。主流となる甕形土器は、第１式土器に比べ急激な変化の跡をとどめている。

鉢型土器

甕を祖形とする明瞭な鉢形土器の出現は、２期の一つの特徴である。39はこの典型で、口縁部外面に凹線風の凹凸をわずかに残しているが、口縁部の立上がりは高く、器高は低くて鉢のプロポーションを備えている。外面は縦刷毛、内面はヘラ削りで仕上げられる手法は甕と共通するが、外面は甕に比較し入念に仕上げられている。

椀形土器

鉢形土器の出現とともに、椀形土器のはしりもこの期にさかのぼる。46は編平に横に広がる坏部をもち、ハの字形の高台部をもつ。外面はヘラ磨きが加えられており、内面はヘラ削りのあと雑になでられ壺蓋との区別は困難である。

高坏形土器

56、57の高坏が典型で、坏部の形態は上東鬼川市Ⅱ式の高坏に類似している。しかし筒部は明瞭でなく、坏接合部からハの字形にすそ広がりの脚部を有するのが特徴で脚端は癖をもっている。また、他に丹彩例が顕著で、ていねいにヘラ磨きされているものが多い。59には、口縁部外面に暗文風の格子目のヘラ磨きがあり、これなどは２式土器の特徴をよく示しているといえよう。この他、連続成形手法によるものも併存している。

第３式土器

３式土器については、必ずしもそのセット関係について明白にするにたる資料が整っているわけではなく、指標の多くを甕形土器にたよらざるえない現状にある。しかし、２式土器、４式土器とは多くの点で異なる特色をもっており、あえて一型式を設定した。

壺形土器

大形壺の良好な資料に欠けるが、小形壺は口縁部は高く立上がり、直立からやや外彎傾向を示すものが多く、いわゆる二重口縁を呈する。９は外面ヘラ磨き痕を残すが、胴中位にハケ目痕を残し、全般にやや仕上げが雑なものである。底部は明白な平底で、２式土器壺に比べ胴部最大径は下方に移動し、さらに丸みをおびている。８の壺も、２式土器と比べ、立ちあがり部が上方に発達をみせ、その差は歴然としている。底部資料から判断していずれも明白な平底を有するものと思われる。

甕形土器

やや外彎傾向を示すいわゆる二重口縁の甕が多く、口縁部外面に凹線風の段を残すもの、櫛状工具による平行沈線文を巡らすもの、ナデ仕上げのものの複合として現象している。
口縁外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らすもののうちには、この部分をさらにナデ消すものがある。26は、肩部にヨコ方向の刷毛目痕が残されているが、肩部に櫛状工具により施文されるものが増加することとも考え合わせられる現象である。
２式土器に比べ、やや器高を減じ、丸みをおびてくるが、いずれも平底土器と思われる。

鉢形土器

３式の鉢形土器は、バリエーションに富む。40は、二重口縁のやや外反した丸みのある口縁部をもち、底部を欠くが平底と思われる。６号住居には、こね鉢状のものがあり、13号住居には、くの字口縁の片口付の鉢の資料がある。用途に応じた機能分化が顕著になった例と思われる。

高坏形土器

59が数少ない高坏形土器の中でもほぼ全形を知りうるものであるが、資料としてはやや傍系の感がある。２式高坏と同じく筒部は明確でなく、ハの字に裾広がりな点は類似しているが立ち上がり部下端に下方に突出部が一巡し、外面に３条の凹線風文様がめぐる。

脚端部の癖は消失しており、きめてに欠くが57に比べやや新しい傾向をもっているとみることができる。

第4式土器

壺形土器

いずれも二重口縁の土器が多いが、第3式土器に較べ、頸部上半と立ち上がり部のなす角がさらに鈍角化する。また小型壺の中には、丸底のものが出現している。胴部最大径もほぼ胴中央へと移動している。明白なタタキ目痕を残すものの出現も、この時期の特色である。壺形土器の大半は、内面ヘラ削り仕上げであるが、タタキ目を残すものには、ハケ仕上げのものが多い。底部は、大形壺は平底、タタキを有するものの中には輪台法による突出底のものがある。

甕形土器

タタキ成形による甕形土器の出現が特色で、31のような端部に癖のあるくの字口縁をもつものは、東部の影響の強まりを示している。甕底部は、平底、タタキのあるものには、突出底ないし平底の痕跡をわずかに残す丸底のものがあり、突出底のものには木の葉底が含まれている。

鉢形土器

3式土器以前の鉢に較べ一般に大型化している。43の台付鉢は、県南部の酒津式土器と対比する上で重要な指標とみられる。

高坏形土器

口縁端部を内傾させる癖をもつ低脚の高坏と、大きく外反する坏部をもち比較的長手の筒部が付く高坏があり、ともに丹彩例が多く、ヘラ磨きも顕著である。

器台形土器

本遺跡では4期以降に鼓形器台が発見される。比較的シャープに、ていねいにつくられているものと、角のとれたものがあり、ともに丹彩が於されているが厚手で重い。

この器台とともに71にみられる特殊な形態の器台がＰＥ24・ＰＥ50で発見されている。

ともに胎土、色調が一致しており、一見して搬入品と認められる。

第5式土器

壺形土器

二重口縁壺は、口縁部のつくりがシャープで、角張っている。器壁は著しく薄くなり、外面肩部分にヨコ方向のハケ目痕を残すものが多い。ハケ原体は、ごく目の細いものが用いられる場合が多い。底部は丸底化が著しく、胴部は球形化がさらに進んでいる。

特にこの期は、壺甕の識別が困難なものが多い。14の直口壺も、この期の新しい傾向としてあげることが出来る。

甕形土器

壺形土器にその特徴を同じくし、器壁は薄くシャープである。もっとも薄いものでは、2～

3㎜のものがあり、製作上の専門化を暗示している。底部は丸底ないし、尖底ぎみの丸底がある。

高坏形土器

高坏は、脚部のみの資料であるが、低脚のきゃしゃなもの63、64と筒部の明確な中実のものがあり、65は筒部をヘラ削りしたあと、斜めにハケ仕上げされている。

器台形土器

鼓形器台があり、73は大形で分厚く、くびれ部は狭い。胎土中に砂粒を多く含み、丹彩痕跡はない。

② 山陽地方と山陰地方との相対的平行関係について

津山地方は、中国山地の山ふところ、ちょうど山陰と山陽を結ぶ一つの接点に位置している。津山の弥生土器は、両者の影響を受け、さらに東部の影響も顕著で、中国地方東部の土器編年を考慮する上で要となる位置をしめている。

中国山地の土器編年は、従来、山陽地方や山陰地方に比べたち遅れていたため、これらの両者の併行関係については、諸説があって根拠もあいまいであった。
また、中国山地の土器資料については、主として山陽地方の土器編年に対比しがちであったため、それは遺跡の評価に一定の混乱をもたらしてきたようにもみえる。

こういった中で、S54年、藤田憲司は、主として中国縦貫道の事前発掘調査で得られた資料をもとに、これを再評価し、山陰と山陽を結ぶ土器編年のアウトラインを呈示した。[①]

大田十二社遺跡の土器編年の作成にあたっては、極力沼遺跡群の中で考えることとし、このため藤田編年との間で若干のかいりが生じたものの、大田十二社の五期区分を軸に平行関係を求めた場合、大むね藤田54年論文の線にそったものとなっている。

以下、大田十二社遺跡の土器編年を基に，山陽・山陰との併行関係を求めてみたい。

第１式土器は、広く東中国地方の土器の斉一化現象の中で捕えられ、併行関係を求めることは、さして困難ではない。美作地方では、天神原13号住居[②]・沼Ｅ遺跡１号住居[③]・久米町法事坊、同釜田遺跡[④]に類品を求めることができる。また、山陽では鬼川市Ⅰ式[⑤]の中にその類を多くみ、山陰では、鳥取市大桷遺跡[⑥]SK056、SK008、SK 007、青木遺跡第Ⅱ期[⑦]に対応できるもので、口縁部外面の凹線文，内面ヘラ削りの発展を指標とすることができる。一べつして、全般的な相似現象の中に遺跡ごとの特性が総合されていることは、後期弥生社会成立の基盤を暗示している。

策２式土器を山陽、山陰の土器細分と直接対応させることは、今のところ種々の問題を含んでいる。美作では、二宮遺跡[⑧]・袋状貯蔵穴No. 100　第３・４層出土土器・久米町荒神遺跡[⑨]24号住居出土土器に類品をみることができる。

個々の土器の類似要素を求めた場合、19、20の甕形土器は、松江市的場土壙墓群[⑩]出土のものに類似しており、高坏形土器57も坏部の形態、脚端部の癖などからみて、大むね的場土壙墓群

出土のものに対応させられるものと思われる。39の鉢形土器も下郷遺跡[11]に類例があり、45の椀形土器も九重式以降発達をみせる低脚坏と機能上の共通性を示すものと考えられよう。

従って、２式土器（２期）は、大むね九重式ないしは的場式土器に併行させることが可能で、京免遺跡ＳＨ 199、８号住居址出土の土器は、この中でやや新しい一断面をもった土器といえよう。

２式土器を山陽地方と対比する場合、比較材料は少ないが、４及び６の壺形土器、また56、57の高坏形土器の坏部の形態、57の坏部の過度な暗文風の装飾の有り様からみて、しいて対応関係を求めるとすればやや新しい傾向をもつとはいえ、概ね上東鬼川市Ⅱ式に比定することができよう。

３式土器は、美作地方では二宮遺跡、袋状貯蔵穴No. 100 第５層出土のもの、大成遺跡１号住居出土のものがある。一方山陰地方との対応資料としては、青木遺跡[12]に良好なものが存在する。

壺形土器８は、青木ＦＳＩ06Ｐ１と器形を共にし、甕形土器25・26の類似資料は、同じく青木遺跡ＦＳＩ28Ｐ２、ＦＳＩ12Ｐ４があげられる。また、24の甕形土器も、ＦＳＩ12Ｐ３と、大むね対応できる資料である。従って３式土器は、山陰地方編年、青木Ⅳ式に併行させてよいように思われる。

一方３式土器を山陽地方編年に直接対応させる資料には乏しいが、41の台付壺は、真備町黒宮大塚[13]の石室上の土器に類似品がみられ、これは鬼川市Ⅲ式に対応されている。
また、59の高坏形土器と57の２式高坏形土器の間には、大きな時期差を認めがたく、山陽地方編年の鬼川市Ⅲ～才の町Ⅰ式に概略対応できるものと考えられる。

４式土器に至って、東部の影響が顕著に表われてくる。中でもタタキ成形土器の盛行が特徴である。

同時期資料は、美作地方では、二宮遺跡No.35袋状ピット、天神原遺跡溝出土土器がある。31の甕は、天神原遺跡に類似した資料があり、東に目をうつすと、佐用町・本位田遺跡[14]、太子町川島立岡遺跡ＳＤ20に類似資料が存在する。この甕とともに胎土、器形の点で搬入品とみられる71の器台形土器[15]の類品が本位田遺跡にあり、立岡遺跡の壺形土器口縁と分類されている土器の中にもこの手の資料がある。

ちなみに胎土、器形の点で71例にもっとも近いものは、但馬の城崎町弥布ケ森遺跡[16]に出土例があり、この地方からの搬入品である可能性が強い。

62の高坏も同様川島立岡遺跡ＳＤ20に類品があり、この平行関係はほぼ認めてよかろう。44、43の鉢及び台付鉢は、県南部の酒津遺跡出土土器に対応でき、上東遺跡編年才の町Ⅱ式～下田所式資料に対応するものと思われる。

一方西に目をうつすと、谷尻遺跡[17]No. 176土坑の二重口縁鉢及びタタキを有する甕形土器、No.

192溝出土の壺形土器にも４式土器の類品がある。

４式土器で山陰地方と直接対応できる資料はないが、鼓形器台の特徴からおして、青木遺跡Ⅴ式に近いものと思われる。

５式土器は、美作地方では、二宮遺跡No.42袋状ピット出土のものがある。しかし、これ以外今のところ、散発的資料のみで、まとまったものはない。

山陰地方では、秋里遺跡Ａ６－Ａ７区土器群の資料と二宮遺跡No.42はよく似ており、14の壺形土器は、秋里Ａ６－Ａ７[18]区出土土器群、青木ＦＳＸ03、神原神社に類似資料がある。
また、壺形土器13は、青木ＦＳＸ03と類似するといえよう。神原神社[19]例からおして最古式古墳は、この時期に発生したと考えられるが、大田十二社５式はこれらの資料と比べ、やや古い様相をもっているので、これらのものとの厳密な併行関係、古墳発生期との関係については、さらに厳密な分析が必要とされ、現時点では弥生式土器の範ちゅうの中でとらえられる。

山陽地方と５式土器を対応させる資料には乏しいが、亀川上層式にまでは下らぬものと考えられ、藤田編年の仮称才の元式資料に対応するものとできよう。

(注)

① 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第４号』1979年

② 河本清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会　1975年

③ 津山市沼字松山に所在する弥生時代集落遺跡。宅地造成に伴い1978年に沼Ｅ遺跡発掘調査委員会が調査。報告書近刊。遺跡概要は、
河本清、柳瀬昭彦「沼Ｅ遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告９』岡山県教育委員会　1978年に紹介されている

④ 村上幸雄、橋本惣司『稼山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979年

⑤ 伊藤晃、柳瀬昭彦、池畑耕一、藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２』岡山県教育委員会　1974年
柳瀬昭彦、江見正己、中野雅美「川入上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会　1977年

⑥ 杉谷愛象他『大桷遺跡Ⅰ』鳥取市教育委員会　1978年

⑦ 青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青木遺跡発掘調査団　1976年

⑧ 葛原克人、高畑知功、二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会　1978年

⑨ 注④に同じ

⑩ 近藤正、前島己基「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌第57巻第４号』　1972年

⑪ 注⑦に同じ

⑫ 栗野克己、山磨康平、泉本知秀「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会　1973年

⑬ 間壁忠彦、間壁葭子、藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報第13号』1977年

⑭ 井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書、佐用編』兵庫県教育委員会　1976年

⑮ 川島立岡遺跡調査報告書刊行会編『川島立岡遺跡』太子町教育委員会

⑯ 兵庫県教育委員会　松下勝、櫃本誠一の好意により実見させていただいた。

⑰ 高畑知功、井上弘他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会　1976年

⑱ 加藤利晴、杉谷愛象、辻本武、平川誠「秋里遺跡」『鳥取市文化財調査報告Ⅳ』鳥取市教育委員会1976年

⑲ 前島己基、松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌第62巻第３号』　1976年

③ 土器の胎土分析について

分析目的

美作は、瀬戸内文化圏と日本海文化圏との接点にあって、常に両地域の社会的文化的影響を受けつつ今日に至っている。すでに弥生時代中期の土器において、播磨地方の影響が観察されるとともに、後期に至り日本海側の影響が認められることが古くより推測されてきた。

近年、大田十二社遺跡及びそれに引きつづく京免遺跡の発掘調査によって、いわゆる「山陰系」土器が大量に出土し、日本海側と美作地方の交流を探る資料が量的に増大してきたのである。

こういった経緯の中で、「山陰系」土器と在地系土器との相互関係を把握するために、型式学的分析による細部検討を加えるとともに、岩石学的方法による土器胎土分析によって、在地製の「山陰系」土器と搬入品そのものが区別しうるか否かが、まず当面の課題となってきたのである。

型式学的な類推に基づく「搬入品」という判断が岩石学的分析による産地同定によってその客観性を与えられるとすれば、またさらに搬入品と在地製「山陰系」土器が峻別できうるとすれば、次のような課題を追求することに手がかりを与えることになろう。

たとえば、従来、形態及び技法上の類推によって求められてきた広範囲な地域の土器編年に、一定の共時的指標を与え得るということ。周辺地域の土器様式の影響のもとに成立した在地製土器様式の継承パターンの設定を可能にすること。あるいは、搬入距離と搬入器種との弁別によって、その交流内容の本質を追求する道を与えるということなどである。

今回の胎土分析に供した資料点数は6点という極く限られた数であり、資料選定の上で体系的方法に基づくものでもなく、分析によってもたらされる追求を可能とするためには、相当まとまった体系的資料分析が必要であることはいうまでもない。

また今回の報告は、中間的なものであり、さらに厳密な分析途上のものであることを申し述べねばならないとはいえ、分析資料が二群に大別されえるという結果を得たこと、それはまた土器の形態及び技法上から推定した「搬入品」という判断と必ずしも矛盾しないということは、上記のような課題を追求する上で一つの見透しを与えるものと思われる。

資料の選定

形態及び成形技法を基準に、搬入品6点、これとの対比資料として在地製と思われる3点を選びだした。これらは、搬入品と考えられる多数の土器片のうちのほんの一部であり、完形品は除外している。

在地製と考えられた3片の土器の選出は、必ずしも形態、技法にわたる細部の検討を加えた

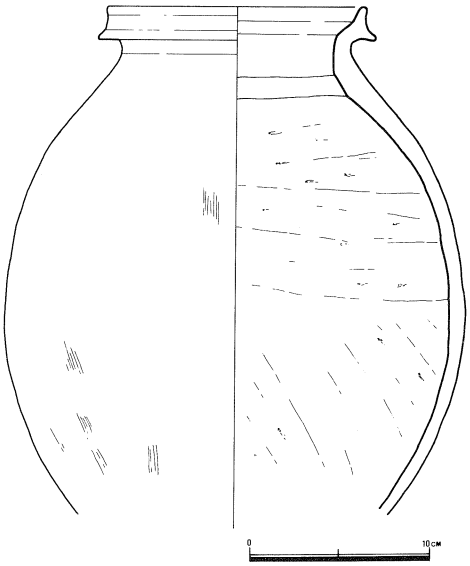
のちになされたものではないが、一見して在地製と考えられる破片が多く、この中から任意に選びだしたものである。「搬入品」6点の選出根拠及び所属時期は次のとおりである。

試料ＮＯ．１は、ＰＥ45、Fig.62-9の5期に属する甕形土器である。全般に、器壁は薄く白っぽい胎土で、肩部分に櫛描波状文を巡らすもので、5期に外部の影響を顕著に認める一群の土器の中から、肉眼観察により搬入の可能性のあるものの1つとして取り出した。

試料ＮＯ.2は、ＰＥ25、Fig.57-2のタタキ成形による壺形土器片。4期にいたって、タタキ成形土器が盛行するが、このうち器形からみて搬入の可能性のあるものとして選んだものである。

試料ＮＯ.3は、ＰＥ24、Fig.57-3の4期に属する器台形土器で、器形の点で美作地方には類がなく、タタキ技法に伴い搬入された土器の一つとして、また器台という器種の特異性を考慮に入れ選定した。

試料ＮＯ.4は、右図の2期に属する丹彩甕形土器で、肉眼観察により、灰白色の砂っぽい胎土を有するものと判断されたため選んだものである。発掘資料でなく、造成工事中に配石遺構群中より発見されたものである。



試料ＮＯ.5は、ＰＥ38、Fig.61-11のくの字形口縁をもつタタキ成形による甕形土器で、5期に属するものと思われる。タタキ成形土器の中にあって、やや仕上げ調整の上で異質な点が認められるもので、搬入品の可能性のあるものとして取り上げたが、特に想定される出土地域もなく、ごく付近の集落から持ち込まれた可能性もある。

試料ＮＯ.6は、沼京免遺跡の環濠内から出土した甕形土器細片である。ＮＯ.1とほぼ同じ基準でとりあげたものである。

試料ＮＯ.7～ＮＯ.9は、袋状貯蔵穴Ｐ43、配石遺構中の土器細片から、肉眼観察により在地的様相を濃くもっているもの3片を任意に選びだしたものである。（中山俊紀）

方法と結果

分析方法は、資料となる土器を薄片とし、含有する岩石鉱物を偏光顕微鏡で同定し、それらの種類、性質によってその試料が如何なる地質に基づくかを考察するという手順をとった。

薄片の作成は、まず土器試料の粘土及び砂粒の空隙に加熱したカナダバルサムを吸収させ、試料を堅固にし、研磨砂によって2/100～3/100㎜の厚さにした。

この際、カナダバルサムの加熱温度は100℃を越えないように調節したので、岩石鉱物の結晶変化に影響を及ぼす恐れはない。

こうして作成したプレパラートを、偏光顕微鏡によって岩石学的方法と同様の手順により、試料に含有される岩石鉱物の種類、性質を同定していった。

胎土の岩石鉱物の分類は、第１表に示す。以下に分類基準について述べる。

(1) 鉱物とは単一の結晶として存在するもので、岩石とは複数の鉱物から成り、岩石名を与えるのに十分な組成のものをいう。複数の鉱物からなるが、岩石の部分的破片であるため、その組成比が不自然で岩石名を与えることができないものについては、それぞれを個々の鉱物として分類した。

(2) 第１表中の１～４の数字は、薄片中での面積量の相対比を示すもので、４＞３＞２＞１の関係を示す。４は全岩石鉱物のほぼ半ばを占めるものであり、１は微細片として存在しているもので、面積量が非常に微量なものを示す。

(3) 石英には自形をとり正常な消光性をもつものと波動消光を示すものとを併せ含める。ただし、変成作用によって生じた片理をもつ波動消光の石英は、この項から除いた。

(4) カリ長石は、その結晶的特徴によってパーサイトと微斜長石に細別する。

(5) 輝石は、光学的性質によって紫蘇輝石、普通輝石などに細分可能なものがある一方、結晶が微細であるため、細分が困難なものもあるために、ここでは輝石として一括して分類した。

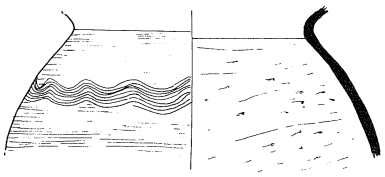
第１表　分析土器の岩石鉱物と胎土組成分類

岩石鉱物 / 試料	石英		カリ長石		斜長石	黒雲母	白雲母	角閃石	輝石	ジルコン	カンラン石	緑簾石	不透明鉱物	火山岩	火山ガラス	結晶片岩
	一般形	波動消光	パーサイト構造	微斜長石												
1	4	4	3		2	2		2	2				1	2		1
2	4	4	3	2	2	2		1	1	1			1	2		
3	4	3	2		2	2		2	1				1		1	
4	4	3	3	1	2		1	1		1	1		1			
5	4	3	2		1		1	2	1				1			2
6	4	4	3	2	2	1		2	1				1			
7	4	3	3		2	1	1	2		1	1		1			1
8	4	3	3		2	2	1	2					1			1
9	4	3	3	2	2	2	1	2	2			1	1			2

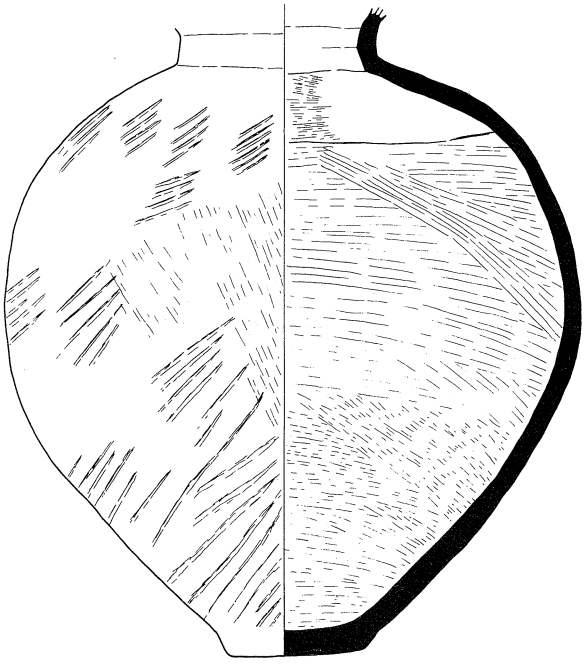
分析にあたって、中国山地、日本海側、瀬戸内側の３地域を区分する視点でみれば、胎土に含まれる火山岩の種類が１つの手がかりを与える。

分析結果から、試料１、２には安山岩と考えられる火山岩が、また試料３には細片であるが火山ガラスが含まれている。この点で、以上の３点は他の６点と区別できる。

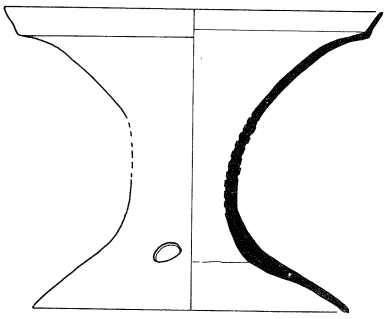
ただし、これらの火山性岩石鉱物は、いずれも細片で、詳細な種類の細別を行なうことは難かしく、産地を限定する要素としては弱いが、大づかみな推定として、３点の土器の産地を山陰から中国山地北半部の地域と考えて矛盾のないものである。（清水芳裕）



分析試料No. 1（PE45）



分析試料No. 2（PE25）



分析試料No. 3（PE24）

2．住居群構成の分析

大田十二社遺跡の住居群構成を分析するには、あまりにも不確定な要素が多く、客観的に群構成を復元することは至難のわざである。群構成の復元を困難にする主な原因は、個々の住居の使用期間が不確定な点と、土器形式と住居使用年数の間に不一致が考えられる点に集約されよう。

本項では、調査中の印象を基に土器の五期区分を前提として一つの群構成試案を呈示したい。

大田十二社遺跡の住居群を近接した住居群にグルーピングすると大略図のようなA、B、C、Dの４区分が可能なように思われる。

A群は、４号、５号、６号、12号。B群は、２号、14号、18号、21号。C群は、１号、10号、15号、19号。D群は、３号、８号、13号、16号の各住居で構成されている。

このうち、心をずらして重なりあう９号３号住居、19号15号住居、13号北南の住居をみると、いずれも連続的に建設されたとみることに矛盾はなく、この点で近接した住居相互に強いつながりのあることが暗示されている。

各群ごとに、住居の時期別動きをみると次のようになる。

	１　期	２　期	３　期	４　期	５　期
Aブロック		12号住居	→６号住居	→５号住居 →４号住居	
Bブロック	21号住居	→14号住居 →18号住居		→２号住居	
Cブロック	19号住居→15号住居	→10号住居	→１号住居		
Dブロック	９号住居	→３号住居 ８号住居	→13号住居 →16号住居		

各ブロックの住居群の形成と消滅について、不一致はあるもののこの表にみる限り、しいて住居群内の不連続を考える必要はない。また、土器の一型式内に複数の住居が重なる場合も土器を詳細に検討すれば、新古の区別がつきそうで、こうしてみると各ブロックの住居は、常に一軒を大きく出ることはない。

従って、大田十二社遺跡の同時併存住居は、常に３、４軒、１群で構成されていたとみることが出来る。また各ブロックの竪穴住居には、機能上に大きな差を認めがたく、住居＝小家族の傾向が強まっている可能性を示さしている。

しかし、一つの祭祀場を共有するらしい点、袋状貯蔵穴が時期別に集中する点で個々の住居は、それぞれ独立していたのではなく、強いつながりのもとに成立していたことを考えさせられる。

水田経営を前提にして考えれば、これら数軒の単位が耕作と消費の単位であったことが考えられよう。

しいて推測すれば、各竪穴ごとに小家族形態が機能しつつも、それを越えたつながりが社会的に基本となる関係をもっていたと考えることができよう。

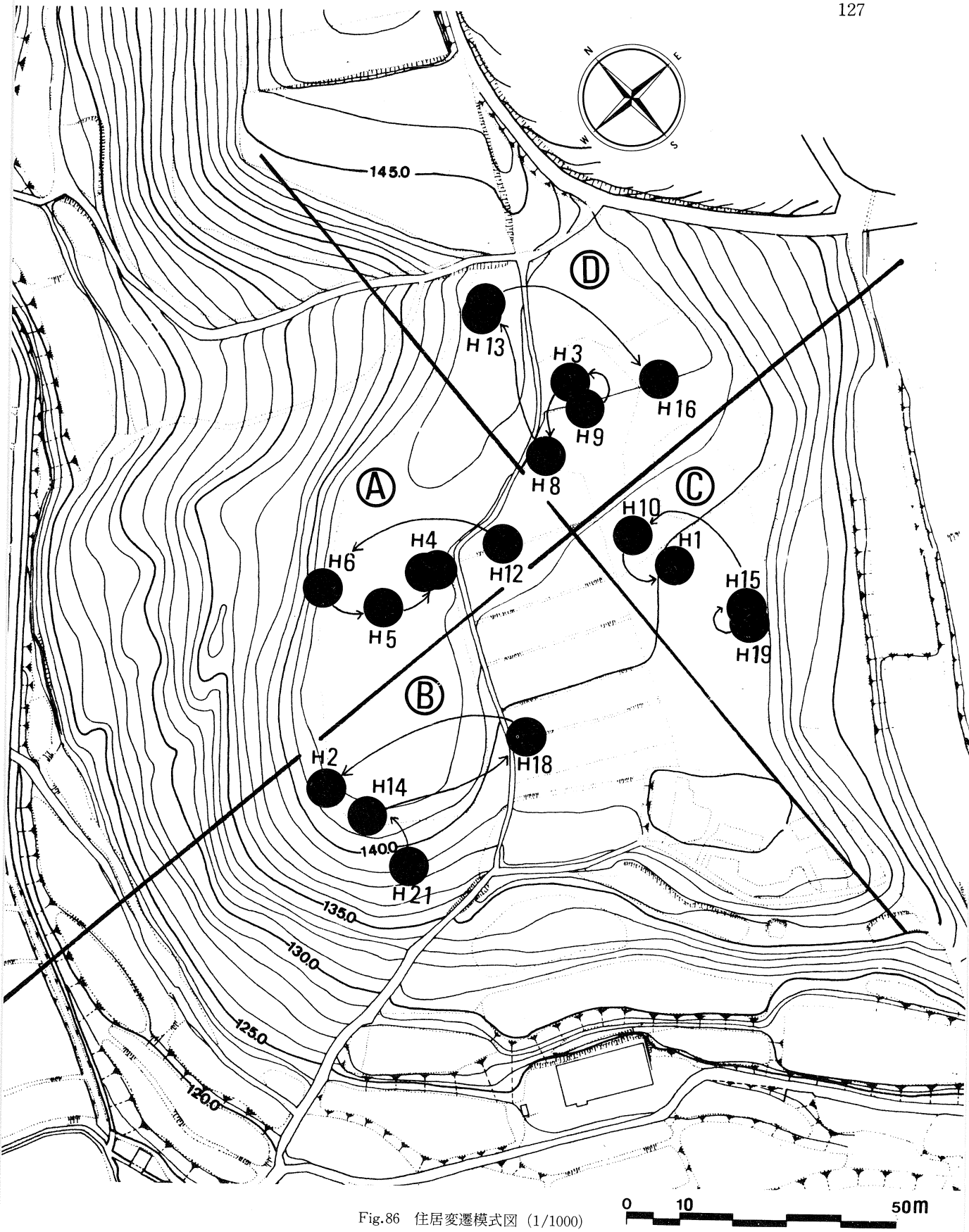


Fig.86　住居変遷模式図（1/1000）

3．貯　蔵　穴

1．袋状ピットは墓か

袋状ピットが貯蔵穴であるという認識は、その使用法について諸説があるものの今や通説となっている。しかし一部に墓説をとるものもあるので、この点にまずふれておきたい。

墓説の根拠は、袋状ピットに砥石や石錘が伴うこと、ピットの一部に不透水層をつき破るものがあるという点である。これ以外に墓説の根拠として、縄文時代の二次埋葬に袋状ピットを利用しているものがあるということらしい。

しかしいずれもこれらの根拠から墓説を唱えるのは、根拠にとぼしいように思われる。まず、袋状ピットは使用後ゴミ穴にされたとみられる例が多く、墓のありかたとしてはふさわしくなく、当然この際砥石や石錘の混入が考えられる。また一部に不透水層をつき破っているものがあるとしても、当時の地下水位が必ずしも今のそれと一致する保証はない。むしろ、近年の中国地方の調査例は、高燥の場所に配慮してつくられているとみられるものが大半である。

大田十二社遺跡の袋状ピットを貯蔵穴とみるのは次の点にかかっている。まずその位置は、いずれも高燥の場所に位置しており、占地条件の第１に防湿が考えられていたとみられる点。また、集落内の住居配置にオーバーラップするものの多いのは、弥生時代後期のものとして日常的用途を考えさせるに十分である点。また、放棄後ゴミ穴としてつかわれたらしく底部近くにいたるまで土器片の厚く堆積したもののある点。さらに、完形土器を残したＰＥ55についてみた場合、壺、甕、高坏、椀、台付鉢と日常土器のセットがあらわれており、またＰＥ25では２個体の壺が倒立しておさめられているなど、日常生活をほうふつさせている。

北九州の袋状貯蔵穴は炭化玄米を出すものが多く、貯蔵穴であることが確実視されており、九州でも後期に袋状貯蔵穴が存在するので、これとの対比は十分可能である。中国地方では数少い例であるが、岡山県阿哲郡大佐町[①]で袋状貯蔵穴底部に炭化玄米が発見されており北九州の例とならんで中国山地の袋状貯蔵穴も第一義的には米の貯蔵に備える穴倉とみてよいように思われる[②]。

2．使用法について

袋状貯蔵穴の使用法については、壺などを利用してその一部を貯蔵にあてるという見方と、貯蔵穴の大部分を貯蔵にあてるという二つの見方ができる。いずれの使用法がとられたかを積極的に証明するにたる根拠は確認されていない。

北米プエブロインディアンの使用例がＣ．Ｄ．Fordeによって紹介されているのでこれを一つの参考例としてあげておこう。Fig.87がプエブロインディアンの袋状貯蔵穴の模式図[③]で大田十二社のものに比べ規模は相当大きい。プエブロインディアンのものは、壁面を草で綿密におおいトウモロコシとカボチャを内部一杯につみあげている。密ぺい部には段をつけ丸太をわた

て獣皮で二重におおい間層に土か草を用いている。密ペイ部上面が地表と同レベルになるようにし、上屋構造はともなわない。

北九州の袋状貯蔵穴には、こういった密閉部の段に似た構造をもつものが存在しており、今後こういった点の検討が加えられることが望ましいように思われる。④

ところで、プエブロインディアンは一般にStore house をもっているが、こういった貯蔵穴を利用するのは、Fordeによると外敵からの略奪防止のためであるという。

3．高床倉庫との関係

津山盆地でも、中期後半の住居群に高床倉庫が普遍的に付設されるらしく、沼遺跡⑤、押入西遺跡⑥、鮒込遺跡⑦などで倉庫と考えてほぼまちがいのない建物址が発見されている。

後期にも、天神原遺跡⑧や紫保井遺跡⑨で倉庫とみられる建物址がみつかっており、天神原遺跡では、袋状貯蔵穴も合わせ発見されている。大田十二社遺跡では建物址がみつかっていないが、トレンチを広げる調査法がとられたこともあり、本来備わっていたと見た方がよい。

高床倉庫、袋状貯蔵穴相方に米が蓄えられていたとすれば、両者には役割の相異が存在していたにちがいない。

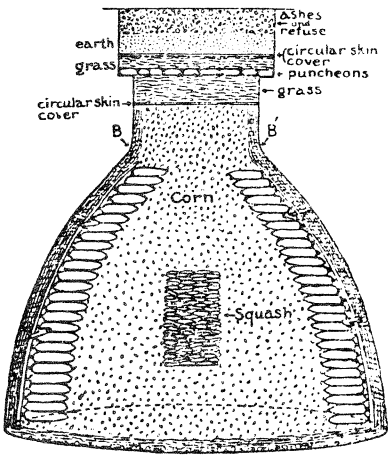


FIG. 85. HIDATSA CACHE PIT ABOUT 7 FEET DEEP (*After Wilson*)

Fig.87　プエブロインディアン貯蔵穴模式図

4．袋状貯蔵穴の時期

大田十二社遺跡で発見された袋状貯蔵穴で時期の推定できるものは、1期に属する1例以外すべて2～5期に属するものである。

大田十二社遺跡だけに限っていえば、2～5期にかけ増加するようにみられ、後期にそれは特徴的発達を示したとみられる。

周辺の遺跡をみわたした場合、確実に中期に属する例としては、美作町高本遺跡⑩、米子市青木遺跡⑪のものがあるのみで、津山周辺にはまったく発見されていない。津山周辺の中期に属する集落遺跡の発掘例は相当数あるが、今までに発見されていないところからみて、今後発見されるとしても、きわめてまれな例となろう。

ところが、後期の例としては、桃山遺跡⑫、天神原遺跡⑬、内山遺跡⑭、二宮遺跡⑮、釜田遺跡⑯、荒神遺跡等と多数の発見がある。このことからみて、袋状貯蔵穴はこの地方では後期にいたり著しい発達を示すとみて大きな誤りはないであろう。

後期に発達する要因は、二つの側面から考えることが可能なように思われる。その一つは、

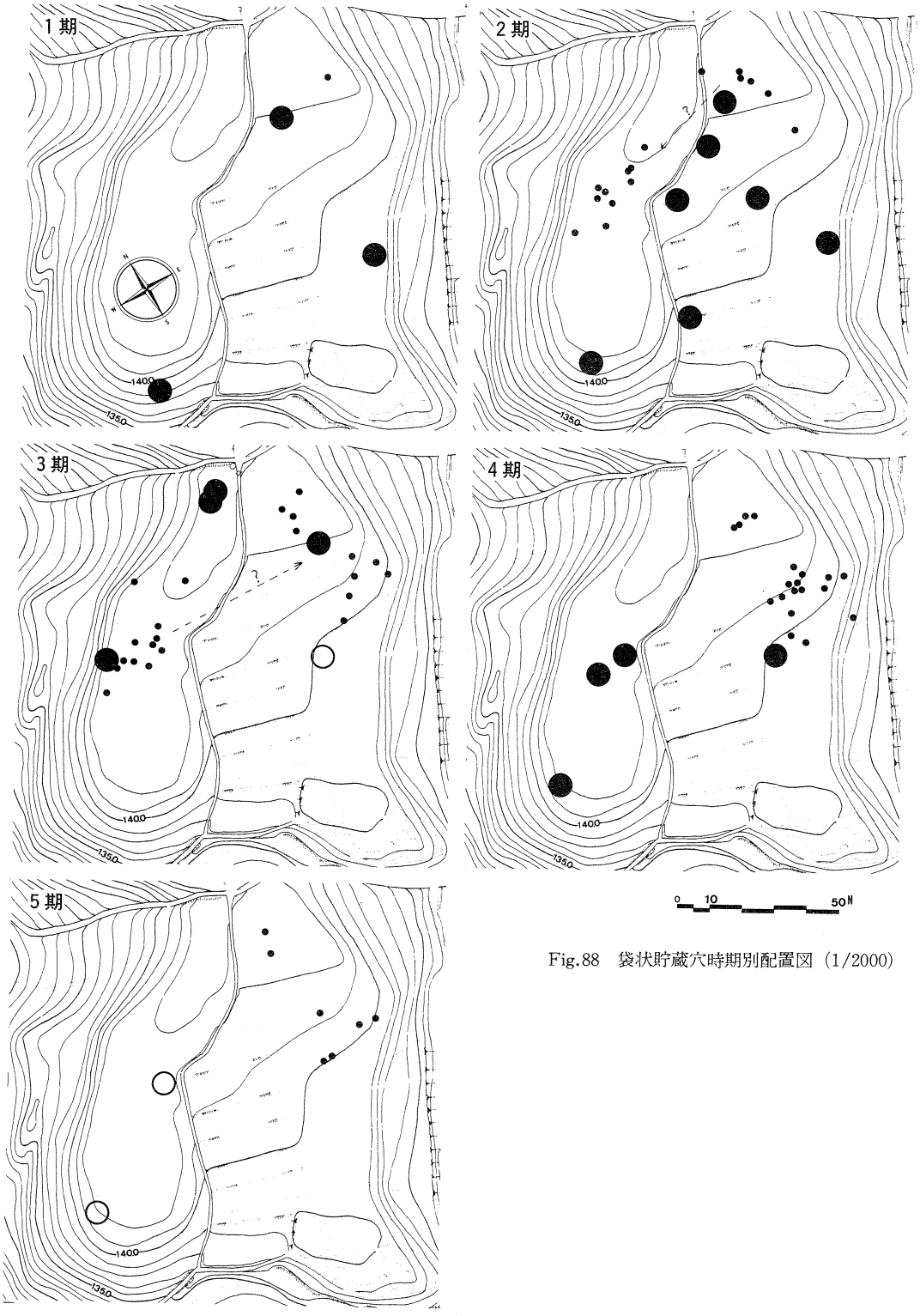


Fig.88　袋状貯蔵穴時期別配置図（1/2000）

外部の文化的な影響によって導入され盛行したとみる考え方と、内部的な生活環境の変化によって、袋状貯蔵穴がその変化に良く対応する性格をもっていたとする見方である。

前者については、周辺部のデーターが今だそれほど整っておらず、後者については、そのことを考えるにたるほどの集落分析がおこなわれていない。勿論両者は、相矛盾するものではなく、今後この両側面から貯蔵穴の分析を進める必要があろう。

5．袋状貯蔵穴の群在傾向について

大田十二社遺跡の場合、袋状貯蔵穴は集落各所に不規則に分布するようにみえる。しかし、大まかに押えた小時期ごとの分布をみると、一定の群在傾向が読みとれる。1期の1例は別としても、2～3期のものは主として西平担部につくられており、4、5期のものは東平担部に集中している。貯蔵穴の耐用年数がどの程度のものであったかは不明であるが、同時存在の貯蔵穴が単数であったことはまず考えられず、複数存在したことは確かなように思われる。

住居との関係を細く見ていった場合、個々の住居に付設された可能性のあるものもないではないが、特に各住居と貯蔵穴が対応する関係は分布上からは考えられない。むしろ、住居群と概ね対応する可能性の方がずっと強い。貯蔵穴の個別性を強調して、小住居群の分解を考慮することも消極的には可能であるが。一地点に集中して造られたことの方にむしろ意義をみとめて、この点に着目したい。

(注)

① 福岡市教育委員会　池崎譲二の教示を受けた。

② 橋本惣司「大佐町田治部発見のピット郡」『岡山県埋蔵文化財報告Ⅰ』岡山県教育委員会1971年

③ Forde , C.D. “Habitat Economy and Society”、Methen & Co. Ltd . 1971年

④ 「津古内畑遺跡」『福岡県三井郡小郡町津古遺跡発掘調査概要』小郡町教育委員会　1970年

⑤ 近藤義郎、渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」『津山郷土館考古学研究報告第2冊』津山郷土館1957年

⑥ 橋本惣司、井上弘、柳瀬昭彦、下沢公明「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会　1957年

⑦ 津山市草加部に所在した弥生時代中期の集落遺跡。工業団地造成に際し、1976～78年に草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が調査。

⑧ 河本清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会　1975年

⑨ 津山市紫保井に所在する弥生時代の集落遺跡。大規模農道敷設に伴い1976年紫保井遺跡発掘調査委員会が調査。

⑩ 山磨康平、岡田博、井上弘「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会　1975年

⑪ 青木遺跡発掘調査団編「青木遺跡発掘調査報告Ⅰ」青木遺跡発掘調査団　1976年

⑫ 河本清「津山市桃山作陽高等学校弥生時代竪穴群」『古代吉備第5集』古代吉備研究会　1963年

⑬ 津山市総社に所在する弥生時代後期集落遺跡。交通公園の建設に際し1976年に津山市教育委員会が確認調査を実施。

⑭ 葛原克人、高畑知功。二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会 1978年

⑮ 村上幸雄、橋本惣司「稼山遺跡群Ⅰ」久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979年

⑯ 注⑮に同じ

4．配石遺構をめぐる若干の問題

配石遺構については、傾斜面がやや平坦となる位置に存在することから単なる石及び土器の捨場とする見解があった。この意見によると、配石遺構 101についても一定のまとまりをもっているようにみえるが、これも単なる偶然の所産によるものとするのである。

しかし、こういった見解は以下の２点によって成立し難いものと思われる。

第１点は、石群は直径１ｍ内外の環状単位をなしており、発掘範囲内でそれが少くとも二大単位の円形配石群にまとまると観察される点①である。これは、縄文時代の関東地方や中部地方で発見されている墓群ないしは祭祀遺構とされる配石遺構（環状集石群）②と現象的にきわめて類似しており、単なる偶然によるものとは考えにくいことにある。

第２点は、配石遺構 101には石棒が本来立っていたような状態で発見されており、土器片のあり方にも一定の規則性が認められ、その中心部下部には完形の椀形土器が伏せられて置かれていたことにある。この点縄文時代の配石遺構(集石群)とも構造的に一致すると考えられる。

これら二点から、この配石遺構の形成を偶然の所産にする可能性はほとんどないものと判断される。

配石遺構 101によせられたもう一点の疑問は、石棒は縄文時代の製品で配石に用いられたのはまったく偶然によるのではないかというものである。しかし、縄文時代のこの種の配石遺構（集石群）の小単位に石棒ないし石棒状の自然石が伴う例が多いということ③からみて、石棒の存在はやはり全体構造の中から推し計られるべきものと考えられる。

また、弥生時代の石棒が存在する例は西日本に少数例あると聞くし、岡山県内でも邑久町門田遺跡④では前期に属するとみられる、また山陽町用木山遺跡⑤には中期に伴うとみられる石棒が発見されており、同一機能を有する木製品の存在も考えられ⑥ないことはなくこの点からも石棒を必ずしも縄文時代のものとする必要はないものと考えられよう。

以上の前提が認められるとして、以下本遺跡の配石遺構の性格について若干言及したい。

まず、大田十二社遺跡の配石遺構は祭祀遺構か墓址かという点であるが、結論からいえば墓の可能性は薄く、墓であるとしても通常の墓とは認めがたいということである。

その第１点は、配石を断ち切った下部の土層観察によっても、墓壙とおぼしき明瞭な落ち込みが認められなかったことである。通常この時期の墓地は、木棺墓を主体としており、明瞭な掘り方が認められる。配石遺構下に木棺墓ないし同類の下部構造が存在しておれば当然確認できたはずである。

第２点は、出土土器には内面をていねいに仕上げ壺棺として用いられた可能性のあるものや高坏形土器が目につくとはいえ、配石遺構 101に混入していたＳ字形スタンプ文様を伴う器台片１片以外、この時期の墓地でよく見られる葬送用土器片が発見されなかったことである。

このことから、この配石遺構が墓としての機能を有していたとしても通常の墓とはそうとう異った性格のものとしなければならないだろう。従って、大田十二社遺跡の配石遺構は墓としての要素を含むとしても、本来それとは異る祭祀の場であったとするのが妥当な見解であるといえよう。

縄文時代の配石遺構（環状集石群）は、墓の可能性が強いといわれているが、そうであるとすればこの点で両者はやや相異をみせているといえる。

次に、この遺構全体をきわめて象徴的に表わしているとみられる配石遺構 101出土の石棒から、その祭祀の性格を推測してみることにしょう。

石棒と土器の間には、一定の調和した秩序がみられ、それは当時の信仰、宇宙観を端的に表出していると考えられる。石棒は、そのうちの一角を占めている。縄文時代の石棒について、筆者は土偶と信仰大系の[⑦]中で不離の関係にあるもので、いずれも埋葬儀礼にともない使用されたものと考えるので、大田十二社遺跡の石棒にも祖霊を示す位置が与えられていたと考える。このことが認められ[⑧]るとすれば、当時の人々の宇宙観に祖霊の占める割合は小さくなかったことがわかる。大田十二社遺跡の配石遺構は、本来墓であったと認めにくく、墓は後期にいたり集落と分離傾向を示すので、墓としての性格を強調する場合二元性をおびたものとなろう。

一方、文献記録や民俗資料によれば、石棒類似品が豊じょう儀礼に変容し狩法神事としてあらわれているものなどがあり、配石遺構101の天地四方観は農耕祭祀を推測させるものがある。

おそらく、これら諸要素が[⑨]揮然とからみあって表われたものが、本遺跡の配石遺構であるとするのが、もっとも事実に近いものといえよう。

（注）

① 躊躇する筆者を説得した奥和之に深謝。縄文時代の類似構造を知るに及んで筆者も確信するに至った。

② 笹沢浩編「阿久遺跡発掘調査概報」長野県中央道遺跡調査会調査団　1978年

③ 亀井正道の教示による。

④ 近藤義郎の教示による。

⑤ 春成秀爾の教示による。

⑥ 神原英郎「用木山遺跡」岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地埋蔵文化財発掘調査概報 4　山陽町教育委員会

⑦ 「大田十二社遺跡調査略報」　津山市教育委員会　1976年

⑧ 土偶は、母系原理をあらわし、石棒は父系原理を表わす、ともに埋葬に際し用いられたもので、両者のからみあいの中で縄文社会が理解できる。このうち土偶は葬送に際しつくられ、衷明けとともに打ちこわされた。縄文土偶のあり方は地中海地方の女神像に一脈通ずるものがあり、この点縄文時代研究者の今後の研究を期待するものである。

⑨ 国分直一「日本民族文化の起源」慶友社　1970年

5. 鉄　　器（Fig.89・P.L.29）

全体で7点の鉄器が出土している。その大半は弥生時代に属するものであり、器種は鉈が4点、不明のものが3点ある。

1は4号住居址の埋土中から出土した鉈で、先端と下端を欠失している。基部は幅1.2㎝、厚さ3.5㎜の板状を呈し、現存全長は7.4㎝。錆化が激しく判然としないが、刃部の復元長は2.5㎝前後になると思われ、わずかに反っている。2も1と同形の鉈で、13号住居址埋土中から出土したものである。先端部を欠失しており、現存長は8.15㎝。基部下半は、幅がわずかに狭まる傾向を示すが、欠損したものである可能性もある。基部の表裏面には木質が残存しており、木目方向はいずれの面においても長軸と平行しているが、残存状態の良い裏面下半部の側辺付近には、長軸と直交する繊維方向の樹皮状のものが、木質を覆う状態で部分的に認められる。刃部の復元長は3㎝前後である。3は完形の鉈で2号住居址床面から出土した。全長15.5㎝、重さ32g をはかる。刃部の長さは2.7㎝で、1・2に比べて刃部の反りが顕著である。木質らしいものが基部下端近くの表面にわずかに認められるが、木目の走向等は不明である。基部は1・2と同様に扁平な板状を呈し、中央部の幅は1.1㎝、厚さ3.5㎜である。4も鉈と考えられるものだが、前三例と形状を異にする。ＰＥ61の底面近くから検出されたもので、全長11.5㎝、重さ12.5g をはかる完形品である。全体に細身で、刃部の長さは3㎝をはかるが、先端部分の反った箇所が機能部と思われる。刃部から基部への移行部分は明確でなく、次第に扁平な板状の基部に移る。基部下半は、片側に段を持って幅狭となり、鏃等の茎に近い形状を持つ。さらに下端部をねじっている。以上の特徴ある形態からみて、刀子を再加工して鉈としたものと考えられ、下端部の加工は、着柄を強固にするための工夫ではないかと思われる。

5･6は4号住居址床面東部に存在する別個の柱穴から、それぞれ出土したもので、器種は不明であるが茎の部分と考えられる。5は鏃の可能性のあるもので、現存長6.2㎝の角柱状を呈しており、一端は尖っている。上半部に木質が残存しており、その断面は円形を呈する。その表面には樹皮状のものが部分的に認められ、矢柄状のものに装着されていたと考えられる。6も5と同様の形状をもつが、断面は9×7㎜と太い。現長7.3㎝。これらの他に、図示できなかったが、13号住居址の1柱穴から5と同様の太さの、やはり茎の可能性のあるものが1点出土している。

以上の鉄器の所属時期についてみれば、2が3期、1･3が4～5期に属し、また4は4期に属する可能性が強い。5･6については4～5期か、あるいは奈良時代に属する可能性もある。

このように、鉈は3期から5期、つまり当地域の後期後半に属するものであるが、3にみられるように長大化したものが存在すること、そして刃部と基部との区別が明確な形態になること、この2点において弥生中期後半例と異った形態を示していることに注意しておきたい。

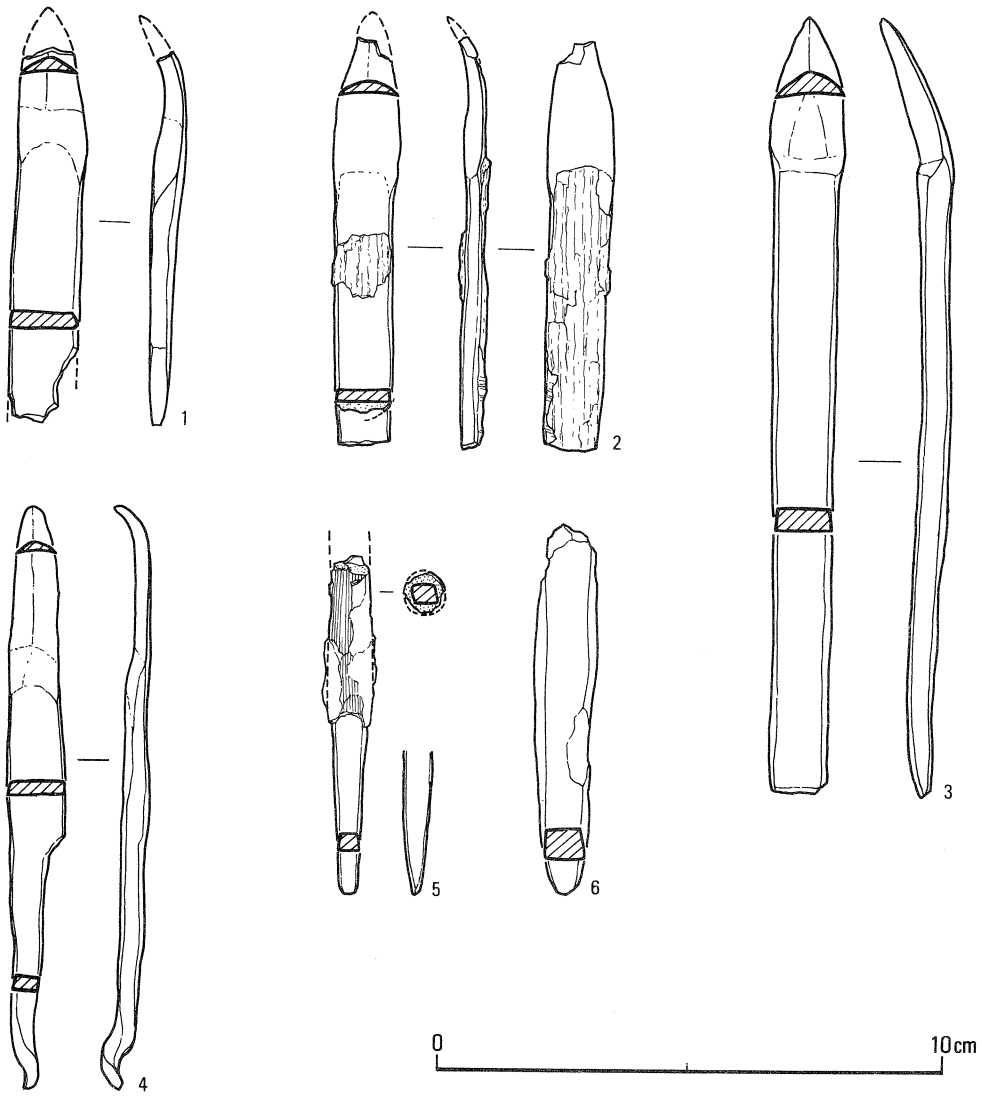


Fig.89　鉄器実測図（縮尺2:3）

さて、たまたま遺存したこれらの鉄器が、本遺跡で用いられたすべての器種でないことはいうまでもない。一方、本遺跡で出土した石器の大半は石庖丁と砥石で、その他若干みられる叩き石等を含めても弥生時代の石器群としては器種の偏在が認められる。特に、木工具、狩猟具または武器等の主要な利器類は全く出土していない。これは、当地域の中期後半までの豊富な出土例とくらべ、対照的であり、こうした利器類については他地域と同様に後期段階における鉄器化の進行を考えないわけにはいかない。また、中期後半期においても鉋などの鉄製品にはかなりの出土例があり、石庖丁にみられる特定の石器器種の存続については、それをもって直ちに鉄器および鉄生産力の高低の問題に結びつけることはできないと考えられる。

6．石　器

石器は総数23点出土した。内訳は石庖丁13点、砥石５点、スタンプ状石器１点、叩き石１点磨石１点、石錘１点、掻器１点である。

石庖丁（Fig.90、１～13）

石材は粘板岩、白雲母石英片岩、緑色片岩の３種類に限定される。粘板岩製７点、白雲母石英片岩製４点、緑色片岩製２点である。粘板岩製は２号住居址より２点（１、２）、４号住居址より１点（３）、６号住居址より１点（５）、袋状貯蔵穴Ｐ６より１点（９）、配石遺構より１点(13)、出土している。他に１点(11)遺構に伴なわず単独で出土した。白雲母石英片岩製は４号住居址より１点（４）、22号段状遺構より１点（８）、配石遺構より１点(12)出土している。他に１点(10)遺構に伴なわず出土した。緑色片岩製は13号住居址より２点出土した。これらは穿孔途中のものが１点（６）だけ含まれるがいずれもよく研磨され、２孔を有す。

さて、各石材ごとに、形態、刃部、穿孔などの特徴についてみてみよう。粘板岩製は全て半月形外彎刃と考えられる。１、13とも欠損品であるが、現存部から判断すると半月形外彎刃と考えるのが妥当であろう。１は端部から刃部にかけてのゆるやかなカーブに比べ刃部が直線になっている。これは研磨による刃部作出の切り合いが示すとおり刃部再生による直線刃と考えられる。刃部の断面形は11が丸味を帯びている他は研磨による鋭角な両刃に仕上げられている。両端は鋭角でとがっており穿孔には２つの方法が用いられている。表裏両面から穿孔するもの（１、３、５、９）と、１方向のみ穿孔するもの（２、11、13）の２方法である。前者は表裏両面から半分づつ穿孔するものであるが、大きなずれはなく穿孔具の大きさの範ちゅうに入るものである。片岩製の形態で半月形を呈すものは10だけである。残りの３点（４、８、12）は扁平な楕円形を呈す。刃部はいずれも外彎刃である。刃部は両面から研磨された両刃であるが８、10が鋭角な刃部であるのに対し、４、12は鈍角で丸味を帯びている。12は刃部端が平担に研磨されている。これは刃部の再生途中のものと考えられる。穿孔はいずれも表裏両面から半分づつ行なわれている。粘板岩製に比べて非常に雑である。表面からの穿孔と裏面からの穿孔が断面図に示すとおり大きくずれている（４、８、10）。穿孔方法は、第１段階として孔径の２倍くらいのくぼみを表裏両面から穿ち、第２段階として紐孔を貫通させるもの（４、８、10）と、くぼみをつくらせないもの（12）の２種類がある。緑色片岩製はどちらも半月形外彎刃である。刃部は表裏両面から鋭角に研磨された両刃である。７は表裏両面から穿孔しており、ずれを生じている。６は唯一未穿孔のものであるが刃部はていねいに研磨されている。

スタンプ状石器（Fig.91、14）

4号住居址から出土した。石材は砂岩である。角柱状の自然石を素材とし、4周をみがいている。下端面は折断したままの状態であり、磨滅痕は認められない。この面から４辺に対して小剝離

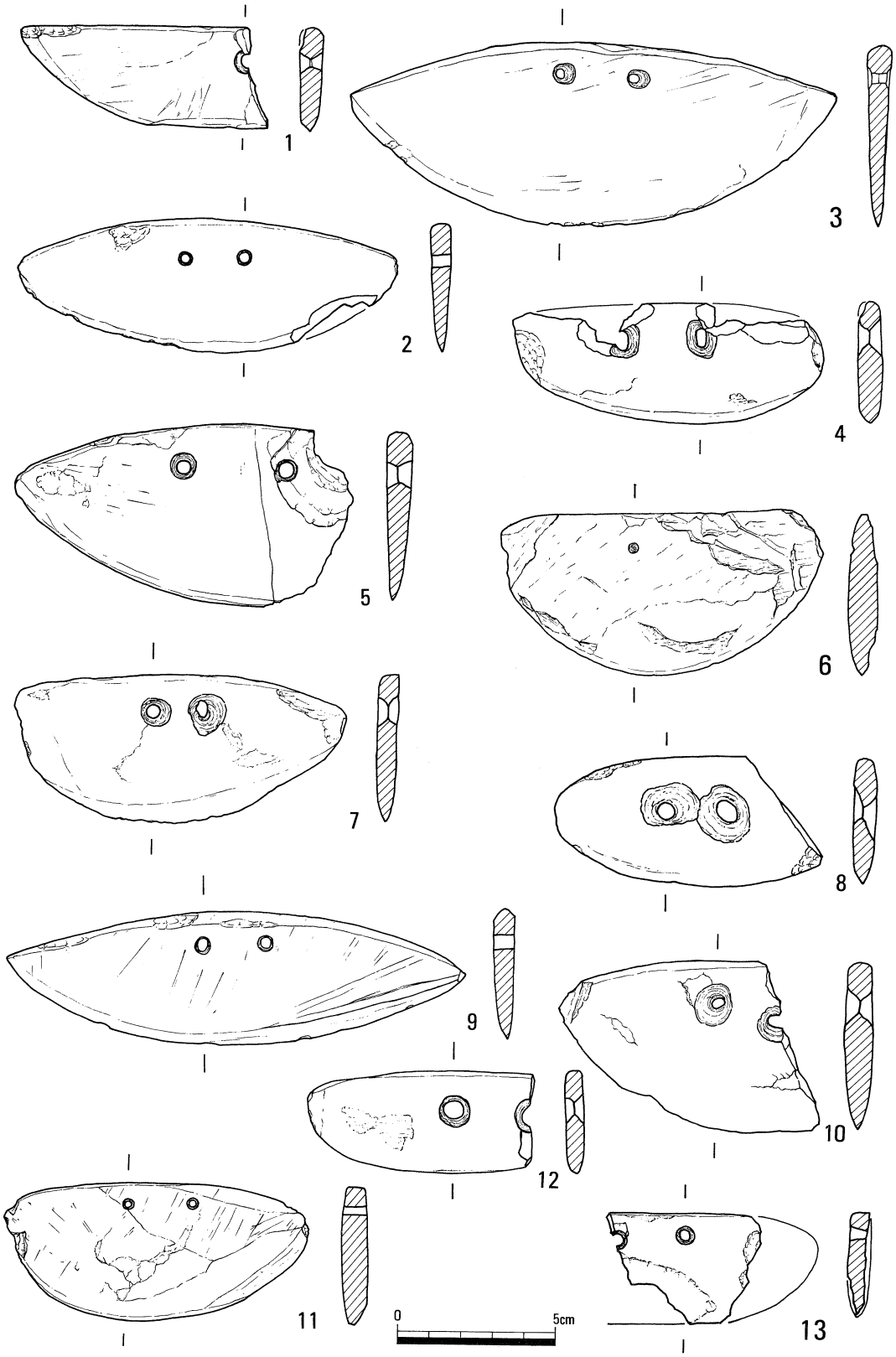


Fig.90　石器実測図（1/2）

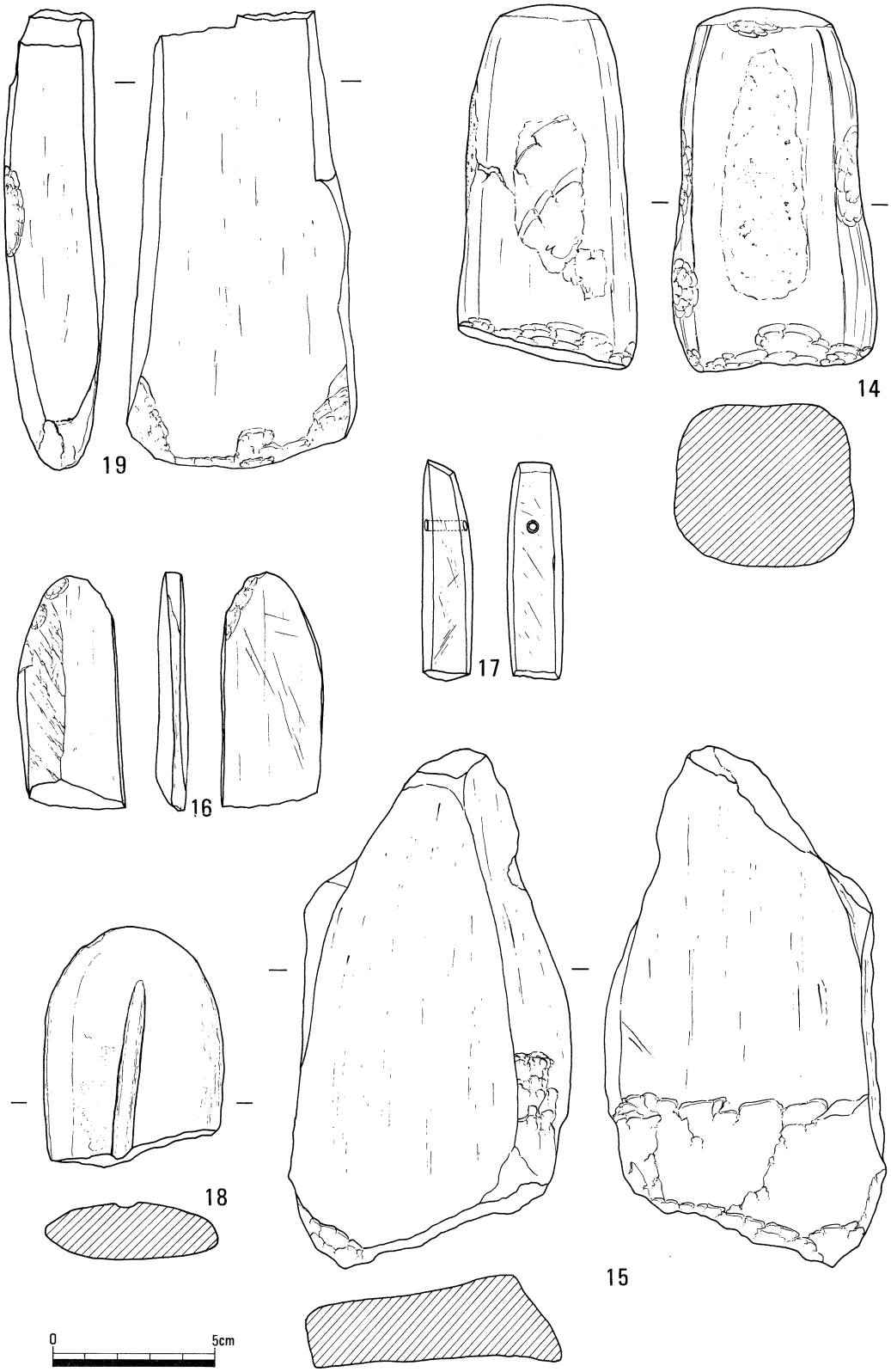


Fig.91　石器実測図（1/2）

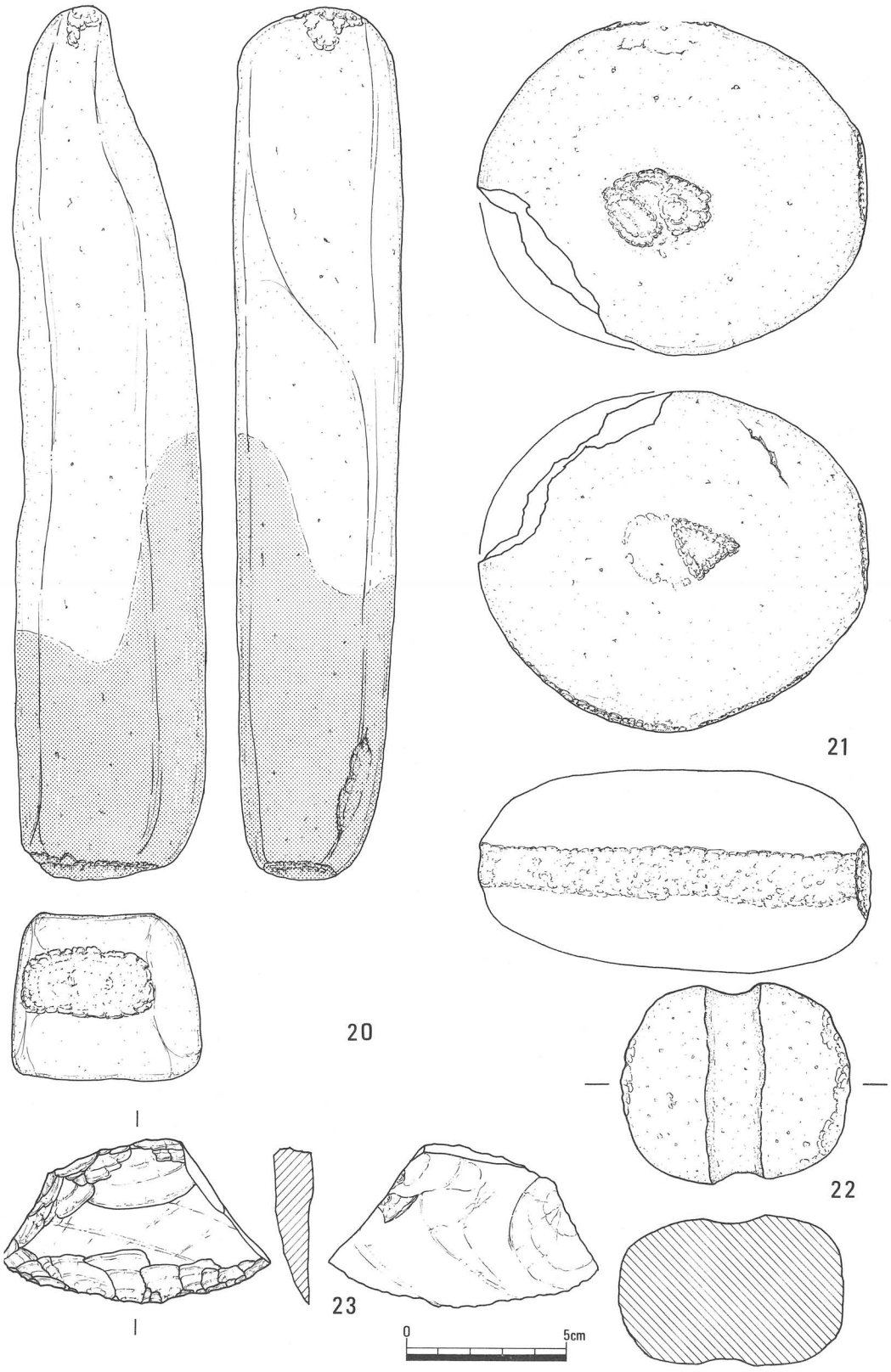


Fig.92　石器実測図（1/2）

を施している。縄文時代にみられるスタンプ状石器に類似するが、用途は不明である。砂岩製。

砥石（Fig. 91、15～19）

15、19は砂岩製である。共に偏平礫を素材とし、15は４面、19は３面を砥面として使用している。15は5号住居址、19はPE22から出土した。16、17は小型である。16は緑色片岩、17は頁岩かと思われる。16は偏平礫を素材とし３面を砥面としている。17は角柱状に整形し、４面を砥面とし、ひもを通して携行するためと思われる１孔を有す。18は半分欠失しているが、砂岩製の楕円形扁平礫を利用した１本の溝を有する砥石である。溝の幅は約６㎜を計る。恐らく鉄製品を砥いだものと考えられる。13号住居址から出土した。

叩き石（Fig. 92、20）

砂岩製の棒状礫を使用している。下端には顕著な磨滅痕が認められる。下半部は火を受けたためか赤化している。13号住居址から出土した。

磨石（Fig. 92、21）

砂岩製の円礫をそのまま利用している。表裏両面の平担面には敲打による凹みがみられ、外周には幅約1.5㎝の帯状磨滅痕がみられる。一部欠失している。縄文時代の磨石に酷似する。ＰＥ29から出土した。

石錘（Fig. 92、22）

花崗岩製である。中央部に幅約1.7㎝の糸をまくための浅い溝が一周する。Ｐ E57から出土した。

掻器（Fig. 92、23）

サヌカイト製の横長剥片を素材とする。刃部は大まかな剥離を行なった後、剥離面の切り合いによってできた稜を除去するごとく細かい剥離を施してかなり鋭角に仕上げられている。風化が激しく黄褐色を呈す。縄文時代に属するものと考えられる。Ｐ－８区より出土した。

以上、個々の石器について概観したが、石庖丁について簡単にふれておくことにする。石材は粘板岩製と片岩系製のものに大別することができる。粘板岩製は形態・研磨・穿孔など非常にていねいな作りであるのに対し、片岩系製は雑である。特に穿孔については顕著な相違が認められる。粘板岩製は小さな孔で表裏両面からの穿孔ズレはほとんどないが、片岩系製は最初にくぼみをつくり、次に貫通させるという方法をとるものもあるなどして大きなズレを生じる。未製品の問題についてみてみると、粘板岩製の未製品は１点もなく、未製品はすべて片岩系製に限定される。津山市高橋谷遺跡では、おびただしい石庖丁と未製品が出土しているが、やはり同様の事実がうかがえる。すなわち[①]、粘板岩製に未製品は含まれず、すべて完成品であり、未製品、製作時に生じる剥片は片岩系であるという事実である。これらは何を示唆するものであろうか。まず石材入手の問題と考えねばなるまい。粘板岩製はていねいに作られるということ、未製品がないということと同意であるが、製作時に生じる剥片が出土しないことがあげら

れる。これらのことから原産地から石材を遺跡に持ち込むという行為は考えられず、製品として持ち込まれたことが理解されよう。次に製作工程についてみてみよう。押入西遺跡[②]での未製品は荒割り整形後、穿孔のためのくぼみがつけられている。この工程としては、荒割り整形→くぼみをつける→穿孔→研磨仕上げが考えられる。しかし、本遺跡13号住居址出土の石庖丁(6)は穿孔途中のものであるにもかかわらず、刃部はていねいに研磨されている。この工程は荒割り整形→研磨→穿孔（くぼみをつけない）が考えられる。しかし、１点という少ない資料で論じるわけにはいかない。研磨→穿孔という工程もあるという指摘にとどめておきたい。石器の全般的な特徴としては古い様相が残るということがあげられよう。特に石棒、叩き石、スタンプ状石器など縄文時代の石器と非常に類似した石器も、弥生時代後期の遺跡から出土している。しかし、縄文時代から弥生時代後期にいたるまでの連続的な石器の系統が把握されていない現状であり、弥生時代後期の石器を縄文時代のそれと直接比較することは避けなければならない。石庖丁も同様、瀬戸内地方など、弥生文化摂取に先進的役割を果した地域等に比べると新しい時期にまで残ることが指摘できる。

(注)

① 昭和51年津山市教育委員会が発掘調査を行なった。報告書は未刊

② 河本清、橋本惣司、井上弘、下沢公明、柳瀬昭彦「押入西遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３1973年

石庖丁石材及び計測値表

(単位：cm)

番号	石　材	出土遺構	最大長	最大幅	最大厚	備　考
1	粘板岩	H-2		3.2	0.8	欠　損
2	粘板岩	H-2	12.0	4.4	0.7	
3	粘板岩	H-4	15.3	5.9	0.8	
4	白雲母石英片岩	H-4	9.8	3.9	0.7	
5	粘板岩	H-6		5.8	0.8	欠　損
6	緑色片岩	H-13	10.2	5.2	0.9	穿孔途中
7	緑色片岩	H-13	10.5	4.8	0.7	
8	白雲母石英片岩	H-22		4.2	0.8	欠　損
9	粘板岩	P-6	14.5	4.2	0.7	
10	白雲母石英片岩			5.5	0.9	欠　損
11	粘板岩		9.6	4.4	0.8	
12	白雲母石英片岩	配石遺構		3.3	0.6	欠　損
13	粘板岩	配石遺構				欠　損

※Ｈは住居址及び段状遺構、Ｐは袋状貯蔵穴を示す。

第５章　宮川流域における弥生社会の展開過程と大田十二社遺跡の位置

大田十二社遺跡の発掘調査を前後して、この津山盆地においても多数の弥生時代遺跡が発掘調査されている。大田十二社遺跡の位置する宮川流域のものだけでも、押入西遺跡、紫保井遺跡、高橋谷遺跡（一丁田遺跡）、沼Ｅ遺跡、沼京免遺跡、沼竹ノ下遺跡（以上集落址①）、下道山遺跡②、権現山遺跡（以上墓址③）等の諸遺跡④がある。いずれも工事に先⑤だつ緊急調査⑥ではあるが、弥生社会解明⑦のための⑧多くの手がかりを与えるものである。

ところで、近藤義郎「共同体と単位集団」1959年で展開された共同体論の中核をなすものは、中期後葉の沼弥生住居址群であって、その行動領域⑨からみてそれと上記各遺跡とは不可分の関係にある。近藤論文の共同体論⑩展開の「場」を問題とする場合、まさにこれら各遺跡群はその場を共有する。

弥生集落論の新たな展望を切り開くためには、現時点までに蓄積された莫大な資料を駆使し、行動領域に応じた集中的な遺跡群の総括とこれを基とした広範囲の比較分析をおしすすめる必要がある。この点で、これら遺跡群総体としての評価は重要な意味を持つ。

以下、宮川流域の弥生社会の発展過程を通観しつつ、その若干の特質について考察してみたい。

津山盆地の弥生時代前期社会の様相はいまだ明確となっていない。前期の遺跡として、わずかに一丁田遺跡、天神原遺跡、京免遺跡の三ケ所を数えるにすぎない。いずれも明白な遺構をとどめず、一丁田遺跡が他二者⑪に較べ遺物量が豊富な点注意される以外、その生活痕跡は乏しい。これらの事実から、いずれも小集団の不安定な生活が予想されるが、三遺跡を比較した場合、その遺跡のありかたに一点明白な相異が存在する。一丁田遺跡の場合、集落は中期から後期へと継続して営まれ、これを南限として大規模な遺跡群へと発展してゆくのである。一方、他二者は今のところ中期に直接継続される可能性はきわめて薄い。

津山盆地では、少くとも前期から後期末に至るまで継続して営まれる遺跡は、他に知られておらず、その位置からみても一丁田遺跡は津山盆地に弥生社会が広まってゆく上で母集団または少くともその一つとしての役割を果した可能性が強い。

津山市内で発見されている確実な弥生遺構の最も古いものに、沼竹ノ下遺跡第１区検出の中期中葉のＶ字溝がある。このＶ字溝は、深さ1.5ｍ、幅1.8ｍで一旦埋ったのち、さらにＶ字形に掘り込まれていることが観察された。新しく掘り込まれた溝底に大形甕形土器が据えられていた。

検出部長は、区画街路幅７ｍのみであるが、この地点より約30m南で確認調査により同様の溝が検出されており、さらに長く延びていたことはほぼ確実である。

このＶ字溝中より、笠原安夫は炭化玄米を植物種子分析の過程で発見しており、土器片の流入が少いことから、用水溝であったことが考えられる。この溝を集落を取り囲む溝と評価するにしろ、その背景に積極的な開田活動の進展を想像することは容易で、少くともこの程度の溝を計画的に掘り進めるにたる労働力の結集が可能となったことは認めてよい。

宮川流域で本格的な農業生産が開始されるのはこの時期以降と考えてよいだろう。

一旦流水制御を伴う水田経営が確立された場合、必然的に小規模な集団の分出がくり返されたはずである。津山盆地に多い丘陵上に点在する弥生中・後期の集落のうちには、この時期に開始されるもののあることは興味深い。この例として、紫保井遺跡、沼Ｅ遺跡をあげうる。いずれも付近に開田容易な谷をもっている。各遺跡とも住居ないしは、住居址状遺構１～２棟のみ発見されているが、発掘範囲は限定されており、少くとも数棟で構成されていたことは確かである。このことは、この地方の初期農耕者はまず谷水田の開拓から手がけていったことを示している。その小規模な分出者たちは、中期後葉にいたり遺跡規模を除々に拡大してゆくことが知られており、注目に値することは、後葉に至り爆発的ともいえる遺跡数の増大をみることである。このことは、きわめて限定された地域に多数の人口集中がおこなわれたことを意味している。短期間のうちにこの人口増を招来したのは、全般的な農耕形態の集約化が極度におし進められた結果と考えられよう。

こういった谷水田開拓者たちの住居群址の良好な発掘資料が近年増加してきたので、以下この点について、やや詳しい検討をしたい。

「単位集団」でとらえられるこういった小住居群構造は、通常住居、長方形竪穴住居状遺構、高床倉庫、その他の付属施設と分けて分析するととらえやすい。

通常の居住住居とは、竪穴住居址で、平面形態は円形、隅丸方形が基本である。囲炉裏とみられる中央穴を設置していることが指標で住居規模は大小二形態に大きく分かれる。大形住居を中心に数棟で構成される場合が多い。紫保井遺跡では、大形住居、小形住居各一軒のみサヌカイト片が密に散布するものがあり、通常住居も居住という点では、均質なものではなかったことが推測される。

長方形竪穴住居状遺構は、中央穴が伴わぬことが特徴で、床面に柱穴痕を残さない小形のものと建物状の柱穴配置を示す二形態が確認できている。これは、遺跡のあり方からみて、本来小住居群ごとに、少くとも一棟伴った可能性が強い。良く焼けた焼土面をもつものが多く、火をたくことを目的に建てられた施設である可能性が強い。

高床倉庫は、通常掘立柱建物址としてあらわれ、柱抜取穴に土器が破砕され投げ入れられているものが多い。偶然の転入でないことは疑いのないところとなっており、倉庫移転に際し祭りがおこなわれたとするのがもっとも妥当な考え方で、これには、大形器台[12]や装飾性の著しい壺などがあって、対象となる「カミ」を稲魂とすることができる。

その他付属施設は、前三者以外種類も多いが機能不明のものが多く、ここでは中期後半の小住居群は施設の機能分化が顕著な点だけを強調しておこう。

こういった建物の組み合わせとして、中期後半の小住居群を分析した場合、大まかには奈義町・野田遺跡、押入西遺跡、沼遺跡、沼E遺跡、紫保井遺跡、下道山遺跡、久米町・稼山遺跡もすべて同一[13]構造の住居群として理解できるもので、こういった群構成をこの地方の中期後半[14]の小住居群のモデルとすることができる。

それでは、こういった小住居群の示す実態はどのようなものであったのだろうか。これらの小住居群には、中葉の草分け的少数住居の拡大としてあらわれているものがあり、住居群居住員相互が血縁関係を基本に結ばれていたことが考えられる。

住居中央穴は、古墳時代にいたりカマドへと変遷するらしい事実から、カマドとしての機能ももちえていた可能性があり、住居個々の共食単位を考えることも[15]できるが、住機能の差を各住居が示すとみられる点、この時期に3mにもみたない住居が特徴的に存在する点から、共食範囲の基本は各住居より大きいとみたい。この時期の火災住居に土器を伴わぬものが多いのは、主としてこの事実にかかわっているのかもしれない。

掘立柱建物の多くが穀倉と考えられるが、小住居群ごとに普遍的に穀倉が伴っていたとみられ、また穀倉と特定住居の間に強い関連もみられないので、これら小住居群がまた財産共有体であったとみられる。

耕地の本源的所有関係は別としても、これら小住居群が耕地の一経営主体であったことに問題はなく、少くとも用益権を確保していたことは明らかである。

以上の諸点を要約すれば、これら小住居群はその内部構造の細部はおくとしても、独立性のきわめて高い、いわゆる「大家族」に対応させてよいように思われる。沼竹ノ下遺跡や沼E遺跡では中期後葉から後期初頭にかけての小規模な墓地が付設されており、この点からも各小住居群が一「家族」としてのまとまりを持つことが考えられよう。

観点をかえて次に、土器型式の広がりから広くこれら諸集団の社会関係の特質を考えてみよう。美作の中期後半の土器は、各器種にわたってその諸特徴の広がりは斉一的かつ単系文化的でその範囲はさらに広く兵庫県の加古川付近から新見地方まで同系土器の分布をみている。この中でも、美作町・高本遺跡、津山市・押入西遺跡、紫保井遺跡、久米町・稼山遺跡の土器を比較すると、その時間的幅[16]にかかわらず類似性が著しく、土器型式の変化は小地域ごとに微妙な差となってあらわれていることに気づく。

この現象は、既述した当時の社会環境をきわめてすなおにあらわしているように思われる。すなわち、発展継承線に沿った交流がその特質であり、同時にこのことは、小地域ごとの閉鎖的社会環境に対応すると考えられるからである。住居群のあり方から考えられた当時の閉鎖社会の特徴は、土器のありかたにもまたよくあらわれているとみることができるのである。

中期の土器様式に比し、後期の土器のあり方には、基本的な変化が観察される。大田１式に編年される大田十二社遺跡９号住居址、15号住居址、ＰＥ７袋状貯蔵穴出土の土器と沼Ｅ遺跡１号住居址出土の土器を比較すると、たとえ両者の間にわずかな時期差を認めたとしても、それぞれの土器が示す様相には、著しい相異を認めることができる。特にそれは壺形土器によくあらわれている。沼Ｅ遺跡の長頸壺形土器は県南部地方の上東式土器のそれと酷似しており、逆に大田十二社遺跡の壺形土器には、上東式土器の影響がほとんど反映していない。近接した遺跡において、その土器のあり方にかなりな相異が生じていると考えざるをえない。両者は、１kmのへだたりもない一つの谷をはさんだ二遺跡であり、一方では同一共同体のサブユニットとみてまちがいないのである。このことは、どういった社会関係の変化を反映しているのであろうか。少くとも閉鎖環境の崩壊と同一共同体内のサブユニット間に、なんらかの差が芽ばえたことがよみとれる。

中期の遺跡と後期の遺跡を、宮川流域の遺跡群の中で比較した場合最大の相異点は、平地部に大規模な環濠集落が形成されてくることである。大規模というのは、単に集落面積の問題ではなく、同時併存住居数の差となってあらわれている。大田十二社遺跡と沼京免遺跡の後期集落を比較した場合、どうみても集落面積では倍以上のひらきはない。しかし、大田十二社遺跡の場合一時期の住居は非常にまばらで、沼京免の場合は非常に多い。土器形式からみていずれの集落も後期に途切れることなく存続しており、この点における差異はない。同時存在住居数を大胆に推定してみた場合、大田十二社遺跡がせいぜい一時期４～５軒であったとみられるが、沼京免遺跡の場合は最盛期20軒を優に越していたものとみられる。

ところで、沼京免遺跡は中期中葉から引きつづき営まれた集落でもあるので、本来拠点集落であったとする見方もできるが、中期住居群が数ケ所に点在するように観察され、後期集落を取り囲む２～３ｍ幅の環濠が掘られた時期は後期以前に溯る可能性はなく、中期住居群が後期環濠外に多い事実は、大まかには中・後期の間に集落の性格に大きな相異があったことを推測させる。

後期のもう一つの重要な特徴は、大田２期以降宮川流域の土器の中に山陰的色彩が濃厚に出現してくることである。第４章１でふれたように大田十二社遺跡出土土器には、各時期にわたって山陰地方の土器様式の直接的な影響が認められ、その中には単に影響というだけではなく伯耆、但馬地方からの搬入品も認められるのであって、宮川流域と日本海側の地方との緊密な通交関係を知ることが出来る。

中期末に谷水田における集約農業が一定の到達点に達したことは、集落数の増大とともにきわめて限定された立地を示す集落が後期に継続されず居を移動するように観察されることからも推測され、後期にいたり農耕地の新たな拡大が図られたことを推測させるが、後期における土器のあり方は、この中で蓄積された余剰生産物を背景に広範囲な交易圏が形成されてきたこ

とを示しており、土器の出自からみて交易圏は山陰地方を広く含むものであったことが推定できる。こういった広範囲な交易圏を設定するものとして、特定集団の果した役割は大きかったであろう。

また、可耕地が限定されつつあった状況にあって土地獲得をめぐる葛藤が一層増大してきたことであろう。こうした中で、社会分化が急速におしすすめられたとしても不思議はなく、それが階層と呼ぶにはなお未熟なものであったとしても、農業共同体内部に優劣の分化が目だってきたことは容易に推測される。

ところで、経済圏の設定のみによって宮川流域の土器に出現してくる著しい山陰的色彩を説明しきることはできない。こういった経済圏は、民族例によるかぎりしばしば通婚圏とも重なるものであって、血縁婚姻によるつながりの強い地域でもある。後期土器のあり方は、多様な出自土器の錯綜として全搬として日本海色が強いわけであるが、このことからおして、遠融地との通婚志向ないしは傾向が生れつつあったことを指摘することができよう。

墓地遺跡において葬送用土器が増大するのもまさに大田２期以降のことであり、両者はきわめて関連深い内容をもっているとみられる。

墓地における葬送用土器の盛行は、とりもなおさず墓前祭祀の活発化を示しており、祖霊のしめる位置が日常生活をも律する傾向の現われてきたことを知ることができる。内行花文鏡片を出土した下道山遺跡の位置からみても、この前後の時期から階層化の動きが顕著になってきたことを知ることができるが、それはまた出自を問題とした地域間交渉の結果でもあったことを知らねばならない。

葬送用土器についても、全般として日常土器に準じた傾向を示すが、この中で下道山遺跡、上原遺跡等では県南部地方で著しい発達をみた特殊器台形土器がこれら木棺墓群に伴って発見されている。

これら特殊器台形土器は、いずれも平墓木棺墓群の特定の墓ないしは墓群にともなって出土するものとみられ、直接首長権継承儀礼に用いられたとすることは困難であるが、少くともこの特殊器台形土器のあり方から、この墓群中で県南部地方の特定の葬送祭式が直接ないしは間接とりおこなわれたことを推測してもよいだろう。この異質な祭式は、農業共同体内外に一定の継承線を強調誇示する働きは十分果しえたことであろう。

こういった背反した傾向の中に美作における階層形成の特質を垣間みることができよう。

いずれの地域をみた場合も、階層形成の動きは主として不均等の拡大に対応した首長権の安定化、世襲化を図るという内部要因に基づくものとみられ、各地域の存在条件に規制され地域間にかなりな変異を生じ、それが墓制におけるさまざまな特異性となってあらわれているとみられるが平墓木棺墓群に特殊器台形土器が伴うという宮川流域の事例もまたそのことを示していると考えることができよう。

この地方の集落の消長からみると、集落遺跡で大田５期以降古墳時代に継続して営まれるものは、きわめて多数の発掘例があるにかかわらず、今のところ知られていない。現象的には大田５期に至り突然集落は消失するような観を呈している。今後古墳時代前期集落のあり方をはっきりさせはければならないが、少くともこの事実から弥生時代と古墳時代の間に社会構成史上の画期があったことを推測することは可能である。

以上、大田十二社遺跡の報告書の作成にあたり、宮川流域における弥生社会の動向について若干の見通しを述べたものであるが、津山市における弥生時代遺跡の発掘調査例は多数あり、そのほとんどが未整理であって、本稿はきわめて大雑把な見通しにすぎず、現状では不十分な点が多く今後補正を期してゆきたい。（河本清、中山俊紀）

本稿は、1979年７月の考古学研究会、岡山例会で「宮川流域における弥生社会の展開過程」として発表したものに若干の加筆修正を加えたものである。本稿の作成にあたっては、近藤義郎、中根千枝両先生の学恩に負うところが大きい。また、安川豊史、行田裕美の教示を得た他、近藤義郎先生に御校閲いただいた。記して感謝の意を表したい。

（注）

① 橋本惣司、下沢公明、井上弘、柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』岡山県教育委員会　1973年

② 津山市紫保井に所在する弥生時代中・後期集落遺跡、1976年大規模農道敷設に伴い紫保井遺跡発掘調査委員会が発掘調査。報告書未刊

③ 津山市山北に所在する弥生時代から鎌倉時代にいたる遺跡、津山市立鶴山中学校の建設に伴い、1977年～78年にかけ津山市教育委員会が発掘調査。報告書未刊

④ 河本清、柳瀬昭彦「津山市沼Ｅ遺跡Ⅰ」津山市沼Ｅ遺跡発掘調査委員会、（近刊）

⑤ 津山市沼に所在する弥生時代中・後期の集落遺跡、土地区画整理事業に伴い1977年～1979年にかけて津山市教育委員会が調査。報告書作成中。

⑥ 津山市沼に所在する弥生時代中・後期の集落遺跡、土地区画整理事業に伴い1979年～80年に津山市教育委員会が調査。報告書作成中。

⑦ 御船恭平、「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21・22合併号』1959年　栗野克己、岡本寛久、「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』1977年

⑧ 津山市小原所在の弥生時代後期墓地遺跡、1977年墓地造成工事に伴い津山市教育委員会が調査。報告書未刊。

⑨ 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究第６巻第１号』1959年

⑩ 近藤義郎、渋谷泰彦、「津山弥生住居址群の研究」津山市 津山郷土館　1957年

⑪ 河本清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会　1957年

⑫ 押入西遺跡、紫保井遺跡、鮒込遺跡等で同様の現象が確認された。

⑬ 浅野正、高村継夫、西山薫『北吉野村史』北吉野村史編纂会　1956年

⑭ 村上幸雄、橋本惣司、『糠山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1979年
⑮ 青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青木遺跡発掘調査団　1976年
⑯ 山磨康平、井上弘、岡田博「高木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８』1975年

写真図版挿図対象表

PL19	PL20	PL21	PL22
1. Fig 55-2	1. Fig 20-3	1. Fig 29-1	1. Fig 58-2
2. Fig 23-7	2. Fig 54-8	2. Fig 17-6	2. Fig 57-1
3. Fig 55-6	3. Fig 20-1	3. Fig 17-13	
4. Fig 55-10	4. Fig 20-6	4. Fig 73-17	
5. Fig 55-3	5. Fig 25-3	5. Fig 29-16	
6. Fig 55-13	6. Fig 54-10	6. Fig 17-11	
7. Fig 55-1	7. Fig 33-12	7. Fig 73-22	
8. Fig 55-9	8. Fig 31-23	8. Fig 29-23	
9. Fig 33-1	9. Fig 33-5.Fig 54-7	9. Fig 29-39	
10. Fig 55-7.14.15.16.17.18	10. Fig 74-30	10. Fig 17-26	
11. Fig 55-22			
13. Fig 55-21			
PL23	PL24	PL25	PL26
1. Fig 66-4	1. Fig 66-9	1. Fig 7-28	1. Fig 68-8
2. Fig 58-12	2. Fig 59-15	2. Fig 62-5	2. Fig 62-4
3. Fig 57-2	3. Fig 58-13	3. Fig 58-4	3. Fig 68-9
4. Fig 66-5	4. Fig 52-6	4. Fig 64-12	4. Fig 56-1
	5. Fig 67-22	5. Fig 52-11	5. Fig 68-14
	6. Fig 67-21	6. Fig 58-11	6. Fig 75-5
	7. Fig 67-22	7. Fig 52-8	7. Fig 52-1
	8. Fig 63-9	8. Fig 65-19	8. Fig 56-4
PL27	PL28		
1. Fig 56-9	1. Fig 75-10		
2. Fig 51-8	2. Fig 75-9		
3. Fig 65-12	3. Fig 60-17		
4. PE 50	4. Fig 75-11		
5. Fig 60-10	5. Fig 76		
6. Fig 68-6			
7. Fig 74-29			
8. Fig 75-8			

PUBLICATION IN ARCHAEOLOGY NUMBER 10

ŌDA JŪNISHA

REPORT ON THE EXCAVATION OF YAYOI AGE SETTLEMENT SITE IN TSUYAMA CITY

ENGLISH SUMMARY

EDUCATIONAL BOARD OF TSUYAMA CITY, JAPAN
1981

ODA JUNISHA

CONTENTS

Page

Chapter I INTRODUCTION 1
1. Process to Excavation 2
2. Organization 3
3. Environment 3

Chapter II GENERAL DESCRIPTION
1. Excavation 9
2. General Description of Remains 12

Chapter III DESCRIPTIVE
1. Houses 15
2. Cache Pits 54
3. Ritual Site 91
4. Trial-trenches in the Paddy Field below the Hillside
① General Discription of Trenches 100
② Paleoethnobotanical Analysis of Seed Remains 102

Chaper IV ANALITICAL
1. Ceramics 108
① Chronological Order 114
② Relative Chronology, compared with those of Areas nearby . . . 118
③ Petrological Analysis of Ceramics 122
2. Space Division of Houses 126
3. Cache Pits 128
4. Some Problems of the Ritual Site 133
5. Iron Tools 135
6. Stone Tools 137

Chapter V YAYOI AGE SOCIAL DEVELOPMENT ALONG THE RIVER MIYA 143

SUMMARY

From May of 1974 through March of 1975, Educational Board of Tsuyama-city carried out the excavation of Ōda-Jūnisha, a settlement site of late Yayoi culture in Tsuyama-city, Okayama.

This excavation was caused by the construction of newly integrated junior high school, which aimed to renew the superannuated school buildings and dissolve the differences in quality among the old ones.

Tsuyama was a local center of the ancient country of the Mimasaka district, inland hilly country.

The Yayoi farmer in this district began to bring under cultivation probably in the middle of Yayoi Age.

We can find many settlement sites after this period at many places in this country.

Ōda-Jūnisha is one of these village sites. The excavation survey was carried out in the area which contains almost whole settlement. We found 18 pit dwellinghouses, 83 cache pits, one ritual site, ditch of paddy field, stone sickles, iron tools and whetstones in and around the structure.

We can classify these house plans roughly into round type and spuare one. Fire places were situated in the center of these plans and a shallow ditch rounded floors. The number of wooden post holes were 4 of square type and 4 to 7 of round type. Since we found some burnt midcanthus on the floors, these houses were probably thatched ones. The function of "cache pits" is not so clear. Some archeologists say that this pit is grave. But we think, in comparison with those in norther Kyushu and ethnoglaphical data, the original function of these pits is storing rice.

At ritual site, we found many stones and fragments of potteries. We can grasp them as several "units", round and one meter in diameter. Besides as a whole, they make a large circle and we can recognize that in this excavation area there are at least two circles, eastern one and western one.

At one small unit by this eastern circle, we dug up, under stones, the penis-shaped stone and potteries with some significant arrangement, suggesting how the rite took place there.

Through the study of potteries in and around this settlement, we have known the traits of potteries(especially domestic) of late Yayoi poriod in this region. That is, the potteries are closely related to the potteries of Izumo, Hoki and Tajima, ancient coastal countries along the Japanese Sea. Chronologically we are able to classify thses potteries into five types. Judging from the classification, it seems that several houses were being built continuously through each period in this settlement and cache pits, too, were being dug through each period, and they were increasing in number, as times went by.

They looked incoherent as a whole, but, investigating the period of each cache pit and studying its arrangement, we can grasp them as "unit". The ritual site was used mainly from the second to fifth stage.

Judging from the existence of penis-shaped stone, as this object is said to be related to the rite for productiveness, we presume that the rite held there may have been connected with the cultivation. Maybe the arrangement of relics suggests their outlook of the pantheon. We suppose on these data that this settlement was made up of 3 through 4 families and they cultivated terras field around the hill in cooperation with each other. They also communally used this ritual site and cache pits. Sociologically this family-group was minimun unit of the

period.

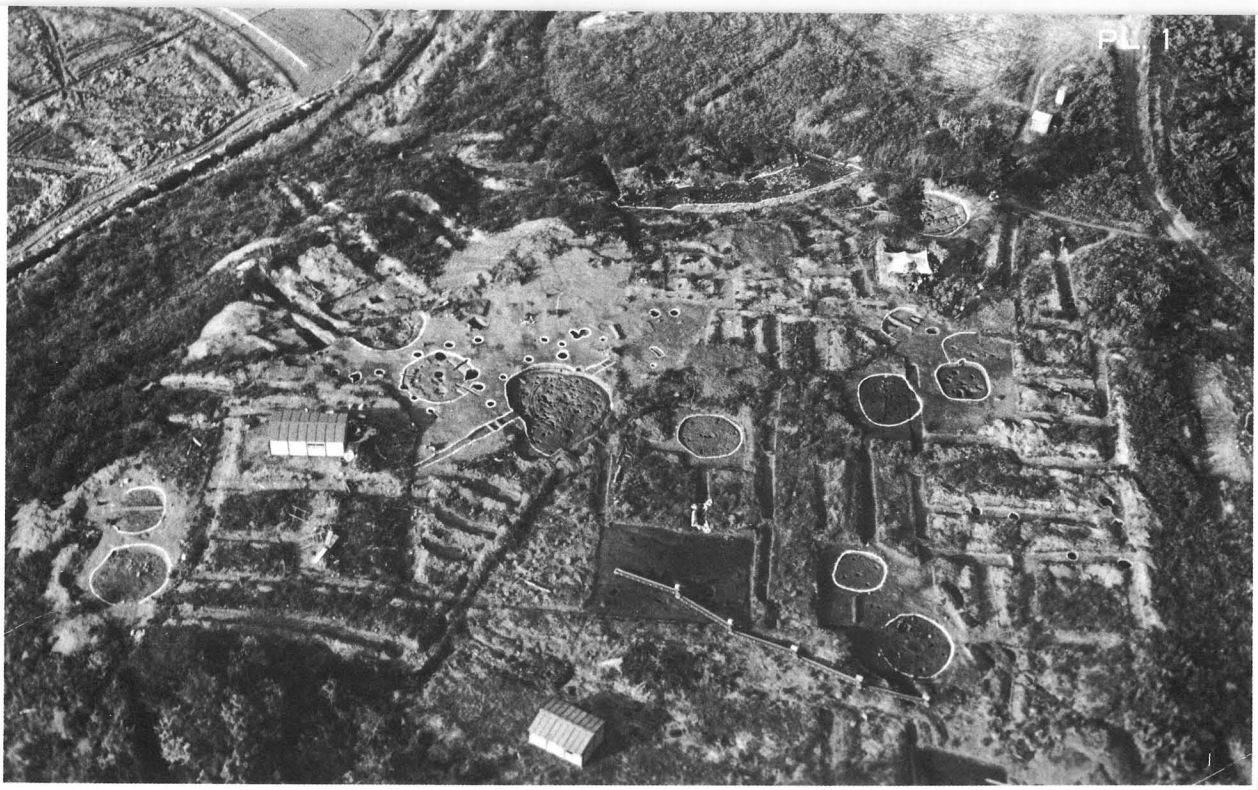
Judging from the appearance of large-scale settlement on the flat ground below and the changes of its feature from middle to late Yayoi pottery, or unicultural to multicultural, in this area, it may be given as a conclusion that the trade of goods and human interchanges mainly with the Sanin district in late Yayoi period were as extensive as they had been closed in middle Yayoi period. Following this change, it seems that the decent began to play an important part in the real life.

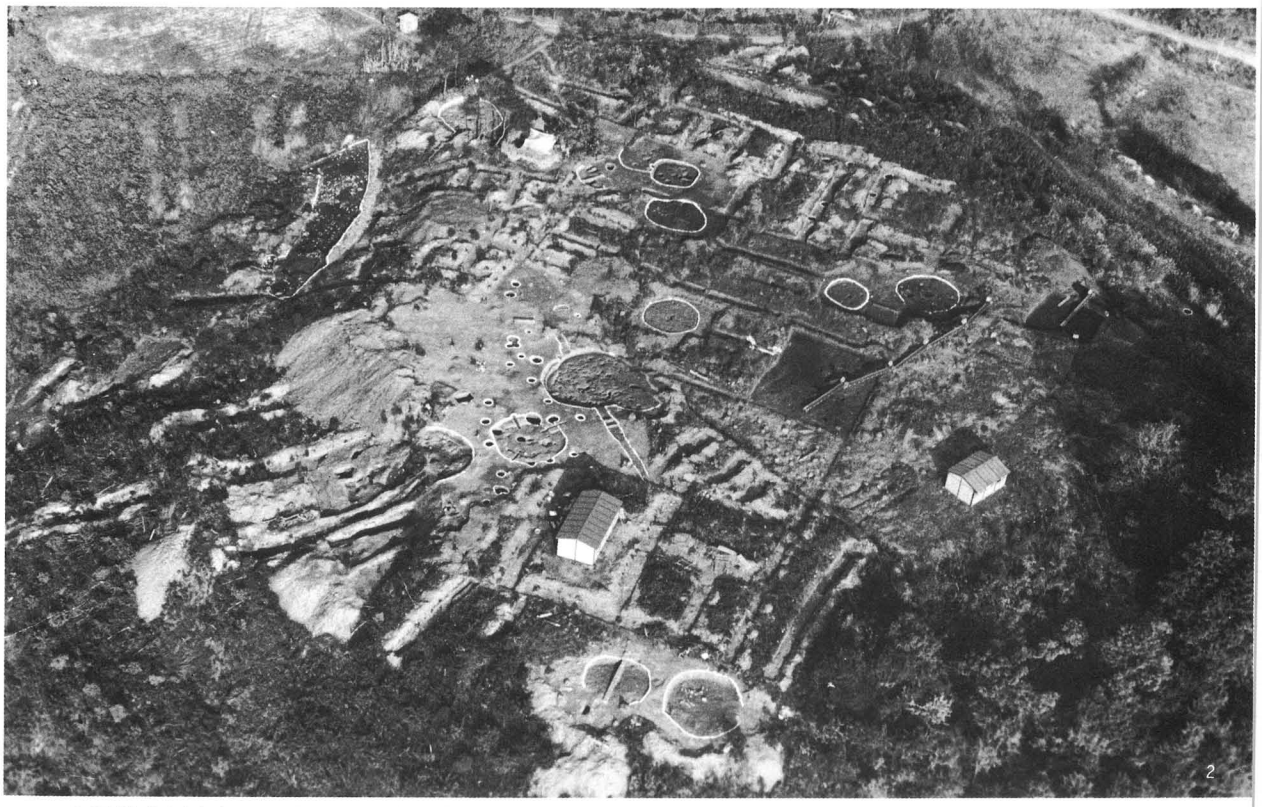
It was clear that the rite held at the grave grew prosperous since late Yayoi period, and the aspect in this district was the same. This shows these changes remarkably.

Besides it is very important that the pottery which had made peculiar growth in Kibi, southern coastal leading country along the Inland Sea, for being used in the rite held at the grave, was found in the graves around here, though, of course, its pottery was influenced by one in the Sanin district. This fact shows that, in spite of a whole tendency, some influential persons appeared who wanted to make their position stable by forming a strong connection with Kibi.

Therefore through the fact of these changes, we also see the exogamous inclination and rapid performance of rank accompanied with it.

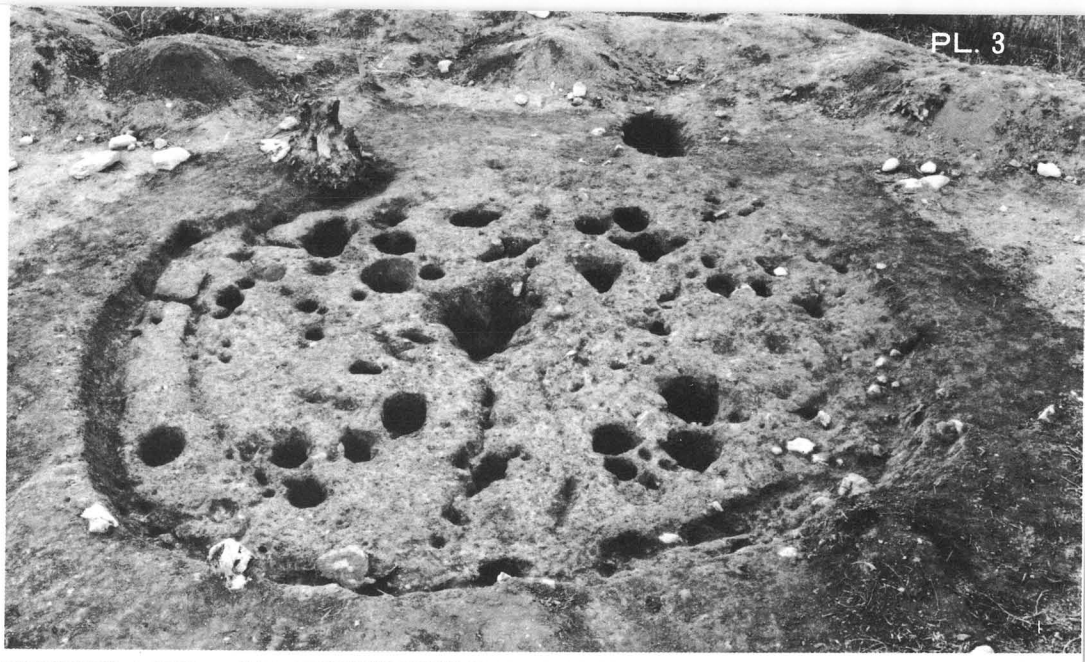
図　　版

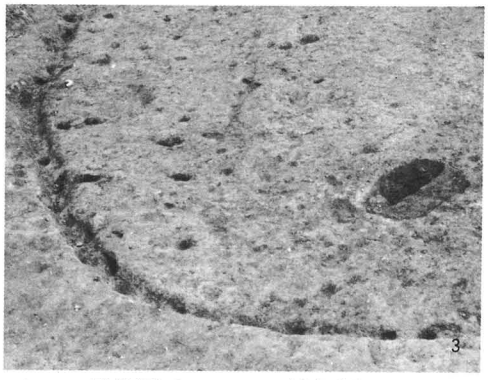


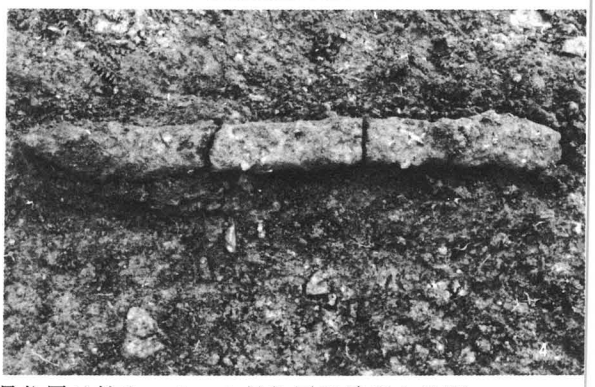


1．全景航空写真(南から)　2．全景航空写真(南西から)

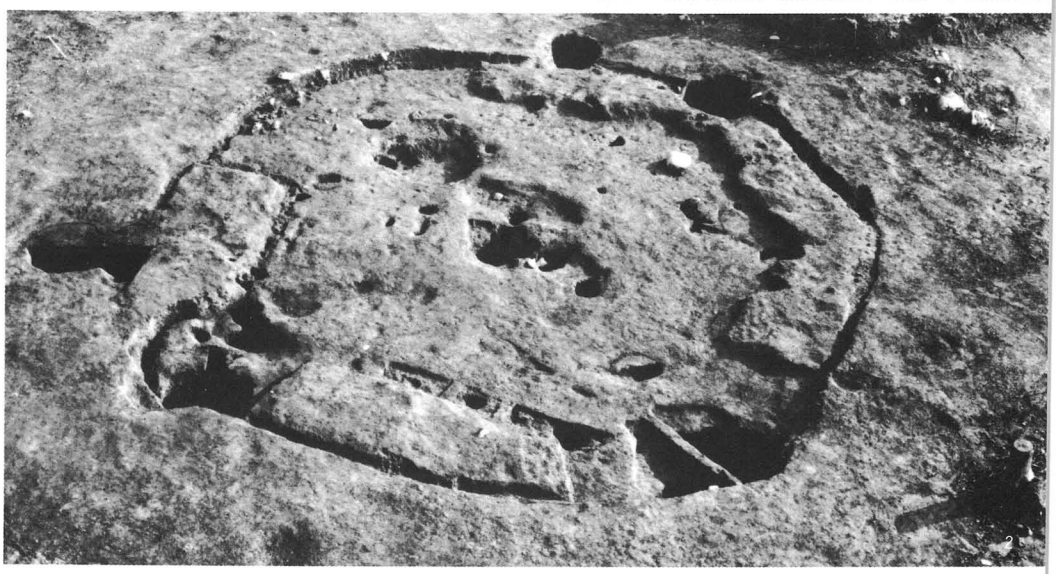
1．1号住居址　2．1号住居址中央穴土堤断面　3．1号住居址中央穴
4．1号住居址土器出土状況

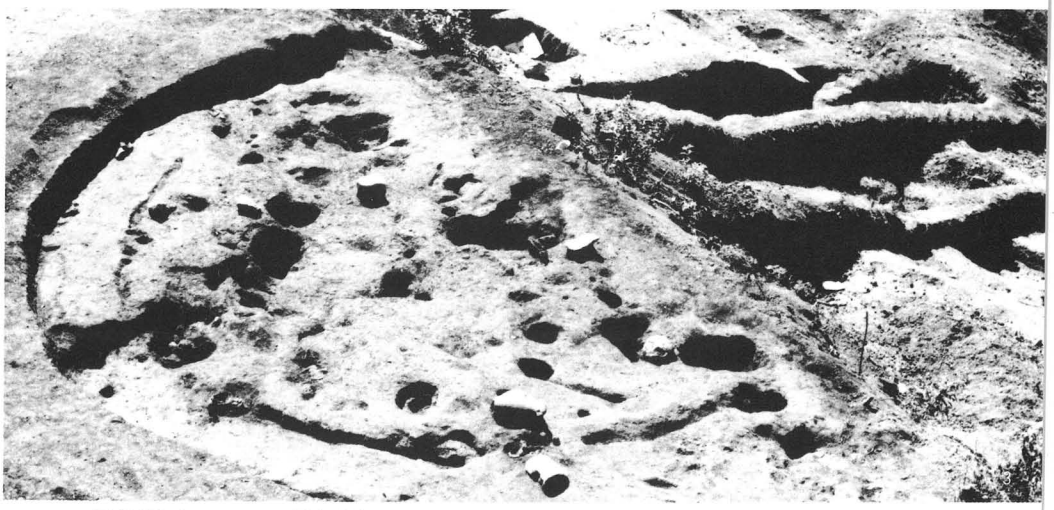




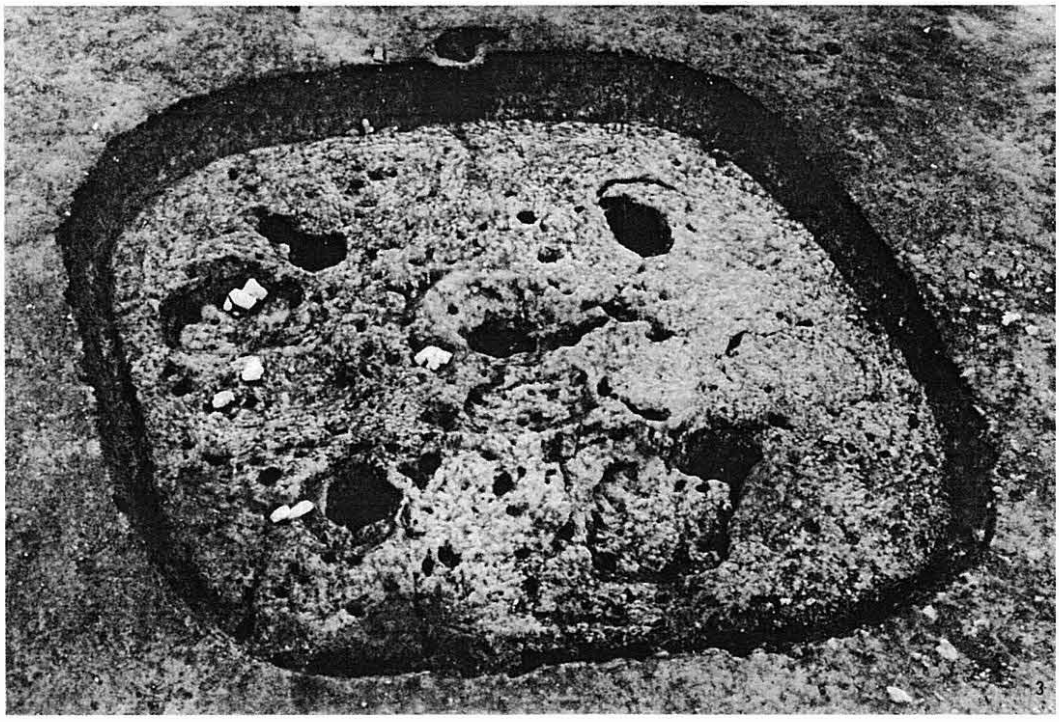


1．2号住居址　2．3号住居址　3．3号住居址杭穴　4．2号住居址鉈出土状況

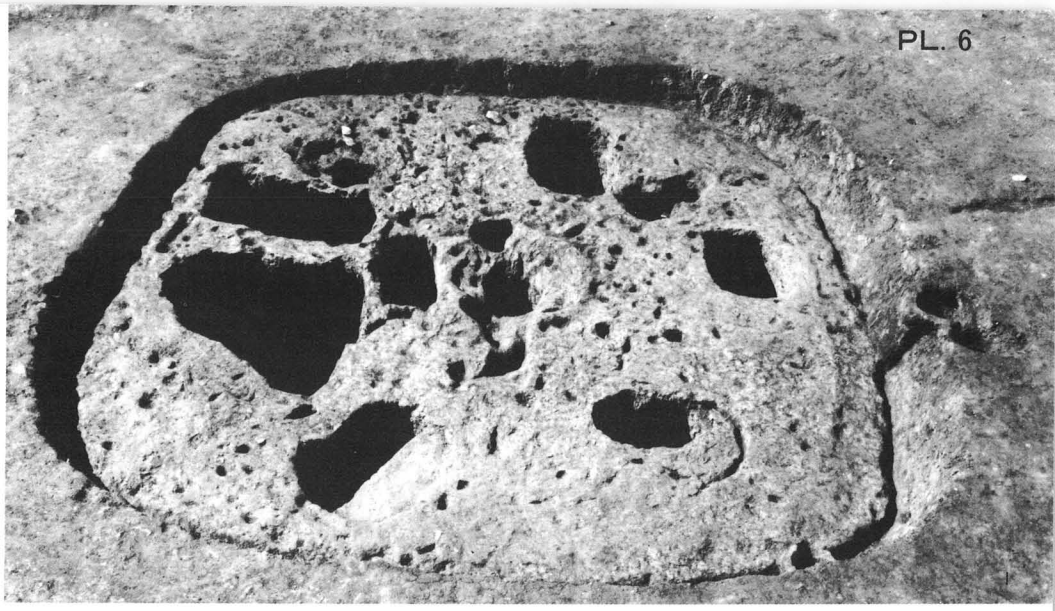


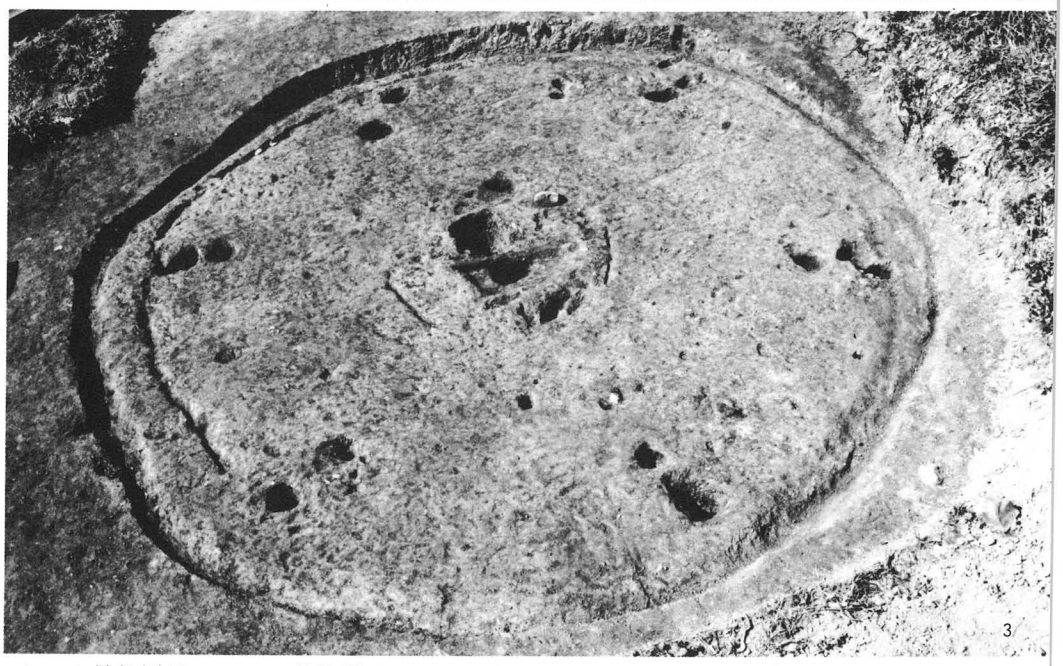


1．4号住居址　2．5号住居址　3．6号住居址

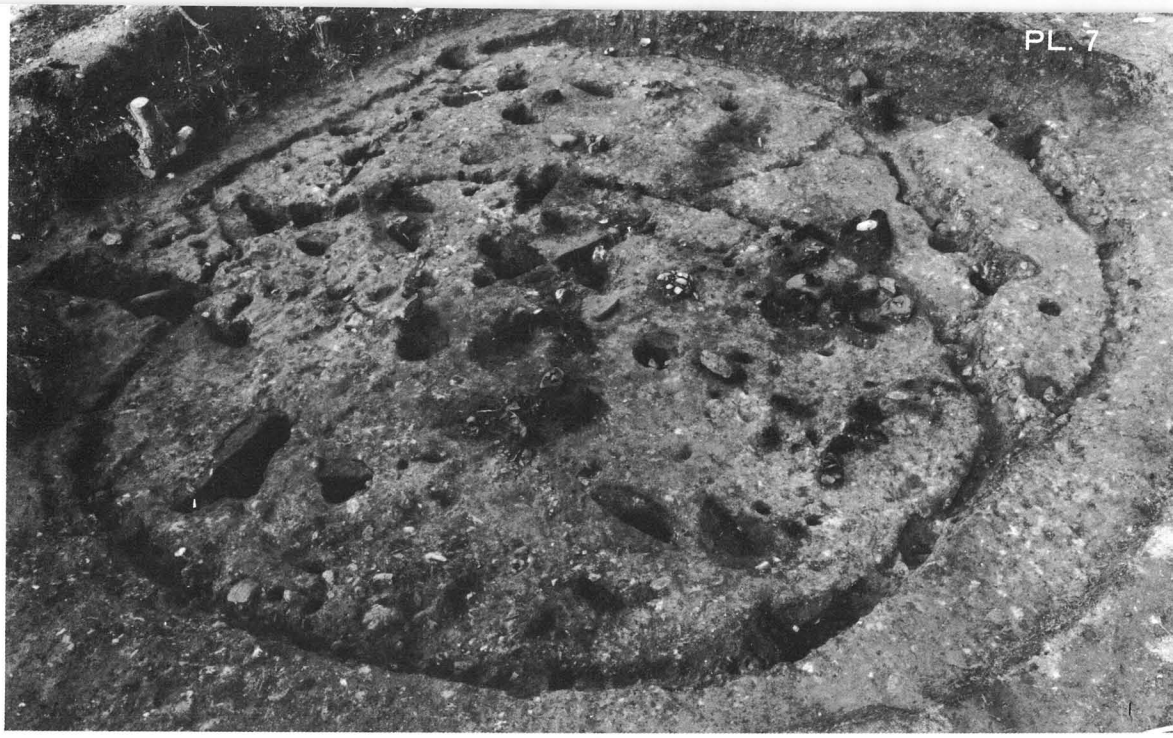


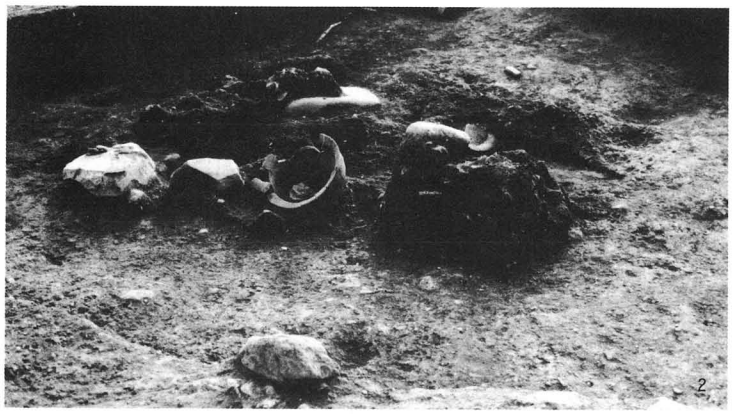
1．7号段状遺構　2．8号住居址　3．9号住居址

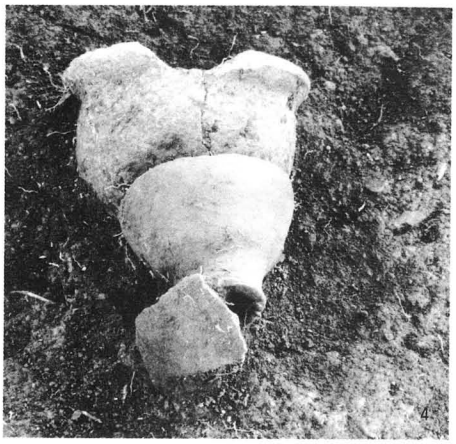


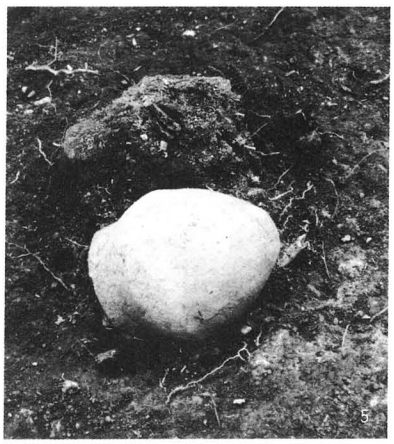


1．9号住居址　2．10号住居址　3．12号住居址

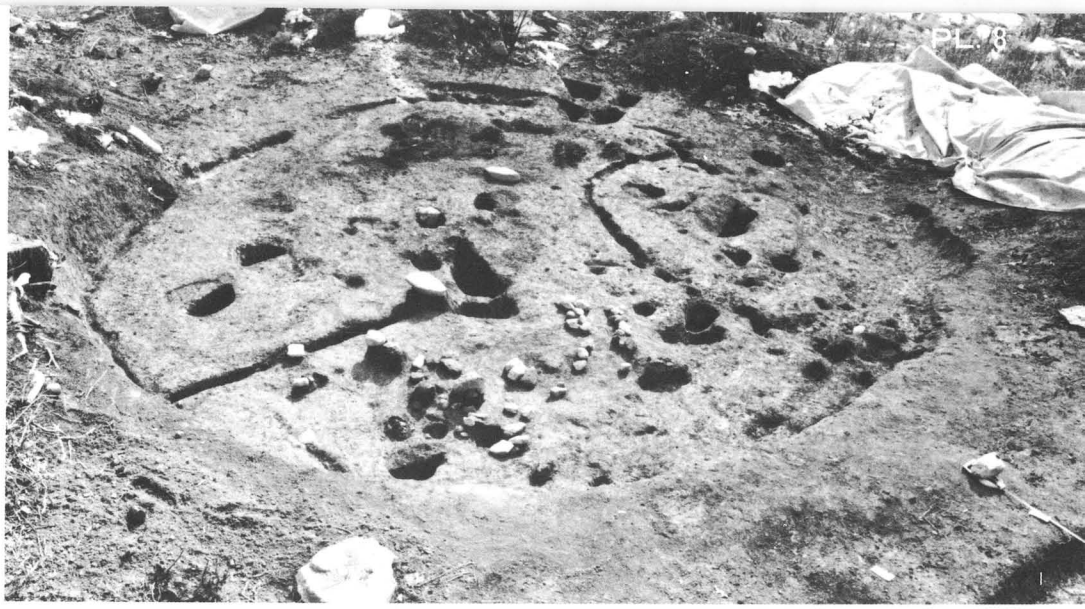




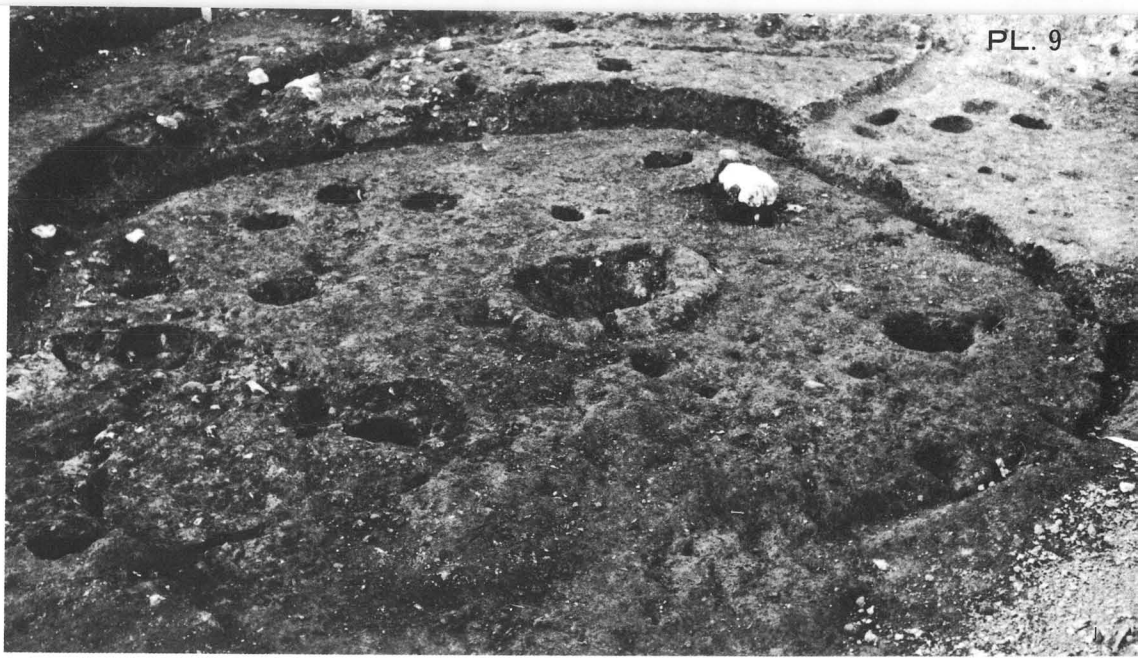


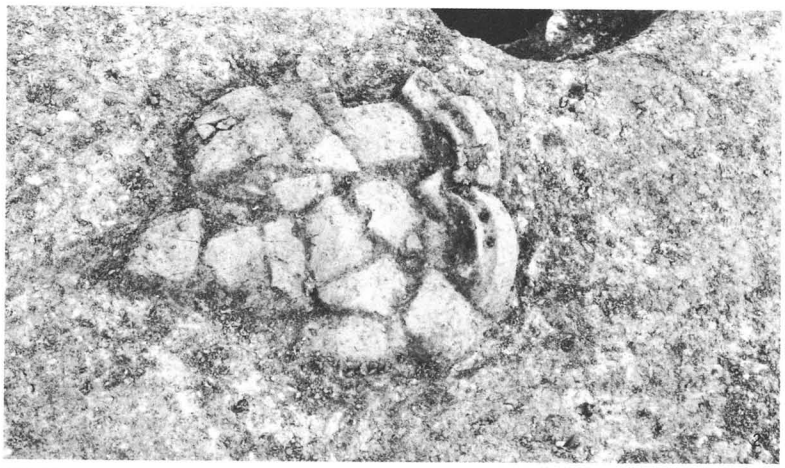


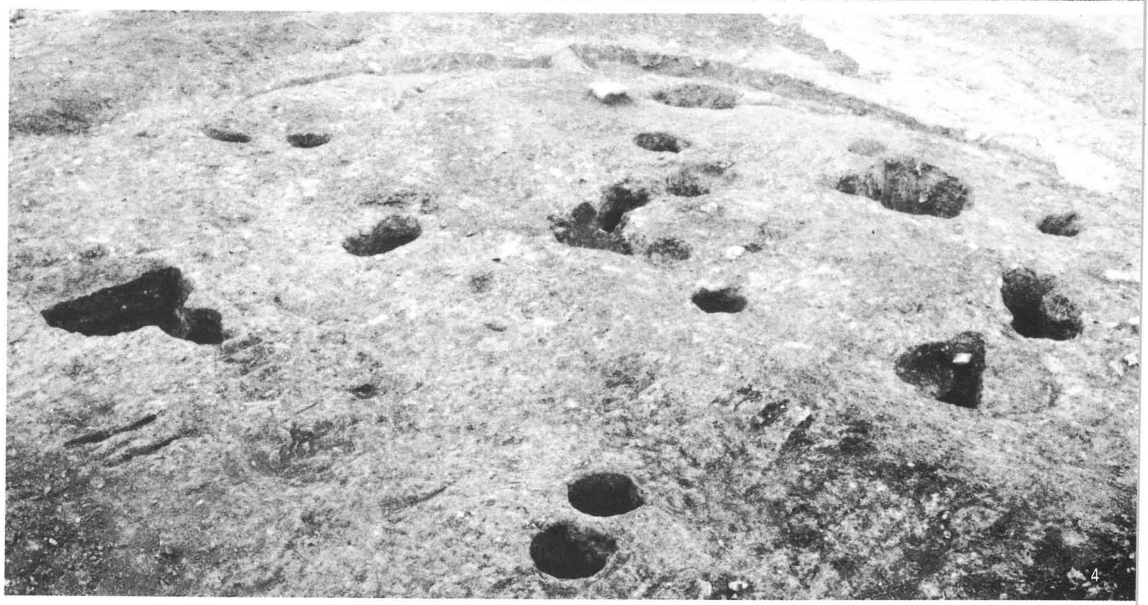
Ⅰ．13号住居址　2～6．13号住居址遺物出土状況



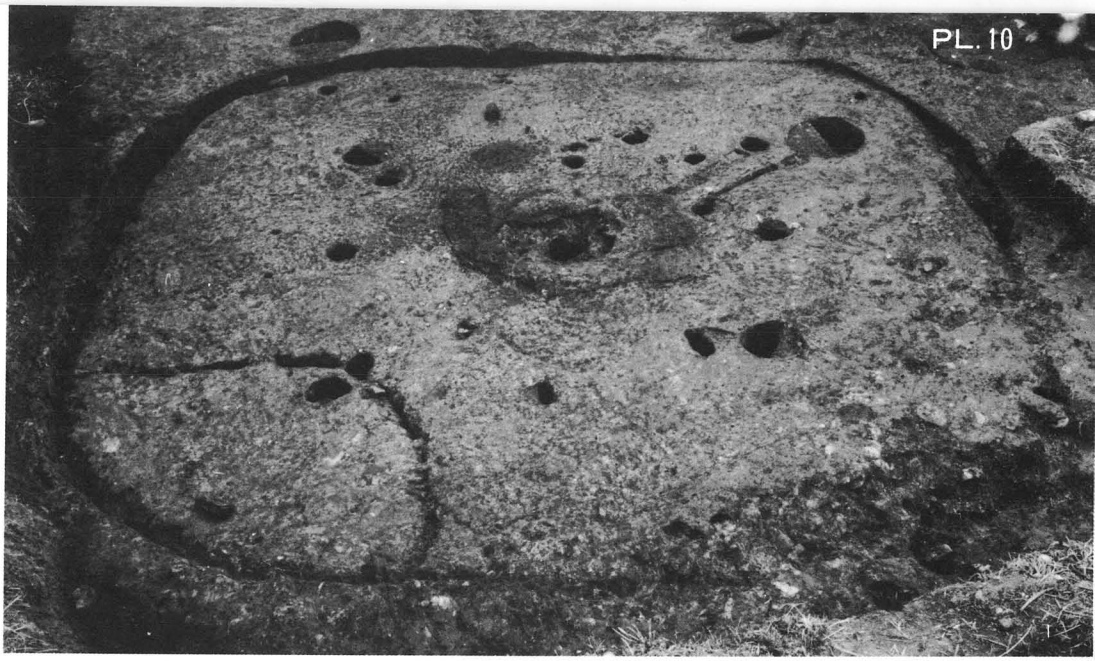
1・2．14号住居址　3．14号住居炉址

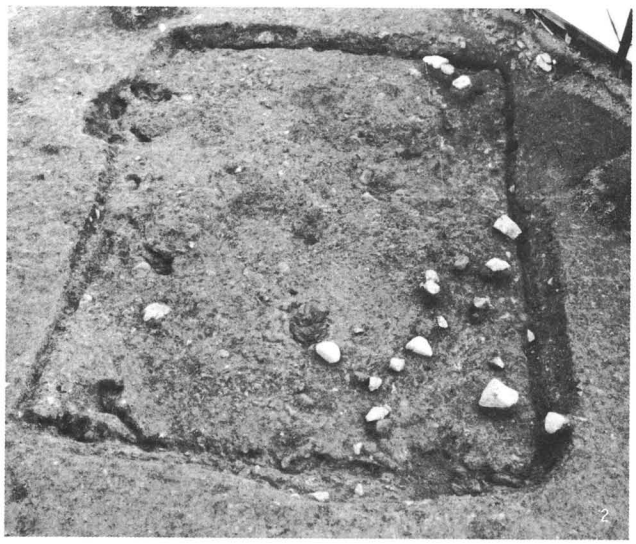


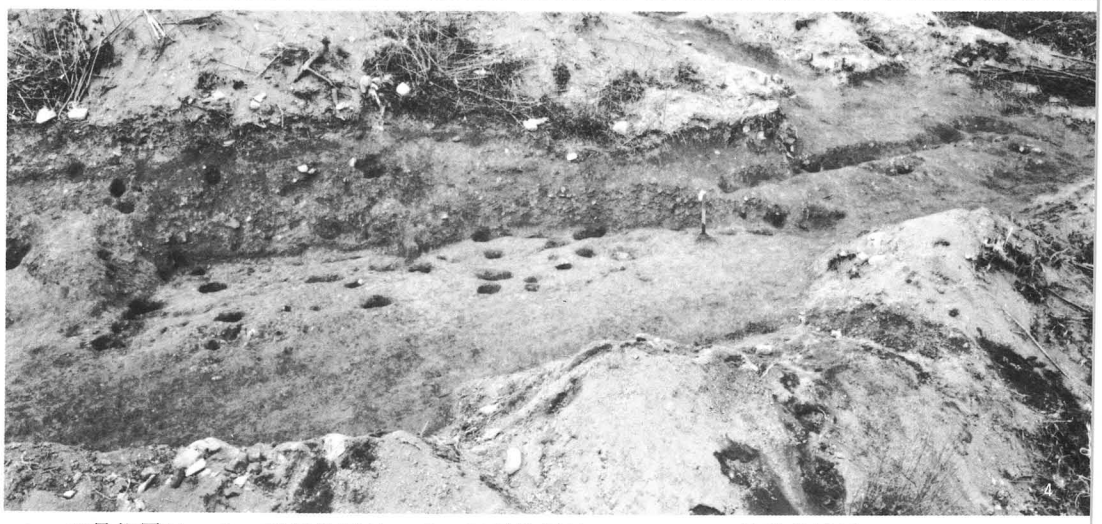




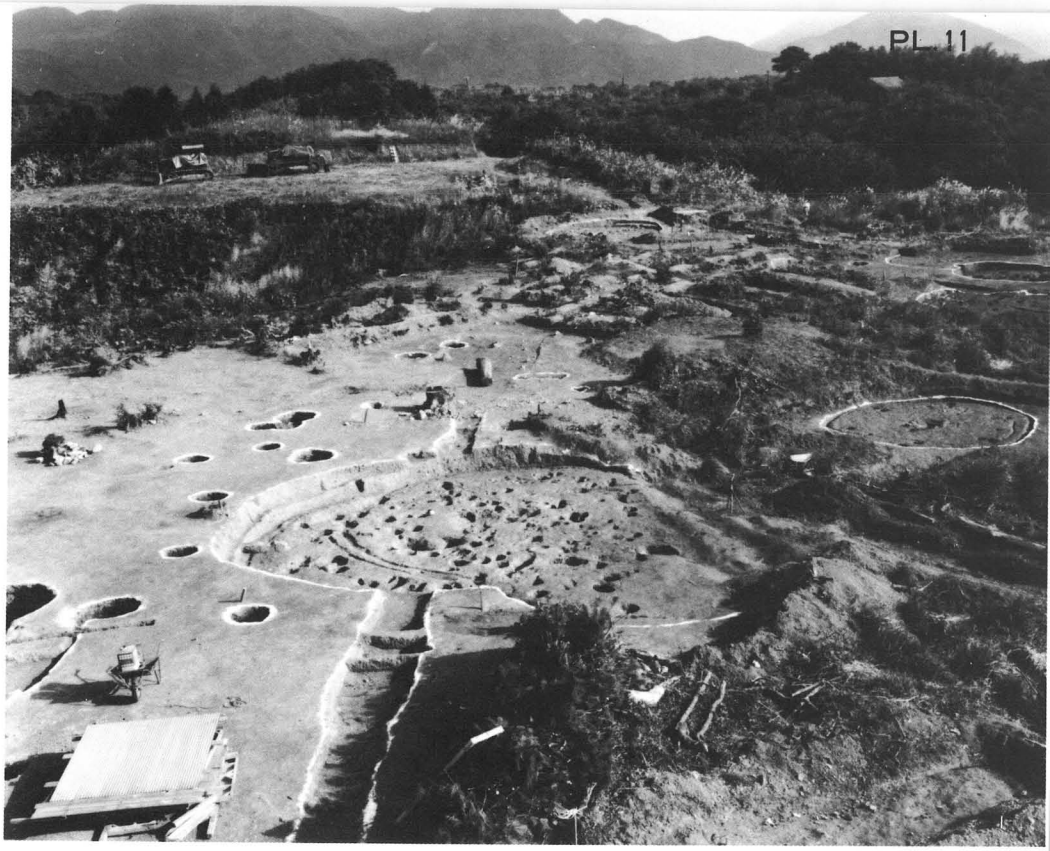
1．15・19号住居址　2．16号住居址土器出土状況　3．15号住居址　4．16号住居址





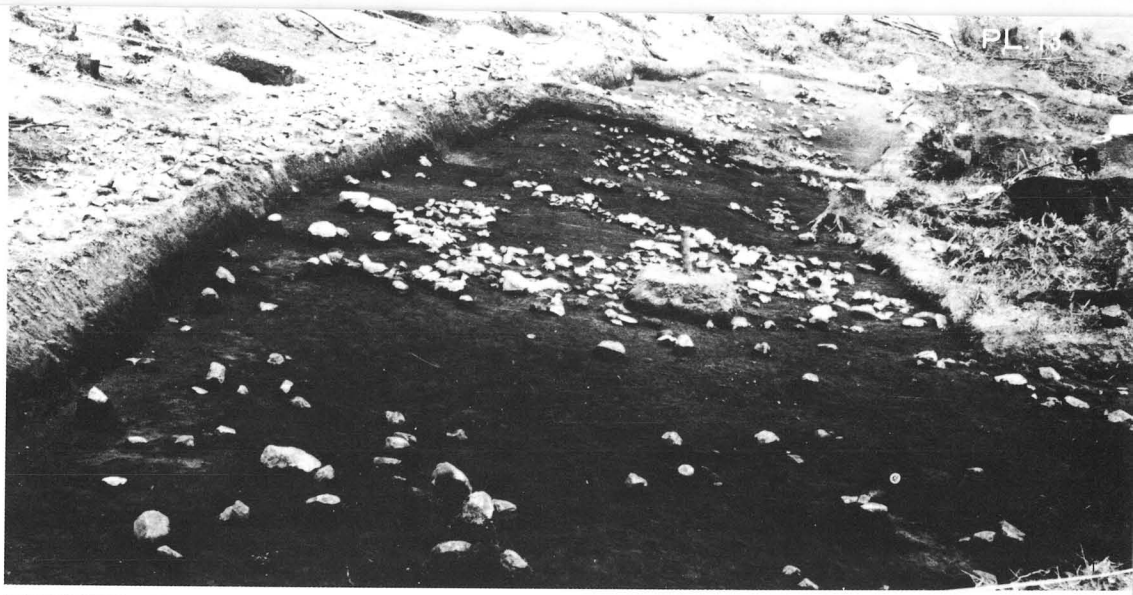


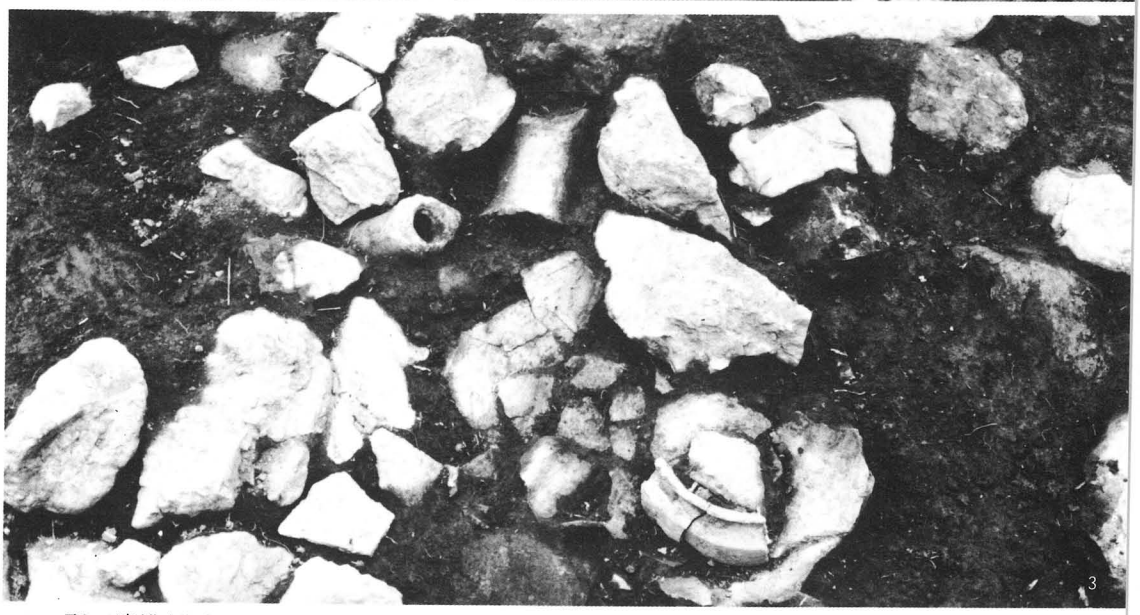
1．18号住居址　2．20号住居址　3．21号住居址　4．22・23号段状遺構



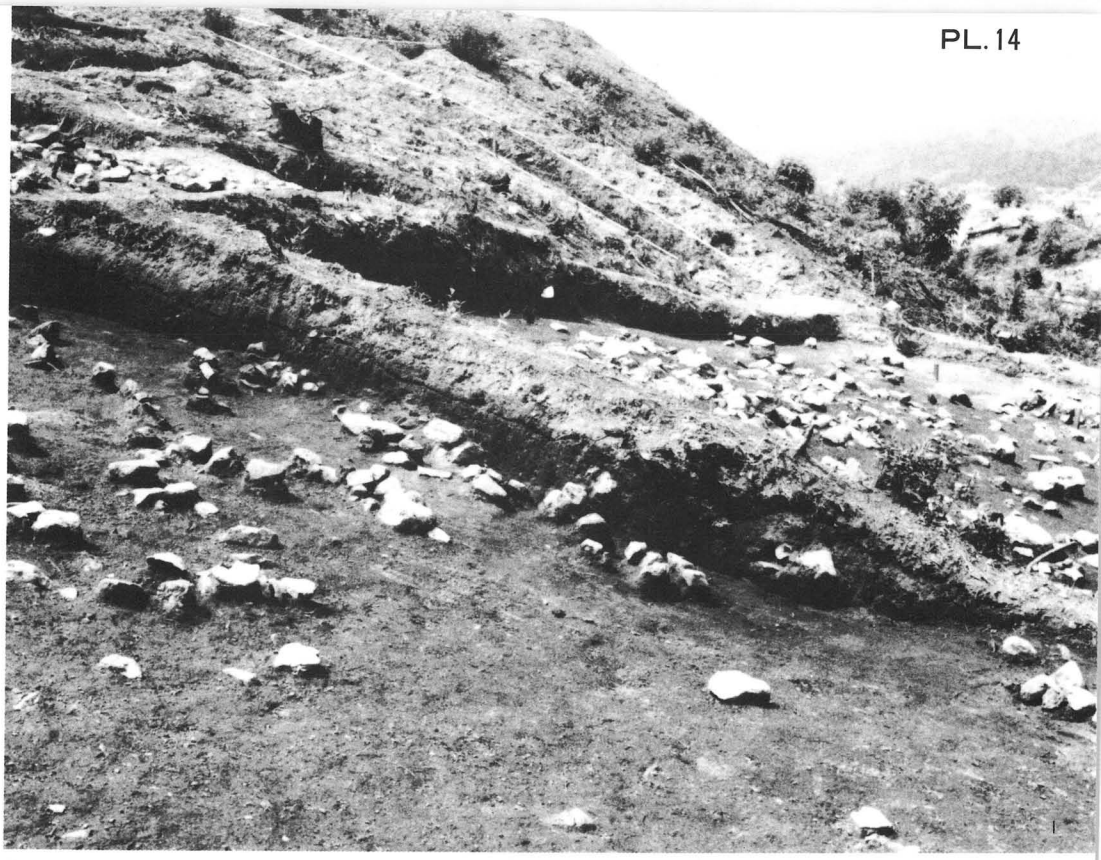
1．西平坦部遠景　2．貯蔵穴群

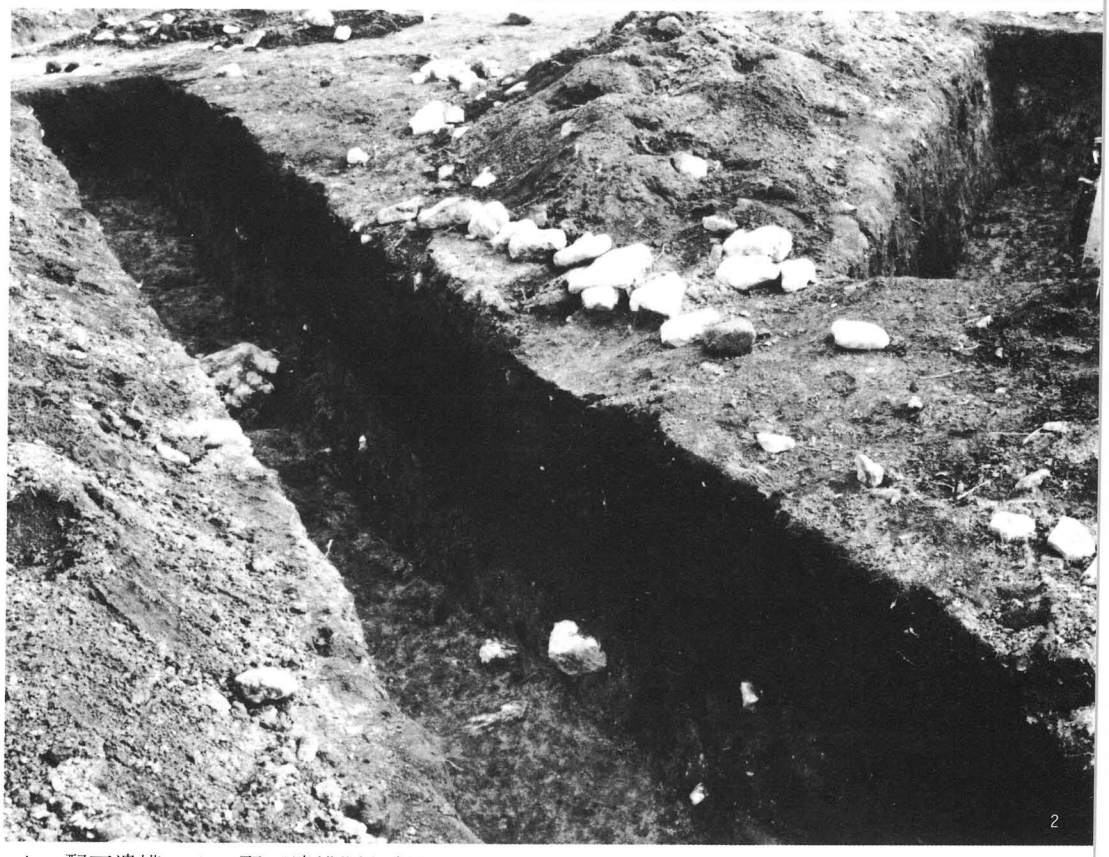
1．袋状貯蔵穴切断面（P19）　2．袋状貯蔵穴ＰＥ55



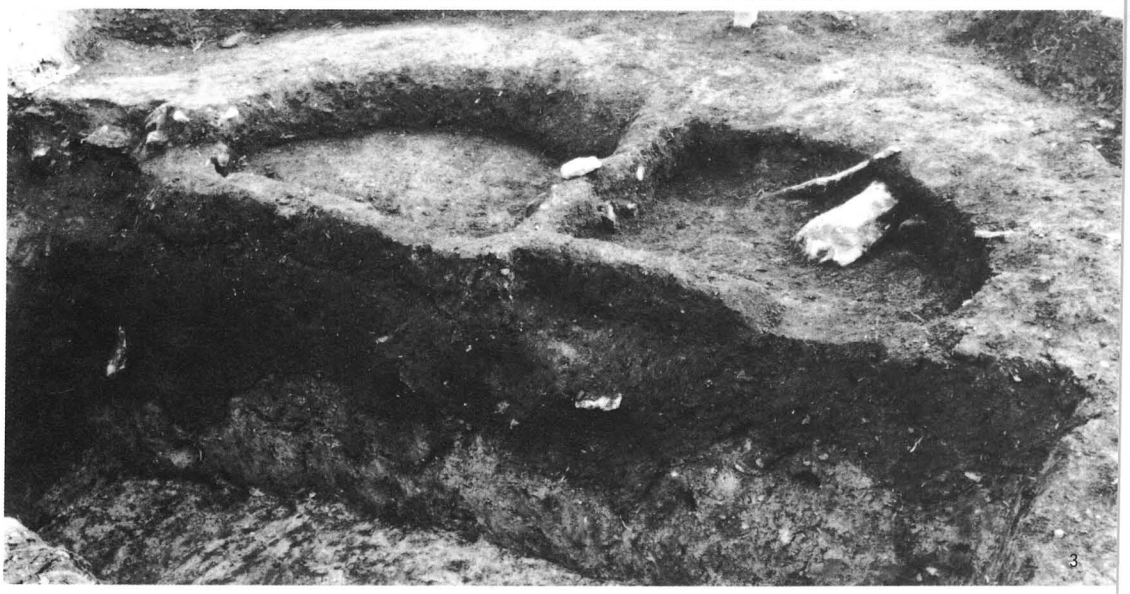


1．配石遺構(北東から)　2．配石遺構東群　3．配石遺構土器出土状況

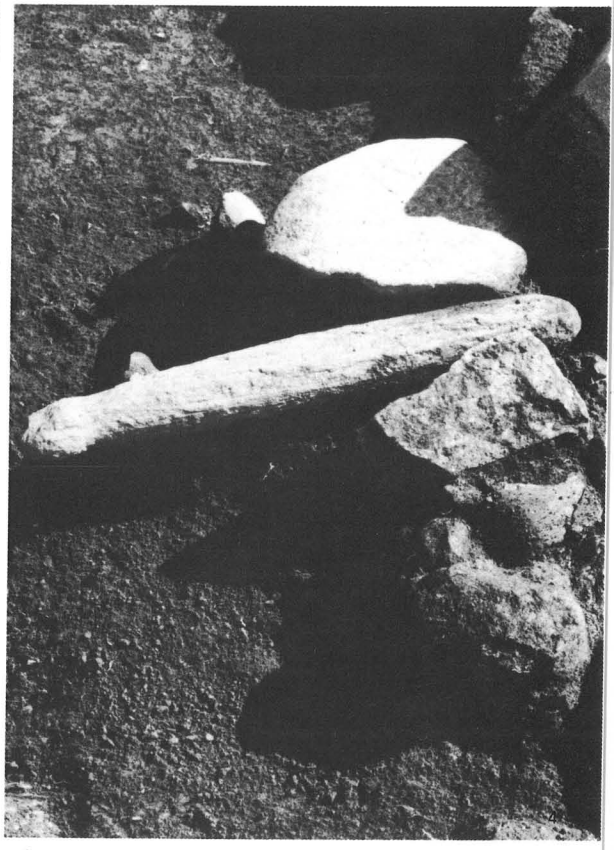




1．配石遺構　2．配石遺構断ち割り

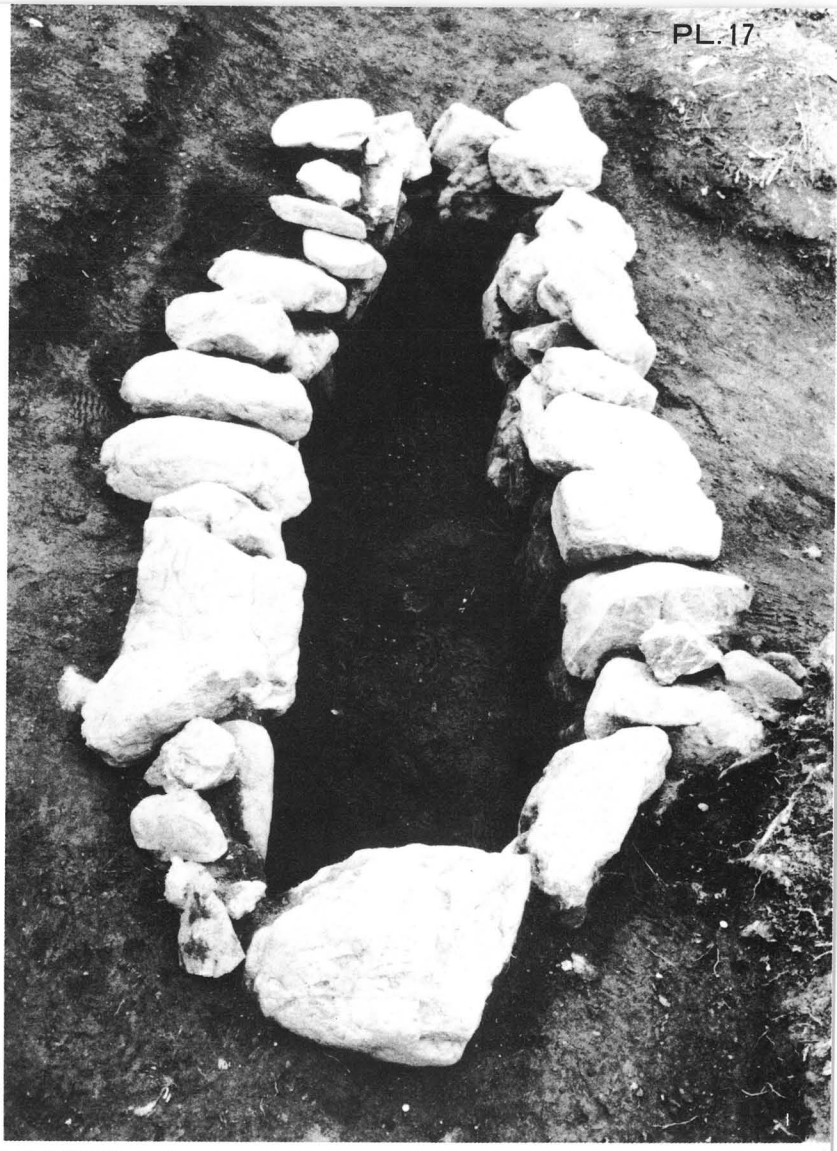


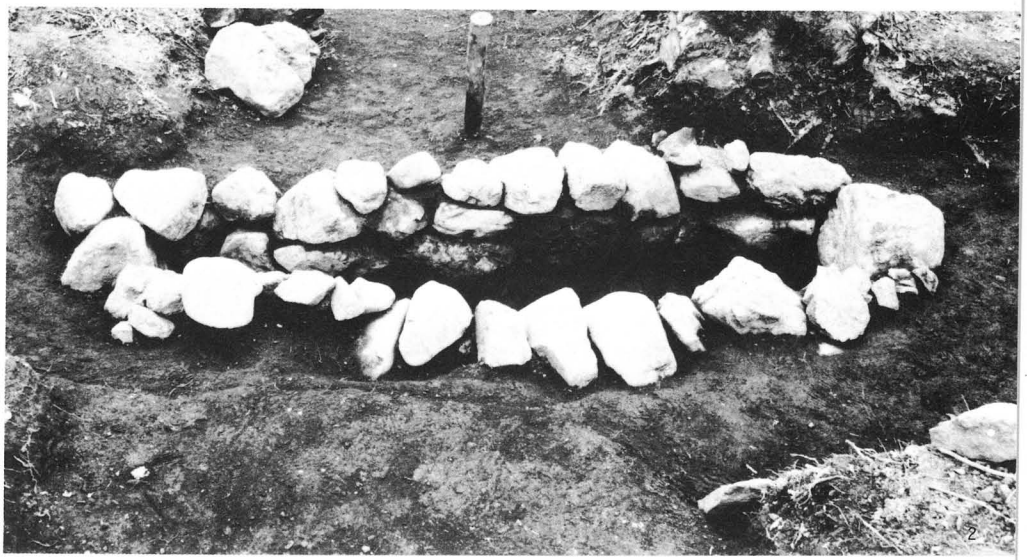
1～3．配石遺構（P101）



1・2．配石遺構(P101)鼓形器台出土状況　3．配石遺構(P101)椀形土器出土状況

4．石棒出土状況

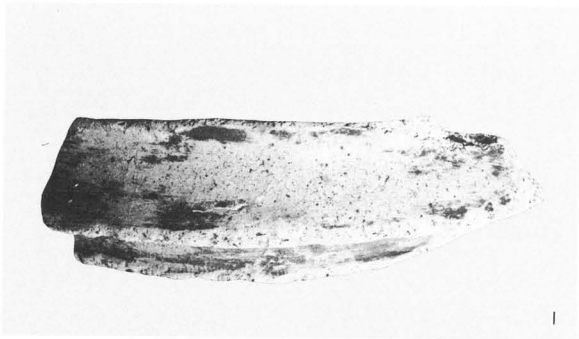


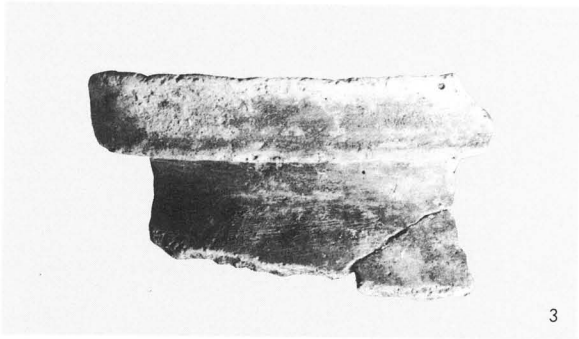


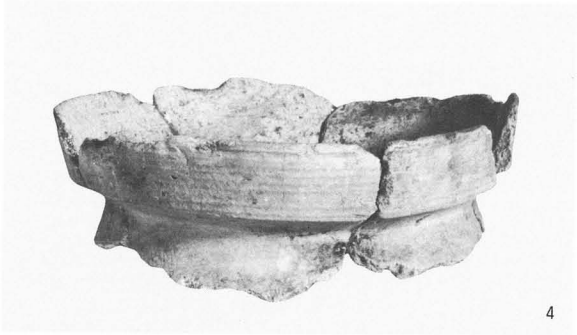
1・2．古墳石室

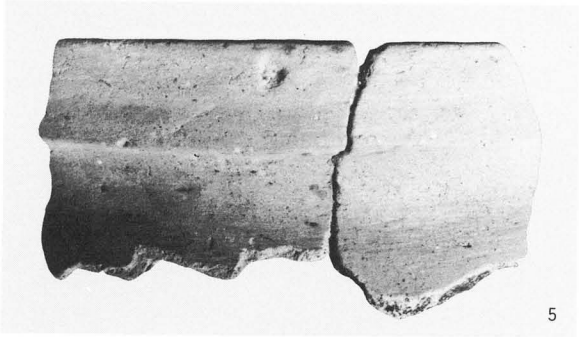
1．谷部トレンチ発見の溝断面

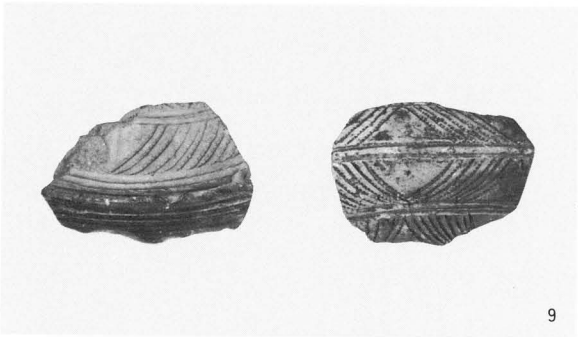
第１式土器

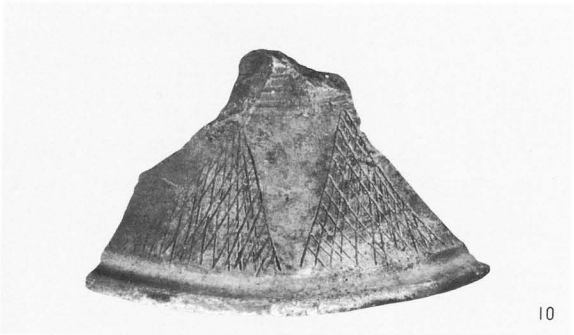




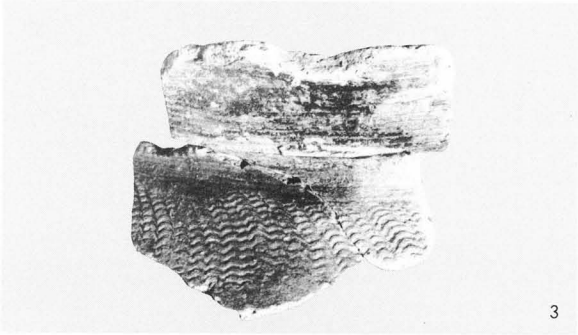


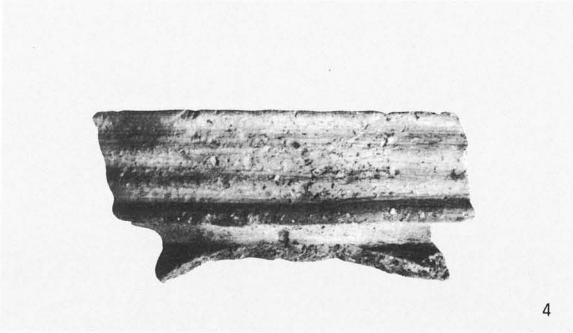


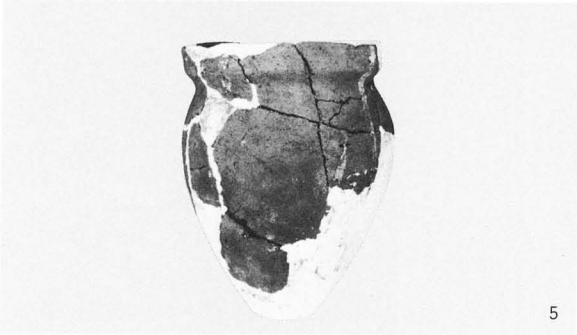


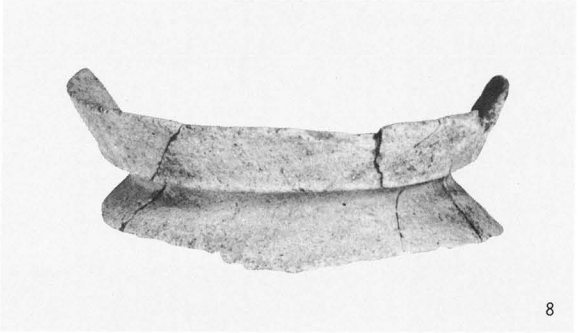


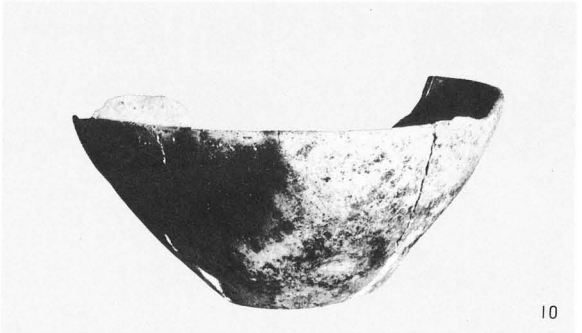
第２式土器











第３式土器

1

2

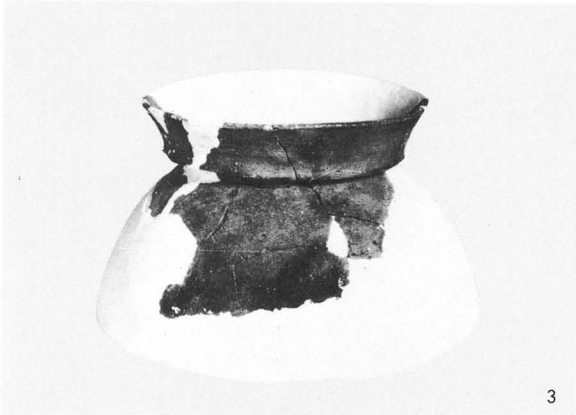
1・2、第4式土器

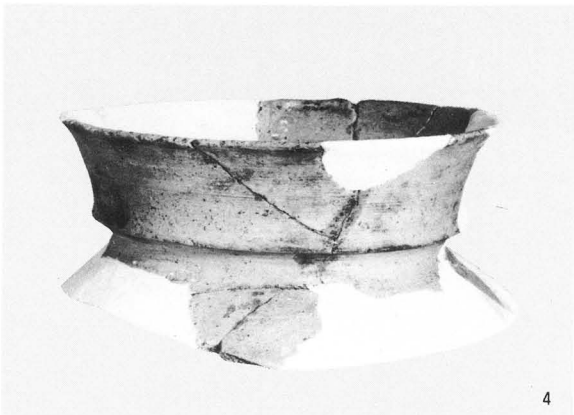
第 4 式土器

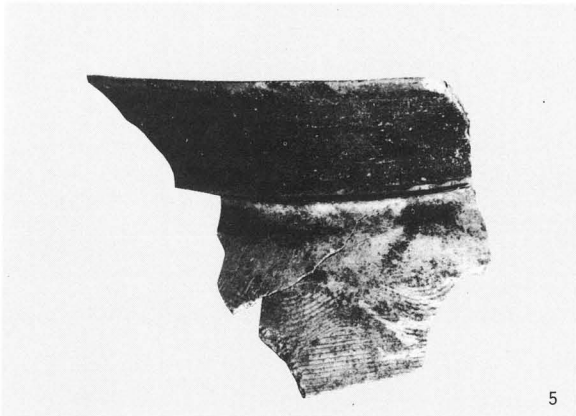
第 4 式土器

第 4 式土器

第５式土器

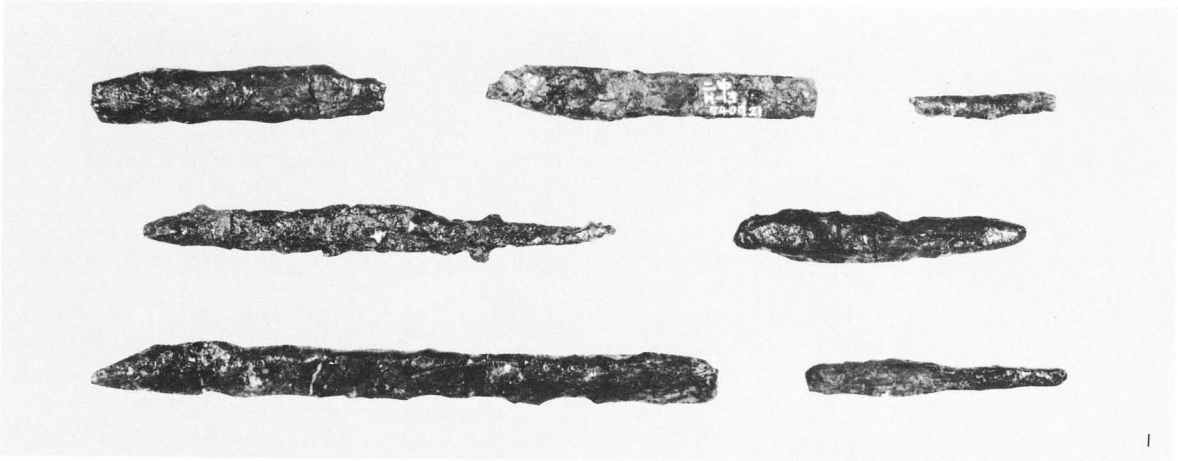






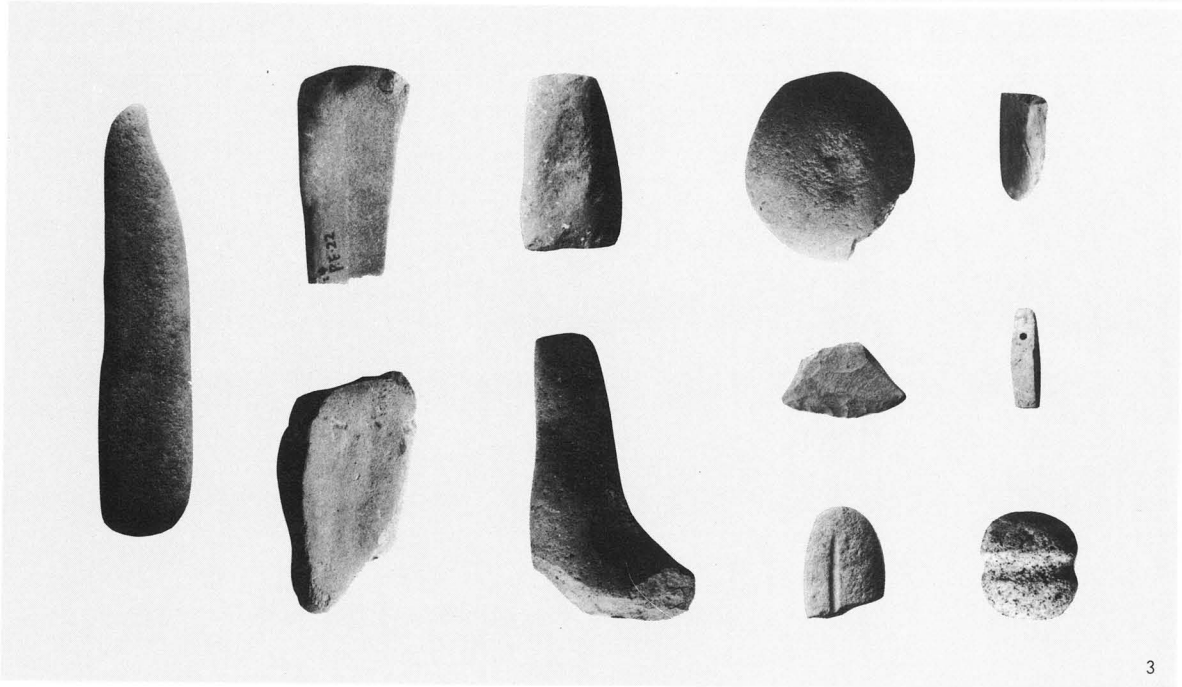
第５式土器

1～4．鼓形器台　5．石棒



1

2



3

1．鉄器　2．石器(石庖丁)　3．石器

大田十二社遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集
１９８１年１０月１５日

発　行　津山市教育委員会
岡山県津山市山下97の１
印　刷　作州日報
岡山県津山市皿901-６
図版印刷　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル